

**第24回 夏季デフリンピック競技大会  
日本選手団参加報告書**

**一般財団法人 全日本ろうあ連盟**

# 目 次

1. 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）	1
2. 第24回夏季デフリンピック競技大会及び日本選手団の概要	2
3. 日本選手団名簿	4
4. 成績一覧	
①メダル獲得数	10
②国別メダル獲得ランキング	11
③各競技成績一覧	12
5. 日本選手団団員報告	
①本部	19
②各競技	23
6. 参考資料	
①日本選手団ハンドブック	108
②メディカルガイド	111
③デフリンピック開催地一覧	114



## 第24回夏季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）

一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長  
デフリンピック派遣委員会委員長  
石野富志三郎

第24回夏季デフリンピックがブラジル・カシアス・ド・スル地方にて2022年5月1日～5月15日まで15日間にわたり開催され、日本からは選手・スタッフ合わせて149名を派遣いたしました。日本選手団に対し、ご支援とご声援をいただきましたことを、心からお礼申し上げます。

日本代表選手たちは、コロナ禍による活動制限にも負けず、金12、銀8、銅10の計30個と過去最高のメダル数を獲得しました。

これは選手一人ひとりの日々の練習の集大成であるとともに、それを支えてくださった多くの方々のご支援、そして競技団体による努力の賜物です。

一方で、大会前に新型コロナウイルス感染症対策を講じ、大会期間中もできる限り他者との接触を防ぐ等、努力をして参りましたが、日本選手団149名のうち、最終的に陽性判定を受けたものは23名に上りました。

日本選手団本部は選手たちの命と健康を守ることや、そして開催地のカシアス・ド・スル市民や他国の選手へのさらなる感染拡大を防ぐため、各競技団体の代表者たちへ説明と意見交換を重ねた上で、5月11日以降の全競技を出場辞退することを決断しました。そして、日本選手団本部は現地でのサポートを続け、最後の陽性反応者が帰国できたのは5月30日でした。

デフリンピックのために5年間、練習を積み重ねてきたのにも関わらず、試合をすることなく帰国した選手もおられることや、応援いただいた皆様にこのような報告をしなければならないことを大変心苦しく思っています。

派遣にあたってご支援を賜りました文部科学省をはじめ、スポーツ庁、外務省、公益財団法人日本パラスポーツ協会、またコロナ対策や感染者へ多大なサポートを頂いたメディカルチーム、順天堂大学、ポルトアレグレ領事事務所所長の横山卓司様、Hospital Tacchini病院の皆様、現地の森口エミリオ秀幸医師及び由美夫人、南日伯援護協会の皆様にこの場をお借りし厚くお礼申し上げます。

そして、2025年にはここ日本でデフリンピックが開催されます。100年近くの歴史を持つデフリンピック、障害のある人となない人とのコミュニケーションや情報バリアフリーや情報アクセシビリティを推進し、“誰一人取り残さない”世界（SDGs）の実現へのさらなる前進となることを願ってやみません。

## 第24回夏季デフリンピック競技大会概要

- 1 大会名称 第24回夏季デフリンピック競技大会  
(通称：2021カシアス・ド・スル デフリンピック競技大会)
- 2 開催期間 2022年5月1日(日)開会式～5月15日(日)閉会式 【15日間】
- 3 開催国／都市 ブラジル／カシアス・ド・スル
- 4 運営主体 国際ろう者スポーツ委員会  
(International Committee of Sports for the Deaf)  
第24回夏季デフリンピック競技大会組織委員会  
(the 24<sup>th</sup> Summer Deaflympics Organizing Committee)
- 5 参加国・地域数 73カ国
- 6 参加人数 2,412人(選手)
- 7 実施競技 陸上、バドミントン、バスケットボール、ビーチバレーボール、自転車、サッカー、ゴルフ、ハンドボール、柔道、空手、マウンテンバイク、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、バレーボール、レスリング(フリースタイル)、レスリング(グレコローマン)、ボウリング(21競技)  
※ボウリングー2022年10月20日～30日、マレーシア／クアラルンプールにて別開催
- 8 大会ロゴと日本選手団ロゴ

大会ロゴ



日本選手団ロゴ



## 9 大会スケジュール

ブラジル／カシアス・ド・スル	4月		5月														
	30日	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	
開閉会式	●	●															●
陸上								●	●	●	●		●	●	●	●	
バドミントン			●	●	●		●	●	●	●	●	●					
バスケットボール				●	●	●	●	●	●		●	●	●	●			
ビーチバレーボール				●	●	●	●	●	●	●		●	●	●			
自転車			●		●		●		●								
サッカー	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●
ゴルフ								●	●	●	●	●					
ハンドボール			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
柔道				●	●	●											
空手			●	●	●												
マウンテンバイク											●						
オリエンテーリング							●	●	●		●		●			●	
射撃			●	●	●	●	●		●	●	●	●	●				
水泳			●	●	●	●	●	●	●	●							
卓球						●	●		●	●	●	●					
テコンドー							●	●	●		●	●	●	●	●		
テニス				●	●	●	●	●									
バレーボール				●	●	●	●	●			●	●	●	●			
レスリングフリースタイル														●	●		
レスリンググレコローマン												●	●				

マレーシア／クアラルンプール	10月												
	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	31日
ボウリング				●	●	●	●	●	●	●	●	●	

## 日本選手団概要

- 1 派遣規模 149名（選手95名 役員54名）  
実施21競技中、11競技に参加

	競技名	選手		役員	
		男子	女子	男子	女子
1	陸上	12	7	3	4
2	バドミントン	5	4	2	1
	バスケットボール	0	0	0	0
3	ビーチバレーボール	4	0	1	0
4	自転車	3	2	0	1
5	サッカー	0	16	3	3
	ゴルフ	0	0	0	0
	ハンドボール	0	0	0	0
6	柔道	2	0	2	0
7	空手	2	2	0	3
8	マウンテンバイク（自転車兼）				
	オリエンテーリング	0	0	0	0
	射撃	0	0	0	0
9	水泳	4	3	2	1
10	卓球	4	4	4	1
	テコンドー	0	0	0	0
	テニス	0	0	0	0
11	バレーボール（男子）	11	0	5	0
	バレーボール（女子）	0	10	2	3
	レスリングフリースタイル	0	0	0	0
	レスリンググレコローマン	0	0	0	0
	本部			9	4
	ボウリング	0	0	0	0
	小計①	47	48	33	21
	小計②	95		54	
	合計	149			

- 2 構成
- 1) 団長：嶋本 恭規（一財）全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 事務局長）
  - 2) 主将：茨 隆太郎（水泳競技）
  - 3) 旗手：蓑原 由加利（自転車競技）、山田 真樹（陸上競技）
- 3 派遣期間 2022年4月26日（火）成田発～5月18日（水）成田着  
※競技ごとに派遣日程が異なる。競技スケジュールに合わせて渡航
- 4 公式行事等
- 1) 結団式 2022年4月20日（水）オンライン
  - 2) 開会式 2022年5月1日（日）SESI Gymnasium
  - 3) 閉会式 2022年5月15日（日）SESI Gymnasium

# 日本選手団名簿

※年齢－2022年5月1日現在

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	ろう きこえる	性別	年齢	住所
1	1	陸上	選手	青山 拓朗	あおやま たくろう	ろう	男	25	東京都台東区
2	2	陸上	選手	石田 考正	いしだ たかまさ	ろう	男	35	愛知県岡崎市
3	3	陸上	選手	北谷 宏人	きただに ひろと	ろう	男	20	大阪府河内長野市
4	4	陸上	選手	坂田 翔悟	さかた しょうご	ろう	男	22	愛知県刈谷市
5	5	陸上	選手	佐々木 琢磨	ささき たくま	ろう	男	28	宮城県仙台市
6	6	陸上	選手	高田 裕士	たかだ ゆうじ	ろう	男	37	東京都港区
7	7	陸上	選手	中野 洸介	なかの こうすけ	ろう	男	25	東京都江戸川区
8	8	陸上	選手	森本 真敏	もりもと まさとし	ろう	男	36	埼玉県本庄市
9	9	陸上	選手	山田 真樹	やまだ まき	ろう	男	24	東京都北区
10	10	陸上	選手	山中 孝一郎	やまなか こういちろう	ろう	男	40	東京都町田市
11	11	陸上	選手	山本 剛士	やまもと つよし	ろう	男	20	滋賀県彦根市
12	12	陸上	選手	湯上 剛輝	ゆがみ まさてる	ろう	男	29	愛知県みよし市
13	13	陸上	選手	岡田 海緒	おかだ みお	ろう	女	24	東京都立川市
14	14	陸上	選手	上森 日南子	かみもり ひなこ	ろう	女	21	埼玉県戸田市
15	15	陸上	選手	佐藤 湊	さとう そう	ろう	女	26	神奈川県相模原市
16	16	陸上	選手	末吉 凧	すえよし なぎ	ろう	女	17	京都府亀岡市
17	17	陸上	選手	田井 小百合	たい さゆり	ろう	女	43	群馬県前橋市
18	18	陸上	選手	滝澤 佳奈子	たきざわ かなこ	ろう	女	22	神奈川県横浜市
19	19	陸上	選手	安本 真紀子	やすもと まきこ	ろう	女	34	静岡県静岡市
20	20	陸上	スタッフ	内海 優	うつみ ゆう	きこえる	女	49	滋賀県大津市
21	21	陸上	スタッフ	佐々木 亜矢子	ささき あやこ	ろう	女	36	宮城県仙台市
22	22	陸上	スタッフ	佐藤 将光	さとう まさみつ	ろう	男	41	愛媛県松山市
23	23	陸上	スタッフ	滝澤 美妃子	たきざわ みきこ	きこえる	女	56	神奈川県横浜市
24	24	陸上	スタッフ	名取 英二	なとり えいじ	きこえる	男	64	宮城県仙台市
25	25	陸上	スタッフ	廣瀬 芽里	ひろせ めり	ろう	女	48	長野県安曇野市
26	26	陸上	スタッフ	山岸 亮良	やまぎし あきら	きこえる	男	47	神奈川県横浜市
27	1	バドミントン	選手	永石 泰寛	ながいし やすひろ	ろう	男	34	佐賀県小城市
28	2	バドミントン	選手	伊東 勇哉	いとう ゆうや	ろう	男	23	東京都大田区

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	ろう きこえる	性別	年齢	住所
29	3	バドミントン	選手	太田 歩	おおた あゆむ	ろう	男	31	兵庫県神戸市
30	4	バドミントン	選手	柿内 康平	かきうち こうへい	ろう	男	37	鹿児島県鹿屋市
31	5	バドミントン	選手	沼倉 昌明	ぬまくら まさあき	ろう	男	36	埼玉県朝霞市
32	6	バドミントン	選手	長原 茉奈美	ながはら まなみ	ろう	女	28	埼玉県朝霞市
33	7	バドミントン	選手	沼倉 千紘	ぬまくら ちひろ	ろう	女	32	埼玉県朝霞市
34	8	バドミントン	選手	矢ヶ部 紋可	やかべ あやか	ろう	女	20	福岡県太宰府市
35	9	バドミントン	選手	矢ヶ部 真衣	やかべ まい	ろう	女	17	福岡県太宰府市
36	10	バドミントン	スタッフ	小堀 知史	こほり ともふみ	ろう	男	50	熊本市東区
37	11	バドミントン	スタッフ	岡野 篤郎	おかの あつろう	きこえる	男	31	東京都多摩市
38	12	バドミントン	スタッフ	高田 美佳	たかだ みか	きこえる	女	28	神奈川県大和市
39	1	ビーチバレーボール	選手	今井 勇太	いまい ゆうた	ろう	男	29	大阪府大阪市
40	2	ビーチバレーボール	選手	瀬井 達也	せい たつや	ろう	男	39	東京都大田区
41	3	ビーチバレーボール	選手	竹村 徳比古	たけむら のりひこ	ろう	男	38	神奈川県横浜市
42	4	ビーチバレーボール	選手	山本 将隆	やまもと まさたか	ろう	男	24	愛知県知多郡
43	5	ビーチバレーボール	スタッフ	牛尾 洋人	うしお ひろひと	きこえる	男	47	神奈川県逗子市
44	1	自転車競技	選手	川野 健太	かわの けんた	ろう	男	31	東京都練馬区
45	2	自転車競技	選手兼スタッフ	早瀬 憲太郎	はやせ けんたろう	ろう	男	49	神奈川県横浜市
46	3	自転車競技	選手	箭内 秀平	やない しゅうへい	ろう	男	34	東京都国分寺市
47	4	自転車競技	選手兼スタッフ	早瀬 久美	はやせ くみ	ろう	女	47	神奈川県横浜市
48	5	自転車競技	選手	養原 由加利	みのらはら ゆかり	ろう	女	39	東京都練馬区
49	6	自転車競技	スタッフ	田村 梢	たむら こずえ	きこえる	女	44	神奈川県横浜市
50	1	サッカー	選手	阿部 菜摘	あべ なつみ	ろう	女	22	東京都大田区
51	2	サッカー	選手	岩渕 亜依	いわぶち あい	ろう	女	28	東京都新宿区
52	3	サッカー	選手	押領司 真奈	おうりょうじ まな	ろう	女	19	宮崎県宮崎市
53	4	サッカー	選手	大上 志穂子	おおかみ しほこ	ろう	女	29	東京都江戸川区
54	5	サッカー	選手	川畑 菜奈	かわばた なな	ろう	女	32	埼玉県所沢市
55	6	サッカー	選手	久住呂 文華	くじゅうろ あやか	ろう	女	17	東京都江戸川区
56	7	サッカー	選手	國島 佳純	くにしま かすみ	ろう	女	22	愛知県西尾市
57	8	サッカー	選手	酒井 藍莉	さかい あいり	ろう	女	23	静岡県静岡市



通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	ろう きこえる	性別	年齢	住所
58	9	サッカー	選手	杉本 七海	すぎもと ななみ	ろう	女	18	大阪府東大阪市
59	10	サッカー	選手	高木 桜花	たかぎ おうか	ろう	女	15	千葉県袖ヶ浦市
60	11	サッカー	選手	高橋 遥佳	たかはし はるか	ろう	女	24	神奈川県相模原市
61	12	サッカー	選手	田中 恵	たなか めぐみ	ろう	女	40	北海道室蘭市
62	13	サッカー	選手	松川 容子	まつかわ ようこ	ろう	女	24	京都府南丹市
63	14	サッカー	選手	宮城 実来	みやぎ みく	ろう	女	21	沖縄県那覇市
64	15	サッカー	選手	宮田 夏実	みやた なつみ	ろう	女	24	東京都大田区
65	16	サッカー	選手	山口 彩芽	やまぐち あやめ	ろう	女	22	石川県小松市
66	17	サッカー	スタッフ	仙波 優菜	せんば ゆうな	きこえる	女	33	千葉県柏市
67	18	サッカー	スタッフ	野呂 啓	のろ けい	ろう	男	46	愛知県名古屋
68	19	サッカー	スタッフ	伊藤 優花	いとう ゆか	きこえる	女	25	千葉県船橋市
69	20	サッカー	スタッフ	久住呂 幸一	くじゅうろ こういち	ろう	男	47	東京都江戸川区
70	21	サッカー	スタッフ	中村 崇修	なかむら たかよし	きこえる	男	27	福岡県福岡市
71	22	サッカー	スタッフ	星野 あかり	ほしの あかり	きこえる	女	24	東京都足立区
72	1	柔道	選手	蒲生 和麻	がもう かずま	ろう	男	28	東京都江東区
73	2	柔道	選手	佐藤 正樹	さとう まさき	ろう	男	28	静岡県三島市
74	3	柔道	スタッフ	小志田 憲一	しょうじた けんいち	きこえる	男	59	東京都中央区
75	4	柔道	スタッフ	麓 康次郎	ふもと こうじろう	きこえる	男	50	埼玉県川口市
76	1	空手	選手	北村 陽	きたむら ひなた	ろう	男	23	大阪府吹田市
77	2	空手	選手	森 健司	もり けんじ	ろう	男	17	大阪府茨木市
78	3	空手	選手	小倉涼	おぐら りょう	ろう	女	22	埼玉県坂戸市
79	4	空手	選手	湯澤 葵	ゆざわ あおい	ろう	女	18	東京都足立区
80	5	空手	スタッフ	高橋 朋子	たかはし ともこ	ろう	女	45	東京都練馬区
81	6	空手	スタッフ	山崎 由美子	やまざき ゆみこ	ろう	女	44	東京都板橋区
82	7	空手	スタッフ	海老澤 あきつ	えびさわ あきつ	ろう	女	44	東京都江戸川区
83	1	水泳	選手	茨 隆太郎	いばら りゅうたろう	ろう	男	28	神奈川県平塚市
84	2	水泳	選手	金持 義和	かなじ よしかず	ろう	男	28	大阪府堺市
85	3	水泳	選手	藤原 慧	ふじはら さとい	ろう	男	26	東京都江戸川区
86	4	水泳	選手	星 泰雅	ほし たいが	ろう	男	23	東京都板橋区

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	ろう きこえる	性別	年齢	住所
87	5	水泳	選手	齋藤 京香	さいとう きょうか	ろう	女	21	山梨県甲府市
88	6	水泳	選手	中東 郁葉	なかひがし いくは	ろう	女	20	愛知県みよし市
89	7	水泳	選手	平林 花香	ひらばやし はなか	ろう	女	13	大阪府大阪市
90	8	水泳	スタッフ	佐藤 学	さとう まなぶ	きこえる	男	49	東京都府中市
91	9	水泳	スタッフ	鈴木 しのぶ	すずき しのぶ	きこえる	女	56	静岡県焼津市
92	10	水泳	スタッフ	豊田 律	とよだ ただし	ろう	男	55	京都市伏見区
93	1	卓球	選手	井藤 博和	いとう ひろかず	ろう	男	36	千葉県浦安市
94	2	卓球	選手	亀澤 史憲	かめざわ ふみのり	ろう	男	29	東京都国分寺市
95	3	卓球	選手	川口 功人	かわぐち こうと	ろう	男	22	愛知県豊田市
96	4	卓球	選手	灘光 晋太郎	なだみつ しんたろう	ろう	男	28	東京都中央区
97	5	卓球	選手	亀澤 理穂	かめざわりほ	ろう	女	31	東京都杉並区
98	6	卓球	選手	川崎 瑞恵	かわさき みすえ	ろう	女	26	東京都練馬区
99	7	卓球	選手	立石 里吏	たていし りさと	ろう	女	29	東京都江戸川区
100	8	卓球	選手	山田 萌心	やまだ もえみ	ろう	女	13	島根県益田市
101	9	卓球	スタッフ	大倉 峰雄	おおくら みねお	きこえる	男	61	宮城県仙台市
102	10	卓球	スタッフ	大平 静也	おおだいら しずや	ろう	男	63	新潟県長岡市
103	11	卓球	スタッフ	井出 敬子	いで けいこ	きこえる	女	59	神奈川県相模原市
104	12	卓球	スタッフ	梅村 正樹	うめむら まさき	ろう	男	48	北海道北広島市
105	13	卓球	スタッフ	小森園 一樹	こもりその かずき	きこえる	男	32	神奈川県横浜市
106	1	バレーボール(男子)	選手	黒木 歩夢	くろき あゆむ	ろう	男	23	大阪府大阪市
107	2	バレーボール(男子)	選手	井上 樹	いのうえ たつき	ろう	男	27	大阪府大阪市
108	3	バレーボール(男子)	選手	加賀 辰樹	かが たつき	ろう	男	29	兵庫県神戸市
109	4	バレーボール(男子)	選手	加賀 充	かが みつる	ろう	男	31	新潟県長岡市
110	5	バレーボール(男子)	選手	狩野 拓也	かのう たくや	ろう	男	29	愛媛県松山市
111	6	バレーボール(男子)	選手	坂下 真一	さかした しんいち	ろう	男	23	大阪府大阪市
112	7	バレーボール(男子)	選手	篠崎 賢大	しのざき けんた	ろう	男	21	愛知県名古屋
113	8	バレーボール(男子)	選手	高橋 竜一	たかはし りゅういち	ろう	男	34	愛知県高浜市
114	9	バレーボール(男子)	選手	田中 友祈也	たなか ゆきや	ろう	男	23	愛知県安城市
115	10	バレーボール(男子)	選手	寺井 捺貴	てらい なつき	ろう	男	20	大阪府泉佐野市

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	ろう きこえる	性別	年齢	住所
116	11	バレーボール (男子)	選手	遠山 順平	とおやま じゅんぺい	ろう	男	26	兵庫県神戸市
117	12	バレーボール (男子)	スタッフ	村井 貴行	むらい たかゆき	きこえる	男	38	千葉県船橋市
118	13	バレーボール (男子)	スタッフ	西原 翔太	にしはら しょうた	きこえる	男	34	沖縄県国頭郡
119	14	バレーボール (男子)	スタッフ	竹内 準	たけうち じゅん	きこえる	男	33	千葉県千葉市
120	15	バレーボール (男子)	スタッフ	鶴見 将史	つるみ まさし	きこえる	男	38	千葉県松戸市
121	16	バレーボール (男子)	スタッフ	長松 郁弥	ながまつ ふみひさ	きこえる	男	30	埼玉県朝霞市
122	1	バレーボール (女子)	選手	石原 美海	いしはら みなみ	ろう	女	19	北海道江別市
123	2	バレーボール (女子)	選手	成丸 奈美	いぬまる なみ	ろう	女	25	大阪府吹田市
124	3	バレーボール (女子)	選手	梅本 綾也華	うめもと あやか	ろう	女	19	大阪府大阪市
125	4	バレーボール (女子)	選手	梅本 沙也華	うめもと さやか	ろう	女	19	大阪府大阪市
126	5	バレーボール (女子)	選手	尾塚 愛実	おづか あいみ	ろう	女	24	鹿児島県阿久根市
127	6	バレーボール (女子)	選手	栗林 愛美	くりばやし あみ	ろう	女	17	愛媛県松山市
128	7	バレーボール (女子)	選手	高濱 彩佑生	たかはま さゆき	ろう	女	17	神奈川県鎌倉市
129	8	バレーボール (女子)	選手	中田 美緒	なかた みお	ろう	女	21	神奈川県三浦郡
130	9	バレーボール (女子)	選手	長谷山 優美	はせやま ゆうみ	ろう	女	21	神奈川県横浜市
131	10	バレーボール (女子)	選手	平岡 早百合	ひらおか さゆり	ろう	女	22	神奈川県川崎市
132	11	バレーボール (女子)	スタッフ	川北 美雪	かわきた みゆき	きこえる	女	44	愛知県額田郡
133	12	バレーボール (女子)	スタッフ	大川 裕二	おおかわ ゆうじ	ろう	男	55	東京都大田区
134	13	バレーボール (女子)	スタッフ	中川 菜保	なかかわ なほ	きこえる	女	45	熊本県熊本市
135	14	バレーボール (女子)	スタッフ	安田 恵視	やすだ めぐみ	きこえる	女	44	山梨県甲府市
136	15	バレーボール (女子)	スタッフ	岡田 直樹	おかだ なおき	きこえる	男	40	神奈川県横浜市
137	1	本部	団長	嶋本 恭規	しまもと やすのり	ろう	男	45	兵庫県三田市
138	2	本部	総務	倉野 直紀	くらの なおき	ろう	男	49	東京都千代田区
139	3	本部	広報	中西 潤	なかにし じゅん	ろう	男	41	埼玉県熊谷市
140	4	本部	医師	薬師寺 道代	やくしじ みちよ	きこえる	女	57	東京都港区
141	5	本部	医師	塩田 有規	しおた ゆうき	きこえる	男	47	東京都新宿区
142	6	本部	看護師	染谷 咲子	そめや さきこ	きこえる	女	39	神奈川県川崎市川崎区
143	7	本部	看護師	新谷 絢子	しんが いあやこ	きこえる	女	36	広島県神石郡
144	8	本部	トレーナー	野津 将時郎	のづ しょうじろう	きこえる	男	30	千葉県八千代市

通し	No	競技名	役職 (スタッフ/選手)	名前	ふりがな	ろう きこえる	性別	年齢	住所
145	9	本部	手話言語通訳	森本 行雄	もりもと ゆきお	きこえる	男	66	東京都足立区
146	10	本部	手話言語通訳	黒石 恵理子	くろいし えりこ	きこえる	女	43	静岡県静岡市駿河区
147	11	本部	国際手話通訳	野添 亘	のぞえ わたる	ろう	男	33	東京都板橋区
148	12	本部	事務局	藤川 太郎	ふじかわ たろう	ろう	男	42	東京都武蔵野市
149	13	本部	輸送	林 孝雄	はやし たかお	きこえる	男	72	神奈川県横浜市栄区

## メダル獲得数（合計30）

メダル	獲得数	No,	氏名	競技	種目
金メダル	12	1	石田 考正	陸上	ハンマー投げ
		2	北谷 宏人	陸上	棒高跳び
		3	佐々木 琢磨	陸上	男子100m
		4	小倉 涼	空手	女子形
		5	小倉 涼	空手	女子組手
		6	茨 隆太郎	水泳	400m個人メドレー
		7	茨 隆太郎	水泳	100mバタフライ
		8	茨 隆太郎	水泳	200m個人メドレー
		9	茨 隆太郎	水泳	200m自由形
		10	藤原 慧	水泳	400m自由形
		11	藤原 慧	水泳	1500m自由形
		12	齋藤 京香	水泳	100mバタフライ
銀メダル	8	13	森本 真敏	陸上	ハンマー投げ
		14	伊東 勇哉 太田 歩 柿内 康平 沼倉 昌明 長原 茉奈美 沼倉 千紘 矢ヶ部 紋可 矢ヶ部 真衣	バドミントン	団体戦
		15	早瀬 久美	自転車	マウンテンバイク
		16	茨 隆太郎	水泳	50mバタフライ
		17	茨 隆太郎 藤原 慧 金持 義和 星 泰雅	水泳	4×100mフリーリレー
		18	茨 隆太郎 藤原 慧 金持 義和 星 泰雅	水泳	4×100mメドレーリレー
		19	藤原 慧	水泳	200m自由形
20	亀澤 理穂 川崎 瑞恵 立石 里吏 山田 萌心	卓球	女子団体戦		
銅メダル	10	21	岡田 海緒	陸上	女子1500m
		22	末吉 凧	陸上	棒高跳び
		23	簗原 由加利	自転車	ロードレース
		24	簗原 由加利	自転車	タイムトライアル
		25	簗原 由加利	自転車	ポイントレース
		26	北村 陽	空手	男子形
		27	森 健司	空手	男子形
		28	湯澤 葵	空手	女子組手
		29	亀澤 理穂 川崎 瑞恵	卓球	女子ダブルス
		30	井藤 博和 亀澤 史憲 川口 功人 灘光 晋太郎	卓球	男子団体戦

## 国別メダル獲得ランキング

順位	国名	金	銀	銅	計
1	ウクライナ	68	40	45	153
2	アメリカ	20	11	24	55
3	韓国	17	20	21	58
4	イラン	14	12	14	40
<b>5</b>	<b>日本</b>	<b>12</b>	<b>8</b>	<b>10</b>	<b>30</b>
6	ポーランド	8	22	12	42
7	トルコ	8	19	17	44
8	フランス	8	3	5	16
9	インド	8	1	8	17
10	ドイツ	5	8	6	19
11	ケニア	5	7	12	24
12	イタリア	4	11	8	23
13	カザフスタン	4	7	18	29
14	チェコ	4	1	3	8
15	中華台北	3	13	14	30
16	クロアチア	3	1	0	4
17	リトアニア	2	5	3	10
18	マレーシア	2	4	1	7
19	ベトナム	2	3	12	17
20	ラトビア	2	2	1	5
21	スロバキア	2	1	2	5
22	キューバ	2	1	0	3
23	メキシコ	2	1	0	3
24	ポルトガル	2	0	2	4
25	スロベニア	2	0	2	4
26	フィンランド	2	0	0	2
27	ギリシャ	1	2	6	9
28	コロンビア	1	2	1	4
29	アルジェリア	1	1	3	5
30	シンガポール	1	1	1	3
31	ドミニカ	1	1	0	2
32	エストニア	1	0	2	3
33	オランダ	1	0	1	2
34	アラブ	1	0	1	2
34	モンゴル	1	0	1	2
34	デンマーク	1	0	1	2
37	チリ	1	0	0	1
37	エクアドル	1	0	0	1
39	ハンガリー	0	4	4	8
40	キルギス	0	2	4	6
41	スペイン	0	2	1	3
42	アルゼンチン	0	1	2	3
42	ブルガリア	0	1	2	3
44	オーストラリア	0	1	1	2
45	カナダ	0	1	0	1
46	ブラジル	0	0	6	6
47	アルメニア	0	0	5	5
48	ウズベキスタン	0	0	3	3
49	サウジアラビア	0	0	2	2
50	イスラエル	0	0	1	1
50	タイ	0	0	1	1
50	スウェーデン	0	0	1	1
50	セネガル	0	0	1	1

## 各競技成績一覧

### 【陸上競技 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位/人)	記録	POINT	風力	成績
青山 拓朗	男子 5000m								棄権
石田 考正	男子 ハンマー投げ	6	決勝	—	1/6	58m21			金
北谷 宏人	男子 棒高跳	5	決勝	—	1/5	4.20			金
坂田 翔悟	男子 100m	62	一次予選	9	2/7	11.23		0.3	準決勝敗退
		32	二次予選	4	3/8	10.99			
		16	準決勝	2	5/8	10.98		1.6	
	男子 200m								棄権
佐々木 琢磨	男子 100m	62	一次予選	9	2/7	11.07			金
		32	二次予選	4	1/8	10.77			
		16	準決勝	2	2/8	10.79		1.6	
		8	決勝	-	1/8	10.75		0.2	
	男子 200m								棄権
高田 裕士	男子 400mハードル								棄権
中野 洸介	男子 10000m	17	決勝	-	12/17	35.13.28			12位
	男子 マラソン								棄権
森本 真敏	男子 ハンマー投げ	6	決勝	—	2/6	57m24			銀
山田 真樹	男子 100m	62	一次予選	9	1/7	11.29		-0.1	7位
		32	二次予選	4	2/8	10.99		-0.3	
		16	準決勝	2	1/8	10.77		1.6	
		8	決勝	-	7/8	10.95		0.2	
	男子 200m								棄権
山中 孝一郎	男子 10000m	17	決勝	-	10/17	33.28.38			10位
	男子 マラソン								棄権
山本 剛士	男子 400m	43	予選	7	1/6	51.19			6位
		24	準決勝	3	2/8	48.81			
		8	決勝	—	6/8	49.22			
湯上 剛輝	男子 円盤投げ								棄権

### 【陸上競技 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位/人)	記録	POINT	風力	成績
岡田 海緒	女子 1500m	6	決勝	—	3/6	4:51.78			棄権
	女子 800m								棄権
上森 日南子	女子 走り幅跳び	14	予選	2	3/6	4m82			11位
		12	決勝	—	11/12	4m08		-0.2	
佐藤 湊	女子 棒高跳び	7	決勝	-	5/7	2m80			5位
末吉 凧	女子 棒高跳び	7	決勝	-	3/7	3m05			銅 WJR
田井 小百合	女子 100mハードル	6	決勝	—	5/6	16.00			5位
滝澤 佳奈子	女子 棒高跳び	7	決勝	-	6/7	2m20			6位
安本 真紀子	女子 マラソン	6	決勝						棄権

### 【陸上競技 リレー】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位/人)	記録	POINT	風力	成績
北谷 宏人・坂田 翔悟・佐々木 琢磨・高田 裕士・山田 真樹・山本 剛士	男子 4x100m リレー								棄権
北谷 宏人・坂田 翔悟・佐々木 琢磨・高田 裕士・山田 真樹・山本 剛士	男子 4x400m リレー								棄権
北谷 宏人・高田 裕士・岡田 海緒・上森 日南子	混合 4x400m リレー	8	決勝		6/8	3.55.96			6位

## 【バドミントン 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)	マッチ	セット*ポイント			予選成績			成績
								1	2	3	順位	勝	負	
永石 泰寛	シングルス	44	予選リーグ	14	勝	Tomas KRATKA アメリカ	2-0	21-18	21-15		1/3	2	0	決勝トーナメント進出
		32	決勝トーナメント	-	勝	Sunho JUNG 韓国	2-0	21-9	21-8					
伊東 勇哉	シングルス	44	予選リーグ	14	負	Kyungduk SHIN 韓国	1-2	21-15	18-21	14-21	2/3	1	1	決勝トーナメント進出
		32	決勝トーナメント	-	勝	Siriwat MATTAYANUMAT タイ	1-2	21-17	15-21	16-21				
柿内 康平	シングルス	44	予選リーグ	14	勝	Aleks YORDANOV ブルガリア	2-0	21-5	21-8		2/3	1	1	ベスト16
		32	決勝トーナメント	-	負	Ignas REZNIKAS リトアニア	0-2	21-23	14-21					
沼倉 昌明	シングルス	44	予選リーグ	14	勝	Xavier VALLEDOR フランス	0-2	19-21	13-21	21-21	2/3	1	1	決勝トーナメント進出
		32	決勝トーナメント	-	負	Thunthanasorn THANADECHAWATTHANA タイ	2-0	21-10	21-15					
沼倉 昌明 太田 歩	ダブルス	21	予選リーグ	7	勝	Petro TAKALO ウクライナ	0-2	6-21	14-21		2/3	1	1	決勝トーナメント進出
		32	決勝トーナメント	-	負	Hassan SHAFIQ マレーシア	2-0	21-12	21-12					
沼倉 昌明 太田 歩	ダブルス	21	予選リーグ	7	勝	T.THANADECHAWATTHANACHOTI Sompon WIBULSIRIKUL タイ	2-0	21-6	21-9		1/3	2	0	4位/入賞
				7	勝	C. DA SILVA G. DE FARIA ブラジル	2-0	21-7	21-7					
		14	決勝トーナメント	-	勝	Hritik ANAND Abhinav SHARMA インド	2-0	21-16	21-15					
				-	勝	Chung-I CHEN Chen-Ding CHENG 中華台北	2-0	21-14	21-16					
14	準決勝	-	負	Kazimieras DAUSKURTAS Ignas REZNIKAS リトアニア	棄権									
	3位決定戦	-	負	Siriwat MATTAYANUMAT Ittikon PUNYANGAM タイ	棄権									
伊東 勇哉 永石 泰寛	ダブルス	21	予選リーグ	7	負	Myeongsoo SEO Jisoo WOO 韓国	0-2	13-21	16-21		2/3	1	1	ベスト8
		14	決勝トーナメント	-	勝	Tomas KRATKA Jay YANG アメリカ	2-0	21-12	21-4					
	ダブルス	14	決勝トーナメント	-	勝	Hassan SHAFIQ Edmund Seng Keong TEO マレーシア	2-0	21-11	21-10					
				-	負	Kazimieras DAUSKURTAS Ignas REZNIKAS リトアニア	1-2	21-12	12-21	18-21				

## 【バドミントン 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)	マッチ	セット*ポイント			予選成績			成績
								1	2	3	順位	勝	負	
長原 菜奈美	シングルス	38	予選リーグ	12	勝	Emilija UNTE リトアニア	2-0	21-6	21-8		1/3	2	0	ベスト16
		24	決勝トーナメント	-	勝	Sofia CHERNOMOROVA ウクライナ	1-2	19-21	21-16	21-19				
矢ヶ部 紋可	シングルス	38	予選リーグ	12	負	Jerlin JAYARATCHAGAN インド	0-2	18-21	14-21		1/3	2	0	ベスト16
		24	決勝トーナメント	-	勝	Marija RIMKUTE リトアニア	2-0	21-12	21-5					
矢ヶ部 真衣	シングルス	38	予選リーグ	12	勝	Bohdana HUBANOVA ウクライナ	2-0	21-15	21-10		1/3	2	0	予選通過
		24	決勝トーナメント	-	勝	R. DA SILVA ブラジル	2-0	21-9	21-9					
矢ヶ部 真衣	シングルス	38	予選リーグ	12	勝	Katrin NEUDOLT オーストリア	0-2	5-21	12-21		1/3	2	0	4位/入賞
				12	勝	Jerlin JAYARATCHAGAN インド	2-0	21-18	21-17					
		24	決勝トーナメント	-	勝	Floriane DUBOIS フランス	2-0	21-8	21-8					
				-	勝	Shreya SINGLA インド	2-1	13-21	21-13	21-15				
16	予選リーグ	5	勝	Jung-Yu FAN 中華台北	2-0	21-9	21-11							
		5	負	Katrin NEUDOLT オーストリア	棄権									
16	決勝トーナメント	-	負	Wei Ying BOON マレーシア	棄権									
		-	負	Wei Ying BOON Zu Tung FOO マレーシア	棄権									
長原 菜奈美 沼倉 千紘	ダブルス	16	予選リーグ	5	勝	Amanda Ferreira SANCHES 2 Cynthia Quirino SILVA ブラジル	2-0	21-4	21-4		1/3	2	0	ベスト8
		10	決勝トーナメント	-	勝	Emilija UNTE 3 Vaiva ZYMANAITE リトアニア	2-0	21-8	21-11					
	ダブルス	10	決勝トーナメント	-	勝	不戦勝								
				-	負	矢ヶ部 紋可/矢ヶ部 真衣 日本	1-2	23-21	17-21	11-21				
矢ヶ部 紋可 矢ヶ部 真衣	女子 ダブルス	16	予選リーグ	5	負	Jerlin JAYARATCHAGAN Shreya SINGLA インド	1-2	21-16	17-21	17-21	2/3	1	1	4位/入賞
				5	勝	Aurelija RAMANECKAITE Marija RIMKUTE リトアニア	不戦勝							
		10	決勝トーナメント	-	勝	不戦勝								
				-	負	長原 菜奈美/沼倉 千紘 日本	2-1	21-23	21-17	21-11				
10	3位決定戦	-	負	Wei Ying BOON Zu Tung FOO マレーシア	棄権									
		-	負	Sofia CHERNOMOROVA Bohdana HUBANOVA ウクライナ	棄権									



## 【バドミントン 混合・団体】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手		マッチ	セットポイント			予選成績			成績
						(選手名・国)			1	2	3	順位	勝	負	
沼倉 昌明 沼倉 千紘	ダブルス	30	予選リーグ		勝	Jay YANG Judy YANG	アメリカ	2-0	21-12	21-11		1/3	2	0	ベスト16
					勝	Myeongsoo SEO Gwanghui PARK	韓国	2-1	21-13	16-21	21-16				
		20	決勝トーナメント		勝	Xavier VALLEDOR Floriane DUBOIS	フランス	1-2	17-21	22-20	19-21				
伊東 勇哉 矢ヶ部 真衣	ダブルス	30	予選リーグ		勝	Oliver WITTE Finja ROSENDAHL	ドイツ	2-0	21-14	21-10		2/3	1	1	ベスト8
					負	Jisoo WOO Soyeong LEE	韓国	0-2	17-21	24-26					
		20	決勝トーナメント		勝	Kazimieras DAUSKURTAS Vaiva ZYMANTAITE	リトアニア	2-1	21-13	13-21	21-19				
					勝	Petro TAKALO Sofia CHERNOMOROVA	ウクライナ	2-1	22-20	18-21	21-17				
					負	Edmund Seng Keong TEO Wei Ying BOON	マレーシア	0-2	18-21	15-21					
柿内 康平 矢ヶ部 紋可	ダブルス	30	予選リーグ		勝	Sompon VIBULSIRIKUL Supinya BOONNUM	タイ	2-0	21-15	21-10		1/3	2	0	ベスト16
					勝	Titouan KEIFFER Louise BERNARD	フランス	2-0	21-16	21-17					
		20	決勝トーナメント		勝				不戦勝						
団体戦		10	予選リーグ	4	勝	トルコ		5-0				1	1	0	2位
					勝	フランス		3-2							
		8	決勝トーナメント	8	勝	韓国		3-2							
					負	インド		1-3							

順位	国名	順位	国名	順位	国名
1	インド	5	フランス	9	ブラジル
2	日本	5	リトアニア	9	マレーシア
3	中華台北	5	タイ		
4	韓国	5	トルコ		

## 【ビーチバレーボール 男子】

選手名	ラウンド	対戦相手		勝敗	マッチ	セットポイント			予選成績			成績
		選手名	国			1	2	3	順位	勝	負	
今井 勇太 瀬井 達也	予選リーグ Bグループ	Taaber / Sepp (EST)	エストニア	棄権	0-2	0-21	0-21		4	0	3	13位
		Sudy / Schmidt (GER-2)	ドイツ	負	1-2	15-21	21-18	10-15				
		Keshavarz / Khirandish (IRI)	イラン	負	0-2	13-21	19-21					
	ラッキー ルーザー	Zidek / Skopovy	チェコ	棄権	0-2	0-21	0-21					
竹村 徳比古 山本 将隆	予選リーグ Dグループ	Tarasov / Renkas (UKR-2)	ウクライナ	棄権	0-2	0-21	0-21		4	0	3	13位
		Zidek / Skopovy (CZE-2)	チェコ	負	0-2	12-21	13-21					
		Aquilani / Musacchio (ITA)	イタリア	負	0-2	9-21	12-21					
	ラッキー ルーザー	Pahler / Templin	ドイツ	棄権	0-2	0-21	0-21					

## 【自転車 ロード】

選手名	種目	出場数	順位 (位/人)	記録	成績
早瀬 憲太郎	男子 1000m スプリント	29	19/29	19	19位
	男子 個人タイムトライアル	33	13/33	51:11.857	13位
	男子 個人ロードレース	43	16/43	2:59:42	16位
	男子 ポイントレース	41	-	-	DNF
川野 健太	男子 1000m スプリント	29	6/29	6	6位
	男子 個人ロードレース	43	26/43	3:05:26	26位
	男子 ポイントレース	41	6/41	11pt	6位
早瀬 久美	女子 個人ロードレース	9	9/8	1:36:09	8位
	女子 ポイントレース	9	-	-	DNF
蓑原 由加利	女子 1000m スプリント	8	4/8	-	4位
	女子 個人タイムトライアル	6	3/6	38:59.019	銅メダル
	女子 個人ロードレース	9	3/9	1:31:04	銅メダル
	女子 ポイントレース	9	3/9	20pt	銅メダル

## 【自転車 マウンテンバイク】

選手名	種目	出場数	順位 (位/人)	記録	成績
箭内 秀平	男子 クロスカントリー・オリンピック	25	6/25	1:43:39.38	6位
早瀬 久美	女子 クロスカントリー・オリンピック	12	2/12	1:33:15	銀メダル

## 【サッカー 女子】

プログラム	対戦国	勝敗	スコア	P K	成績
予選リーグ	ケニア	勝	12-0		予選リーグ 4位
	ポーランド	負	2-5		
	アメリカ	負	0-1		
	ブラジル	棄権	—		
順位決定戦	3位決定戦	棄権	—		

### ■最終結果

順位	国名
1	アメリカ
2	ポーランド
3	ブラジル
4	日本
5	ケニア

## 【柔道 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		成績
					佐藤 正樹	66kg 級	
			2 回戦	勝	CRISPIM,Romulo	ブラジル	
			3 回戦	負	SALAHSHOUR GOL KHANI,All	イラン	
			敗者復活戦	負	MOZYREV,Vladyslav	ウクライナ	
蒲生 和麻	73kg 級	13	1 回戦	勝		不戦勝	5位
			2 回戦	勝	MIDIN,Azhymukan	キルギス	
			準々決勝	負	DAFTARI,Amirmohammad	イラン	
			敗者復活戦	負	SHERETOV,Dmytro	ウクライナ	

## 【空手形】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	ポイント	形名	マッチ	成績
							北村 陽	
			G1-2 回戦	23.16	スーパーリンペイ	2位		
			3位決定戦	23.36	パープレーン	勝		
森 健司	男子 形	20	G2-1 回戦	2	23.02	ニーパイポー	1位	銅
			G2-2 回戦		22.48	五十四歩	2位	
			3位決定戦		23.42	スーパーリンペイ	勝	
小倉 涼	女子 形	14	G1-1 回戦	2	22.54	クルルンファ	1位	金
			G1-2 回戦		23.52	アーナン	1位	
			決勝		23.94	スーパーリンペイ	勝	
湯澤 葵	女子 形	14	G2-1 回戦	2	20.2	アーナン	6位	予選敗退

## 【空手 組手】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	成績
						北村 陽	男子 -60kg		
2 回戦	負	SADEGHZADEHMOGHADAM MILAD	イラン	2-10					
敗者復活戦	負	ALIBRANDI GISEPPE	イタリア	4-6					
小倉 涼	女子 -61kg	7	1 回戦	シード				金	
			2 回戦	勝	MOUTSOKOU SOFIA	ギリシャ	5-0		
			決勝戦	勝	OZKAN SINEM	トルコ	2-0		
湯澤 葵	女子 -55kg	6	1 回戦	負	HASSANPOOR ZEINAB (IRI)	イラン	0-10	銅	
			敗者復活戦	勝	AFSAR KADER_ISIK	トルコ	6-2		

## 【水泳 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位/人)	記録	成績
茨 隆太郎	男子 50m バタフライ	35	予選	5	3/35	0:25:55	銀メダル
			決勝	—	2/8	0:25:33	
	男子 100m バタフライ	20	予選	3	2/20	0:58:15	金メダル
			決勝	—	1/8	0:56:18	
	男子 200m バタフライ	13	予選	2	—	—	棄権
	男子 50m 自由形	38	予選	6	—	—	棄権
	男子 200m 自由形	30	予選	4	2/30	2:00:15	金メダル
			決勝	—	1/8	1:54:82	
男子 200m 個人メドレー	21	予選	3	1/21	2:17:69	金メダル	
		決勝	—	1/8	2:07:90		
男子 400m 個人メドレー	10	予選	2	3/10	5:00:12	金メダル	
		決勝	—	1/8	4:35:46		
金持 義和	男子 50m 背泳	18	予選	3	—	—	棄権
	男子 100m 背泳	17	予選	3	3/17	1:01:11	4位
			決勝	—	4/8	0:59:03	
	男子 200m 背泳	12	予選	2	4/12	2:17:85	4位
決勝			—	4/8	2:10:18		
藤原 慧	男子 200m 自由形	30	予選	4	1/30	1:58:45	銀メダル
			決勝	—	2/8	1:55:22	
	男子 400m 自由形	24	予選	3	3/24	4:15:98	金メダル
			決勝	—	1/8	4:07:52	
	男子 800m 自由形	12	予選	2	—	—	棄権
男子 1500m 自由形	11	予選	2	1/11	16:40:87	金メダル	
		決勝	—	1/8	16:21:69		
星 泰雅	男子 50m 平泳ぎ	25	予選	4	9/25	0:31:77	予選敗退
	男子 100m 平泳ぎ	23	予選	4	7/23	1:11:85	7位
			決勝	—	7/8	1:11:12	
男子 100m 自由形	36	予選	5	24/36	1:01:00	予選敗退	
茨隆太郎・金持義和 藤原慧・星泰雅	男子 4×100m フリースタイルリレー	9	予選	1	3/9	3:54:66	銀メダル
			決勝	—	2/8	3:38:84	
茨隆太郎・金持義和 藤原慧・星泰雅	男子 4×100m メドレーリレー	8	予選	1	3/8	4:21:45	銀メダル
			決勝	—	2/8	4:00:82	
茨隆太郎・金持義和 藤原慧・星泰雅	男子 4×200m フリースタイルリレー	8	予選	1	—	—	棄権

## 【水泳 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位/人)	記録	成績
齋藤 京香	女子 50m バタフライ	16	予選	3	—	—	棄権
	女子 100m バタフライ	17	予選	3	1/17	1:08:24	金メダル
			決勝	—	18	1:06:98	
	女子 200m バタフライ	5	予選	1	—	—	失格
女子 200m 個人メドレー	15	予選	3	6/15	2:34:97	6位	
		決勝	—	6/8	2:32:70		
中東 郁葉	女子 100m 背泳ぎ	18	予選	3	3/18	1:12:59	4位
			決勝	—	4/8	1:12:24	
	女子 200m 背泳ぎ	9	予選	2	—	—	棄権
	女子 400m 自由形	18	予選	3	—	—	棄権
	女子 800m 自由形	11	予選	2	—	—	棄権
	女子 1500m 自由形	9	予選	1	3/9	18:54:74	4位
決勝			—	4/8	18:58:96		
平林 花香	女子 50m 背泳ぎ	18	予選	3	6/18	0:34:25	6位
			決勝	—	6/8	0:33:89	
	女子 100m 背泳ぎ	18	予選	3	8/18	1:15:36	8位
			決勝	—	8/8	1:15:09	
	女子 200m 背泳ぎ	9	予選	2	—	—	棄権
	女子 50m 自由形	26	予選	4	14/26	0:30:51	予選敗退
	女子 100m 自由形	21	予選	3	9/21	1:06:01	予選敗退
女子 200m 個人メドレー	15	予選	3	12/15	2:45:37	予選敗退	

## 【水泳 混合】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	順位 (位/人)	記録	成績
金持義和・星泰雅 齋藤 京香・中東郁葉	混合4×100m リレー	7	予選	1	—	—	棄権
金持義和・星泰雅 齋藤 京香・中東郁葉	混合4×100m メドレーリレー	7	予選	1	—	—	棄権

## 【卓球 男子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	予選成績			成績
						順位	勝		負			
井藤 博和	男子 シングルス	51	予選リーグ	12	勝	KONKUBAYAV, KANAT	カザフスタン	3-1	3/4	1	2	予選リーグ敗退
					負	TUTURA, MAREK	スロバキア	0-3				
					負	OVCHARENKO, MAKSYM	ウクライナ	1-3				
川口 功人	男子 シングルス	51	予選リーグ	12	勝	STÜRMER, ERWIN	オーストリア	3-0	3/4	1	2	予選リーグ敗退
					負	LU, SHIH-CHIEH	台湾	1-3				
					負	OH, SEUK	韓国	0-3				
亀澤 史憲	男子 シングルス	51	予選リーグ	12	勝	PIETA, PAWEL	ポーランド	3-0	2/5	3	1	予選通過
					勝	SILVA, CLEITON BATISTA	ブラジル	3-0				
					勝	VELIEV, ANTON	ウクライナ	0-3				
					勝	MAZUMDER, SRIJIT	インド	3-0				
		16	決勝トーナメント	-	負	BUDAVARI, ATTILA	ハンガリー	棄権				17位
灘光 晋太郎	男子 シングルス	51	予選リーグ	12	負	SHIN, CHEOLJUN	韓国	1-3	2/4	2	1	予選通過
					勝	NARKEVICIUS, VIKORAS	リトアニア	3-0				
		16	決勝トーナメント	-	負	BURKITBAY, ABYLAY	カザフスタン	3-0				17位
井藤 博和 川口 功人	男子 ダブルス	18	一回戦	18	勝	KASTER, ARTHUR / SILVA, VINICIUS	ブラジル	4-0				9位
			二回戦		負	OVCHARENKO, MAKSYM / ZAKLADNYI, GENNADII	ウクライナ	0-4				
亀澤 史憲 灘光 晋太郎	男子 ダブルス	18	一回戦	18	負	OH, SEUK / LEE, CHANGJOON	韓国	1-4				17位
日本チーム	男子 団体戦	10	予選リーグ	2	負	韓国		2-3	2/5	2	2	予選通過
					勝	ハンガリー		3-0				
					勝	台湾		1-3				
		4	準決勝	-	勝	オーストリア		3-1				
					負	ウクライナ		0-3				銅メダル

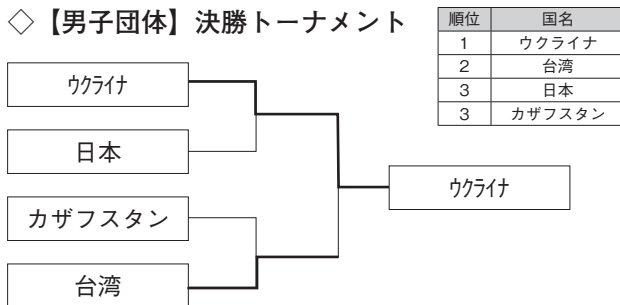
## 【卓球 女子】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	予選成績			成績
						順位	勝		負			
亀澤 理穂	女子 シングルス	30	予選リーグ	8	負	MO, YUNJA	韓国	1-3	1/4	2	1	予選通過
					勝	SMIZEWSKA, MONIKA ANNA	ポーランド	3-0				
		16	決勝トーナメント	-	勝	VASYLIEVA, MARIIA	ウクライナ	3-0				9位
川崎 瑞恵	女子 シングルス	30	予選リーグ	8	勝	ATTAL, RAKHI	インド	3-0	1/4	3	0	予選通過
					勝	MARIA COSTA	ブラジル	3-0				
		16	決勝トーナメント	-	勝	KIM, SEOYOUNG	韓国	3-2				9位
立石 里史	女子 シングルス	30	予選リーグ	8	勝	ZYLA, IWONA	ポーランド	棄権	2/4	2	1	予選通過
					勝	MONTERO, ROJAS D	キューバ	3-0				
		16	決勝トーナメント	-	負	MARQUES, ANA C. F.	ブラジル	3-0				9位
山田 萌心	女子 シングルス	30	予選リーグ	8	負	NUJEVO, ABRIANNE	フィリピン	1-3	3/4	1	2	予選リーグ敗退
					負	BUDNYK, ROKSOLANA	ウクライナ	棄権				
		4	準決勝	-	勝	KHODKO, JULIA O.	ウクライナ	0-3				
亀澤 理穂 川崎 瑞恵	女子 ダブルス	13	一回戦	13	勝	LEE, JIYEUN	韓国	0-3				銅メダル
			二回戦		負	BANERJEE, ABHISHA	インド	3-0				
立石 里史 山田 萌心	女子 ダブルス	13	一回戦	13	負	JURKOVA, EVA / STETKOVA, EMA	スロバキア	4-0				9位
日本チーム	女子 団体戦	7	予選リーグ	2	勝	MONTERO, ROJAS D	キューバ	3-0	2/4	2	1	予選通過
					勝	MARQUES, ANA C. F.	ブラジル	3-0				
					負	NUJEVO, ABRIANNE	フィリピン	1-3				
		4	準決勝	-	勝	BUDNYK, ROKSOLANA / ZAVINOVSKA, KARYNA	ウクライナ	3-4				
					勝	ポーランド		3-2				銀メダル
					負	ウクライナ		0-3				

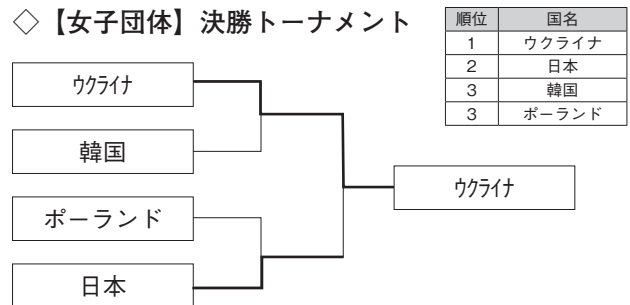
## 【卓球 混合】

選手名	種目	出場数	ラウンド	組数	勝敗	対戦相手 (選手名・国)		マッチ	予選成績			成績
						順位	勝		負			
井藤 博和 川崎 瑞恵	混合 ダブルス	28	一回戦	28	勝	JABLONSKI, M. / SZEMIEL, DAGMARA	ポーランド	4-0				5 位
			二回戦		勝	SHIN, CHEOLJUN / LEE, JIYEUN	韓国	4-3				
			準々決勝		負	OVCHARENKO, MAKSYM / BUDNYK, ROKSOLANA	ウクライナ	2-3				
瀬光 晋太郎 立石 里史	混合 ダブルス	28	一回戦		勝	NOWAK, GRZEGORZ / SMIZEWSKA, MONIKA ANNA	ポーランド	4-1				9 位
			二回戦		負	KEINATH, THOMAS / JURKOVA, EVA	スロバキア	4-0				
亀澤 史憲 亀澤 理穂	混合 ダブルス	28	一回戦		負	DYSZKIEWICZ, GABRIELA / SZELOGA, ADRIAN)	ポーランド	3-4				17 位
川口 功人 山田 萌心	混合 ダブルス	28	一回戦		勝	PIETA, PAWEL / ZYLA, IWONA	ポーランド	4-0				5 位
			二回戦		勝	BENCNIK, GERGELY / IOLA, PAMELA	ハンガリー	4-0				
			準々決勝		負	ZAKLADNYI, GENNADII / KHODKO, O.	ウクライナ	1-4				

### ◇ 【男子団体】 決勝トーナメント



### ◇ 【女子団体】 決勝トーナメント



## 【バレーボール 男子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	ポーランド	負	2-3	26-24	20-25	27-25	22-25	15-13	グループ B 4 位	2	3	予選 通過
	ブルガリア	勝	3-0	25-19	25-21	25-20						
	ガーナ	勝	3-0	25-11	25-10	25-14						
	ウクライナ	負	1-3	19-25	23-25	25-22	12-25					
	トルコ	負	0-3	19-25	23-25	20-25						
準々決勝	イタリア	負	0-3	19-25	18-25	20-25			(棄権)			8 位
5-8 位決定戦	ブラジル	負	0-3	0-25	0-25	0-25			5-8 位決定戦 7-8 位決定戦			
7-8 位決定戦	メキシコ	負	0-3	0-25	0-25	0-25						

### ■最終結果

順位	国名
1	トルコ
2	ウクライナ
3	イタリア
4	フランス
5	ポーランド
6	ブラジル
7	メキシコ
8	日本
9	ブルガリア
9	ベネズエラ
9	ガーナ

## 【バレーボール 女子】

ラウンド	対戦国	勝敗	マッチ	セットポイント					予選成績			成績
				1	2	3	4	5	順位	勝	負	
予選リーグ	ウクライナ	負	2-3	25-21	25-23	20-25	18-25	13-15	グループ A 2 位	2	1	予選 通過
	メキシコ	勝	3-0	25-11	25-11	25-9						
	ブラジル	勝	3-0	25-20	25-12	25-12						
準々決勝	アメリカ	勝	3-0	25-20	25-18	25-17			(棄権)			4 位
準決勝	トルコ	負	0-3	0-25	0-25	0-25			準決勝 3 位決定戦			
3 位決定戦	ウクライナ	負	0-3	0-25	0-25	0-25						

### ■最終結果

順位	国名
1	トルコ
2	イタリア
3	ウクライナ
4	日本
5	アメリカ
6	ポーランド
7	ブラジル
8	メキシコ

日本選手団本部

1. はじめに

第24回夏季デフリンピック競技大会カシアス・ド・スル2021（以下、「今大会」という）は、2022年5月1日から15日までの期間、ブラジル・カシアス・ド・スルにおいて開催された。本来は2021年に開催されるはずだったが、新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」という）の世界的感染拡大の影響や、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が2021年に延期となったことを受けて、今大会も2022年に延期となった。

なお、今大会は73カ国から2,412名の選手が参加し、日本からは全日本ろうあ連盟（以下、「当連盟」という）のデフリンピック派遣委員会（以下、「派遣委員会」という）から10競技に選手95名を含む計149名の日本選手団を派遣した。日本選手団の成績は過去最高のメダル獲得数であったが、コロナ感染者が続出したため、選手団一人ひとりの命と健康、安全を守るために大会途中で全競技を棄権することになった。

2. 今大会におけるコロナ対策の現状

2021年12月20日に、組織委員会から各国ろう者スポーツ委員会へ『参加者の受け入れのための健康安全プロトコル』が配信された。そのプロトコルが示した方針は以下の通りである。

- ①参加者は出発の14日前までにワクチン接種完了
- ②搭乗72時間前までに実施されたPCR検査陰性証明の提出
- ③ポルトアレグレ到着時に抗原検査を実施
- ④陰性であればデフリンピックスクエアでアクレ取得を行う
- ⑤陽性ならPCR検査を行い、その結果が出るまで隔離を行う

2022年1月15日～17日に、同地で開催された団長会議でも、組織委員会から上記の①～⑤を行うことや、バブル方式は導入しないという説明があった。しかし、実際には日本選手団が到着すると、上記の③④⑤は実施されていなかった。なお、オリンピック・パラリンピック等の国際スポーツ大会では組織委員会から「コロナ対策ガイドライン」が出されているが、国際ろう者スポーツ委員会（以下、「ICSD」という）及び組織委員会からは今大会におけるガイドラインは出されなかった。

2022年2月22日に、当連盟スポーツ委員会からICSD及び組織委員会へコロナ対策について、文

書で要望を提出した。

その要望内容は主に以下の通りである。

- ①大会にバブル方式を採用することを求める
- ②大会期間中のPCR検査の実施を求める
- ③大会期間中のコロナ陽性者と濃厚接種者の扱いの明確化
  - ・救急搬送、入院、隔離の方法
  - ・隔離期間
  - ・隔離はどのように終了するのかを明示
  - ・隔離終了後はどうするのかを明示
  - ・隔離期間中の手話通訳等情報保障
- ④大会参加者の食事会場（昼食、夜食）に設定されている「デフリンピックスクエア」から遠いホテルに宿泊する国も多いため、各ホテルで食事ができるよう組織委員会からホテルに交渉することを求める

しかし、要望をしたにもかかわらず、結局、いずれからも回答はなかった。2022年4月に大会会場や競技施設の視察及び選手団が宿泊するホテル及びレストランとコロナ対策について打ち合わせを行った。また、組織委員会にも聞き取りを行ったところ、組織委員会からの説明は以下の通りであった。

- ◎ポルトアレグレ空港到着時に検査する。検査後、カシアス・ド・スル市にあるデフリンピックスクエアに向かい、そこで検査結果を待つ。陽性の場合、基本的には宿泊ホテルにて隔離、重症の場合のみ病院に入院する場合もある
- ◎大会期間中のPCR検査は行わない
- ◎帰国前のPCR検査は実行委員会で準備する。場所はデフリンピックスクエアを予定しており、検査費用は各国負担
- ◎カシアス・ド・スル市の感染者は現在ゼロ、死亡者もゼロ。ワクチン接種率は80%であり、マスク装用の義務付けはない

3. 日本選手団の派遣方針について

2021年7月10日に開催された派遣委員会では、「選手やスタッフの命を守ることを最優先」とし、派遣方針にコロナ対策を十分に行うことを検討することにした。引き続き、同年8月6日、12月17日、2022年2月16日、同年3月12日に開催された派遣委員会でもコロナ対策や派遣の是非また中止も視野に入れた上で検討を続けた。そして、競技団体、選手やスタッフにコロナ対策及び感染のリスクを十分に説明し、承諾を得た上で派遣する、過去大会では本部メディカルチームの帯同ドクターは基本的には常時1名だったのを2名とする、選手団のコロナ対策を十分に講じる、日本選手団独自のバブル方式を設ける、ICSD及び組織委員会にコロナ対策を文

書で申し入れる、選手やスタッフの命を最優先とし、状況によっては例え出発直前でも派遣中止も厭わない等を、派遣前提条件とするに至った。

#### 4. 各競技団体への説明会、意見交換等

派遣委員会で決定した前提条件をもとに、各競技団体へ全5回にわたり、選手団の派遣の意思の有無や是非、日本選手団のコロナ対策も含めた意見交換、説明会を行った。2021年7月の時点で、政府がブラジルの感染症危険レベルについて、レベル3「渡航は止めてください（渡航中止勧告）」を発出していることや、医科学委員会が「派遣を推奨しない」という意見を出していること、そして組織委員会のコロナ対策は期待できないことを説明した上で、選手を日本代表に推薦するかどうか、各競技団体内で十分に検討してほしいと説明した。各競技団体からは、日本選手団独自のバブル方式を行うことや、そのために専用バスを借りること、コロナ感染を防ぐために日本選手団専用の飲食の場やホテルの個室の確保等の要望が出された。説明会を重ねた結果、参加決定した競技団体もあれば、参加辞退した競技団体もあった。

#### 5. 日本代表選手、スタッフ等の選考・決定

派遣委員会は、2020年4月2日に『第24回夏季デフリンピック競技大会日本代表選手団派遣方針』を公表した。派遣方針では、それぞれのデフ競技団体（以下、「競技団体」という）が定める選考基準を満たす選手であること、またスタッフは国際競技大会の経験かつマネジメント及びコーチングについても一定の経験を有し、国際大会戦略や選手への支援に熟達していることや選手団本部と連携できること等を条件としている。その派遣方針に基づき、各競技団体から派遣委員会に推薦された選手やスタッフ等を、当連盟スポーツ委員会（以下、「スポーツ委員会」という）の医科学委員会（以下、「医科学委員会」という）のメディカルチェックや、派遣委員会の審査を経て、2022年3月12日～13日に開催された当連盟理事会にて内定、公表した。そして、2022年4月15日に日本選手団として正式決定、公表した。

日本選手団の大会参加の概要は以下の通りである。

○日本選手団：149名

（選手95名、競技役員41名、本部13名）

○日本参加競技：11競技

陸上、バドミントン、ビーチバレーボール、自転車、マウンテンバイク、女子サッカー、柔道、空手、水泳、卓球、男女バレーボール

#### 6. 日本選手団本部体制

日本選手団本部は、団長、総務、広報、メディカルチーム（医務2名、看護師2名、トレーナー）、手話言語通訳2名、国際手話通訳、事務局、輸送の体制で構成した。

本部は、各競技団体のTD会議や監督会議（対面またはオンライン）への出席への手配や、選手やスタッフの入出国、宿泊対応、アクレ対応、開閉会式の参加調整、ICSD及び組織委員会との連絡調整、各競技団体との情報共有、輸送車両及びドライバーの手配、コロナ対策を含むメディカル対応、その他突発的に起こる事態への対応等を行った。なお、これまでの日本選手団本部の体制と比べ、大きな特徴としては、コロナ予防及び対策のため、医師2名及び看護師2名を常時帯同としたことである。

#### 7. 日本選手団のメディカル体制

日本選手団本部のメディカルチームは、コロナ対策及び感染者が出たときのサポート体制を重要視し、医師2名、看護師2名、トレーナー1名の計5名で構成した。また、カシアス・ド・スル市から最寄りの在ポルトアレグレ領事事務所の横山事務所長に、コロナ感染者が出たときの対応や医療・検査体制について相談し、現地の森口医師とタッチーニ病院をご紹介いただき、現地でのメディカル体制を整えた。なお、在サンパウロ総領事館の釜谷医師も事前に森口医師と面会され、対応を検討していただいていた。

#### 8. 日本選手団の選手・スタッフの健康管理

選手及びスタッフの健康管理や現地も含めたメディカル体制、現地での感染対策を、メディカルチームにより策定した。そして、2022年4月20日に選手やスタッフに対してのオリエンテーションを行い、メディカルチームからコロナ対策について説明を行った。また、選手及びスタッフの健康管理のために、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会でアスリートの健康管理に使用されていた『健康観察アプリ』を導入した。このアプリを選手団全員のスマホ等にインストールし、各自、出発日の2週間前から毎日、朝夕に自体温の数値を入力してもらった。そして、アプリの管理者であるメディカルチームのドクターが全員の体温データをもとに全員の健康管理を行い、必要であれば検査を行った。

その上で、ブラジル滞在日を極力短くするため、選手団を3グループに分け、それぞれが競技日の約2日前に入国するよう工夫をすると共に、選手団全員が成田国際空港を発つ直前にPCR検査を行い、陰性を確認した者のみ参加する方針をとった。なお、

選手団149名全員とも、出国時は陰性であった。

## 9. 現地でのコロナ対策

日本選手団が宿泊するホテルは他国選手団の接触を避けるため、日本選手団のみの貸し切りとするよう交渉した結果、ホテルはほぼ選手団のみの宿泊となった。そして、日本選手団の選手やスタッフそれぞれに個室を用意し、人が集まる場所では不織布マスク着用を義務付けた。また、競技団体のミーティングやトレーニング用として、十分なスペースのある会議室を貸し切り、通気や選手間の接触を避ける工夫をした上で時間を区切り、選手間・競技団体間での接触を控える様に徹底した。

移動の際は、他国選手と同乗しないよう、日本選手団専用のバスを3台チャーター（大会期間中に各競技団体から日本選手団内の他の競技チームとも同乗させないでほしいという要望が出され、最終的には7台となった）し、日本選手団のみで移動を行うようにし、できる限り選手団以外の他者との接触を避けるようにした。

なお、日本選手団から感染者・濃厚接触者が発生したときは、その部屋はホテルスタッフは立ち入り禁止とし、PPE（個人用防護具）を装着したメディカルスタッフが食事の配膳・ゴミ回収やリネンの交換を行うことで、ケアを行うスタッフによる間接的な接触による感染拡大のリスク軽減に努めた。

濃厚接触者の定義にあたり、現地組織委員会による感染対策がなされていないことや、バス同乗・マスクを外し競技会場で行動を共にしている等を勘案し、日本の定義よりも厳しい濃厚接触者認定を行うことや、感染者の競技団体全員を対象とし、同時にPCR検査でも感染がないかどうか確認を早期に行うこととした。

また、組織委員会が用意した大会参加者用の食事会場はコロナ対策が行われていないため、感染のリスクがかなり高いと判断し、ホテル隣のレストランを貸し切り、選手団のみの食事会場（夕食のみ）とし、他者との接触を極力、軽減させるようにした。日本選手団内に感染者が出てからは、ホテルやレストランの協力を得て、三密を防ぐために競技ごとにグループ分けをし、入れ替え制で食事、その際の黙食及び手指の消毒もさらに徹底させた。

PCR検査また抗原検査により感染が明らかとなった選手は自室隔離及びその選手が所属する競技団体の選手・スタッフも自室隔離を行い、必要に応じてPCR検査を行うようにした。

## 10. コロナ感染者の発生

5月1日にある競技チームの1名が発熱を訴えた

ため、選手団本部メディカルチームが抗原検査を行ったところ、陽性が確認された。即時にその感染者が所属する競技チームの選手やスタッフも含めてすべて隔離を行った。翌日にはそのチームから新たに1名の感染が判明したため、チーム全員のPCR検査を行い、残りの選手やスタッフは陰性であることを確認した。しかし、7日に他の競技チームから発熱者が出たため、その競技団体全員及び濃厚接触者のPCR検査を地元の病院に依頼したところ、新たに5名の感染者が判明した。

これらの感染者への聞き取りを行ったところ、先ほどの1日、2日の感染者との濃厚接触はないこと、競技会場では選手や関係者がほぼマスクを着用していないことや、他国選手団が応援のために大声を出しているなど感染しても当然と思われる状況であることがわかった。メディカルチームで検討した結果、組織委員会のコロナ対策の無実施、競技会場等で多くの他国の選手や観客等のマスク不装用、消毒等の予防措置も行っていないことにより、競技会場における感染のリスクがかなり高いという結論となった。

なお、7日時点で選手団の感染者は7名だったが、濃厚接触者の選手・スタッフも含めると、隔離者は20名近くに上ること、また、選手やスタッフは症状が出てもよほどのことがない限り、本部へ報告がないことや、注意喚起後も部屋の行き来や部屋内でのミーティングが行われていた等、この状態が続くと感染者はさらに増える恐れが出てきた。実際に、7日以降も新たな感染者は8日に1名、10日に3名、12日6名、13日3名、14日2名、15日1名と増加する一方であった。

## 11. 全競技を棄権

感染を広げないため、感染者・濃厚接触者の部屋にはホテルスタッフ立ち入り禁止とし、防護具を装着したメディカルチームのスタッフが診療や食事の配膳・ゴミ回収やリネンの交換を行った。日本選手団本部は、7日時点で20名以上の感染者・濃厚接触者へのサポートそして、他の競技に出場する選手やスタッフのサポートを並行して行っていた。コロナのオミクロン株は軽症者が多いが一定数重症化するケースや後遺症が残るケースもあり、選手団の中には感染後重症化が予測される基礎疾患を抱えている者もいたため、このままでは選手団の命を守れない危機が出てくる恐れが出てきた。

日本選手団本部で協議した結果、「選手やスタッフの命と安全を守ることを最優先」とし、全競技を辞退する方針を決定し、当連盟スポーツ委員会が定めた『選手・職員等海外派遣危機管理マニュアル』



にある危機管理体制に基づき、日本選手団本部団長から、派遣委員会及び当連盟事務局に全競技辞退の方針を決定したことを報告した。併せて、すぐに同日の夜に各競技団体の代表を招集し、団長から上記の方針を伝えた。

しかし、各競技団体からは「試合に出させてほしい」という要望が多数あったため、継続して競技団体と話し合うことになった。翌8日、試合がある競技団体は競技に参加していたが、その一方で、さらに一人発熱者が出たため、PCR検査を行ったところ、陽性が確認され、全員で感染者は8名となった。再度、競技団体と話し合いを持ち、これ以上の感染拡大を阻止するため、「選手団内で新たに感染者が出た場合は全競技を辞退する」こととなった。

そして、5月10日に新たに発熱者が出たため、その競技団体全員のPCR検査を行った結果、3名の感染者が判明した。この競技団体にヒアリングしたところ、陽性者が出た他の競技団体との接触はなかったこと、競技会場に練習に行った際に同練習場にて地元のイベントが開催されており、その際に市民等と接触、感染した可能性が高いと判断した。これらの経過を競技団体代表へ説明し、感染者を最小限に食い止め、選手の健康を守るためにも、5月11日以降、全競技の出場を棄権することを決定した。

## 12. コロナ感染者等へのサポート

コロナ感染者の中には、発熱、咳などで点滴治療を要する者もいたが、ほとんどが1～2日の発熱やのどの痛みの軽症者だった。

メディカルチームは感染者全員へ発症日から隔離解除まで、連日、医師や看護師による状態確認を実施した。手話言語を意思疎通の主な手段とするきこえない者にとって、サポートにあたり手話言語通訳は必須だが、感染予防の観点から手話言語通訳者が室内に入ることが出来ず、手話言語が出来る看護師が入室対応、ZoomやLINEなどを利用し遠隔で手話言語通訳を行うことで、できる限り、きこえないコロナ感染者への情報保障に努めた。

状態が安定しているものに対しては①1日2回朝夕、メール報告、②配膳時に状態確認、③テレビ電話での状態確認を行った。

緊急時と要観察者に対しては、メディカルチームで24時間連絡体制を整え、緊急時には医師や看護師が部屋を訪問し状態観察のもと、治療を行った。また、必要に応じてタッチー二病院への受診、検査への付き添い、感染者や自室隔離者への一日三食、飲料水等の準備や配布、リネン物やタオルの交換等のサポートを行なった。特に14日～15日は感染者が20名となり、自室隔離者も含めるとサポートを

行う対象者数は30名以上となった。

さらに、一部の感染者には、異国の地で陽性となり、隔離されたことで、気分の落ち込みや帰国できるかどうかへの焦りなどが見られたため、メンタル的なサポートが重要となった。実際に、ホテルの自室のみでの隔離生活でのストレスが大きく、また現地の食事が合わないために食欲が無くなっていく様子や、ストレス性の胃炎になり点滴治療が必要になった者もいた。また、自分がPCR陽性であることを受け入れられず、何度もPCR検査を要求する者もいたが、現地の医療機関には快くこの様な患者にも対応していただけたことには感謝したい。なお、メンタルサポートについては、選手やスタッフが所属する競技団体や当連盟加盟団体に6月3日付けで通知した『第24回夏季デフリンピックに関する選手・スタッフの心のケア等ご協力をお願い』にて、選手やスタッフから専門機関や手話言語通訳派遣等の問い合わせがあれば、特段の配慮をしてもらえるよう、依頼を行った。そして、7月には聴覚障害の特性に応じた対応の経験のある手話言語のできる臨床心理士及び公認心理師、または精神保健福祉士を中心としたデフリンピックメンタルケアチームで対応する『こころの相談窓口』を設置し、各競技団体を通して選手やスタッフへの周知を行った。なお、『こころの窓口』は2022年12月31日まで開設し、1件の利用があった。

## 13. 現地の皆様の温かい支援

1人目の感染者が出た時点から、毎日、在ポルトアレグレ領事事務所や現地の森口医師と選手団の状況について連携していたが、それ以降も新規感染者は日を追うごとに増加し、選手団のコロナ感染者は最終的に23名となった。幸い、全員が軽症であったため、入院には至らなかったが、一番の問題は帰国予定日の5月15日に帰国ができない者が出てきたことである。帰国の際、航空会社に「PCR陰性証明」の提出が必要であるが、発症後10日間後の療養終了者の何名かはコロナウイルスの残渣が体内に残っているため、PCR検査をしたところ陽性反応が出てしまっていた。このままでは、感染者や陽性反応者も含め、ブラジルに残る必要があるが、新たに宿泊ホテルを手配するにあたり、感染者を受け入れてくれるホテルを確保することが問題となった。

そのため、感染者全員の病状や検査状況等、事前に横山事務所長と連携し、陽性発覚から10～12日間経過後に、PCR検査と抗原検査を行った結果がまだ陽性のままであれば、即座に森口医師より回復証明を得て、その回復証明書をもとに領事館レターを作成していただき、フライトが予約できれば帰国

させる等、帰国や現地での療養体制の準備を並行して進めた。

そして、森口医師のご支援の下、ポルトアレグレ空港近くのホテルを確保し、5月16日に感染者等18名をメディカルチームの看護師、援助者も含め、移送した。このホテルは、ブラジル厚労省がコロナ患者の隔離療養として認可したホテルであったため、ホテル側もコロナ患者の対応には慣れており、受け入れてくれた。

そこでも、森口医師及び帰国したメディカルチームの医師によるオンライン診療での医療支援を行った。そして、陰性証明もしくは領事レターが得られた者を順次、帰国させた。なお、当時は政府の方針により、日本入国者数が絞られていたため、フライトチケットの入手も難しく、少人数に分けて帰国させた。

感染者や援助者にとって嬉しかったのは、毎日のように、南日伯援護協会の方々から日本食を差し入れてくれたことである。南日伯援護協会は、1900年代に政府の移民政策でブラジルへ移住していた日本移民と日系ブラジル人によって創立された協会であり、今も移民1世への福祉、医療支援や日本とブラジルの懸け橋として活動をされている。その方々が、困っている私たちのために、手を差し伸べてくれたのは本当にありがたく、同胞としての心強さを感じた。

陰性となった者を順次、帰国させ、最終的に選手団すべての帰国が完了したのは、5月30日であった。

今回、在ポルトアレグレ領事事務所や現地医療機関、森口医師、南日伯援護協会、メディカルチームに医師や看護師を派遣していただいた順天堂大学スポーツ健康医科学推進機構の皆様に、多大なご支援をいただいたことに改めて深く感謝申し上げたい。

※なお、今大会終了後の6月3日に、ICSDは大会前や大会期間中、大会後の感染対策や感染者への対応手順を定めた『感染拡大を防ぐためのICSDプロトコル』を公表したが、遅きに失した感がある。

## 陸上競技チーム

トレーナー/強化スタッフ 内海 優

### 1. 自己の役割とその評価

トレーナーとして、

- ・選手、スタッフの体調管理
- ・メンタル面でのサポート

- ・試合までのボディケア、コンディショニング
- ・毎日の健康観察、管理、カウンセリング、個々のケア

年間を通しての強化合宿。事前合宿など通して、毎朝メディカルチェックを行い、気になる症状は細かく個々に対しカウンセリングを行なった。デフリンピック期間中も、『健康日記』に併せ、陸上独自に毎朝、体温、体調報告はもちろん、顔を見て、顔色、表情、日々の様子、変化を感じ、感染対策は行いつつ、話をしたり、言葉かけをしながら、ストレスの緩和、安心感を与え、自らの競技に集中できるよう、取り組んだ。アスリートアロマ コンディショニング（精油の作用）、筋膜リリース、足ツボ療法など、その都度、選手の状態に合わせた施術を行なったことで、好結果につながったかと思われる。結果として、1人の感染者をだしたが、もともと扁桃腺の症状が出やすい体質であったこともあり、陽性となった。しかしながら、大学生であり、今大会が初めてのデフリンピックであること、身近にコロナ感染者が多発、全体の競技辞退となったことへの大きな負担を感じてのことが大きな要因だったかと思う。

### 2. 今後の課題

同じ轍を繰り返さないために、こういった事態へのシミュレーション、想定しての対策を事前に徹底し、講じ、各競技団体に周知してほしい。今後も引き続き、合宿、強化部通して、選手一人一人と向き合う形をとりながら、選手層の拡大、2025デフリンピックがより良いものにできるよう考え行動していく。

スタッフ 佐々木 亜矢子

### 1. 自己の役割とその評価

<役割>

- ・選手が競技に向けて自分のベストパフォーマンスを発揮、集中力を高めやすい環境を整えること
- ・ビデオ撮影、リザルト確認など
- ・バス手配、洗濯物手配、買い出し
- ・食事面などのサポート
- ・TD会議に参加（監督のサポート）
- ・日本製スタートランプの接続サポート

日本から炊飯器を持参し、他スタッフと協力しながら、食事面で偏った食事にならないようにした。そして、今大会では今までの国際大会とは違ったさまざまな対応があったため、監督等に相談しながら最新情報を収集に心がけた。

今大会ではホテルから競技場まで1時間の移動だったため、ホテル組と競技場組のスタッフをうまく分担したりと、試行錯誤だったが、今回は本部や旅行会社とのLINEグループがあったおかげでスムーズに本部や旅行会社とすぐに連絡を取ることができた。

今回のデフリンピックで陸上チームはさらなる結束力、そしていろんな面で気持ちがみんな同じだと改めて感じさせられた。

## 2. 今後の課題

本部は食事時間など急なお願いにも関わらず、対応してくださったことや、朝早くから夜遅くまでさまざまな対応（コロナ対策で日本選手団だけのバス手配をする等）には感謝しています。

また、今大会はライングループがあったため、連絡等がスムーズに捗ったので、今後の大会もメールではなく、ライングループで連携をとっていく方法が良いと思います。

今大会は全競技団体が辞退という急な出来事に戸惑いを隠せませんでした。陸上は後半に出発したため、あまりにも不利すぎて悔しさ、悲しい、といろんな感情があり、全競技棄権という結果には今でも納得いかない。今大会のメダルは今までとは違う重みのメダルだと思う。4年に1度しかない最高の舞台で全ての力を出しきれなかった選手がたくさんいる。

監督 佐藤 将光

### 1 監督としての総評

2022年5月にブラジルで行われたデフリンピックへ、史上最多のメダル獲得が期待できる、史上最強のメンバーで行った。

男子100mでは、世界規模の大会として日本人選手初となる金メダルの獲得、男子ハンマー投げでは金、銀メダル、女子1500mでは初の銅メダル獲得、初出場ながら金、銅メダルを獲得した棒高跳。メダル獲得できなかったものの、自己ベストを果たす等、成果を上げた選手もいる。競技4日目にして、史上最多タイのメダル数6個を獲得し、その活躍はめざましいものがあった。

しかしながら、その一方でコロナ感染の状況により、5月11日以降の全競技を「棄権する」という苦渋の決断が下され、涙をのんだ者も大勢いた。監督として競技続行を叶えられず、選手に辛い思いをさせたこと、選手の気持ちを考えると、やりきれない思いが今も胸の奥に残っている。選手たちに落ち

度は一切ない。選手全員を温かく、大きな拍手で迎えてください。今まで応援していただいた方々、関係者の皆様、本当に感謝しています。誠にありがとうございました。

次は2025年に東京でデフリンピックが開催される。今回のデフリンピックを糧に、これまで以上の活躍を披露できると信じている。また引き続き応援のほど、よろしくお願ひします。

強化スタッフ 滝澤 美妃子

### 1. 自己の役割とその評価

強化スタッフとして参加し、選手の生活全般のサポートをした。陸上競技は特に食事に気を遣っており、競技の性質上、種目毎に試合の日も時間も違うし、種目の特徴も一言に陸上競技と言っても、全く質のことなる競技のため選手毎にサポートの質も変わる。

その繊細とも言える体調管理をコロナの感染防止も含めて、本当に真剣に取り組んできた。大会の参加辞退については無念としか言いようがないが、26人の大所帯で感染者1名（帰国前検査で判明）にとどめたという結果はあの状況の中では選手を守ったと言う自負がある。

### 2. 今後の課題

国際大会の場合、当面感染症についての考慮は必要と考える中で、世界各国の考え方や対処方法に始まり医療の状況など情報収集はさらに入念にすることが必須と思った。

スタッフ 名取 英二

### 1. 自己の役割とその評価

(1) 自己の役割～ブラジル入国から競技日まで

出場する競技者が実力を発揮できるようサポートすることが今回の役割であった。特にトラック種目について、競技前の調整段階から当該競技が実施されるまで、身体的側面、精神的側面からしっかりサポートできるように心がけた。初めてのデフリンピック、きこえない人の大会で戸惑うことも多かったが、監督はじめ他のスタッフの絶大なるご支援のもと、また選手たちの協力もありほぼ想定どおりのサポートを行うことができた。しかし、コロナ感染症による日本チームの途中棄権については全く想定外であり、競技者それぞれに対するケアが十分できなかったことは残念であった。

(2) 自己の役割～参加決定からブラジル入国まで

参加者を対象とした強化合宿を複数回実施し、本大会へ向けた準備を行った。参加者はデフリンピックでの入賞を目指し、それぞれの課題解決へ向けた取り組み姿勢も明確であり意識も非常に高くサポートする上でやりがいのある事業であった。大会前の情報が少なく、大会を迎えるに十分な戦力分析ができなかったことが反省点である。

## 2. 今後の課題

### (1) 競技について

今回参加した競技者の競技レベルは非常に高く、総じて日本の競技レベルの高さを示すことができたと思料する。しかし選手確定から本大会までの期間が短く、結果として個人ごとの競技レベルの評価が十分されないまま本大会を迎えることとなった。

準備段階から丁寧な対応を行うためには、本大会を基準にした計画的な競技力向上の事業が実施されることが不可欠であると思われた。

### (2) チームの体制について

遠征チームのスタッフの構成などについては、日本選手団として十分な議論がされておらず、競技のパフォーマンス発揮のためは不十分な内容であった。大会へ向けた日本選手団としての方針も明確ではなく、競技ごとの対応にも限界があった。

日本選手団としてどのように戦うのか方針や課題を事前に示すことにより、競技ごとのパフォーマンス向上にもつながるものと思われ今後の課題であると思料する。

国際手話通訳 廣瀬 芽里

## 1. 自己の役割とその評価

今回、陸上競技団体の国際手話通訳として同行した。デフリンピックに参加したのは2回目。最初の1回目は本部の国際手話通訳としてイタリアのローマで開かれたデフリンピックの時であった。あの頃は、国際手話よりアメリカ手話の方が先に出てしまい、みなさんに迷惑をかけてしまった。あの時の経験を生かすために、できるだけたくさんの世界各国のろう者と、積極的にコミュニケーションを図ってきた。国際手話は言語ではないため、国によって表現方法が微妙に異なる。

また、デフリンピックで初めて陸上に関する手話通訳を務めさせていただいたが、陸上に関する専門の手話は無知だった。そこで、アメリカ在住時代にお世話になった元ICSD会長のドナルド博士に、個人的にレッスンを設けてもらい、何回かに分けて

教えていただいた。その結果、手話だけではなくデフリンピックの歴史や背景についても知ることができたのは貴重な経験となった。事前勉強をしておいたお陰で、デフリンピックでは胸を張って行動することができると思っていた矢先に試合全て中断という形になってしまった。そのため自己評価はできない。

## 2. 今後の課題

帰国してから2週間が過ぎたが、まだ気持ちが整理できておらず、残念無念でたまらない。今回、国際手話通訳という立場でデフリンピックに参加させて頂いたが、全競技棄権げ決定してから、様々なことが立て続けに起こり、心身ともに限界を感じていた。一番大変なのは選手たちなのに、スタッフの私がメンタルにやられたらどうすると、自問自答を繰り返していた。予想外の出来事が起きても、めげない気持ち、ぶれない自分である必要があると改めて思い知らされた。いろいろあったが、引き続きデフリンピックの知名度アップに繋がる運動は続けたいと思う。

また、デフリンピックに参加する度に感じているのは、日本人選手団は他国の選手と交流する時間が作れないでいることである。交流できるのは試合の時のみで、それ以外は全く交流ができていない。そのため、他国の選手たちから、日本人選手とお話しできるのはレア、滅多にないことだと言われた。デフリンピックのために国際手話を勉強した選手たち、また将来、他国でコーチをしたいと言ってきたろう選手たちの可能性を広げるために、アクションを起こせたらと思っている。

トレーナー 山岸 亮良

## 1. 自己の役割とその評価

トレーナーとして帯同。2016年頃からデフ陸上に携わり、微力ながらデフ陸上の運営を手伝い、デフ陸上のみならずデフスポーツを盛り上げられるように、もっと多くの人に知ってもらえるように、色々な活動を企画し実施してきた。私は常に「デフスポーツはろう者が主役」と考えており、ろう者の意見を尊重し表に出ず裏方として協会運営などを支えてきたが、ブラジルデフリンピックの途中棄権については納得がいかず、あえて表に出て主張した。

前回の2017年トルコ大会から5年間、選手スタッフが皆、ブラジルデフリンピックに向け様々な困難に立ち向かい、苦しい練習を耐え抜き、自身を奮い立たせ、代表を勝ち取った選手たち。また、同じよ

うに苦しい練習を耐え抜きがんばってきたが代表選手から漏れた選手たち。その思い、その姿を5年間ずっと近くで見えていたからこそ最後までやらせてあげたかった、完全燃焼させてあげたかった、フィールドに立たせてあげたかった。今でもその思いは変わらない。しかし、もう過ぎた事で戻ってこない。

選手たち、スタッフたちも現在、次に向け気持ちを奮い立たせ、また苦しい練習に耐えよう、この悔しさをバネにがんばろうとしている。まだ、立ち直れない選手やスタッフ、夜も眠れないと訴え心身に影響を及ぼす恐れのある選手、スタッフもいる。しかし、そのような状況に追い込まれた選手たちやスタッフたちの気持ちを理解してください。

## 選手 青山 拓朗

### 1. 当初の目標（自己目標）

5000mの自己ベスト更新しメダル獲得

### 2. 結果に対する評価

出場辞退

### 3. 今後の課題

今回のデフリンピックは出場辞退という悔しい結果になってしまった。他の選手の試合を現地で観たが、中長距離においてはケニア勢が強かったと感じた。だが、戦えないかというそんなことはなく、メダルも頑張れば狙えるのではないかと感じた。次大会はマラソンで勝負したいと考えているが、自分の課題と感じているのはスタミナの部分である。今大会はトラック種目での戦いであったため、どちらかというとスピード強化の方に重きを置いて練習したが、マラソンで勝負するとなるとスピードに加え、スタミナを強化していかなければならないので、普段のジョグの距離を増やしたり、ペース走を増やすなどしてスタミナ強化に努めていきたい。

また、デフリンピックの知名度向上にも取り組んでいきたい。デフ陸上をはじめとしたデフ競技を観て、興味を持ってもらい、たくさんの人々にデフリンピックというものを知ってもらいたいと思う。今回の悔しさを次に活かせるかどうかは、今後の自分の取り組み次第であり、悔しさを忘れずに、3年後はマラソンで金メダルを目指すつもりである。

## 選手 石田 考正

### 1. 当初の目標（自己目標）

●前回のデフリンピックは銅メダルだったので、今回のデフリンピックは銀メダル以上を獲得すること

●世界記録を更新するため、ハンマー投げの技術レベルのステップアップへ導くこと

●自分らしい投法をすること

●ご支援頂いている会社と全力応援していただいている学校の期待に応えること

### 2. 結果に対する評価

今大会の目標として掲げた「銀メダル以上」を、金メダルを獲得することで達成できた。自分らしい投法もでき、自己ベストを出したのは文句ないくらいよかったと思うが、動画を見ると、軸が少しだけブレていたため、改善の余地があると考えている。更なる技術レベルのステップアップに向けて、引き続き練習に励みたい。

ご支援頂いている会社と全力応援していただいている学校から、本当に嬉しくなるほど、応援メッセージがいっぱい書かれた日本国旗を頂いた。その場で「期待に応えるべく全力を尽くして、金メダルを獲得し、そのときはこの日本国旗を背負ってウィニングランをやりまします！」と約束した。そして、約束通り金メダルを獲得し、日本国旗を背負ってのウィニングランをすることができた。

### 3. 今後の課題

私の挑戦はまだ終わっていない。世界記録更新に向けて引き続き練習に励みます。引き続き応援のほどよろしくお願い致します。そして、ありがとうございました。

## 選手 北谷 宏人

### 1. 当初の目標（自己目標）

初めての国際大会、そしてデフリンピックとなるが、自分の力を発揮する、コロナ禍の中、開催されたこと、いろんな人の支えがあったからこそ、ここまでやってこれたということを忘れずに試合に望む、でも、気負いすぎずにリラックスすることを目標とした。

### 2. 結果に対する評価

棒高跳びで世界一となり、金メダルを獲得することが出来た。しかし、調子は悪くなかったのに、記録的には自己ベストには程遠く、尚更悔しく納得していない思いの方が強かった。でも、デフリンピックは勝負の世界だと先輩がおっしゃっていたので、勝負どころで勝てたのは自分を褒めたいと思う。

男女ミックスマイルリレーに急遽出ることになり、専門外の種目だったが、自分なりに力は出せたと思う。でも、もっと貢献できるように走力を上げたいと思った。

大会途中、日本選手団内でコロナ感染者が続出したことにより、全競技を棄権することになってしまい、見えない敵に負けたことには、本当に悔しい思いでした。

### 3. 今後の課題

今回、デフリンピックを最後までやりきることが出来なく、悔しい思いが残ったが、これもデフリンピックの知名度がまだまだ低いことが関係しているように思う。オリンピック、パラリンピックだったら、絶対に同じような対応はとっていないと思う。

棄権と知らされた時は、全日本ろうあ連盟に対して不満でいっぱいだったが、競技が優先する選手の思いと、連盟の命を優先という思いが交錯するところがあった。今大会が終わった後落ち着いて考えると、連盟に対してここまでいろいろと動いてくれたことにも感謝する必要があると思った。

今大会では金メダルを獲ったが、記録では納得していないので、2025デフリンピックではしっかり記録を出して優勝したい。それまでもっと「人間力なくして競技力向上なし」といった言葉のように競技力だけでなく人間力も向上できるように、日々精進していきたい。

選手 坂田 翔悟

#### 1. 当初の目標（自己目標）

100m、200m P B 決勝進出

4×100mR、マイル 金メダル獲得

初めての国際大会となり、自分の力が世界にどれくらい通用するのか試すとともに、海外選手に負けないうようなレースに挑むことを個人目標とした。前回大会のリレー種目では、日本チームが4×100mRで金メダルを獲得しているため、2連覇を目指し、スターターとして良い流れを作ることを目標とした。

#### 2. 結果に対する評価

100mでは決勝進出することができなかったが、P Bは叶わずともP Bに近い記録である10秒台を二次予選や準決勝で出すことができたので、決勝進出は不可能ではない、海外選手に対抗できると自信につながったと思う。

200m、4×100mR、マイル 出場辞退

### 3. 今後の課題

全競技棄権により、3種目出場辞退となったため、あらかじめ自分で用意していた補食が余ってしまった。もし全種目出場となっていれば明らかに足りない状況になった。日本でいつもの感覚だと海外では通用しないと痛感した。次の国際大会以降では、自分が思っている以上の準備を心掛けたい。

競技面では、海外選手と比べて圧倒的に筋力量が違うことだと思う。これからはウェイトトレーニングを取り入れ、海外選手に負けないような走りを身に付けていきたい。リレー種目も、次回大会でも選ばれるとは限らないため、国内で他選手と切磋琢磨し、チャンピオン奪還を目指したい。応援ありがとうございました。

選手 佐々木 琢磨

#### 1. 当初の目標（自己目標）

・3冠王になること（100m.200m.4×100m R）

・特に100mは絶対に世界一になること。

#### 2. 結果に対する評価

100mで世界一になることができた。この14年間の夢だったので、とても感慨深いです。

苦手としていた100m後半の走りに対して、コーチからの指導により、「走り」に繋がる動きの技術練習を長距離を使って練習で克服し、決勝で勝つことができた。

昨年、行われた世界デフ陸上競技選手権大会でエストニア選手に敗北した事がきっかけで、全てを陸上に捧げる覚悟で過ごしてきたので、世界一に繋がったと思う。今となってはあの時の敗北は良かったと思っている。100点満点。デフ陸上最高！！俺らは強い！！押忍！！JAPAN！！

### 3. 今後の課題

世界一になったことの反響が大きいのので、きっと、今後の練習は今までが一番精神的にきついかもかもしれないが、素晴らしいコーチや仙台大学陸上競技部の大切な仲間たちと一緒に謙虚・感謝を忘れずに練習を楽しんでいきたいと思っている。

2025デフリンピックこそは世界新記録を樹立することと、国際大会に出場する全選手の自己ベストを超えるタイムを出して勝つこと「完全勝利の世界一」を目指す。

## 1. 当初の目標（自己目標）

- ・男子400mハードル  
三大会連続の決勝進出・メダル獲得、自身の日本記録更新
- ・男子4×100mリレー  
二連覇・金メダル獲得
- ・男子4×400mリレー  
メダル獲得
- ・男女混合4×400mリレー  
決勝進出・入賞以上

## 2. 結果に対する評価

結果は5月11日より前に実施された1種目のみとなる。

- ・男女4×400mリレー決勝6位入賞  
男女4×400mリレー決勝当日に、個人種目のない選手4名で力を合わせて出場した。残念ながら、メダル獲得はできなかったが、最低限度の結果（※決勝進出・入賞以上）を残すことができ安堵している。5月11日以降の競技は全て辞退となったため、下記の3種目は出場していない。
- ・個人種目の男子400mハードル
- ・男子4×100mリレー
- ・男子4×400mリレー

## 3. 今後の課題

気持ちの整理ができておらず、今後のことはまだ何も考えられない状態です。申し訳ございません。応援、本当にありがとうございました。

選手 中野 洸介

## 1. 当初の目標（自己目標）

- ・10000m 8位入賞
- ・フルマラソンメダル獲得  
初のデフリンピック、日本代表の自覚を持ち、悔いのない試合をすること。

## 2. 結果に対する評価

10000mは入賞より程遠い12位（17人中）でした。今年に入ってから、左前太腿に違和感が続いていたため、薄底シューズを使つての練習が思うように積めず、結果的に接地感覚を忘れたままのレースとなってしまった。

調子、コンディションの面では、しっかり疲労抜きに徹してきたので悪くはなかった。最終日のフルマラソンは、全競技棄権により、競技を終えること

になった。

## 3. 今後の課題

2025デフリンピックに向けて、あと3年。今回の結果と2021年9月の世界デフ陸上競技選手権大会の結果を踏まえ、トラック技術（薄底シューズ慣らし）を上げる、長時間のスピード持久力の向上、2023年と2024年の2回、ケニアに行き、高地トレーニングを行うこと。

2025デフリンピックでは、必ずメダル獲得を狙う。5000mは6位内、10000mとフルマラソンはメダル獲得！

選手 森本 真敏

## 1. 当初の目標（自己目標）

8年ぶりの競技復帰で自己ベストを投てき、金メダルを獲得！

## 2. 結果に対する評価

5投目に57m24を投てき、競技復帰後の自己ベストを更新し銀メダルを獲得できたので達成度は98%！私の心は金メダルです。ここ1年間、概ね正しいトレーニングを積めたことが証明されたと思う。

選手 山田 真樹

## 1. 当初の目標（自己目標）

2017サムスンデフリンピックでの200m、4×100mで金メダルを取得したのと同様に、今大会も金メダルを取得して2連覇を目標としていた。これまでの全大会で銀メダルを取得した400mは100mに変更することにした。100mの国際試合には出場したことがなく、今大会が初出場になるため、決勝に残れることを目標としていた。4×400mリレーは新メンバーが多く、だれが走るか当日まで分からなかったが、選ばれた場合、最低でも銅メダルを取得する。今大会で出場する4種目すべてで何かしら結果を残したいと考えていた。

## 2. 結果に対する評価

まず、評価の前にスタートラインに立たせてもらえなかったことが悔しい。前大会から5年間2連覇を狙うように頑張ってきたのに、その機会を奪われたことには残念な思いしかない。出場予定だった4種目のうち、唯一出場できた100mは自分の実力がどこまで通用するか分からなかったが、準決勝で

佐々木選手を抑えて1位通過した。これを機に確実にメダルを取得できると自信がついた。しかし、いざ決勝のとき、隣の韓国の選手がスタートランプより速く反応していたため、私はやり直しかなと思って身体の力を抜いてしまった。スタートランプは消えることなく黄色から白に変わったため、出遅れてしまい7位に終わった。

### 3. 今後の課題

これまで出場してきた国際試合では200m、400mのスタート地点がコーナーであり、隣のレーンに選手がいないのが当たり前だったが、今回の100mは隣に選手がいた。その中でのレースは200m、400mにない緊張感があり、それを経験することが出来たのは今後の競技人生において役立った。特に佐々木選手は絶対に1位を取ってやるという圧巻のオーラがあった。その姿勢が大変勉強になり、今後につなげたいと思った。

#### 選手 山中 孝一郎

### 1. 当初の目標（自己目標）

10000mとマラソンの2種目出場で入賞。特に後者は狙えるなら3位以内。

### 2. 結果に対する評価

- ・10000m 33.28.38 10位
- ・マラソン 出場辞退

10000mの8位は33分08秒だったので、本来の走りをすればよかったが、本調子ではなくスピード対応ができていなかった。マラソンは全競技棄権により、出場できなかった。

参考までに、マラソンの1位と3位の結果を記す。  
(記録、資格記録の順位、コンディション)

1位 2:33:03 7番目

3位 2:36:24 14番目

雨、温度：14℃、湿度：100%

次に、エントリーリスト、コース、天候の3点を以下にあげる。

エントリーリストは資格記録では上位5番目。コースは周回でアップダウンあるコースが特徴。最後に、当日の天候は肌寒く雨の中で実施。

1点は自信を持って、2点はレース中に対応すればよい。3点は今回よりも土砂降りの中、自己PB(2:25:40)を出した。雨の大会でも結果を残した自負はあり、あの天候は自分にとっては自信があった。

これら3点より、3位以内に入れる可能性があっただけに、スタートラインすら立つことなかったの

は、非常に残念だといわざるを得ない。

### 3. 今後の課題

コロナ禍や延期など様々な異例の状態、通常のパフォーマンスを出すのが困難な大会だった。また、個人的には4月中旬にワクチン接種をした影響でキレが鈍かった。今後は競技に限らず日程に対する余裕を持って取り組めるようにしたい。

なお、今回は宿から4km先に競技場があり、移動負担を減らせたと思う。海外開催の場合、今後同様のことがあれば、本会場に固執するのではなく、毎日ではなくても近郊の競技場を使うことを検討してほしい。

最後に、出場辞退の件は様々な思いがあるが、出場辞退の過程等、様々な面を検証していただきたいと思う。

#### 選手 山本 剛士

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・400m 最低でも決勝に残ること
- ・4×100mR 二連覇を目指す(前大会は金だった)世界一、世界新記録を出すこと
- ・4×400mR メダルを獲得すること
- ・チームに少しでも貢献できるよう頑張ること

### 2. 結果に対する評価

- ・400m 6位入賞 49, 22(準決勝48, 81)

自分はリレー種目だけの内定(1月)を貰い、個人種目では内定されなかった分、頑張って自分の力を出し切ろうと思っていたところ、4月上旬に400mの内定を貰った。そのときは嬉しさより、「もっと頑張って結果で返さないといけない」と責任感を強く感じた。

個人種目については、初めてのデフリンピックで準決勝は約3年振りの自己ベストを更新し、決勝ではセカンドベストを出すことができた。目標は達成することができたが、やはりメダルが欲しかったと感じている。

リレー種目は「全競技棄権」となったため、出場辞退となったのが残念である。リレーメンバーは出身地が違い、合宿しか集まることができない。合宿での短時間の練習時間を大切に、コミュニケーションを取りながらやってきたのに、努力してきた分が無駄になるという結果になり、悔いが残る。悔しい。

### 3. 今後の課題



400mのメダルは2025年にお預け、今回は初のデフリンピックでいろいろ学ぶことが多くあり、良い経験を得ることが出来たと思う。また自分の弱点を知ることが出来たので、しっかりと計画を立てて、理想な自分(走り)に近づけたいと考える。そして、最後に後悔しないように努力したい。

選手 湯上 剛輝

### 1. 当初の目標 (自己目標)

世界ろう記録更新と金メダル獲得。

前回大会のサムスンデフリンピックが銀メダルだったので、今回は絶対に金メダルを取るという強い気持ちと絶対的な自信を持って臨んだ。きこえる選手の世界でも戦っている自分にとって、今大会は大きな意味を持っていた。デフ界だけでなく、きこえる方々と多くのパイプを持つ自分にとっては、ここで活躍することによって、オリパラだけでなくデフリンピックの認知度を上げること、そして日本チームの代表としての意識向上を図ることも1つの目標であった。

### 2. 結果に対する評価

出場辞退

### 3. 今後の課題

まず、今回の件に関して思うことは2つある。

#### ①出場辞退について

これは本当に残念です。現地の医療状況や感染対策の甘さについては、そもそも派遣前から分かっていたことであり、派遣を決めたからにはその覚悟があったからこそだと思っていた。私もワクチンを3回接種し、個人的にも感染対策を徹底した上で、覚悟を決めて出国した。「仮に数名が陽性になっても組織として選手を守るために、陽性者は隔離期間～帰国まで十分な治療を受けられるように期間が延びたとしても最後まで対処する。陰性者は継続して競技することが可能なように、独自で検査や感染対策等を徹底する」というように覚悟を決めた上での派遣だと思っていた。

日本選手団としても独自でホテルやバスを手配するくらいには徹底していたので、その尽力ぶりとはとても理解できる。何人かが陽性反応になっても、責任を持って選手を守り、全員が帰れるように尽力したことや、現地の医療が日本に比べ十分でなかったことも理解している。結果的に出場辞退の結論だったが、流石に全競技辞退は極端すぎるように感じた。情報がかなり少なく、私自信も全てを理解できてい

たわけではない状態で感情的になり、強い非難の言葉を連盟に向けて発してしまったのはいちアスリートとして、人間として反省すべきだと感じている。

#### ②日本選手(ここでは陸上)の選手としての意識

前回大会に比べ、代表メンバーがアスリートとして成熟しつつありことを感じた。前回大会は日本の表彰の時ですらお構い無しに手話で会話していた選手が今回はそういうことをしなくなったのは日本代表としての意識の成長を感じている。しかし、意識向上に反して、全体的な競技レベルには変化がないように感じる部分もあった。はっきり言えば、デフリンピック陸上競技は高校生インターハイ、種目によっては中学生全国レベルと変わらないレベルであり(一部、日本選手権レベルの種目もあるが)、また選手の掘り起こしがなかなか進まないことから、競技レベルアップや人材の発掘がそれほどうまくいっていない印象を受ける。デフ陸上同士での狭い世界ではなく、日本全体、そして世界と広い世界を見て、目標を高く持ち、レベルアップして行って欲しい。

選手 岡田 海緒

### 1. 当初の目標 (自己目標)

女子800m・1500m・ミックス4×400mリレーの3種目にエントリー。800m、1500mではメダル獲得、ミックス4×400mリレーでは入賞を目標。

### 2. 結果に対する評価

・ミックス4×400mリレー 6位入賞

リレーでは私は4走を務めました。全員、専門種目外の選手が走ることになり、メダル圏には程遠く届かなかったが、この400mが個人種目への良い刺激になった。

・1500m 3位

当日、雨が降り、気温も低く冷えていたが、しっかり防寒対策をした。ミックスリレーに出場したことで、競技開始時間の気温やコールからの試合開始までの流れ、競技場の特徴などをあらかじめ把握でき、当日の試合に備えることが出来た。タイム的には決して満足いくものではないが、目標としていたメダル獲得を達成できて率直に嬉しい反面、金メダルが見えていただけに悔しさもある。

・800m 出場辞退

### 3. 今後の課題

2025年デフリンピックで世界一を目指して、どのようなレースパターンでも対応できる確実な強さ

をつけていきたい。また、年々女子デフ中距離のレベルが格段に上がってきているため、日本選手権に出場できるようなレベルまでいきたい。

試合会場までバスで1時間だったが、普段練習でも車で同時間ほどかけて通っていたため、苦ではなかった。しかし、ミックスリレーの予選が無くなった日、練習と応援で会場に向かう途中に、「予選あり」と連絡を受けた。他の競技団体も乗り合わせていたため、すぐにはホテルに引き返せなかった。幸い、結局予選がなくなったが、考えてみるに、ホテルから会場まで遠いとパニックに陥りやすいリスクがある。万一の事態に備える、選手の身体的負担への軽減を考えると、今後独自で宿泊施設を確保するときにはできるだけ競技会場に近いところが良い。

### 選手 上森 日南子

#### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピック出場は初めてだったので、楽しむことが一番の目標だった。世界大会に出場したことはあるが、デフリンピックはどのくらいのレベルなのか想像出来なかった。今の自分の実力で挑戦するという意味を込めて、ベスト8に入ることを目標にした。

#### 2. 結果に対する評価

ミックス4×400mRは6位入賞出来たが、個人種目の走幅跳は決勝11位という残念な結果になってしまった。予選の結果は全体の5位だったのでまだ良かったが、一番大事な本戦では結果を残すことができなかった。結果としてはあまりにも酷い結果だったが、三試合全て最後まで出場できたことに関しては良かったと感じている。途中棄権することなく、最後まで戦い続けた自分を褒めたいと思う。

#### 3. 今後の課題

今後の課題については気持ちの整理が出来次第、じっくり考えていきたい。今回、デフリンピックを経験して感じたことは、体力がなさすぎることである。今までの経験では、一発決勝で6本跳ぶ試技が多かったが、今回は予選と決勝が分かれていた。つまり、予選3本と決勝3本、そしてベスト8に残れば3本追加と合計9本跳ぶことになったかもしれない。さらに、連続試合ということもあり、体力不足や疲労が抜けなかったことが結果に影響を与えてしまったのではないかと感じている。だから、今よりも体力をさらにつけるべきだと考えている。

#### 1. 当初の目標（自己目標）

3度目の出場となる今回は、①メダル獲得、②自身の記録更新（現在の自己ベストは3m20cm）③デフスポーツ最高峰の舞台を楽しむという、3つの目標を掲げた。その3つの目標の先には、デフスポーツの発展、認知度の向上、そして同じろうの子どもたちをはじめとするこれからを期待される子どもたちに私の活動を通して伝えられるものがあると考えた。

また、今回棒高跳に出場する選手は男女合計4名で、男女ともメダル獲得が狙える位置にいたため、自身だけでなく、他の選手のサポートもしていくことも目標とした。

#### 2. 結果に対する評価

上記で挙げた3つの目標は成し遂げられず、2m80cmの記録で7名の出場中5位となり、不完全燃焼で終了してしまっただけでなく、よほどの悪天候やアクシデントでも起きない限り、2m台の記録で終わるといことはここ最近ではなかった。競技直前の練習での動きの悪さは若干気にはなったが、それでも安定して跳べていただけに自身の未熟さが際立つ結果となった。

他の選手のサポートについては、デフリンピック初出場の選手が2名いる中で、私ができる最大限のサポートはできたかと思う。

#### 3. 今後の課題

競技力の面では、ベースとなる基礎的な体力・技術などはもちろん、いかなる状況でも実力を発揮できる技術、集中力、気持ちへの向き合い方を課題だと考えている。

### 選手 末吉 凧

#### 1. 当初の目標（自己目標）

学校で指導をしてもらっている顧問や外部講師がいない中で自己ベストを更新。

#### 2. 結果に対する評価

自己ベストを更新したため目標は達成。時々焦ってしまい冷静になれなかった時があった。しかし、日本代表選手やスタッフの存在で緊張は解け普段参加している一般の大会よりも楽しみながら、上にどんどんチャレンジしたいと試合中に思えた。

5cm更新ができ、3位に入賞し銅メダルを獲得し、

U20世界記録を更新できたことはとても大きな自信に繋がった。この自信を継続させさらなる高みを目指していこうと強く思えた試合だった。

### 3. 今後の課題

- ・スイングと空中フォームの改善。  
→鉄棒や6歩助走の時にスイングの練習をする。
- ・つっこみ姿勢の改善。  
→ポールワークの時から常に意識をする。  
→柔らかいポールで感覚を掴む。
- ・試合で冷静さを保てるようにメンタル強化。  
→出場できる大会にひたすら出場する。

### 選手 田井 小百合

#### 1. 当初の目標（自己目標）

前回のデフリンピックでは、レース中盤でハードルに脚を引っかけてしまいメダル争いに加わることができなかったため、今回のデフリンピックでは前回のリベンジを果たすべく試合に臨んだ。もちろんメダルを目標としていたが、とにかくハードルを引っかけることなく、自分の走りを最初から最後までして、その上で結果がついてくれば良いなと思っていた。

#### 2. 結果に対する評価

雨、低気温という悪条件の中、アップの段階から非常に集中しており、緊張することなく清々しい気持ちでスタートラインに立つことができた。レース終盤まで銅メダルペースで最後の10mで二人に抜かれて5位となってしまったことは正直悔しいが、自分が今持てる力は全て出さった上での結果なので、その点に関して悔いはない。メダルには届かなかったけれど、前回の悔しさは今回のレースで雪辱を果たすことができたと感じている。また、今回無事にスタートラインに立つことができたのは、日本デフ陸上競技協会のスタッフの理解、心強いサポートがあつてのことであり、本当に感謝している。

#### 3. 今後の課題

長年の課題でもあるスプリント力の向上を今後も第一優先とし、スプリント力を現状よりも向上させるために必要なトレーニングを行ないたい。また、レース後半の速度低下が著しいため、スピード持久的なトレーニングも今後は積極的に取り入れていきたい。日頃からセルフケアも含めて身体のケアには気を遣っているが、今後もより一層自分の身体と向き合い、故障を事前に回避できるように身体のケア

は意識的に継続していきたい。

### 選手 滝澤 佳奈子

#### 1. 当初の目標（自己目標）

前大会では自己ベストを更新し、メダルを獲得したので、今回もデフリンピックという大舞台で自己ベストを更新することを目標に練習してきた。

#### 2. 結果に対する評価

記録に満足はしていないが、悪い試合ではなかったと思う。改善点は山ほどあるが、できることはしっかりとできたと思う。

#### 3. 今後の課題

今大会で一旦休止しようと思っているため、競技に対する課題や目標は立てていないが、今後も陸上競技、デフ陸上、デフスポーツと向き合いたいと思う。日本でデフスポーツの知名度を上げ、今後のアスリートがより練習、試合に向き合えるよう貢献していきたい。

※陸上競技チームから報告の提出がなかったのは、佐藤将光（監督）、山岸亮良（トレーナー）、山田真樹（選手）、末吉凧（選手）、安本真紀子（選手）である。

### 選手 安本 真紀子

#### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピックに初めて代表選手を選ばれたマラソンは最終日でした。初めて世界大会に出場することになったが、入賞することを目指した。マラソンコースはアップダウンが過酷なレースだったけど記録より選手と競争して順位を優先して最後まで走り抜けるように頑張ろうという気持ちが強かった。特に30キロ～35キロくらいでペースが失速しやすいので粘ること。

#### 2. 結果に対する評価

マラソン競技は最終日の3日前にがコロナが蔓延したため、全競技棄権の通知があり、辞退となった。

#### 3. 今後の課題

出場辞退となったことには、悔しさでいっぱいです。次のデフリンピックはマラソン競技だけではなく陸上競技5000mや10000mも参加標準記録を突破し、代表選手に選ばれるように。

監督 小堀 知史

## 1. 選手・役員の選考基準・方法

2021年7月に『第24回夏季デフリンピック競技大会（バドミントン競技）日本代表選手選考会』を開催し、選手選考を行った。本来ならば同年6月に一次選考、7月に最終選考と行う予定だったが、コロナ禍を理由に7月のみの開催となった。選考会は男女シングルス、男女ダブルス、混合ダブルスの合計5種目行い、選考会の結果から強化委員会が定めた選考基準をもとに選考委員が代表選手を選出、その後理事会での承認の上代表選手を決定した。

<選考基準>

- 1) 選考会での獲得選考ポイントが特に多い者
  - \*男女シングルス 各1名、男女ダブルス・混合ダブルス 各1ペア
- 2) 強化委員会推薦
  - \*2017～2020年度の強化合宿の様態及び各種大会（国際大会、一般大会）での実績、日本ランキング・世界ランキングなどを参考に強化委員会にて決定

<選考会結果>

■各種目の獲得選考ポイントが特に多いもの

- ・男子シングルス 永石泰寛
- ・女子シングルス 矢ヶ部真衣
- ・男子ダブルス 太田歩&沼倉昌明ペア
- ・女子ダブルス 長原茉奈美&沼倉千紘ペア
- ・混合ダブルス 太田歩&鎌田真衣ペア

<選考に関して>

まず、選考会の結果をもとに各種目のポイント上位者になった男子3名、女子4名を選出した。その後、男子2名、女子1名を選考会の結果や過去の国際大会の実績等を考慮し選出した。選考のポイントとしては、団体戦でのメダル獲得を目指し、団体戦での戦い方をコーチの間で構想を固めた上で、先に選出したメンバーとのバランスを考慮し、男女ダブルス、男子シングルスに重点においた選考を行った。これまでの国際大会の結果をみても、日本のダブルスは上位レベルに達している。2019年の世界選手権において女子ダブルスが2ペア銅メダルを獲得、男子ダブルスが1ペア銅メダル獲得、もう1ペアが5位入賞をしていることから、その強みを活かすため、男女ダブルスで勝てる選手をポイントとして選考した。また、男子シングルスにおいても同年の世界選手権において5位入賞を果たしており、団体戦においてポイントを獲得するのに優位になると判断

し、選考した。

しかし、2022年3月に選手1名が自己都合により派遣辞退となったため、強化委員で検討した結果、選手の繰り上げ選出は行わずに、最終的には選手9名（男子5名、女子4名）を派遣した。

## 2. 成績一覧

バドミントン競技は5月2日～11日の10日間の間に合計6種目あり、①混合団体戦、②男子シングルス、③女子シングルス、④男子ダブルス、⑤女子ダブルス、⑥混合ダブルスが行われた。日本からは全ての種目に出場し、下記の成績を収めた。

### ■混合団体戦

混合団体戦は10カ国が参加し、予選は4つのリーグで分かれて行われ、上位2チームが決勝トーナメントに進出するレギュレーションだった。日本は団体戦におけるシードポイントで2位に入ったため、2カ国しかいないBグループに入った。

<予選リーグ>

グループB

第1試合 日本 ○5-0× トルコ

\*1勝0敗、リーグ戦1位で決勝トーナメントに進出

<決勝トーナメント>

準々決勝 日本 ○3-2× フランス

準決勝 日本 ○3-2× 韓国

決勝 日本 ×1-3○ インド

\*最終成績 2位

### ■男子シングルス

・伊東勇哉選手

予選リーグ：1勝1敗 Aグループ2位（決勝T進出）

決勝トーナメント 1回戦敗退

\*最終成績 ベスト32

・柿内康平選手

予選リーグ：1勝1敗 Dグループ2位（決勝T進出）

決勝トーナメント 2回戦敗退

\*最終成績 ベスト16

・永石康寛選手

予選リーグ：2勝0敗 Lグループ1位（決勝T進出）

決勝トーナメント 1回戦敗退

\*最終成績 ベスト32

・沼倉昌明選手

予選リーグ：1勝1敗 Hグループ2位（決勝T進出）

決勝トーナメント 1回戦敗退

\*最終成績 ベスト32

## ■女子シングルス

- ・長原茉奈美選手  
予選リーグ：2勝0敗 Dグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 2回戦敗退  
\*最終成績 ベスト16
- ・矢ヶ部紋可選手  
予選リーグ：2勝0敗 Jグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 2回戦敗退  
\*最終成績 ベスト16
- ・矢ヶ部真衣選手  
予選リーグ：2勝0敗 Fグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 準決勝棄権により敗退  
\*最終成績 4位

## ■男子ダブルス

- ・太田歩&沼倉昌明ペア  
予選リーグ：2勝0敗 Cグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 準決勝棄権により敗退  
\*最終成績 4位
- ・伊東勇哉&永石泰寛ペア  
予選リーグ：2勝0敗 Dグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 準々決勝敗退  
\*最終成績 5位入賞

## ■女子ダブルス

- ・長原茉奈美&沼倉千紘ペア  
予選リーグ：2勝0敗 Bグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 準々決勝敗退  
\*最終成績 5位入賞
- ・矢ヶ部紋可&矢ヶ部真衣ペア  
予選リーグ：1勝1敗 Dグループ2位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 準決勝棄権により敗退  
\*最終成績 4位

## ■混合ダブルス

- ・伊東勇哉&矢ヶ部真衣ペア  
予選リーグ：1勝1敗 Eグループ2位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 準々決勝敗退  
\*最終成績 5位入賞
- ・柿内康平選手&矢ヶ部紋可ペア  
予選リーグ：1勝1敗 Iグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 2回戦敗退  
\*最終成績 ベスト16

## ・沼倉昌明&沼倉千紘ペア

予選リーグ：2勝0敗 Bグループ1位（決勝T進出）  
決勝トーナメント 2回戦敗退  
\*最終成績 ベスト16

## 3. 成績と評価

今回のデフリンピックは前回のデフリンピックや世界選手権において上位だったロシアや中国が不参加となり、メダル獲得が大いに期待できる状況だった。特に団体戦では2015年の世界選手権で銅メダル、同年のアジア太平洋スポーツ競技大会で銀メダル、2019年の世界選手権で銅メダルを獲得したが、デフリンピックでは2001年ローマ大会（銅メダル獲得）以降メダルが獲得できていなかった。そこで、デフリンピックという大舞台でのメダル獲得を果たすために、これまでの合宿等で今のチームに不足しているものを整理して、調整も含めて課題を一つ一つ確実にクリアできるように努めた。その結果、団体戦のメダルを獲得できた。準決勝では今まで一度も勝利したことがない強豪韓国との因縁の対決であったが、試合前から選手・スタッフが円陣を組み「新しい歴史を切り開いていくんだ！という気持ちを持ち、最後まで諦めずに強い気持ちで押していこう！」と伝えた。選手たちは闘争心がみなぎる顔で試合に挑み、激戦の末3-2で辛勝し、史上初の決勝進出となったのは、日本デフバドミントン界にとって新しい歴史を刻んだ瞬間でもあった。惜しくも決勝戦ではインドに惜敗してしましたが、団体戦で日本が史上初めて銀メダルを獲得できたことは評価したい。

個人戦は準決勝・決勝が棄権となったが、女子シングルス、男女ダブルスの3種目でベスト4に進出することができた。また、男女ダブルス、混合ダブルスでも1ペアずつ5位入賞を果たしており、全体的に良い結果を残すことができた。日本チームの技術、技能的な面はまだまだな部分もありますが、以前よりもレベルアップしており、世界に通用するところが多くなったことは大きな収穫でした。しかし、男子シングルスでは4名が出場し、全員決勝トーナメント進出したものの、ベスト8に1人も残れなかったのは寂しく残念な結果でした。海外選手は長身の選手が多く、ハングリー精神が日本の選手よりもワンランク上で、メンタル面で劣勢となる部分が多かった。今後、そのような選手に勝つためにはもっとフットワークのスピード強化やメンタル面の強化を更に図って行くことが重要だと感じた。男子シングルス強化していかないと今後団体戦でも勝つのが難しくなってくるため、改善していきたい。

#### 4. チーム（スタッフ）体制と各スタッフの役割

バドミントン競技のチーム体制を下表のように構成し、選手たちのサポートにあたった。

氏名	役職	役割
小堀知史	監督	チームの最終意思決定者 練習や選手起用、選手へ技術的指導や心理的サポート 本部スタッフとの連携
岡野篤郎 (きこえる)	トレーナー	チームのまとめ役 選手のコンディション管理 選手のケアやトレーニング 本部や医療チームとの連携
高田美佳 (きこえる)	トレーナー	チームのサポート役 選手のコンディション管理 選手のケアやトレーニング 本部スタッフとの連携

今大会初めてバドミントン競技としてトレーナーを2人派遣し、意義を大いに感じた。前大会ではトレーナーが1人のみの派遣であったため、トレーナーの負担も大きく派遣人数に関しては今大会への課題としていたが、2人体制によって負担が軽減できたのではないかと感じている。また、2人体制によって選手へのケアの時間も前回よりも長めにでき、選手が試合でベストパフォーマンスを発揮できたことはトレーナーのお陰でもある。次回もトレーナーを2人派遣してもらいたいと思う。また、コーチ体制に関しては今後更なるメダル獲得を果たすためにはより専門的なコーチの採用が必要不可欠であると考え。シングルス専門、ダブルス専門を採用すれば、選手により専門的な技術を指導しながら試合に挑める環境を構築できるので、今後実現を目指しながらやっていきたいと思う。

#### 5. 競技スケジュール（渡航スケジュール）

バドミントン競技についての競技スケジュールは以下の通り。今回は日本出国前から事前合宿を行い、直前まで大会に向けた調整を行った。

日程	内容	出場種目（*）
4/27（水）	日本出国	
4/28（木）	ブラジル入国	
4/29（金）	アクレ取得、公開練習	
4/30（土）	公開練習	
5/1（日）	公開練習	
5/2（月）	団体戦-予選L	
5/3（火）	団体戦-決勝T	
5/4（水）	団体戦-準決勝・決勝	
5/5（木）	公開練習	
5/6（金）	個人戦-予選L	MS.WS
5/7（土）	個人戦-予選L	MS.WS.MD.WD
5/8（日）	個人戦-予選L	MD.WD.WD
5/9（月）	個人戦-決勝T	MS.WS.MD
5/10（火）	個人戦-決勝T	WS.MD.WD.XD

5/11（水）	個人戦-準決勝・決勝	WS.MD.WD （*棄権）
5/12（木）	PCR検査	
5/13（金）	ブラジル出国	
5/14（土）		
5/15（日）	日本帰国	

\*MS…男子シングルス、WS…女子シングルス、MD…男子ダブルス、WD…女子ダブルス、XD…混合ダブルス

#### 6. 大会の競技運営などの報告

大会直前にデフリンピックで使用するシャトルのメーカーが急遽変更になったと、ICSDのバドミントンTDより連絡があった。シャトルのメーカーや種類によって、飛び方が異なり、力の入れ方や打感が変わるため、どのメーカーのシャトルを使用するのはかなり重要なポイントである。そのため、今大会で使用されたメーカーのシャトルを使っ練習は1回しかできなかったことに不安が残った。また日本ではあまり流通していないメーカーのシャトルだったので、練習で使用するために取り寄せるのに苦労した。

TD会議では競技規則の適用等について大きな問題点は認められなかったが、バドミントンの試合会場に着くなり唖然とした部分はいくつもあった。まず、試合前の練習日に試合会場の設営を理由に、試合会場で練習ができなかった。代わりに近くの小学校を練習で使用するようになったが、床がコンクリートであったため、選手の怪我が心配であった。また試合会場でも、得点板が簡素なものであり、また会場施設もバドミントンの会場としてはありえないほど風が吹き抜ける建物だった。幕で風が吹き込まないように対応していたが、隙間風が入り、その影響でシャトルの軌道が変化しコントロールにとても苦労した。さらに、練習用コート（サブコート）がなかったことや、体育館の床もコートマットは敷いてあったもののコンクリート張りであったこと等、試合環境や設備面において選手は大変苦労したと思う。海外によっては日本での常識が通用しない国もあるので、そういった面があっても臨機応変に対応できるようにしなくてはいけないと思った。

食事面に関しては、今大会は昼食を組織委員会が弁当を用意するとの情報を得ていたが、前大会では配布された弁当は試合に挑む選手に適した内容ではなかったので、バドミントンチームは最初から日本から用意したドライフード等で対応した。他の国の選手が食べている弁当を見せてもらったが、やはり試合に挑む選手に適した内容の弁当ではなかったので、今後も最低限自分達が信用できるものを日本から持参したほうがいいと感じた。

## 7. 反省、まとめなど

バドミントン競技は2009年の台北大会を最後にメダルから遠ざかっていたが、前回の2017年に女子シングルスで銅メダルを獲得できた。今大会は前大会以上の結果を残すべく、前大会の反省を踏まえ、選手強化に取り組んできた。特に男子シングルスと混合ダブルスのメダル獲得に期待していたが、それが果たせずに悔いが残った。しかし、団体戦では日本史上初の銀メダルを獲得したこと、個人戦でも棄権にはなったが、女子シングルスや男女ダブルスの3種目では準決勝へ進められたことは大きな喜びであり、今後の日本デフバドミントンにとって明るい材料となった。

前大会と比較すると、今大会ではより専門的な指導、トレーナー体制構築による選手へのより良いサポート等、実現を果たすことができた。その反面、新しい選手の発掘が遅れている課題も残されている。今大会で代表を引退する選手が何人かおり、戦力がダウンする可能性が高いため、早急に新しい選手の発掘や育成に多くの時間を割いていく必要があることを強く感じている。

最後になるが、コロナ禍となった今大会の出場にあたり全日本ろうあ連盟をはじめ、日本選手団本部スタッフの方々やメディカルチームの方々、また、合宿時に練習相手をしていただいた方々、日本から温かい応援をいただいた日本国民の皆様には厚く御礼を申し上げます。

### アスレティックトレーナー 岡野 篤郎

#### 1. 自己の役割とその評価

今回アスレティックトレーナーとして帯同させていただき、主に選手のコンディション管理と本部スタッフやメディカルチームとの連携を行う役割を担った。

大会期間中の主な活動内容は①選手のコンディション管理、②ホテルや競技会場でのコンディショニング指導、③補食の管理、④新型コロナウイルス感染症対策、⑤ドーピングに関する対応、⑥緊急時対応の準備、⑦本部スタッフやメディカルチームとの連携などを行った。

今回はブラジルでの開催となり、日本と12時間ある時差や2日間にも渡る移動時間・気候・環境・食事に適応することがコンディション調整をする上で重要になった。ブラジルに到着後から初戦を迎えるまで中2日間と、十分な調整期間を確保できないことから、時差や移動の対策を出発前から計画的に行う必要があった。そこで、時差対策に関する資料

を作成して選手に説明し、睡眠時間の調整や飛行機内、ドーハ空港、サンパウロのホテルでの対策、体内時計の調整の方法など指導した。

また、試合期間においては10日間（団体戦3日間、個人戦6日間、調整日1日間）と長い試合スケジュールの中、ベストパフォーマンスに近いコンディションをいかに維持できるかもポイントになった。ホテル内や競技会場でのコンディショニング指導では、国内合宿時などから継続して選手にウォーミングアップやトレーニング、セルフケアなどを指導し、選手が自分でコンディション調整ができるよう準備したので、各自が自分の体調に合わせてセルフコンディショニングを行い、トレーナーに頼らずともある程度は自分でコンディション管理ができていた。また、前大会からの反省から今回はトレーナーを2人体制にさせていただいたので、大会期間中は選手に時間を割いて適切な対応ができた。

補食の管理に関しては、事前情報や過去の国際大会の経験をもとに、日本から食品やサプリメントを準備し、バナナなどのフルーツや100%のオレンジジュース、水など現地で調達が必要なものはスーパーで2～3日分まとめて調達した。また、選手個々の嗜好品に合わせてそれぞれ追加で補食などを用意し、現地の食事に合わないことも予測した上で準備したので、食事面で困る選手はいなかった。

以上のような準備・対応を行なったことで、大会最終日までにはプレーに支障をきたす傷害は起こらず、疲労などによってコンディションを大きく崩す選手もいなかった。また、前大会と比べても選手全体のフィジカル能力が向上し、大会終盤まで戦える選手が増えたと思うので、過去の国際大会も踏まえた反省を活かし、コンディション管理はある程度できたのではないかと感じている。

しかし、バドミントンチームでも帰国時のPCR検査で1名陽性者（無症状）が確認された。マスクの着用や手指消毒の徹底、他の国の選手とできるだけ接触しないようにとできる限りの感染症対策を行ったつもりだったが、このような結果になってしまい本部やメディカルチームの方々にも負担をかけてしまったことは大きな反省点となった。

#### 2. 今後の課題

バドミントンは団体戦で過去最高の銀メダルを獲得し、棄権となったが、個人戦では3種目（男子ダブルス、女子シングルス、女子ダブルス）で準決勝進出を果たしており、前大会よりも良い結果を残すことはできた。しかし、今大会で引退する選手が複数人おり、世代交代が求められる中で、今後、チームを再構築する必要がある。2025デフリンピック

まで引き続き国内合宿時、または選手各自が普段からコンディショニングをしっかりとできるような体制作り、土台となるフィジカル面の強化ができるようスタッフと協力してサポート体制を構築していけたらと思う。

## アスレティックトレーナー 高田 美佳

### 1. 自己の役割とその評価

アスレティックトレーナーとして帯同させていただき、主に選手のコンディション管理をした。大会期間中の主な活動内容は①選手のコンディション管理②ホテルや競技会場でのコンディショニング指導③補食の準備・管理④新型コロナウイルス感染症対策⑤ドーピング検査時の付き添い⑥緊急時対応の準備⑦物品の管理などを行った。

開催地がブラジルだったため、時差・移動時間・気候・環境・食事に適応することがコンディション調整をする上で重要になった。ブラジルに到着してから初戦を迎えるまで中2日間と現地では十分な調整期間を確保できないことから、時差や移動の対策を出発前から計画的に行う必要があった。そこで、時差対策に関する資料を作成して選手に説明し、睡眠時間の調整、機内やトランジットの際の過ごし方、体内時計の調整の方法などを指導した。サンパウロのホテルでは、長距離移動で浮腫んだ脚をオイルマッサージで流すことで疲労回復を促した。

また、試合期間においては10日間（団体戦3日間、個人戦6日間、調整日1日間）と長い試合スケジュールの中、ベストパフォーマンスに近いコンディションをいかに維持できるかもポイントになった。コンディショニング指導では、国内合宿時などから継続して選手にウォーミングアップやトレーニング、セルフケアなどを指導し選手が自分でコンディション調整ができるように準備したので、各自が自分の体調に合わせてセルフコンディショニング出来ていた。最低限のコンディショニングが選手自身で出来たため、休養に重要な睡眠時間の確保やトレーナーとのコンディショニングではより質の高いものを選手に提供することが可能になった。

補食の管理に関しては、事前情報や過去の国際大会の経験をもとに、日本から食品やサプリメントを準備し、バナナなどのフルーツや100%のオレンジジュース、水など現地で調達が必要なものはスーパーで2～3日分まとめて調達した。また、それ以外の補食などはそれぞれが追加で持参し、電気ポットを活用してお湯を用意する等、現地の食事が合わないことがあっても十分に対応できた。

以上のような準備・対応を行なったことで、大会最終日まではプレーに支障をきたす傷害は起こらず、疲労などによってコンディションを大きく崩す選手もいなかった。

感染対策については、各国で対策レベルに差があったため、試合会場ではなるべく他国の選手との交流は避ける形をとった。具体的には、日本選手の拠点他国の選手と重ならないような位置に設置し、使用する椅子や触れる可能性のある場所を毎朝消毒する、試合前後の手指消毒など普段行っている対策に加えて現地で出来る可能な限りの対策をした。しかし、バドミントンチームでも帰国時のPCR検査で1名陽性者（無症状）が確認された。できる限りの感染症対策を行ったつもりでしたが、このような結果になってしまい本部やメディカルチームの方々にも負担をかけてしまったことは大きな反省点となった。

### 2. 今後の課題

バドミントンは団体戦で過去最高の銀メダルを獲得し、棄権とはなったが個人戦で3種目（男子ダブルス、女子シングルス、女子ダブルス）で準決勝進出を果たし、前大会よりも良い結果を残すことはできた。しかし、今大会で引退する選手が複数人おり、世代交代が求められる中、今後、チームを再構築する必要がある。2025デフリンピックまで引き続き、国内合宿時また選手各自が普段からコンディショニングをしっかりとできるような体制作り、土台となるフィジカル面の強化ができるようスタッフと協力してサポート体制を構築していきたいと思う。

## 選手 永石 泰寛

### 1. 当初の目標（自己目標）

新型コロナウイルスの影響で県外遠征や練習が思うようにできない中、メダル獲得を目指し、高い意識を持って練習に取り組んできた。自分が劣勢になるときこそ、強く気持ちを持って一本一本ずつを考えて1回戦から最後まで集中すること、また、世界を相手に緊張状態もマックスになりがちだけど、それをいい方向に変えていけたらいいなと思っていた。

### 2. 結果に対する総評

男子シングルの予選では、韓国選手とアメリカ選手でした。韓国戦は厳しいと想定していたので、最初から攻めのラリーで、1本1本ずつ攻めたので集中できた。体育館に風が少し吹いており、シャトル



のタイミングがずれて、守備ミスが多かったけどそれは守備の課題だと思う。アメリカ選手は長身でパワーがあった。パワー型の選手はスマッシュが決まると手が出せない。しかし、連続ミスにつながらないように慎重に一つ一つずつ集中していくことができ、また安定したショットが左右にできたと思う。決勝トーナメントに進出するにあたり、ショットの精度、ラリーへの集中力等、安定させていかなければならないと思った。

決勝トーナメント1回戦は以前に対戦した韓国選手でした。相手はフィジカルや粘り強さ等本当に強く、自分も集中しましたが、2-1で惜しくも負けた。最後まで気持ちで負けないようにと思っていたが、技術的な部分でも相手が上で自分が下。ミスが続いたのと、相手はこちらの動きを読み、こちらが判断に迷ったときは、すかさず打ち込んできた。これから戦術を増やし、技術的な部分で強化をして出直したい。

男子ダブルスの試合は気持ちを切り替えて挑んだ。初戦のアメリカでは伊東選手と組み、最初から攻めていこうと一気に上がり、伊東選手の後衛からのスマッシュで点数を重ねていき、2-0で勝利した。次の韓国戦では、最後まで集中力はあったが、スマッシュが決まらず、緩急のラリーにしようとしたしあったけれど、自分のミスが出る等甘い面や、ダブルスの課題が多く難しかった。

### 3. 今後の課題

今大会でシングルとダブルスの試合でつかんだ良い点や悪い点は課題を忘れないようにしっかりと頭に入れておく。

全競技棄権により、勝ち進んだにもかかわらず、試合に出ることができなかった選手もいるが、今後しっかり練習を重ねていけば、必ずその思いが実るときがあると思う。

2025デフリンピックに出れるよう、試合の中のコンディションやコミュニケーション、体力や筋力などの強化に取り組むことを目標に頑張りたい。

選手 伊東 勇哉

#### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピックに初出場ということもあり、楽しむことを前提に体調管理を整え最大限のパフォーマンスを実施する。

#### 2. 結果に対する評価

結果は混合団体戦では銀メダルを獲得することが

できた。私は団体戦メンバーとして入っていましたが、大事な場面では出場できなかったのが、メダルは良い土産と捉えている。個人戦では、思うより結果を残すことができなかった。3種目出場とチャンスが3度ありましたが、最高ベスト8という結果で幕を閉じた。なぜ思ったより結果を残すことができなかったのか、それは目標に掲げていた体調管理を達成することができなかったからだ。そのため、本来楽しむべきであるのに自分の体調を整えるのに精一杯で何もすることができなかった。

### 3. 今後の課題

現在の気持ちとしては、3年後に開催される2025デフリンピック出場を目指している。今大会を通して何が必要なのか考えた結果、3つ見つけることができた。まず、最初にデフアスリートとしてモチベーションを維持すること。次に身体や体調面のコンディションを整えること。最後に練習環境。これらが整っていれば、間違いなく確実に成長し良い結果を残すことができるだろうと考えた。

1つ目のモチベーションだが、デフスポーツの注目度があまりにも低く、国を背負っていることをあまり実感することなく、ただ自らの自己満足だけで終わってしまっていること。2つ目のコンディションは私自身の体調不良もそうだが、日本選手団のコロナ感染も各選手が警戒すべきことができていなかったことも要因だとは思っている。どちらにせよ結果論でしかないが、だれを責めるという話ではなく、全員が強く意識や対策をすれば防げた面もあったのではないかと思う。3つ目の練習環境とは、デフアスリートは会社勤務の傍ら、夜間は練習、合宿は月1程度で練習に取り組んでいる。しかし問題なのは、プライベートでどう練習するのが課題だと私は思う。自分のために活動するのは良いが、そこで得られるメリットを求めるとしたらほぼ無いに等しい現状である。これらを少しでも打開するためには、3年間の猶予があるので、まずは基盤整備から進めていきたい。

選手 太田 歩

#### 1. 当初の目標（自己目標）

前大会から5年の間に、結婚、出産、育児、引越、転職そしてコロナ禍と、選手活動としての人生の岐路に迷うことも多くあった。妻、友人、職場、多くの方々からの支援や応援のおかげでバドミントンが続けられることができ、日本代表選手に選出することができた。感謝を胸に、結果を出すことが恩

返しであると「メダル獲得！」と大きな目標を立てて大会に臨んだ。

## 2. 結果に対する評価

結果は、団体戦 2位（日本初）、個人戦（男子ダブルス）ベスト4となった。団体戦では、男子ダブルスとして出場し、トルコ、フランス、韓国と対戦し全勝することができた。決勝はインドと対戦したが男子ダブルスは最後尾（5戦目）となり、バトンを繋げられず1-3で敗戦した。惜しくも銀メダルの結果となったが、団体戦で初めて韓国を倒した時は嬉しかった。団体戦最終日までメンバーと一丸となって戦えたことを誇りに思う。

個人戦では、ベスト4に進出したが、最終日（準決勝、決勝）を迎えた早朝に本部より出場辞退を告げられた。この日を迎えるために家族との時間を割いて、多くのことを我慢、諦め、ケガをして、血を吐いては立ちあがり、5年分そして今後の人生をかけて頑張ってきた。このような結末は予想しておらず、まだ心の整理がついていない。もし出場していれば、準決勝でリトアニア、決勝で韓国と対戦するはずだった。リトアニアは2019年世界選手権で2戦しているがどちらもwin。韓国は団体戦時に男子ダブルスで倒している。金メダルを獲得できるチャンスがあっただけに本当に悔しい結果となった。決勝舞台に立つこと夢見て、多くの試練を乗り越え切磋琢磨してきた。二度（団体戦、個人戦）も決勝舞台に立つチャンスを掴み取ったがどちらも叶わず終わったことが大きな心残りであるが、団体戦2位、個人戦ベスト4の成績を収めることができたのは、多くの方々からの支援/応援のおかげであると感じている。本当にありがとうございました。

## 3. 今後の課題

各国々も総合的（団体戦）にも個々でもレベルを上げてきており、どの試合も苦戦を強いられた。個人的に団体戦で特に強化すべきは混合ダブルスと男子シングルスかと感じている。海外とのプレーレベルには大きな差はないので、戦略の強化（引き出しを増やす）、メンタル面を強化（体格に圧されない、土壇場での集中力）すれば安定した結果を残せると確信している。もちろん男子ダブルスと個々の種目も現状からさらに強化していくことが重要である。

選手 柿内 康平

### 1. 当初の目標（自己目標）

「前大会以上の結果を残すこと」と「これまで取

り組んできたことを最後まで十分に力を発揮すること」と「選手としての自覚を持って、感謝の気持ちをお忘れなく」と「選手としての自覚を持って、感謝の気持ちをお忘れなく」と「選手としての自覚を持って、感謝の気持ちをお忘れなく」との3つの目標を立てた。

## 2. 結果に対する評価

結果は、混合団体戦「準優勝」、個人戦シングルス「ベスト16」、個人戦ミックスダブルス「ベスト16」の結果となった。混合団体戦では、初銀メダルを獲得することができたが、個人戦が前大会と同じ結果に終わった。勝てるチャンスは十分にあったが、勝負所で自滅をしてしまい、チャンスを掴めなかった。

混合団体戦ではシングルスに出場した。なかなか、チームに貢献することができず、迷惑を掛けてばかりだったが、今まで以上に選手層が厚くなり、チームワークの雰囲気も良くみんなで切磋琢磨しながら結果を残すことができた。個人戦では、先ほど述べた通り、上位に進出できるチャンスを生かし切れなかったことに悔いが残る。改めて「勝つ」ことはそう簡単にはいかないなと思ったり、勝負の世界は幅広いと感じた。

最後に、コロナ禍で行動制限がある中、コンディションを整えるのも大変だったり、出場辞退という決断があったりなど、いろいろあったが、延期になったもののデフリンピックが無事に開催されたことに「感謝の気持ち」でいっぱいです。ありがとうございました。

## 3. 今後の課題

今後、選手を続けるかは考えていない。しばらくは、ゆっくりと静養しながら過ごしたいと思う。また、これまでのバドミントンを振り返りたいと思う。そして、地元で頑張っているスポーツ少年団や部活動など児童・生徒たちと一緒にバドミントンの楽しさを伝えながら向上していくことができるようにサポートすることができたら良いなと考えている。

最後に、デフリンピックの認知度がオリンピックやパラリンピックみたいにメディアに取り上げられ、さらに高まることを期待している。「2025東京デフリンピック大会」が開催されることを楽しみに応援しています。

選手 沼倉 昌明

### 1. 当初の目標（自己目標）

団体戦、個人戦（混合ダブルス、男子ダブルス）とも金メダルを獲得すること。

## 2. 結果に対する評価

団体戦は銀メダルを獲得した。本来なら金メダルを獲得したかったが、団体戦なので総合力が試される。決勝戦ではトップバッターとして混合ダブルスに出場し、1勝をあげることが出来たので、自分の仕事は果たせたと思う。

個人戦については、混合ダブルスでベスト16でした。相手が長身長でなかなか自分の攻撃のペースに持っていくことが難しかった。アジア相手だったら勝てると思うが、ヨーロッパ相手になるとまた違った戦い方になること、それに慣れる必要があると思った。男子ダブルスは4位でした。準決勝で棄権になりました。もし、出場したら、ほぼ確実に金メダルを獲得できたはずだった。なぜなら、準決勝の相手は世界大会で2回あたり2回とも勝っており、また決勝の相手は団体戦のときに2-0で勝っていたので、負ける気がしませんでした。棄権になったので評価しようがない。

## 3. 今後の課題

技術の面でいうと自分は世界トップレベルに入っていると思う。あとは、それをキープできるかどうかだと思う。技術面でこれ以上、上げていくことは難しいと思うので自分の点数の取り方の引き出しを増やしていく、色んなショットの精度を上げていくしかないと思う。

しかし、今の自分にとって、一番大きな課題はモチベーションの維持である。今回の棄権で以前のよようにやる気が出てこないし、今の自分は頑張る理由がない。どうやったら、以前のようにモチベーションが戻るか、今後模索していく必要があると思う。

選手 長原 茉奈美

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・団体戦 メダル獲得
- ・女子シングルス メダル獲得
- ・女子ダブルス 金メダル

### 2. 結果に対する評価

- ・団体戦 2位
- ・女子シングルス ベスト16
- ・女子ダブルス ベスト8

団体戦のみは目標を達成することはできたが、個人種目においては自分が思うような結果にはならなかった。それでも、結果としては自分的にやり切った感はある。

## 3. 今後の課題

今後はデフアスリートからは一線を退きます。今のところ明確ではないが、今後デフスポーツに関わることはほとんどないと思う。また、コーチについては自分のポリシーもあるので、絶対コーチをすることはないと断定する。自分からは積極的にデフスポーツ、デフバドミントンについてSNSや講演会などで発信することはなくなるかもしれないが、協力などはしようとは思っている。

サムスンデフリンピック以来、会社からの大きな応援、市役所、友人に家族等いろいろな方々からこれまで応援の声に支援などしていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。結果としては自分が思うような結果にはならず悔しい気持ちもあるが、それ以上にこの大会でバドミントンに対する思いや気持ち的にやりきったので、もう今となってはいい思い出である。

また、コロナという大変な状況の中、出国前からブラジルの現場にて日本の連盟本部に医療スタッフに手話通訳者さん、私たちのために、より良い環境を整えてくださってありがとうございました。

今までお世話になりました。ありがとうございました。

選手 沼倉 千紘

### 1. 当初の目標（自己目標）

団体戦、女子ダブルス、混合ダブルスの3種目のメダル獲得。

### 2. 結果に対する評価

団体戦において、混合ダブルスと女子ダブルスに自分の役割があるという自覚を持って挑んだ。混合ダブルスではトップバッターということで初戦ではしっかりと流れを作ることができた。その後、フランスと韓国相手にはファイナルゲームまで競ることはできたものの、掴み取ることができなかった。しかし、混合ダブルスでは負けたものの、女子ダブルスで取り返すように気持ちを切り替えて入ることができたので良かった。準決勝の韓国戦では、0-2と後がない状態からチームが1つになって繋いで2-2の場面での女子ダブルスでした。メダルを意識した時に緊張もありましたが、自信を持って試合を進めることができた。選手一人一人が、団体戦における自分の役割をしっかりと意識していたことや、日頃の練習でも自分の役割に集中して取り組むことのできる環境であったことも、今回の団体戦銀メダル

獲得に繋がったと思う。個人戦においては目標を達成することができなかった。若い選手の勢いのあるプレーに対して落ち着いて最後まで対処することができなかったことや勝ち続ける事の難しさを痛感した。

### 3. 今後の課題

海外の選手を見ていると、年齢層が低く、中学生や高校生の時から国際大会に参加し、経験を積み重ねている選手が増えている。また、各国において練習環境が整ってきている国も増えてきている。そのような国に勝ち続けていくためには、若手選手の育成、練習環境の充実等において選手一人一人に委ねるのではなく、チームとなって取り組むことが必要となっていくと考えている。

選手 矢ヶ部 紋可

#### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・団体戦でメダルを獲ること
- ・個人戦の女子ダブルス、混合ダブルスでメダルを獲ること

#### 2. 結果に対する評価

団体戦では、全員が力を合わせて2位という結果を残すことができた。一つ一つの試合を大切にプレーできたことと、チームワーク力があったから得ることができたのだと思う。

個人戦のシングルス、混合ダブルスはベスト16、女子ダブルスはベスト4という結果に終わった。本来ならば、女子ダブルスは準決勝進出する予定だったが、コロナ感染者が増えているため、やむを得ず棄権という形になってしまった。本当にとても悔しくて納得いかない気持ちもあるが、仕方ないことだったと思う。

女子ダブルスの準々決勝では、日本人同士の対決になり、これまで勝ったことがない相手に勝つことができたのは大きな自信となった。しかし、混合ダブルスでは、これまでの練習の成果を100%発揮することができなかったのが悔いが残る試合でした。試合は一度しかないの、一つ一つの試合を大切にプレーすることが必要だと改めて感じさせられた。

### 3. 今後の課題

エースであった4人の先輩がデフ日本代表から辞めることになり、私たちがエースとして引っ張っていかねばならない立場になった。団体戦も主力メンバーとして出場する機会が増えてくることにな

るだろう。プレッシャーの大きい立場なので、しっかりと日本代表としての自覚をもって今後も練習に励んでいきたい。

技術面の課題としては、パワーが足りないこととフットワークのスピードが遅いことが課題である。それを磨き、今まで以上に女子ダブルスと混合ダブルスの練習に力を入れていきたい。

選手 矢ヶ部 真衣

#### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・団体戦で勝利に貢献すること
- ・個人戦のシングルス、ダブルスでメダルを獲得すること
- ・応援してくださった方々に感動して貰えるプレーをする

#### 2. 結果に対する評価

団体戦では初めての試合は、姉とダブルスで出場したが緊張で足が動かず、自分の思うようなプレーができなかった。しかし準決勝の韓国との試合では勝たなければ後がない試合で勝ち、良い流れを作ったことで、チームに貢献できたのではないかと思う。

決勝では、ミスがでて立て直すことができなかったことが敗因だと思う。もっと落ち着いて相手の苦手な所を分析すれば勝つことが出来たのではないかと反省した。結果的には、銀メダルを獲得、史上初ということもあって嬉しかったです。勝因は先輩方を中心としたチームワークの良さではないかと思う。

個人戦のダブルスでは準決勝をかけた試合で日本の先輩方との対戦となってしまった。試合前にどこを攻めるかしっかり話し合い最高のコンディションでコートに入ることが出来た。焦らず1本1本を大切にプレーできたところが勝利に結びついたのではないかと思う。シングルスは、どんな相手でも気を抜かずアップにしっかりと取り組み、試合に臨み、勝ち進むことができた。団体戦で負けたインドの選手にリベンジを果たせて嬉しかった。

目標だった個人戦のメダルは惜しくもコロナ感染拡大のため、途中棄権することになり悔しい思いが残ったが、この悔しさを胸に次の目標に向かって頑張りたい。

### 3. 今後の課題

- ・経験を積み、大会当日に緊張せずに自分のプレーを最初から出来るようにすること
- ・応援してくださった方々に感動していただける

ようなプレーをすること

## ビーチバレーボール競技チーム

監督 牛尾 洋人

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

代表選手については格式の求められる国際大会であることに鑑み、技量体力だけでなく倫理性を重視し、コンプライアンス遵守の精神を持つ者を選考した。具体的には1次試験を面接とし、競技への姿勢、幣協会との関係性、スポーツにおけるコンプライアンスの理解度などを中心に対面を以て確認した。その結果男子2チーム4選手を選出し、男子及び女子に選外選手が出た。役員に関しては代表選手選考と並行して理事会を開催し、現理事長を監督業務兼任として仮選出し、代表選手選考後に各選手の同意如何を確認した。

### 2. 総評

#### デフリンピック出場にむけて

前回デフリンピックの2017年の結果を受けて、ベスト8以上の成績を目標に取り組んできた。目標の達成に向けて以下のような取り組みを行った。

- ①強化選手・代表選手選考会
- ②国際親善大会の自主開催
- ③アジア大会
- ④第3回世界選手権
- ⑤国内公認大会への積極的参戦
- ⑥海外のデフビーチバレーボール大会参戦

上記のような取り組みを計画、実施してきたが、すべてにおいて計画通りに実施できた訳ではなかった。アジア大会は開催国でのデモにより中止、コロナ感染拡大により、世界選手権、デフリンピックともに大会日程の延期があった。なにより日々の生活がまともにできない状況が続いたので、練習どころではない期間も長く続いた。しかし、その状況下で出来ることを模索し出来る形で強化に取り組んできた。

#### デフリンピック競技結果について

今回ビーチバレーボール日本チームからは男子2チームが参加した。(※女子の日本チーム参加はなし)なお、男子は全17チームの参加があった。

4チーム×3ブロック、5チームの4グループに分け総当たりの予選リーグが行われた。日本は予選リーグの初戦を控えた前日に発熱を伴う体調不良者を出してしまい、メディカルチームの指示により初

戦は不戦敗という形になった。PCR検査結果で陰性であったため、2戦目から出場したが、2チームともに残り2戦を2敗し各リーグの4位となりました。17チーム中1チームは予選敗退という中、日本チームは不戦敗が影響しましたが15位、16位で決勝トーナメントには進出する事は出来ました。

決勝トーナメント戦を控えた数日前に日本選手団内でコロナ感染者が増え始め、競技不参加の検討がされ始めた。当チームは決勝トーナメント初戦の朝の体調チェック時に体調異常者がいたため(37.5度以下)、日本選手団の状況や体調異常者の万が一を考え試合を事態することに。結果、決勝トーナメント初戦不戦敗で敗退となり2チームともに13位タイという結果で終了した。

#### 競技運営について

当初予定されていた競技会場のコンディションは、相当ひどい状況であった。具体的には、

- ・水はけがかなり悪い：コート内に水たまり
- ・砂の深さが確保されてない：すぐに土が見える。砂質も悪く粘土状態

結果、競技初日直前に会場が変更され、室内のビーチバレーコートとなった。雨による競技延期の心配はなくなったが、FIVBが定めている競技規定には到底合っていないコートコンディションであったと言わざるを得ない。

- ・コートサイドのスペースがない
- ・砂の深さ
- ・天井の高さ 等々

またコロナ感染症対策については、小さな室内施設であるにも関わらず換気は不十分、アルコール消毒の設置なし、入場者の体調管理もなく、PCR等の検査もなく、感染症対策は全くなかった。また、急な会場変更によるものだと思うが、大会期間中の練習日の際に、サッカーバレーというスポーツの大会が同会場で開催され地元の人が大勢参加していた。(この密な状況での練習がもしかしたら当選手のコロナ感染に繋がったかもしれないと想定している。)

#### 大会運営について

入国初日にID取得をする事になっていたが、デフリンピックスクエアでの長時間待ってのID取得はコロナ感染においては相当リスクであったと思う。幸い我々のときは、日本選手団本部の対応で準備が出来るまで屋外で待機、出来る限り他国との接触や小スペースでの密な状況を避けるような対策をしてもらえたが、とはいえ不安になる場面はいろいろあった。また入国時や競技開催前に、大会組織委員会によるPCR検査等はなく、国によってのコロナに対する意識の違いを感じた。

## ホテル

一般客も宿泊していたことで特に朝食時に不安を覚えた。スタッフも宿泊者もビニール手袋をしておらず我々だけが対応していても効果としては如何なものかと思う。

## 移動

日本チームだけの移動が出来た事は大きな安心材料でしたが、日本チーム内に感染者が出てしまった状況で車内の衛生状態はどうであったのか？というのは気になった。陽性者を載せてバス移動でホテルに移動する際もメディカルチームは相当気を使って荷物の搬送作業を行っていたが、現地運転手は同じ意識で取り組んでないのは明らかでした。結果論ですが、各競技団体に1台車を手配しておく方法でもよかったのかなと思う。大会期間途中からは感染者数も増えて、当初稼働していたバス3台から倍以上に増えたかと思う。スタッフの配車手配の作業時間や労力、選手団内の感染拡大を考えると競技団体ごとの割り振りでもよかったのかなと思う。また殆ど大型バスでしたがチームによってはワゴンなどでも充分であったので（費用面・移動時間）今後の検討として頂ければと思う。

## 食事

生野菜や水道水には気をつけていたつもりだが、栄養を考えると野菜も取らざるを得ないという状況でもあった。もう少しメニュー面の工夫をして頂けるとありがたいと思った。当チームとしても日本からも日本食などを準備してもらったが、足りなかったと反省している。

## 最後に

我々ビーチバレーチームとしては、会場の変更には始まり、予選リーグ初戦不戦敗、決勝トーナメント1回戦不戦敗による競技終了という形でのデフリンピックとなり大変悔いの残る大会になってしまった。また、チーム内でコロナ陽性者が出てしまい、競技不参加もですが、当初の日程で帰国する事が出来ず本当に不安な日々を過ごす事になってしまった。その中、日本選手団の本部スタッフやメディカルチーム、他競技のメンバーや現地メディカルやサポーターの方々など本当にたくさんの支えを頂いたことは感謝している。ありがとうございました。

日本選手団としても不本意であろう、全競技棄権という事態になってしまったが、終わってしまった今となれば、しっかり振り返り、今後どう活かせるか？を真剣に考えていくしかないと思う。我々競技団体としてもこれからしっかりと今大会を振り返り、二度とこのような想いをすることのないよう出来ることに取り組みたいと思う。

最後に、今回このような大変な状況の中でも、最

初から最後まで立派に行動してくれた4人の選手に敬意を表したいと思う。

選手 今井 勇太

## 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピックにおけるデフビーチバレーボールのこれまでの最高順位9位タイを塗り替えるためにベスト8を目標とした。

## 2. 結果に対する評価

### 【対エストニア】

チーム内に体調不良者が出たため、棄権

### 【対ドイツ】

15-21、21-18、10-15 フルセット負け

### 【対イラン】

13-21、19-21 ストレート負け

0勝3敗でBグループ4位、得失差で敗者復活戦に進出

### 【対チェコ】

チーム内に体調不良者が出たため、棄権

結果は13位タイで目標としていたベスト8入りならず。

予選リーグで対戦したドイツは7位、イランは4位であり、世界のベスト8に入るチームにフルセットやデュース負けと、負けはしたが今後の可能性を感じる内容だった。

## 3. 今後の課題

個人的には以下の2点を今後の課題として取り組んでいきたい。

### ①プレーの精度向上

サーブ、サーブカット、トス、スパイク、ディグと全体のプレーをより安定できるように精度を上げていきたい。精度の向上が戦術の幅を広げることに繋がる。

### ②ゲームメイク

試合相手のタイプは皆同じではなく、様々なタイプがあり、相性の良し悪しもある。

その中でも安定した戦いを展開するために、戦術の引き出しを多く持ち、常に自分たちが仕掛けて主導権を握れるようにしたい。

①と②の課題を克服するには、普段の練習における意識の改革と試合経験をたくさん積むことが重要であると考えます。

日本のビーチバレーボールは、4月～11月がシーズンで国内大会が多く開催されるので、国内大会に出続けていきたい。

## 選手 瀬井 達也

### 1. 当初の目標（自己目標）

これまでの国際大会では全てベスト16で終わっていたため、それを上回るベスト8を目標とした。

### 2. 結果に対する評価

最終結果は13位タイという形で終わった。予選リーグの初戦を棄権、2試合目と3試合目は対戦できたが敗者復活戦で再び棄権したためそこで終了した。今回の大会はコロナ禍の中での開催だったことと熱や体調不良がある場合は棄権する方針だったため、試合に対して勝つためにどうすれば良いのかを考えることはもちろんだったが、もしかしたら棄権になるかもという雰囲気の中で毎日进行していたため、これまでにない精神的な戦いも強いられた部分もあったと思う。ただ、結果は結果なのでそれを受け入れて今後はどのようにしていけば良いのか考えつつ、ビーチバレーボール競技で勝ちに行けるような環境を構築していきたい。

### 3. 今後の課題

今後の課題としては技術の向上や経験を積み重ねることはもちろんだが、一番大事なことはデフビーチバレーボールの競技人口を増やし、日本代表を目指している選手たち同士で切磋琢磨しながらそれぞれが強くなっていくことである。海外は日本に比べて選手の層が厚いため、国際大会に出場してくるチームはやはり強いということがわかる。海外チームに勝つためには国内の選手の人数を増やし、技術等を底上げをしないとメダルを獲得することはかなり厳しいので、まずはビーチバレーボールという競技の周知、及びビーチバレーボールの魅力を伝えながら興味を持ってくれる若い選手を増やしていく必要がある。また自分自身もデフビーチバレーボール界の発展のために今後も関わっていきたい。

## 選手 竹村 徳比古

### 1. 当初の目標（自己目標）

コロナ禍の影響で練習場所の閉鎖や仲間と練習ができない時期があり、またマスク装用でコミュニケーションをとることが非常に大変で辛い時期があった。けれども、前回大会では自分がどれだけ非力が思い知らされたため、この5年間必死に練習、トレーニングをしてきた。

本大会へ挑むにあたり、家族、チームメイト、チー

ムスタッフ、これまでのビーチバレーに携わってくださった、たくさんの方々への感謝の気持ちを忘れずにベスト4以上という目標に向かって自分の最大限の力を発揮したいと取り組んだ。

### 2. 結果に対する評価

今回はベストコンディションで本大会に挑むどころか、日本選手団の間で胃関係のウイルスが流行し、ビーチバレーメンバーの中の一人が体調を崩してしまい第1戦は棄権となった。続いて現地練習もなく第2戦、第3戦ともに敗戦したが、ラリーポイントで予選敗退を免れた。ラッキールーザー戦に出場する権利を得られたので、練習場所、時間を確保してパートナーと連携調整を行った。しかし、滞在期間後半にさらにコロナが流行してしまったため、全競技棄権となった。中途半端な結果になってしまい悔しい気持ちと「たられば」で後悔が残る大会だった。

### 3. 今後の課題

ビーチバレーチームも一旦解散となり、新たにパートナーを探す必要がある。いろいろな選手と組んで練習や大会に参加してコミュニケーション力、戦うための連携に適しているか早めの判断をとらなければならない。2024世界選手権、2025デフリンピックまで2年～3年しかないため、3年間で練習や一般大会のスケジュールを組んでチームのパラメーターを上げていく必要がある。

- ・パートナー探し
- ・個人技術能力向上
- ・パートナーと連携調整、試合経験を積み重ねる

## 選手 山本 将隆

### 1. 当初の目標（自己目標）

ベスト8

### 2. 結果に対する評価

予選リーグ2試合は全敗だった。得失点差でラッキールーザーに進出できたが、コロナ感染拡大により棄権したため13位タイで終わった。ベスト8を目指すならば、予選リーグから全勝か1勝はする必要がある。

### 3. 今後の課題

ペア同士のコミュニケーションももちろんですが、まずは個人の技術を磨く必要がある。今大会の競技場は室内に変更となったが、室内だとボールの軌道がいつもと違ってやりにくい部分があった。室

内でやることは減多にないが、万が一のことを考えて室内で練習する必要もあると思う。

## 自転車競技チーム

監督（選手兼任） 早瀬 憲太郎

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

デフリンピックでは、Cycling（ロード競技）とMountain Bike（マウンテン競技）それぞれ別の競技となっているが、日本としては2競技併せて「自転車競技」として活動している。

#### ロード競技・日本代表選手

一般社団法人日本ろう自転車競技協会（以下、「当協会」という）ガイドライン日本代表選手選考基準に基づき、2020年4～11月の大会成績および強化合宿でのパフォーマンスから小笠原崇裕日本代表チーム監督によって、男子：川野健太選手・早瀬憲太郎選手の2名、女子：蓑原由加利選手・早瀬久美選手の2名が選出され、当協会理事会において承認された。

その後、今大会延期に伴い2021年4～11月の大会成績および強化合宿でのパフォーマンスも考慮し、改めて小笠原崇裕監督により、当協会ガイドライン日本代表選手選考基準に基づき、男子：川野健太選手・早瀬憲太郎選手の2名、女子：蓑原由加利選手・早瀬久美選手の2名が選出され、当協会理事会において承認した。

またロード競技4種目において、各選手の出場種目も小笠原崇裕監督により決定した。

#### ■1000m Match Sprint（1000mスプリント）

男子：川野健太選手・早瀬憲太郎選手  
女子：蓑原由加利選手

#### ■Individual Time Trail（個人タイムトライアル）

男子：早瀬憲太郎選手  
女子：蓑原由加利選手

#### ■Road Race（ロードレース）

男子：川野健太選手・早瀬憲太郎選手  
女子：蓑原由加利選手・早瀬久美選手

#### ■Point Race（ポイントレース）

男子：川野健太選手・早瀬憲太郎選手  
女子：蓑原由加利選手・早瀬久美選手

#### マウンテン競技・日本代表選手

当協会ガイドライン日本代表選手選考基準に基づき、2020年4～11月の大会成績および強化合宿でのパフォーマンスから小笠原崇裕日本代表チーム監督によって、男子：箭内秀平選手の1名、女子：早

瀬久美選手の1名が選出され、当協会理事会において承認した。

その後、今大会の延期に伴い2021年4～11月の大会成績および強化合宿でのパフォーマンスも考慮し、改めて小笠原崇裕監督により、当協会ガイドライン日本代表選手選考基準に基づき、男子：箭内秀平選手の1名、女子：早瀬久美選手の1名が選出され、当協会理事会において承認した。

#### ■MTB-XCO（マウンテンバイク クロスカンントリー オリンピック）

男子：箭内秀平選手  
女子：早瀬久美選手  
帯同スタッフ（役員）

小笠原崇裕日本代表チーム監督が帯同できないため、当協会強化委員会より、監督として早瀬憲太郎、事務として早瀬久美、チームサポートとして田村梢の3名が推薦され当協会理事会にて承認した。なお、レースにおける戦略や指示は大会前および大会中はZoomで小笠原崇裕監督より直接選手へ行われた。また、TD会議には早瀬久美が出席した。

### 2. 総評

全体

#### ■1000m Match Sprint（1000mスプリント）

男子：川野健太選手6位入賞・早瀬憲太郎選手18位  
女子：蓑原由加利選手4位入賞

#### ■Individual Time Trail（個人タイムトライアル）

男子：早瀬憲太郎選手13位  
女子：蓑原由加利選手銅メダル

#### ■Road Race（ロードレース）

男子：川野健太選手26位・早瀬憲太郎選手16位  
女子：蓑原由加利選手銅メダル・早瀬久美選手8位入賞

#### ■Point Race（ポイントレース）

男子：川野健太選手6位入賞・早瀬憲太郎選手DNF  
女子：蓑原由加利選手銅メダル・早瀬久美選手DNF

#### ■MTB-XCO（マウンテンバイク クロスカンントリー オリンピック）

男子：箭内秀平選手6位入賞  
女子：早瀬久美選手銀メダル

今大会ではメダル4個、入賞5個となり、前大会を超える成績をおさめることができた。

ロード競技は男子・女子ともに新しい選手の参加が多く、全体のレベルも上がっていた。国内の一般プロ選手と同等のタイムや力を持つ選手も増えており、今後もさらにレベルが上がっていくと思われる



る。また、ロード競技女子は4種目すべてウクライナ・ポーランド・ベネエズラ・日本の4強となり、激しいメダル争いを繰り広げることになった。マウンテン競技男子はロード競技兼任の選手も多く、前大会よりもレベルが上がっており、特に上位選手はコースによっては国内の全日本でも入賞以上の成績をおさめることができる力を持っている。マウンテン競技女子は出場選手の顔ぶれが前大会から大きく変わり、出場人数や出場国も増えて全体のレベルが上がってきた。

今後、ロード競技男子メダル獲得・ロード競技女子銀メダル以上の獲得を目指すためには、男子・女子ともに国内の実業団アマチュアトップカテゴリーにおいて入賞以上の力が求められる。同じくマウンテン競技男子・女子も、国内最高峰のマウンテンク大会で男子は10位以内、女子は6位以内の力が求められる。

#### ロード競技

##### ■1000m Match Sprint (1000mスプリント)

最初に予選(200m個人タイムトライアル)で決勝トーナメントに進出する選手が決定し、決勝トーナメントでは1000m 1対1のマッチレース。

[男子]

43名出場。予選で上位24名が決勝トーナメントに進出。川野健太選手11位(前大会予選落)、早瀬憲太郎選手16位(前大会6位入賞)が決勝トーナメントに進出。決勝トーナメントでは早瀬選手は1回戦でオランダ選手に負けて18位。川野選手は1回戦コロンビア選手、2回戦ポルトガル選手を倒し、準々決勝進出。準々決勝ではフランス選手(金メダル)に敗れ、6位入賞。

[女子]

9名出場。予選で上位8名が決勝トーナメントに進出。簗原由加利選手は3位のタイムで決勝トーナメントに進出。

決勝トーナメントでは1回戦でコロンビア選手を倒し、準決勝進出。準決勝でポーランド選手に勝てば銀メダル以上確定だったが惜しくも敗れ、3位決定戦でベネエズラ選手に敗れて4位入賞。

##### ■Individual Time Trail (個人タイムトライアル)

激しいアップダウンが続く難しいコースで往復10kmの周回コースを男子3周回30km、女子2周回20kmを1人で走りそのタイムを競う。

[男子]

33名出場。メダルを狙っていた早瀬選手は13位と失速。平均時速44kmで走り抜いたフランス選手が金メダル獲得。

[女子]

6名出場。簗原選手が1周目を抑え気味に走り、

2周目を全開で攻めていく練習どおりの走りで前大会に続き銅メダルを獲得。4位の選手とも大きく差を広げた。1000mスプリントに続きウクライナ選手が金メダル獲得、銀メダルにベネエズラ選手。

##### ■Road Race (ロードレース)

スタート/ゴール地点からカシアス・ド・スル市に向かう公道およびバイパスを封鎖し、平坦やコーナーが少なく真っ直ぐでほとんどが上りと下りのパワーを必要とする約30kmの周回コースを男子は周回コース3周を含む総距離100km、女子は周回コース1周を含む総距離44km。

[男子]

44名出場。チームで選手3~5名を揃えたアメリカ・スペイン・フランス・コロンビア・ベネエズラ・ポーランドなどがレースの主導権を握るべく序盤からハイペースとなる。

周回コース1周目で早瀬選手が後輪のパンクで離脱するも集団を追いかけて集団復帰。フランスチームのペースアップで集団が絞られ、3周目で20人となる。後半で川野選手がバイクトラブルで離脱。アメリカチームから1人逃げが出るが、残り1kmで捕まり、そのまま20名でゴールスプリント。早瀬選手が最も狙っていた種目だったが、集団から抜け出せず16位でゴール。1・2位はフランス選手、3位に53歳のオランダ選手。

[女子]

9名出場。序盤は緩やかなペースで進むが、アシストの早瀬選手が単独で抜け出し1人逃げとなる。エースの簗原選手は集団の中で足を温存し、他選手とお互いに牽制しあいながら進む。途中で早瀬選手を吸収しペースが少し上がるが、再び早瀬選手が飛び出し、折り返し地点で500mの差を作る。そこで前もって決めていた作戦通りに簗原選手が渾身のアタックをかけ、まさかのタイミングで各国の反応が一瞬遅れるがウクライナ選手とポーランド選手が飛び出して簗原選手に追いつき、この3人でそのままのスピードで先頭の早瀬選手を抜いていく。集団の最後尾で休んでいたベネエズラ選手(個人タイムトライアル銀メダル)は反応が遅れてトップ3人を必死で追いかけて50m近くまで迫るが、3人は協調して先頭交代しながらハイペースで逃げ続け、そのまま3人の逃げが決まる。最終的に3人でメダルの色争いに入るが、残り2kmでウクライナ選手のアタックに簗原選手が千切れてしまい3位でゴール。早瀬選手はアシストとしての仕事を終え、今後のマウンテン競技に備えて体力を温存し8位入賞でゴール。

金メダルはウクライナ選手、銀メダルはポーランド選手。4位にベネエズラ選手。

## ■Point Race (ポイントレース)

1周500mの周回コースを男子60周回30km、女子40周回20km。4周回ごとにスプリントを行い、1位5ポイント、2位3ポイント、3位2ポイント、4位1ポイントを獲得し、その合計で順位を競う。

[男子]

41名出場。序盤からハイペースとなり一気に18名絞られ、早瀬選手は足切りとなる。川野選手は18名の集団の中に残り、そのまま4周回に1回ごとに活性化する集団のなかで常に前方の位置をキープし、ポイント周回に入る前に集団の中での位置取りを慎重に考えながら1位通過2回、4位通過を1回のポイントを獲得し6位入賞でゴール。

優勝はポルトガル選手、銀メダルフランス選手、銅メダルにギリシャ選手。川野選手とギリシャ選手とのポイント差はあまりなく、展開次第では銅メダルも狙えた。

[女子]

9名出場。序盤からハイペースとなり、ウクライナ選手、ポーランド選手、ベネズエラ選手、箕原選手の4名に絞られる。かなりのハイペースで、箕原選手は4番手のまま周回し中盤で4位となる。日本のピットスタッフから4位の情報を得て、そこから攻撃に入り連続して2位通過のポイントを獲得するなど積極的に動き、最終的に2位まであとわずか2ポイントとなる3位でゴール。金メダルはウクライナ選手、銀メダルはポーランド選手。これでウクライナ選手はロード競技4種目すべて制覇。

## ■MTB-XCO (マウンテンバイク クロスカントリー オリンピック)

1周4.5kmの周回コースで2km近い上りや尖った石が多いくだりでパワーと同時に正確なラインが求められる。最初の1週のトップタイムをもとに設定された時間内での周回数を決められる変則的なルールで男子は1時間45分前後の設定で6周、女子は1時間30分前後の設定で4周。周回コースに入る1.5km手前のアスファルト道路からスタート。

[男子]

24名出場。スタート直後からハンガリー選手が飛び出し、1周回目からハイペースで後続を切り離しにかかる。メイン集団では箭内秀平選手を含め、ポーランド選手、アメリカ選手、チェコ選手、スペイン選手など6名が追走して2周回目へ。

トップはハンガリー選手で2位のポーランド選手に2分以上の差をつけ、3周回目もハンガリー選手に続きポーランド選手と変わらず1周15分と非常にハイペース。3位アメリカ選手、4位スペイン選

手で箭内選手とチェコ選手が5位・6位争い。4周目にハンガリー選手が転倒によりサスペンションを破損、ピットでの修理に手間取り2位のポーランド選手に逆転される。ハンガリー選手はレースからリタイアしようとしたが復帰し2位でポーランド選手を追う。3位アメリカ選手、4位スペイン選手は変わらず、5位・6位の箭内選手とチェコ選手がスピードやラインを変えたりなどお互いに頭脳戦を繰り広げる。最終的に金メダルポーランド選手、銀メダルハンガリー選手、銅メダルアメリカ選手、4位スペイン選手、5位チェコ選手、6位箭内選手となり2大会連続6位入賞を達成。

[女子]

2013年ソフィア(ブルガリア)以来デフリンピック3回目の開催にして8ヶ国12名(ベネズエラ・ウクライナ・スロバキア・ポーランド・ギリシャ・キューバ・ブラジル・日本)と過去最多。スタートダッシュはベネズエラ選手。ウクライナ選手が集団から1分近く差をつけて2周回目に入り、30秒差でポーランド選手が2位。早瀬選手が3位で2周回目に入るが、その20秒後にスロバキア選手、さらに15秒後にギリシャ選手があとを追う。ベネズエラ選手は1周回目のくだりで転倒によるパンクでリタイア。

独走で2分以上差を広げたウクライナ選手が3周回目に入る。2位にポーランド選手、3位に早瀬選手、20秒差でギリシャ選手。4位のスロバキア選手は転倒し遅れる。3周回目の下りでウクライナ選手が激しく転倒し脚から流血、チェーントラブルでバイクを押してピット外で修理。ポーランド選手が抜いて1位で最終周回に入る。ウクライナ選手はその後復帰。早瀬選手が3位で最終周回へ。25秒差でギリシャ選手があとを追う。この間に審判の協議によりウクライナ選手の失格が宣言される。

最終的にポーランド選手が1位でゴールし金メダル。ほとんどの選手が転倒する中で一度も転倒せずにテクニックを生かし丁寧に走り切った早瀬選手が2位でゴールして銀メダル。自転車競技初の3大会連続メダル獲得という快挙を達成。

スタッフ(選手兼任) 早瀬 久美

### 1. 自己の役割とその評価

現在、現役選手でありながら一般社団法人日本ろう自転車競技協会(以下、「当協会」という)強化委員会事務を担当し、国内・国外での競技力向上事業において「選手兼任スタッフ」として強化合宿や大会に関わってきた。2013年ブルガリア・ソフィア大会、2017年トルコ・サムスン大会では肩書き

は「選手」として登録したが、今大会では「選手兼任スタッフ」としての登録となった。

特に今大会は当協会医科学委員会メディカルの立場でコロナ感染予防に細心の注意を払った。コロナ対策として自転車競技チームの選手／スタッフは原則N95マスクを着用（布マスクやウレタンマスクは禁止、不織布マスクは状況に応じて使用可とする）、渡航中や滞在中の注意などを細かく選手／スタッフに指示し、さらに事前準備としてN95マスクや衛生用品などを大量に用意した。そのため自転車競技チーム内では1人も陽性者を出すことなく帰国することができた。さらに全日本ろうあ連盟が定める基準を超えて、選手／スタッフ全員に対して新型コロナウイルスワクチン3回目接種を推奨（住居地の行政などに働きかけて接種券送付を早めてもらう）、またブラジルで流行っている黄熱病ワクチンを自主的に接種してもらうなどの対策も施した。

またスポーツファーマシストとして2009年台湾・台北大会から全日本ろうあ連盟日本選手団メディカルチームとして関わっており、今大会においてもメディカルチームの一員として主に日本選手団が使用する医薬品の取りまとめや選手の使用薬物の把握、アンチ・ドーピングに関する指導や相談を行なった。

自分自身としては自転車競技選手・自転車競技スタッフ・日本選手団メディカルチームの3つの立場を持つことによって相互作用的にそれぞれの立場においてより深く日本選手団そのものに関わることができたと考えている。自転車競技スタッフ、日本選手団メディカルチームの一員として業務を行うにあたって自分自身が選手であることは常にアスリートの視点でスタッフの役割やメディカルチームの役割を捉えることができたのが非常に大きいと評価している。トップレベルである日本代表選手がどのような情報を必要とし、どのようなサポートを求めているのか、迅速かつ丁寧できめ細かい対応をしていくことを心がけてスタッフ業務やメディカルチームの業務を行った。そうすることによってそれぞれの立場が中途半端にならずに選手とフラットな位置関係を築きやすくなり、結果的には自分自身も選手として結果を残すことができた。

兼任の良し悪しよりも、自分にとってのデフリンピックの関わり方を自分の中で納得し、最後まで3つの立場を全うすることができたのは日本選手団の選手やスタッフ、本部、メディカルチームすべての人たちの支えのお陰と感謝している。

## 2. 今後の課題

自転車競技スタッフとしては国内・国外の事業やデフリンピックと同様の関わり方をすることができ

た。自分が選手として競技に出場するときは、やはりどうしてもスタッフとしての業務ができない時間帯が生じてしまう。その課題は、いままでの国内・国外の事業やデフリンピックにて経験を積み重ねながら、自転車競技チームの選手とスタッフで工夫しながらお互いにサポートをしていくことでカバーし、チーム全体で支え合うことでチームとして機能することができたと思う。

ただし、全日本ろうあ連盟日本選手団メディカルチームとしては医薬品の管理やアンチ・ドーピング関連以外にもっと関わることはできたのではないかと、あるいは関わり方を日本選手団メディカルチームや日本選手団本部、そして自転車競技チームの仲間と出発前に話し合うことができたのではないかと、思う。

「選手兼任スタッフ」であることのメリット・デメリットのうち、メリットをより明確に選手との間で話し合い共有していくことでより高次元での関わり方ができるのではと考えている。

最後にこの場を借りて多くの方々から多大なサポートを頂いたことに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

スタッフ 田村 梢

## 1. 自己の役割とその評価

サムスン大会に続き2回目のデフリンピック帯同でした。前はきこえる専任スタッフは3名いたが、今回は私1名。前大会は監督と選手を繋ぐ通訳としての役割が主だったが、今回はチーム物品の管理と運搬、昼食や補食などの食事の準備、会場での拠点設営と選手サポート、記録とSNSでの情報発信、監督とのオンラインミーティングの通訳やレースにおける情報収集と交渉など、より幅広いものだった。

一番重要で、苦労したのがレースでの情報収集と交渉だった。自転車競技は、天候や競技の進行の状況によって周回数などのルールや時間などが変わることがよくある。当日朝会場に着いたら、まず選手のエントリー状況の確認、チップやゼッケンの受け取り、スタート時間や選手の招集、ルールに変更事項があるかどうかの確認する。今回運営側が慣れていなかったのか、初日は悪天候でかなりの変更があったにもかかわらず、手話通訳の配置や視覚的な情報が無く、英語とポルトガル語の音声のアナウンスのみで現場は混乱していた。

きこえる者主体の運営だったため音声での確認が必要で、主に英語そしてポルトガル語・国際手話の全てを合わせて、やっときちんとした情報が獲得で

きるという状況だった。拠点で選手サポートをしつつ、耳慣れない言語のアナウンスを聞き落とさないようにするのはかなり神経を使った。

日本チームは毎回朝一番に到着、朝から何度も確認に通い詰めるうちに、スタッフの方が顔を覚えて積極的に声をかけてくれるようになり、サポートカー手配の交渉やスタッフの移動の送迎サポートなど、現地の方にたくさん助けていただいたことで何とか役割を果たすことができた。

今回は選手の皆さんとの直接のコミュニケーションを大切に、レースの準備や食事、サポート方法等、選手の希望を聞きながら一緒に進めていくことで、様々な困難もチーム力で乗り越えることができた。そして、自転車競技の魅力を改めて感じる充実した大会でした。このチームと一緒に戦えたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

## 2. 今後の課題

自身の課題としては、事前準備としてレースにおける動き方や情報収集のポイントなどについて、監督からレクチャーを受け、サイクルショップで自転車の扱い方の確認、国際手話と英語の学習、レースで頻出するであろうポルトガル語の単語の確認など、できる限りの準備をして臨んだ。

しかし、現場では強い主張・交渉ができるレベルの英語力が求められ、各国が情報獲得に躍起になっている状況では翻訳アプリでの対応も難しく、自身のコミュニケーションレベルの言語力では苦勞する場面があったので、言語力のレベルアップが必要だと痛感した。

自転車競技は選手5名、専任スタッフ1名と少人数のチームでした。だからこそ、選手の皆さんがより安心して競技に集中できる環境が作れるよう、国際的な大会での動き方や、選手のメンタリティについての理解、自転車の扱い方や知識も含め、幅広く対応できるスタッフとしての力をもっと深めていく必要があると思った。

最後に、大変な状況の中、貴重な機会をくださった日本ろう自転車競技協会の皆さまをはじめ、選手の皆さま、そしてたくさんの応援・協力をいただいた皆さまに深く感謝申し上げます。

選手 川野 健太

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・1000mスプリント
- ・ロードレース
- ・ポイントレース

3種目いずれかで入賞以上

### 2. 結果に対する評価

- ・1000mスプリント 6位入賞
- ・ロードレース 26位
- ・ポイントレース 6位入賞

入賞2つという結果を残すことが出来た。

### 3. 今後の課題

コロナ禍の中、国際大会が開催されず各国の状況がわからない状態が続いていた。今までと大きく違っていたのは、人数を揃えて参加したことである。今までは1人か2人といった少数での参加がほとんどだった。今回は7か国以上の国々が3名以上の選手を揃えて参加していた。中でもフランスはスプリント、タイムトライアル、アシストの各専門家を用意しており、今大会でもロード競技全種目にてメダルを獲得した。

ロード競技は個人競技だが、チーム競技としての要素も色濃くある。各国が人数を揃えてきたために、日本チームとしては戦略がどうしても後手に回らざるを得ない場面が多々あった。また、メカトラブルや落車等のトラブルの可能性を考えた際にも2名では心もとない。実際に今回のロードレースでは早瀬憲太郎選手がバンク、私自身も電気系統のトラブルにより集団から遅れてしまった。

今後の課題としてはチーム力の向上が課題であると感じている。選手の育成・発掘が急務であり、育成に関しては時間がかかることから出来るだけ早く、より若い選手を育成する必要がある。また早瀬憲太郎選手が今まで示してきた通り、世界で戦うためのラインを次の選手たちに示し続けていく必要もある。早瀬憲太郎選手や私自身と同等、あるいは超えてくる選手が3名以上そろった時に、日本チームのメダル獲得はより確実なものとなる。

なお、国または協会としての支援が手厚い国々も多々見られた。特に機材に関しては金銭的な部分のみならず、最新の機材はチーム内でメーカーを揃えるだけでも大きなアドバンテージを得られる。（選手間での助け合い、サポートスタッフのミスを防ぐ）

選手 箭内 秀平

### 1. 当初の目標（自己目標）

日本自転車チーム男子初のメダル獲得

### 2. 結果に対する評価

日本チームの作戦として、8日間ほぼ毎日コース

に入り、練習を積み重ね、雨天時の走行ラインやペース配分の確認、タイヤのセレクトなど、万全な準備をしてきた。

レーススタート時からトップを走る上位選手と競り合い、一時的にメダルを争う位置まで押し上げ、世界のトップで戦えるという大きな自信を得ることができた。大きなトラブルもなく3周目（男子は6周回）に入り、徐々にトップ集団から遅れてしまったが、気持ちを切り替えてチェコの選手と5位争いを繰り広げた。

しかし、ダウンヒル区間で一瞬の判断ミスで引き離され、前回の大会を超える5位以内に入ることはできなかった。結果的に二大会連続6位となったが、今回の6位は自分から攻めて獲りにいった結果、またトップから4分以内でゴールした点は評価できる。5年間の強化の方向性そのものは決して間違っていないと、確実に世界でメダルを争えるところまで力をつけることができた。

### 3. 今後の課題

ろうの国際大会におけるマウンテンバイクコースの特性は、調な上りと下りが入った日本人に不利なパワーコースが多い印象。特に単調な上りなどパワーを必要とする場面ではまだ力が足りない。今後は、国内のXCC（ショートトラック）・XCOに参戦し、筋力や心肺機能のベース強化、機材を使いこなす技術、そして単調な上りと下りが入った地域のローカルレースにも積極的に参戦するなどの対策が必要と考えている。

選手 早瀬 憲太郎

#### 1. 当初の目標（自己目標）

2021年度強化合宿において監督によりデフリンピックロードレース4種目出場を言い渡された。この4種目の中でメダルを狙う重要種目はタイムトライアルとロードレース。4種目とも種目特性が異なるため練習内容も異なる。前大会ではタイムトライアル10位ロードレース24位の成績だったが、両種目ともメダル獲得を目標設定として主に1年間タイムトライアルとロードレースに絞って練習を行った。

#### 2. 結果に対する評価

ロードレース16位、タイムトライアル13位という結果に終わった。評価としては以下の通りです。

ロードレースにおいて序盤にパンクで集団から離脱してしまうというトラブルがあった。しかし、1km離れたトップ集団に追いつき100kmをトップ集

団で走り、ゴールスプリントまで持って行くことができたことは、自分としても世界と十分に渡り合えるという大きな自信となった。

### 3. 今後の課題

現時点での国内のレース成績から、今大会では表彰台を狙えるパフォーマンスを持って挑んだが、4種目とも10位台という結果と想定以下の成績となった。ただ、ロードレースでは十分戦える手応えがあり、今後はロードレースに絞りチームとして役割を持って、日本チームがメダル獲得できるためのフィジカルと戦略を持って挑めるように練習を積み重ねていく。

選手 箕原 由加利

#### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・二大会連続メダル獲得
- ・前大会を上回る全種目入賞以上獲得

#### 2. 結果に対する評価

- ・スプリント1000m 4位入賞

5年前のサムスンデフリンピックにて、入賞獲得できなかった悔しさを常に忘れずに、トラックトレーニングを積み重ねた。

そして、タイムトライアル200m予選3位という結果を出すことができ、前大会の12位を上回ることができた。決勝トーナメントではコロンビアの選手に勝ち、ベスト4に進出することができた。準決勝の相手はポーランドの選手対決となり、1セット目は全力を出して勝ったが、2セットと3セット目は接戦で負けた。3位決定戦の相手は5年前の金メダリストのベネズエラ選手で、全力で挑んだが、惜しくも銅メダルを逃した。過酷なレースだったので私にとって良いレースとなった。

- ・タイムトライアル20km 3位

激しいアップダウンのある公道で、前半は落ち着いてペース配分を考えながら漕ぎ続け、スピード落とさず集中できた。後半、雨が止んだばかりの路面だったが、グリップが滑らないように細心の注意を払って持てる力を全て出し切ることができた。接戦だった1位と2位選手のタイム差は1分40秒。タイム的にも納得出来るものではないので、これからも縮められるようにするためにどう鍛えていこうかが考えていきたい。

- ・ロードレース44km 3位

前日の試走段階、路面状況を踏まえてチームでどう攻めるか、逃げるポイントとかいろいろ思考をお

互いに共有し臨んだ。スタートから集団のペースの状況を把握し、それから20km経過折り返し地点で、自分からアタックをかけて集団を大きく引き離してメダル候補選手の二人と組んでペースを上げた。後半からアップダウンとはいえ、きつい上りが続く厳しいコースだったが、最後まで良いパフォーマンスを維持できた。銅メダルはチームワークと作戦も成功した一番の証拠となった。

・ポイントレース20km 3位

1周500mを40周走るコース。序盤から他の選手がアタックを連発する展開となり、スピードのメリハリがとて激しかった。一旦、落ち着いた状態になったときは脚を温存し、積極的に攻めてポイントを獲得し続けた。上位3人とはレースを読む力、バイクをコントロールする力、技術、走力も差は大きく無く、自分が持っている力を出し切れたが、狙っていた銀メダルまでほんのわずかの差で惜しくも逃し3位と非常に悔しい思いだった。

### 3. 今後の課題

全体的ペースを上げられるように強化していきたい。5年前より全種目で世界の選手たちと争えているという感覚があったので、その感覚を忘れないように一日一日身体の使い方を改善し、トレーニングに励みたいと思う。

最後になりますが、本大会における本部役員の皆様、メディカルチームの皆様、グロリアの皆様、全日本ろうあ連盟の皆様、そして競技団体選手・スタッフの皆様から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

選手 早瀬 久美

#### 1. 当初の目標（自己目標）

2021年度の強化合宿において小笠原崇裕監督よりマウンテン競技とロード競技の兼任出場を言われた。マウンテンバイクXCOは銅メダル以上で3大会連続メダル獲得を目標設定とした。ロード競技はロードレースとポイントレースの2種目出場として、簗原選手のメダル獲得に向けてアシストの役割をもって走り、自分自身も8位以内入賞することを目標設定とした。

#### 2. 結果に対する評価

マウンテン競技XCOにおいて銀メダルとなり、3大会連続メダル獲得を達成した。また、前大会までの銅メダルを超える銀メダルは自身の目標設定を超える成果となった。2013年に初めてマウンテン

バイク女子XCOが行われてから、3大会目にして8カ国11名と最も多い参加であった。ほとんどの選手で落車による転倒怪我やバイクトラブルが起きた中、一度も転倒することなく最後まで走り切ることができたのは、5年間テクニックとフィジカルを徹底的に強化していった成果によるものと評価している。またロードレースにおいても簗原選手と5年間様々なレースで経験を積み重ねたことで、作戦が見事に決まり簗原選手の銅メダル獲得に貢献するアシストをすることができた。

### 3. 今後の課題

マウンテンXCO女子の競技人口が少しずつ世界に広がり若い選手も増えてきた今、今後競技レベルもさらに上がっていくと思われる。ただ過去3大会ともXCOとしては国際基準に満たない簡単なパワーコースとなっており、テクニックが求められる国内のXCOと大きな隔りがある。今後、パワー強化かテクニック強化かの方向性を明確にしていくことが求められる。

## サッカー競技チーム

監督 久住呂 幸一

#### 1. 選手の選考基準

前々回のブルガリアソフィアデフリンピックの2年後2015年11月に代表監督に就任した。その間、空白の期間があったが、就任1年目はブルガリアソフィアデフリンピックに参加した選手が半分以上以下、そしてサッカー経験者が少なく、集めるのに苦労した。まず、人数を揃えるのが先という感じでレベル関係なく集めてきた。サッカーをやっている情報を集めたり、宣伝したり紹介してもらったりした。少しずつ人数が増えるも、なかなか集まらない状況でした。そしてデフフットサル代表活動だけという選手もいた。

就任時、目標に掲げた「TOP3」に向けて、戦術を示し、全日本東西対抗戦や代表候補合宿、海外遠征、世界選手権アジア予選などの経験を通して、目標に近づけるチームになるべく、選手を選考した。サッカー経験があり、90分間走り回れる選手、そして気持ちの強い選手、協調性や責任感など自覚のある選手、きこえるチームに所属している選手、チームのために尽くす人間性を見極め、19名を選出しました。しかし、体調不良、コロナワクチン接種拒否、勤務先の都合により、あきらめた選手があり、

16名となった。

◎チーム体制と各コーチの役割

- ①監督／久住 幸一…総指揮、練習・行動計画の立案決定、戦術決定
- ②コーチ／仙波 優菜 …監督補佐、FP指導
- ③GKコーチ／星野 あかり…監督補佐、GK指導
- ④トレーナー／伊藤 優花…選手のコンディション管理指導、ケガの予防処置、メディカル関係の連絡担当
- ⑤スタッフ／中村 崇修…本部への連絡、選手の水の補給のため水買い出し

選手16名に対し、トレーナー1名では負担が多く、他競技団体と比較してみると、割合が低いため、トレーナーは2名いたほうが良いと考える。しかし、金銭面など負担があり、なかなか厳しい状況。女子チームのため、スタッフについても女性の比率を上げるなどの配慮が必要と感じる。監督以外、きこえる人であり、合宿などは手話通訳が付いていたが、今回は諸事情により、手話通訳がいなかった。やはり、手話ができ、きこえない人の背景を知っている人が一番ベストかと思う。「郷に入れば郷に従え」それくらいの覚悟が必要と思う。そして国際手話を知っている人が私と野呂団長二人だけであり、国際手話ができるスタッフも何人か必要だと思う。また、選手たちも国際手話を勉強する時間を設ける必要があると思った。技術面だけでなく、心理面もちろん、人間性を磨くことも代表選手に必要な部分かと思う。代表選手を対象に国際手話講座を設けるなど企画があったらいいと思う。

◎競技及び渡航スケジュール

- 4 / 27 成田空港出発
- 4 / 28 サンパウロ到着
- 4 / 29 カシアス・ド・スル着 ホテル着
- 4 / 30 公式練習
- 5 / 1 自主練習
- 5 / 2 公式練習
- 5 / 3 対Kenya
- 5 / 4 公式練習
- 5 / 5 対Poland
- 5 / 6 公式練習
- 5 / 7 対USA
- 5 / 8 全体ミーティング
- 5 / 9 全体ミーティング
- 5 / 10 全体ミーティング
- 5 / 11 トレーニング (Zoom)
- 5 / 12 トレーニング (Zoom)
- 5 / 13 トレーニング (トレーニングルーム)
- 5 / 14 トレーニング (Zoom)

5 / 15 全体ミーティング(トレーニングルーム)

5 / 16 ホテル発

5 / 18 成田空港着

◎成績一覧

5カ国を予選リーグ戦で行い、戦績により順位決定戦という形式でした。

予選リーグ

5 / 3 対Kenya

前半7-0

後半5-0

合計12-0 勝利

Kenyaチームは初出場と情報もない中で…そして初戦の難しさがありましたが、前半3分杉本選手のゴールを皮切りに、ゴールラッシュとなり、前半で7-0後半5-0合計12-0となった。

5 / 5 対ポーランド

前半1-2

後半1-3

合計2-5 敗戦

Poland戦 前回のサムスンデフリンピックは銀メダル獲得した、少しずつ力をつけてきているチーム。前半8分で杉本七海選手が先取点を奪うも、前半のロスタイムにて逆転を食らう。1-2に。後半は同点に持ち込もうとしたが…。プレスが甘く、1-3で合計2-5に敗戦。

5 / 7 対アメリカ

前半0-0

後半0-1

合計0-1 敗戦

予選第3戦はU.S.A戦 前回のトルコサムスンデフリンピックを除いてすべて優勝を果たしており、アメリカ戦に勝たないと自力にて優勝決定戦へ進められない。まず、前半を0点を抑えることで相手を焦らせ、1点を取りに行く戦術にした。選手たちがそれぞれの役割をしっかりとこなし、思い通りの流れとなった。しかし、残り3分、アメリカの素晴らしいGOALにより0-1で敗戦。これが世界の差だと痛感した。

5 / 11 対ブラジル

棄権

5 / 14 3位決定戦

棄権

5月10日以降の日本選手団の全競技棄権により予選リーグを4位で終えた。

## 2. 総評

デフサッカー女子代表にとって9年ぶりのデフリンピックであり、楽しむだけでなくメダルを取りに行こうとした。9年前のデフリンピックに参加した

選手は現在のチームメンバーに5人ぐらいで、初めてデフリンピックに参加する人が3分の2と、フレッシュなメンバーでした。しかし、コロナ禍のデフリンピックであり、なかなか難しいものだった。移動時間が長く、ほぼ2日間かけてブラジルへ向かった。予め、出発前にzoomにて選手に、トレーナーから、注意するポイントとか食事面とかエコノミークラス症候群対策など講義を行った。そのおかげで、選手たちの意識が高まり、エコノミークラス症候群対策では、選手たちが飛行機内を歩き回ったり、ストレッチをするなどしました。そして、ドーピングについても外部講師に依頼をし、しっかりと選手たちの意識を高く持たせた。サッカーは団体競技であり、何かあるときは連帯責任となる。しかし、現地ではPCR検査をしっかりとやると聞かされたのに、成田空港出発以外、何もなかった。そしてカシアス・ド・スルに着いてからもまったくないままでした。デフリンピックスクエアでのアクレ受領に時間がかかったため、コロナ対策を考え、スクエア内ではなく外で待機する方法を選択した。また、抜き打ちで聴力検査を受ける選手が何人かいると予想していたが、やはり4人が検査を受け、そしてアクレ受領する際にも突然、7人と、チームの3分の2にあたる10名が検査を受けた。とても時間がかかり、夕方終わってもバスがなく、21時にバスがくるまで待つしかなく、気温が低いこともあり、体調を崩した選手がいた。その後、体調不良者が3人出て、抗原検査を受けたところ、2人が陽性と判明し、サッカーチームは隔離となった。その基準も明確でなく混乱した。コロナ禍のデフリンピックは初めてのケースであり、基準をしっかりと定めなければいけないと感じた。日本選手団本部、メディカルチームの協力を得て、初戦の前日にPCR検査を受け、陰性の選手が14名（内体調不良1名）と判明し、大事な初戦を棄権することなく、出場することができた。いろいろと動いていただき、とても感謝をしている。

試合では、Kenyaチームが試合開始15分前に到着と、ユニフォームの色も決められない状態で焦った。ルールでは日本の不戦勝となるが、組織委員会の不手際でバスが遅れたため、待つこととなった。日本は選手団のバスを独自で手配していたので問題はなかったが、他のチームは組織委員会が手配したバスで移動しており、遅れるケースが出たとのこと。

試合にあたり、濃霧の中なのにTDから「ボールはホワイトしかないが理解してほしい」と念を押された。Kenyaチームの情報はほとんどなく、どんなサッカーをしてくるか予想できなく、難しいと感じていたが、蓋を開けてみれば、ゴールラッシュ。

Poland戦では前半8分に先制点を奪うも…、ブ

レスが甘く、前半にて逆転され、後半では同点にという気持ちで送り出すも、2 - 5にて敗戦。

U.S.Aは前回のサムスンデフリンピックを除いてすべて優勝しており、今回も優勝候補。U.S.Aに勝たないと自力突破不可能になる。まず、前半を0点に抑えることで相手を焦らせ、1点を取りに行く戦術にした。引き分けで終わるつもりはなかった。思い通りの流れとなったが、なかなか前へ進められず、残り3分にアメリカの素晴らしいGOALにより0 - 1で敗戦。

選手層が薄いと改めて実感した。もっと人数を増やし、競いえるぐらい、人数を集めなければと思った。今回は日本選手団の全競技棄権という結果となったが、協会とスタッフが一体となって、選手のケアに力を入れ、選手たちは少し落ち着いてきた。もちろんまだ納得してない選手もいますし、帰国後もしっかりとケアをしていかなければいけないと思う。今後の彼女たちを応援していきたいと思っている。世界と戦えるためには色々課題があると思う。体格には勝てないが、フィジカルや判断力などを少しでもあげ、カバーすれば、世界に対抗ができると思う。また、戦術理解度を高める必要がある。デフサッカーに限らず、デフスポーツもそうだが、デフスポーツ人口を増やすために、デフスポーツの存在を知ってもらおう活動をしていかなければ世界に置いて行かれる。デフスポーツ人口が増えると競争が生まれ、一人一人のレベルアップとなり、そしてチームのレベルアップに繋がる。

前々回のブルガリアデフリンピックに参加した中高生が現在、デフサッカー日本代表女子チームの主力となっており、今回のブラジルデフリンピックに参加した高校生がきっと次回のデフリンピックではチームの主力となり、経験を糧に更にチームのレベルアップにつながると信じている。

今回ブラジルデフリンピックに参加し、日本はメダルが取れる位置にいると確信した。次大会ではメダルではなく、優勝決定戦を目指し、協会と監督、スタッフそして選手の力をあわせてやらなければいけない。そして応援していただいている方々を今以上に倍にするくらい増やさなければいけないと思う。

今回のブラジルデフリンピックは難しい大会だったと思う。コロナ禍のため、競技の垣根を越えて交流するのも、他国の選手たちと国際手話でコミュニケーションをする機会もなかった。また、各競技団体ともっと交流し、お互いに刺激し合い、良いものを吸収するなどの努力は必要だと思う。

デフサッカー代表女子チームの未来は明るいものだと思じて。

Beautiful in full bloom



## 1. 自己の役割とその評価

はじめに、感謝の気持ちをお伝えさせていただきます。全日本ろうあ連盟の皆様には、大変な状況の中、適切且つ丁寧にご対応いただきまして本当に感謝しています。皆様のおかげで競技に集中できましたし、安全な状態で帰国をすることができました。また、メディカルの方々には、3名のコロナ陽性の選手に対しても本当に温かくサポート頂き大変感謝しています。山口選手は、最後の最後に陽性になり、本人にとっても苦しい悔しい状況でしたが、連盟やメディカルの方々に支えて頂き、本当に感謝しきれません。今回のデフリンピックでは、本当に本当に多くの方のサポートを頂いて私たちが競技を行えたということを忘れません。本当にありがとうございます。

今大会では、私は女子サッカーチームのコーチを務めさせて頂きました。主に、練習の指揮や選手のプレーの確認を行なう役割を担っておりました。練習以外では、監督やGKコーチとミーティングを行い、チーム戦術やリーグで勝つための戦略を練りました。他にも、日本ろう者サッカー協会スタッフや選手とのコミュニケーションを適宜、行ないました。

自己評価としましては、監督の勝利へのイメージを吸い上げ、練習を通して選手に落とし込むことができたと思っている。これは、今までの合宿の流れも同様であり、選手も集中して取り組んでくれたと捉えている。結果として負けたが、アメリカ戦の戦術は、チーム全員がその戦い方を理解し、徹底できたと感じている。チームに帯同させて頂いた中で一番集中力を高く保った良い試合だったと感じている。

改善点としては、手話通訳者が今回帯同していないこと、私の手話ができないことが重なり、監督とのコミュニケーションにすれ違いが多くあった。緊迫した試合状況の中で、監督の意図をくみ取ることが困難な場合があり、会話が一方通行になっていたと感じている。状況が変化する試合において、どのように監督とコミュニケーションをとっていくのか、想定外の出来事が起きた場合どのように対応するのかについて合宿からより具体的に監督とコミュニケーションしておく必要があったと感じている。

## 2. 今後の課題

デフリンピックという緊張感のある場での正確で迅速な状況判断を監督・コーチ陣は行なう必要があると考える。それを可能にするためには、試合中の

戦い方やリーグでの選手の起用の仕方やスケジューリングを合宿時から細かく具体的に話し合っておく必要があると思う。また、手話通訳者がいないことを想定したコミュニケーション方法の準備（ホワイトボードやUDトークの活用など）も必要だと感じた。他にも、コミュニケーションをスムーズに行なう為に、ろう者もきこえる者もお互いを理解しようと歩み寄る姿勢も欠かせないツールだと考えている。特に、今回は監督・コーチ・スタッフ陣の中にろう者の割合が少なく、きこえる者は無意識に口話で話を進めてしまう傾向もあったので、きこえる者はろう者をしっかりと巻き込んで話を確認しながら進めていく意識を強く持つことが必要だと感じている。ただ、きこえる者だけでなく、ろう者も積極的にきこえる者の会話に入っていく意識も必要だと感じている。

## 1. 自己の役割とその評価

選手の日々のコンディションチェック、怪我人発生時の応急処置、テーピング、練習・試合時のアップ、トレーニングメニュー作成・実施、怪我人の治療、リハビリメニューの作成・実施、選手のケア（マッサージ、鍼灸）、その他雑務。

ブラジルという慣れない土地での実施、コロナウイルス対策とより一層のコンディショニングの管理が必要となった。今大会が始まる前に長期海外遠征の注意点（時差対策・機内での過ごし方・食事の注意点・体調を崩したとき・感染症対策）をパワーポイントで選手に共有し、対策をすること、持ち物の準備に抜かりのないよう伝えた。特に食事の面に関しては、現地の食事に合わず十分な量を食べられない選手、食事をしっかり摂ることのできないスケジュールのなかで自前の非常食等を上手く使っている選手が多かったように思う。体重測定は朝食前・練習前後に行い、渡航前の体重から減少していないか、食事をしっかり食べられているか、トレーニング中の水分補給は不足していないかなどを中心にチェックするようにした。特に海外遠征が初めての選手、偏食の選手は海外の慣れない食環境のなかで十分に食べられず体重を落としてしまっていた。また、チームからコロナウイルス陽性者が出しまったことから、コロナウイルス対策による呼びかけがトレーナーの立場から不十分であったことが反省点である。

毎日朝・夕食後のコンディショニングをチェックし、全員の状態をチェックし、異常のある選手に対

してはヒアリング→対応した。全競技辞退となる前は中1日の試合スケジュールであったため、軽食の準備や毎晩選手のケアを重点的に行い、コンディションの回復に努めた。部屋での隔離生活や全競技辞退となってからは選手の心のケアを中心に行った。トレーニングスペースを使用してのトレーニングも楽しめるものを中心に行い、毎日のコンディショニングチェックから選手一人ひとりの状況をスタッフと共有し対応した。同様に、異常のある選手に対してはそれぞれに合わせて重点的に対応した。その他自室では、身体機能低下を防止するためにもzoomでストレッチやヨガ、トレーニングを実施した。怪我人・症状のある選手が出たときはすぐにメディカルチームへ報告をし、連携を取るようにした。

## 2. 今後の課題

今大会で言えば、一番の反省点はコロナ対策である。現地に到着し、デフリンピックが始まることから少し浮かれてしまっている選手が見受けられた。逐一厳しくこまめに伝えていくことが立场上必要であったと反省している。今回、海外遠征が初めての選手、好き嫌いの多い選手は体重を渡航前より落としてしまっていた。そういった選手は自前の準備が十分でいなかったり、食事の重要性を考えられていなかったりする。食事の重要性を普段から伝えていく必要があることと、その伝え方も工夫していきたいと感じた。個人的なこととしては、海外遠征でよく起こる内科的疾患に対してもっと鍼灸で対応できるよう励んでいきたい。私自身のレベルアップを怠らず、チームが良い成績を残せるようサポートしていきたいと思う。

スタッフ 野呂 啓  
中村 崇修  
星野 あかり

提出なし

選手 阿部 菜摘

### 1. 当初の目標（自己目標）

自分にとっては初めてのデフリンピックなので、思い切り楽しみたい。メダル獲得を目指す。

### 2. 結果に対する評価

コロナに感染してしまい、最初の予選リーグの3試合は出れなかった。しかし、隔離期間が終了した次の日、試合に出れると思いきや、日本選手団内でコロナ感染者が増えたことから、棄権することに

なった。そのため、初のデフリンピックでは試合に出れず、終わってしまった。感染したことに対して、周りの人からは「何も悪くない」と言ってくれているが、それでも試合に出れなかったことは自責してしまう。

### 3. 今後の課題

デフリンピックには出れなかったが、来年はワールドカップが控えているので、切り替えてそれに向けて頑張っていくしかない。来年もwithコロナの可能性もあるので、同じ過ちを繰り返さないように、しっかり感染対策と体調管理をしていくことが大事。

選手 岩淵 亜依

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ①メダル獲得
- ②デフリンピックの経験を今後の自分や自チーム、未来の選手たちに還元できるような内容にする
- ③女子サッカー史上初のメダル獲得を目標
- ④競技人口が少ないというのが女子サッカー競技の課題のひとつであるため、耳が聞こえない子供たちが選ぶ競技の中に女子サッカーという選択肢があるようにする。また、女子サッカーに興味を持ってもらう、サッカーを通して生きがいや心の支え、チームメイトの存在の強さ、サッカーだけでなくスポーツ自体が人生に潤いを与える可能性をかなり秘めているということをもみんなに知ってもらうために経験をする

### 2. 結果に対する評価

今回、棄権という形を取り、目標を達成することはできなかった。しかし、予選リーグで全勝していれば、メダルは取れていた。予選で自分達は成長を見せることができたが、過程と結果を分けるならば、1勝2敗という結果なので自分達に評価できるところはない。今回は精神面での経験がかなり大きなものとなったと思う。前を向く方法や受け止め方は人それぞれだが、競技を今後続ける・人生をいいものにしたければ今回の結果も自分の中で良いものにならなければならない。

### 3. 今後の課題

今後の課題は合宿以外の時間をいかに自己研鑽のために使えるかということ。そしてこの競技をもっと好きになること。わたしたちはプロではないが、日本を代表していることに対してもっと自覚しな

ればならない。自分に良い意味で納得せずに向上心を持って行動しなければならない。そしてこれを口だけでなく行動するために考えなければならない。また、協会やろうあ連盟と同じ方向を向き、協力し合えなければ、これ以上の成長はないと思う。組織としての課題と、個人の課題が大きく見えた大会だったと思う。

## 選手 押領司 真奈

### 1. 当初の目標（自己目標）

トップ3に入ること。  
得点を決めること。

### 2. 結果に対する評価

初戦vsケニア戦12-0 ○

国際大会で初めての試合に出場。この試合では1点決めることが出来た。もっと自分に自信を持ってゴールに入れるチャンスを冷静に決められるようにしたい。

2回戦VSポーランド2-5 ●

この試合では、コーナーキックが多かった。ゴールキーパー前のマークをした。身長でカバーすることは出来ないが、その他の体の使い方ですぐ上手く出来たら良いプレーが増えると思う。

3回戦VSアメリカ戦0-1 ●

前半・後半20分まで、リトリート戦術を使って守備を主に行なった。残りの後半25分から攻撃・守備の繰り返しでゴールを狙った。相手のボランチにパスを通さないように、味方の距離を気にしながら守備をした。次、アメリカと戦うときはリトリートを使わずに試合をしたいと強く感じた。

### 3. 今後の課題

サッカーの知識を増やして、攻撃パターンやドリブル技術の向上を目指すべきだと感じた。90分間・延長・PKまでやれる体力も必要。ボールを奪われても奪い返す体力や粘り強さも勝負に出るなど感じた。最後の最後で何が起こるか分からない。

YouTubeで決勝戦を見た感想では、両チームの攻撃守備、どちらも粘り強いイメージだった。選手同士のぶつかりも激しく、倒れるくらいの強さのレベル。今の私が決勝戦で試合をしていたら怪我をしていたのかもしれないと思った。怪我をしない体作り、体幹も鍛えて行かないと負けてしまう。自分に足りない所を補っていきながらトレーニングに取り組みたい。2025東京デフリンピックや今後の国際大会に向けて、自分の課題と向き合って少しずつ準備

をして行きたい。

## 選手 久住呂 文華

### 1. 当初の目標（自己目標）

チームとしての目標→世界一、世界トップ3

個人として目標→9年間やってきた自分の成長を、この大きな舞台で、発揮する事がすること。日本代表に相応しい行動をしっかりとすること。最初で、最後のチームとして、最高の結果を、最高のメンバーの一人として、中心にやっていくこと。自分のベスト、全てを、やり切ること。後悔がない行動をする。守備の要として、指示など、チームを鼓舞させる立場にいること。初出場でも、怖からずに、自分らしく、プレーすること。普段感じられないことを、経験し、3年後のデフリンピックにつながるようにすること。この目標で、ブラジルデフリンピックに挑んだ。

### 2. 結果に対する評価

正直、ここで終わるのが悔しい。残り2試合だけでもやらせて欲しかった。この予選で金メダルを取れたか？と言われたら、厳しかったです。試合を続ければ、きっと予選リーグでは3位。きっと、初のメダル獲得でもおかしくなかったです。棄権という話がでた時、気持ちは追いつかなかった。プレーする場さえ与えてもらえないのかと思った。努力してきたことが、このコロナのせいで、努力は全て報われないことがあるんだなと思った。努力は報われると思ってても報われないじゃん。コロナだけで、今までの夢、やりたいことを奪われるのかと感じた。でも、選手の前に、人間として考えるとしたら、棄権という結果にたどり着いてしまうのかなと思った。このデフリンピックにきてよかったのか、初めから行かないのか。ブラジルに来てよかったのかと聞かれたら、私はブラジルに来てよかったと答えられる。ブラジルに来ないと、こんなに経験や感じるものはなかったと思うし、どれだけデフサッカーの存在を向き合えることができたか、このチームにいられることが幸せだと再認識するきっかけになったと思う。ブラジルと戦うことは叶えられなかったけど、ケニア、ポーランド、アメリカの3カ国だけでも試合できてよかった。特にアメリカ戦。デフサッカー協会のおかげで、アメリカと戦う自分たちの姿を、日本に見せることができたと思う。私たちの頑張り、日本にいる人たちにも、何か勇気を起こす事ができるきっかけになればいいなと思った。リトリートを使って、戦うことになったが、これでも、十分戦えたと思う。コーチは、「リトリートを使っ

て勝ちたくなかった、正々堂々と戦いたかった」と話したけど、自分は今まで何回も優勝したアメリカ相手に0-1まで抑えられたことを誇りに思いたい。けれど、再戦することになった時は正々堂々と戦う。今回の棄権は、協会や連盟は悩んで悩んだ末にこういう結果になったと思う。この問題に関しては本当に難しいと思った。16人全員で立ちたかったのが本音ですが、個人的にはこのブラジルデフリンピックに参加できてよかった。この悔しさをバネに次のデフリンピックに貢献します。高校生として、このブラジルデフリンピックに参加できたことは、ものすごい大きい人生のキープポイントになった。この経験を忘れずに、思い出で終わらせずに、この先続くように大切に考えていきたい。

### 3. 今後の課題

合宿から、どれだけ、本気で、取り組む事ができるのか、サッカーをする環境をどれだけ強くするのが重要になる。ブラジルデフリンピックで、これから先、やらないといけない最低ラインはわかってきた。それをいかに、自分たちで取り組む事ができるのか重要になってくるのかなと感じている。日々の生活から小さなことでも気づけるような選手になります。次のデフリンピックまで残り3年間。まだ3年間ではなく、もう3年間しか残ってないと危機感を感じながら、日々の練習に取り組んでいく。

選手 國島 佳純

#### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・全試合フルスタメン出場し、今まで練習してきたことを発揮しチームの勝利に貢献する。そして、成績の目標は優勝、最低でも3位に入賞し、女子サッカー界に新しい歴史を作る。
- ・試合だけでなく、チームとして士気を上げられるようなアクションを起こし、結果に繋がられるようにする。
- ・大会を通して、個人課題である人間性を高め、チームのことを考えて行動できるようにする。

#### 2. 結果に対する評価

- ・第1試合目の前日のトレーニングの最中に、不慮の事故により、足首を捻挫してしまい、第3試合目のアメリカ戦だけ出場し、棄権という形で辞退となり、メダル獲得は達成できなかった。そして、全試合フルスタメン出場も達成できなかった。しかし、チームの士気を上げるようなアクションは、モチベーションアップ動画を毎

試合の前日にアップし、チーム全体のモチベーションアップに繋がったので、達成できた。

- ・人間性を高めるという目標に対しては、監督からは、合宿に参加し始めた頃と比べたら、成長したと面談時に答えていただいたが、自覚はしていない。もっとチームのために行動できることがあると感じているので、今後の合宿の目標として引き続き意識していきたい。

### 3. 今後の課題

- ・初めて国際大会に出場し、海外の選手と実際に試合して、いろんなものを収穫した。通用するところもあれば、通用しないところがたくさんあった。個人的な課題としては、キック力、セービング力を高め、攻撃の起点となるパターンを増やす必要があると実感した。  
→練習環境を変え、サッカーをもっとできる環境を作る。（経験数を積み重ねる）
- ・アメリカ戦で、練習した成果を100%発揮できたか？という、半分しか出せなかったと自己分析する。自信がなく飛び出せなかったところが度々あった。その課題を克服するには、試合経験数を増やし、余裕が持てるような選手になる必要がある。チームとしての課題は、（自己分析）個人の力を高め、チーム全体として高める必要がある。セットプレーの質を高める（海外のチームと比べ、日本はそこがまだ弱い）には合宿の日程を増やしたり、回数を増やす必要があると思う。

選手 酒井 藍莉

#### 1. 当初の目標（自己目標）

優勝はもちろん、最低でもメダルを取ること。最後まで全力でやり遂げることを目標していた。

#### 2. 結果に対する評価

初戦 ケニア戦

12-0という結果になりましたが、全体的に見て、もっとやれたのでは？と思った。今まで積み重ねてきたことを出し切れていたのかと言われたらそうでは無いと思う。まだまだ私達らしいプレーができるはずと思った。個人的は、まず、決定力がなかったこと、想定外の対応ができなかったこと。でも、誰よりも走ったし、アシストはできたと思う。決められなかった分、アシストで貢献することはできたのではないと思う。

2戦目 ポーランド戦

5-2で負けという結果。個人的に入りが悪かったと思う。プレスが甘かったり、仕掛けるタイミングがギリギリというか、遅かったのかもしれない。後半では、もっと早く仕掛けたり、プレスに行くように心掛けた。2点目のアシストは、その選手とのアイコンタクトがうまく行って、お互い何を狙っているのか何をしたいのかはっきり通じ合っていた瞬間だったと思う、そこはすごくよかった。そして、先取点を取ることが出来たことも、成長の一つだと感じることはできた。

### 3戦目 アメリカ戦

アメリカ戦は、1-0でもいいから勝つ。ということでもトリートという、戦術をアメリカ戦の前の日の練習のみの、短時間でその作戦を理解し試合に臨む形になってしまったが、結果的には負けてしまったが、失点を1点で抑えることが出来たのはすごくよかった。しかし、最後の最後で失点してしまったこと、自分がもっと強いプレスをかける、パスを出させないようにする対策はできたのではないかと思った。全体の試合を通しての評価は、自分と思う通りうまくいかないことが多かったし、本来自分が持っている力を出すことが出来なかったのではないかと思った。もっと自分らしいプレーを出せたと思う。この大会を通して一人一人の経験値がアップしたのではと思う。私は今回の大会でいろいろ思うことはあるが、今後もし、続けるのであれば、技術を上げる、メンタルも強く、もっと自分を責めて、行動できるような選手になりたいと思った。誰のせいにもしない本当に強い自分に慣れるようにこれからもより自分に厳しく指摘しながらやっていこうと思った。今回の経験は無駄じゃなかったことを、ほかの方法で証明していけたらと思う。最後にメディカルチームの皆様、本当にお世話になりました。そして、ありがとうございました。

### 3. 今後の課題

- ・コロナ対策（想定外という状況がないように）
- ・選手の思いにもっと耳を傾けてほしい。

## 選手 杉本 七海

### 1. 当初の目標（自己目標）

私は、初めてのデフリンピックの選手に推薦して頂き、ブラジルで世界一になるという目標を立てた。世界一になるためには、今までの合宿や自チームの社会人チームや専門学校で自分の実力、メンタル、体力などつけて行くように努力してきた。自分は、去年までは高校生で社会のレベルがあまり分かっていなく、世界で戦うレベルもしっかりと分かっていな

かった。ですが、中学生の時、2021年にデフリンピックがあることを知り、その時からデフリンピックにむけて、世界のプロ選手の試合をテレビで観たり、凄く厳しい高校に入学し、体力や、技術、得点に繋がるトレーニングなど先生から色々と厳しく指導をしていただいた。

そして、2020年に誰もが起きるとは思わなかった、新型コロナウイルスが流行り出し、オリンピック、パラリンピック、デフリンピック等の国際試合が1年延期になったと分かった時はショックだったが、その分1年間力をつけようと切り替えた。そして、高校卒業後、サッカーに関わる専門学校に入学し、デフリンピックに向けて改めて、自分の個性を色々と勉強し、男子と混じって、たくさんサッカーの練習をしてきた。男子に負けない自信を持ち、それを世界で発揮していこうと思いをトレーニングにぶちこんだ。私のポジションはFWで皆と協力しながら1点でも多く取れるように日々練習に励んだ。

### 2. 結果に対する評価

1回戦のケニア戦では、どのような相手なのか分からないが、自分たちのできることを発揮するだけと思い、試合に挑んだ。自分は、ワントップで出場させて頂き、そこでチームにどう貢献をすればいいのか考えながら試合に挑んだ。そして、前半に3点とハットトリックをとれて嬉しかった。後半には1点を取り合計4点取れて嬉しかったです。試合結果は、12対0で初戦圧勝してほっとしました。ですが、内容的に考えると攻守ともまだまだ精度が低く、もっと全体的に上げて行けないと思った。

2戦目のポーランドは前回大会銀メダルの強豪だが、先制点を奪えたことにはかなり自信がついたが、敗戦となり内容的には、フリーキックのチャンスで自分がゴール枠を外してしまったことやゴールチャンスを決めきれなかったり、悔しい結果となった。

3戦目のアメリカは、作戦の守備をしっかりとみんなでもゴールを守りきれたのは良かったと思う。後半途中から攻撃チャンスを作っていく作戦だったが、アメリカの守備が強くて攻撃をができなかった。

### 3. 今後の課題

今回のデフリンピックは、辞退という形で終わったが、3年後のデフリンピックではメダルを取りたいです。海外の選手は体がでかくて、足も早かったからこそ、自分は体をもっと強くし、体幹を鍛えたい。シュートは、確実に正確に決められるようなシュートを打てるようにしていきたい。

## 選手 高木 桜花

### 1. 当初の目標（自己目標）

サッカー面：得点王になる  
その過程として、

- ・スタメン入り
- ・フル出場
- ・詰めまでしっかりやる
- ・全力でやりきる
- ・アシストする
- ・点決める
- ・3アシストする
- ・ハットトリック
- ・総得点5点以上

の9個の目標を掲げた。サッカー以外のところでは、目配り・気配り・心配りを意識することと、感謝の気持ちを忘れずに日本を背負っているという自覚を持って行動することを目標にした。

### 2. 結果に対する評価

初戦vsケニアでは、初めての国際試合でスタメン入りすることができ、初アシスト、得点、ハットトリックを達成することができて良かった。ポーランド戦では世界のレベルを感じた。体が大きくて身長も高く、体当たりが強かった。ボールをキープすることが出来ず、取られることがほとんどでした。アメリカ戦ではリトリートを使って戦い0-1と1失点に抑える事が出来ましたが、なかなか攻める事ができず勝つことが出来なかった。次アメリカと試合することがあったらリトリートを使わずに正々堂々と戦って勝ちたいと思った。この3試合でたくさんを経験し、たくさん学ぶことがあってとても楽しかった。コロナ禍の中、ブラジルで3試合できたことは奇跡だと思う。16人全員揃って一緒にピッチに立って試合することが出来なくて、メダルが取れる可能性が高かったのに最後まで試合をすることが出来ずとても悔しい。

### 3. 今後の課題

まだまだ自分のプレーは世界に通用しないので、今大会で経験したことを糧に、普段の生活から何ができるか考えながらレベルアップしていきたい。特に、体当たりで負けてボールを取られる事が多くて悔しかったので、キープ力を上げたい。

## 選手 高橋 遥佳

### 1. 当初の目標（自己目標）

私にとっては、2回目の9年ぶりのデフリンピックでした。「9年前と同じ結果を残したくない！今回こそはメダルを取りたい！世界一になりたい！」という気持ちが強くありました。正直に言って9年前のレベルと今のレベルを比べると強くなったと言えます。今のチームは、強豪チームに所属した選手に強豪高校に入学した選手が何人かいます。サッカーの知識が深く知っている選手が増えてきました。今のチームなら世界に勝てる自信がありました。

### 2. 結果に対する評価

初戦のケニア戦は、12-0で勝利。2戦目のポーランド戦では2-5で敗戦。3戦目のアメリカは0-1で敗戦。4戦目のブラジルは棄権。3位決定戦も棄権。日本は4位という結果に対して、私はまず「棄権」が一番ショックと共にとても悔しい気持ちだった。ポーランド戦では、相手の体は大きいけれど日本はビビらずに体当たりでも負けなかった。体だけではなくスタミナにパスの質、攻守の作り方は負けなかった。5失点の原因は、プレスに行くタイミングが歩遅かったり誰をマークにするかなどの判断力が遅かった時、失敗の連続で失点したこと。まだまだ日本は失敗のカバーと判断力の速さが課題だと思った。また、アメリカはやはり技術が上手くサッカーをよく知っているチームだった。日本は、「リトリート」という作戦だったが、試合終了3分前に失点してしまった。でも、いい接戦だった。

### 3. 今後の課題

棄権という形で終わったが、前向きに人生の糧にしていきたい。来年はワールドカップまで、あと1年しかないなので、今以上に技術にフィジカル強化を頑張りたい。ワールドカップこそはメダルを取りたいと強く思っている。日本は世界に近づいてきたのでもっともっと頑張りたい。

## 選手 田中 恵

### 1. 当初の目標（自己目標）

世界一を目指す。世界のトップ3に入ること。チーム力を上げること。

### 2. 結果に対する評価

正直に、ただ悔しい。目の前にメダル……。メダルが届く位置にいたのにと、そんな思いだった。メダルが私の夢でもあった。目標である世界一になること、世界トップ3に入ることができなかった。でもチーム力を上げることだけは達成できたと

思う。フィジカル面で世界との差を感じた。また個々の技術が足りてなかったと思う。シュート力やパワーがやっぱり世界との差。フィジカル面をどうカバーするかで変わってくる。また技術面で個々のレベルを上げていくしかないと思う。でもチーム力を上げたことで、最後まで諦めずにプレーをすることができたと思う。仲間を信じる。自分を信じる。と。また優勝候補のアメリカ戦で前半に無失点で抑えることができたし、次の大会に繋がる試合だったと思う。チーム力は重要なので、これからももっと上げていきたい。

大会を通して、確実に世界と対等に戦えるところまでレベルが上がってきていると実感した。まだ課題はあるが、諦めずに個々のレベルを上げて目標に向かって合宿を積み重ねていきたい。

### 3. 今後の課題

レベル的には確実に上がっていると思うので、海外経験、個々のレベルを上げること、また合宿の実施回数を増やすことが重要だと考える。女子サッカーの人口が少ないので、今後のためにもデフサッカーを広め、育成に力を入れていく。

## 選手 宮城 実来

### 1. 当初の目標（自己目標）

デフサッカー女子日本代表として初の世界大会なので、デフリンピック日本団として選ばれるという目標から、世界ベスト3を狙いたいという気持ちがあった。それだけで満足せずフル出場、点を決める、アメリカと試合して勝利という気持ちもあった。

### 2. 結果に対する評価

予選残り1試合を残して3位決定戦を控えていたので納得のいかない結果で終えた。普段は1日寝ただけですべての記憶がないくらい覚えていないが、今回の大会は忘れたくて長く寝ても心に傷が残ってしまうほどのショックで今でも忘れることができなくなってしまった大会だと思う。だが、試合内容に関してはアメリカのプレーが気になっていたの、試合に負けてしまったけど悔しいより楽しい気持ちの方が勝り、初めて楽しいと思える試合だったなと思った。でもやっぱり試合してみないと楽しさに気づけなかっただろうし、今回で気持ちは変わってしまったが未来のために指導者として道を歩み始めたいと思う大会でした。

### 3. 今後の課題

今回は我慢して友達や家族、大学の授業をオンライン授業にしてもらうなど一番周りと接触する機会を少なくして大会に挑んだつもりでしたが、どんなに対策してもウイルスという点的には勝てないと感じました。今回の大会を通して2025年のデフリンピック開催にあたって今回のように予想外のハプニングが起きても対応できるようにもっと体調に気をつけながら過ごさないといけないと思いました。選手でもあるけど試合より自分の体調と周りの体調を見ながらいいチームを作る必要だと思いました。

## 選手 宮田 夏実

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・全試合フルスタメン出場&MVP獲得
- ・優勝、最低メダル獲得
- ・主将としてチームメイトと監督・スタッフのハイプ役を果たす
- ・一人一人と向き合い、仲間の意見を聞き、チームを良い方向にまとめる。
- ・自分の持てる力を120%発揮し、どんな状況であっても、仲間を鼓舞し姿勢を見せ続ける。

### 2. 結果に対する評価

- ・棄権するまでは、フルスタメン出場を果たす。
- ・棄権の話があった時に、チームをまとめることを第一優先し、自分で抱え込んでしまい、自分の気持ちとのバランスが取れなくなってしまった。今後は自分の気持ちと向き合いながら、(自分の気持ちを分析・言語化する)主将としても選手としても、泥臭くチームと向き合っていきたい。
- ・今までの積み重ねが現れた大会だった。絶対王者アメリカに過去は大差で負けたが、今大会は1失点に抑えるなど、日本デフサッカー女子の世界での立ち位置は大きく変わってきている。

### 3. 今後の課題

- ・個人として、初めて出場した9年前のデフリンピック比べて、緊張して周りが見えず空回りすることなく、いつも通り頭は冷静に気持ちは熱くプレーすることができた。しかし、一つ一つのプレーの意味を自分の中に落とし込めていないので、普段の練習から意識していきたい。
- ・誰よりも練習してプレー中で身体を張るなど、チームのために行動に移しチームを鼓舞し、時には周りに厳しいことを言えるようにしていきたい。

・チームとして、今まで以上に貪欲に結果を求め、戦う覚悟を持っていかないと、この先世界で戦っていく上で厳しいと思う。また、各々の基礎のレベルアップ、サッカーの理解、海外の選手と対等に渡り合えるフィジカルを高めていく必要がある。

選手 山口 彩芽

### 1. 当初の目標（自己目標）

サッカー女子は、9年ぶりのデフリンピック出場であり、前回大会の成績を上回ることかつ世界一を取ることを目標にしていた。また、日本でもコロナ禍という厳しい状況が続いているが、スポーツの力で多くの人々に何かを届けられる・与えられる側である私たちがデフリンピックでメダルを獲得することで、日本の方々に「希望」を与えられると考えていた。個人としても、試合に出場をし、足の速さとスタミナが武器であるFWの選手として攻守に渡りたり前線から沢山走り、得点に絡むことを目標としていた。

### 2. 結果に対する評価

サッカー女子は、5/3に初戦のケニア戦を12-0で勝利を収め、5/5のポーランド戦は2-5で敗戦した。また、5/7のアメリカ戦も0-1と敗戦した。残りのブラジル戦、3位決定戦、決勝戦を残したところで棄権が決定した。ブラジル戦を勝利で収めることができれば、3位決定戦に進出することができメダル獲得の可能性は十分にあったところでの棄権となりとても残念である。優勝候補であるアメリカ相手に後半のアディショナルタイムに入るまで0-0で抑えたことは大きな成果だと捉える。しかし、残り3分のところで一瞬の隙を狙われてしまったことは今後改善していくべき点である。個人としては、体調不良で初戦の試合から出場できず1試合も試合に出場することができなかった。

### 3. 今後の課題

コロナ禍という中での大会開催だからこそ、大会運営側と派遣団体の連携を密に取る必要があると感じた。今回、日本選手団内部でのコロナ感染拡大は大会運営側の杜撰さが露呈した結果だと考えている。日本選手団は感染対策を万全に行っていたが、このような結果になってしまったことはとても残念であった。しかし、本部が命を守るために棄権という判断を下したことは英断であると考えている。日本からの長時間の移動、食べ物や環境も大きく変わ

る中で、選手個人個人のコンディショニングの調整の意識を高めていくことが必要であると感じた。また、コロナ禍での開催だからこそ、メディカルスタッフの人員増幅が必要であったと考える。個人としては、コンディション不良で試合に出場できなかったこと。コンディションを整えることができなかったことが課題である。今回のデフリンピックでの反省を活かして普段の生活からアスリート意識をより高めて、トレーニングにも励んでいきたいと考える。

選手 大上 志穂子  
川畑 菜奈  
松川 容子

提出なし

## 柔道競技チーム

コーチ 小志田 憲一

### 1. 自己の役割とその評価

(柔道監督として)

- ・選手、スタッフを安全に引率し、無事に全員で帰国すること
- ・試合前の調整、準備をしっかりと行い、落ち着いて試合に臨ませること
- ・適切にアドバイスをを行い、全員に金メダルを獲得させること

(強化委員長として)

- ・国際デフ柔道連盟、その関係者と交流し関係を築くこと
- ・デフ柔道の国際大会運営に関する知識と経験を得ること

#### ○その評価

選手にメダルを獲得させてあげることが出来ず、大変申し訳なく思っている。選手は持てる力を出し切っており、私がしっかりしていれば、メダルは獲得出来たと考える。

今回出場した佐藤正樹(66kg級)と蒲生和麻(73kg級)の両名は、ベルサイユで行われた第1回デフ柔道選手権大会で決勝に進出し、ともに第2位となっている選手たちなので、最低でもメダルを獲得させることを目標としていた。佐藤選手は第1シードで、2回戦が初戦となった。相手は、長身のブラジル選手。佐藤選手は、背負投を軸に積極的に責めたが、懐が深くなかなかポイントに結びつかず、延長戦に入りもつれ込んだところで小内刈に入り勝負を決めた。準決勝となる3回戦では、体格に勝る



イラン選手の内股を受けきれずに、「技あり」を奪われた。映像確認が行われたほど微妙だったが、組み負けて飛ばされていたので致し方ないところ。反撃に出るも、相手に力を伝えることができず、時間となって敗退。3位決定戦では、変則的な組み方をしてくるウクライナの選手に苦戦していた。立ち姿勢での関節技を何度となく施す相手に、審判が最後の指導（「反則負け」）を与えることが出来ていれば、「反則勝ち」であったと思う。延長戦で、腕挫十字固を極められそうになったが、どうにか凌ぎ、その後、変則的な組み方を警戒しているところに逆の一本背負投で「技あり」を奪われて敗退し5位となった。私が試合前に対策を練って、適切に指示が出来ていれば勝利出来ていたように思う。

蒲生選手も第2シードで初戦は2回戦でした。力強いキルギスタンの選手に組み勝って、左の出足払から横四方固に抑え込んで合せ技で「一本」。やや強引に左足で相手の右足を外から払ったために、痛めていた膝の怪我を悪化させてしまった。準決勝では、序盤、低い姿勢の相手に対して、痛めた足をかばいながら動いていたが組み勝っていたと思う。しかし、一瞬、組み手が変わったところで、相手が倒れ込みながら低い右体落に入ってきたところを耐えきれずに「技あり」を奪われた。残り時間は十分あったので、落ち着いて攻めれば挽回出来る展開だったが、焦りから組み手や攻めが単調になっていたように思う。私が適切に、気持ちを切り替えて落ち着いて攻めるように指示を出していれば、結果も変わっていたと思う。その後、組み手不十分のままに、足を出すだけの大外刈をかけたところを深く戻されて「一本」。左膝の状態は思わしくなく、3位決定戦を棄権することも考えたが、相手はベルサイユの決勝で負けているウクライナの選手で、どうしてもリベンジしてメダルを獲得したいという気持ちが痛みを上回っていた様子。前回の対戦から、相手は受けが強く、強引に投技に入れば返されることになるが、試合が長くなれば、膝が限界を超える恐れもあったので、引き出すような内股で勝負することにした。大きく崩れながら寝技の展開になって相手の攻めを耐えたときに、一瞬動けなくなったので、棄権を申し出ようとしたが、本人が「大丈夫、出来る」とのことで続行。しかしながら最後は踏ん張りが利かず、押し込まれて小外掛でポイントを奪われて敗退、5位となった。堅くなっていた初戦、序盤で相手の技を不用意に受けてしまった準決勝、ともに試合前に指示を徹底出来ていれば、勝ちに繋がっていたかと思うと、大変申し訳なく思う。

第1回デフ柔道世界選手権大会以降、体格や体力でまさる外国人選手に対して、組み手を厳しく、体

さばきを利用して、相手の攻めを受け流しながら、我慢して自分の技に繋げる柔道を両選手に求めてきた。コロナ禍で集まることが出来ず、ただ詰め込むだけになっていたことは反省しなければならない。限られた時間、多くの制約の中、必要なことを深く理解させることが出来なかったことも反省しなければならない。動きや技を自分のモノに出来ていなかったため、試合の重要な場面で、適切な対応が出来ていなかったように思う。

また、試合当日にベストコンディションとするために、現地入りしてからの調整は順調であった。ただ、宿泊ホテルではコロナ染症者、濃厚接触者が同じフロアに居たため、要らぬストレスを感じた。さらには、試合当日のバスの運転手が大会会場を知らず、迷ったあげく、私たちのナビで試合開始時間に会場に到着した。幸い、停電と大会運営の手際の悪さがあって、試合開始時間が遅くなり、かつシードされていたために、アップは出来たが、精神的にはかなり不安定だった。ここは、自らも深く反省しているが、そもそも試合会場から1～2時間のバス移動を受け入れたことを悔やんだ。

## 2. 今後の課題

- ・選手には、試合経験を積むことで、反則やポイントなどの状況に応じて、落ち着いて試合を展開出来るように指導したい。また、外国人選手の柔道に慣れること、特に中央アジア、ロシア系の変形、及び長身の懐の深い選手に対応するための技術を身につけなければならない。例えば、体格や力で勝っている選手に対しては、組み手を徹底して、相手の技をしっかりと受け止める防御方法を身につけなければならない。また、防御から攻撃に転じる技術も合わせて研究する必要があると考えます。
- ・根本的なことではあるが、個人の柔道技術のレベルアップを図らなければならない。例えば、それぞれの得意技については、基本に立ち返り、組み手、崩し、重心移動、体さばきなどを見直して、反復練習を行って欲しい。また、相手の状況に合わせた体さばきや組み手を研究し、試合で使える技にしてゆく必要がある。佐藤選手には、自分の力を相手にしっかりと伝えるための体さばきや、体での崩しを修得して欲しい。蒲生選手には、得意技である内股が、安定せず、返される危険があるので、確実に一本を取れる技として、基本から作り上げてほしい。また、その内股を生かす為に、体さばき、組み方や、前後で組み合わせる足技を研究する必要があると考える。

私たち、指導者、スタッフは、選手たちが安心してそれぞれの課題に取り組めるように、一所懸命にサポートして行きたい。

トレーナー 麓 康次郎

## 1. 自己の役割とその評価

### 自己の役割について

①メディカルスタッフとして、試合において選手がパフォーマンスを発揮できる環境づくり

②柔道競技の現地での窓口的な役割

### ①について

国内の事前練習時に選手が膝にけがを負ってしまった。担当医と連携を取り、また、担当医から現地で選手団の医師である塩田先生にご連絡いただき、スムーズに選手の診察、治療を行えた。また、現地までの旅程と時差による疲労回復と試合に向けた体調づくりに関しても、本部スタッフの方々のサポートにより概ね順調に行えた。

試合当日、バスの運転手が道を間違えるというハプニングがあり、現場にいるメキシコのトレーナーから地図を送ってもらい、小志田監督がナビをして現地に到着した。試合前に2時間以上もバスに揺られ、9時試合開始の会場に15分ほど遅刻をして到着。到底、十分なウォーミングアップを行えずに試合に臨むこととなった。選手のメンタルや試合に向かう体調づくりは不十分となったと言わざるを得ない。

### ②について

今回、デフリンピック初参加だったが、現地に行っただけの自分の役割がつかめていない場面が多々あった。特に、「試合までの練習会場の確保について、自ら現地の大会本部（スクエア）に行き、担当者を探して練習時間と会場の予約を取る。」というシステムは、自分自身の下調べ不足で上手く調整ができず、ご迷惑をおかけした。また、バスの予約時間などについても、前述、練習時間と場所が把握できていないところから上手く調整ができず、翌日の予定を選手に伝えるのが遅くなり、ご迷惑をおかけした。

次回、大会に向けてはしっかりと事前の打ち合わせを行い、現地で不明な点が無いように準備をしたいと思う。

## 2. 今後の課題

### ①柔道選手のメダル獲得に向けて（実務）

選手の怪我の予防と治療を積極的に平時から行いたいと思う。また、対外国人選手対策として柔道に必要なフィジカル面の強化をトレーナーとしてしっかりと行う。

### ②大会時の環境づくり

前述の通り、練習場の手配からバスの移動についても決して選手が最高のパフォーマンスを発揮できる状況で試合当日を迎えることができる環境ではなかった。コロナ禍の特殊な環境であったとはいえ、「朝食の際に試合のない選手は朝食を食べないように。（密を避けるため）」というアナウンスが朝食会場で行われたりした。当日のバスの出発時間とそのバスに乗る移動人数を考慮すれば、前日から何らかの措置はとれたはずと思う。その他にも、「本部」—「各スポーツ協会」—「選手やスタッフ」間の連絡、共有の遅さや、不足のために混乱する場面に多々遭遇した。次回大会に向けては今大会の反省点を洗い出し、アスリートファーストで大会が進むように事前の準備と共有事項の徹底を図り、改善できる点は改善していきたいと感じた。

### ③次代を担える選手の育成および開発

柔道競技においては、世界に通用する選手の人材開発、育成が急務と思われる。そのためにも、現デフ柔道の強化を行い、普及活動を通じて人材を育成できる環境を整えたいと考える。

最後に、コロナ禍の困難な状況の中、お力添えをいただいた大会本部の皆様、柔道協会の皆様、関わってくださったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

選手 蒲生 和麻

## 1. 当初の目標（自己目標）

①圧倒的な強さでオール1本勝ちで金メダルを獲得すること。②監督やトレーナー、選手とコミュニケーションを密にし、信頼関係を築きあげチーム一丸となって試合に望むこと。③慣れない環境において試合までの体調および体重をしっかり管理し、万全な状態で試合に臨めるようにすること。

## 2. 結果に対する評価

結果としては準決勝敗退、3位決定戦敗退だった。金メダルを狙っていただけに非常に厳しい結果になった。この結果は次回の国際大会での組み合わせにも影響があるので、1回戦からシード持ちの相手と戦う可能性がある。さらなる努力をし、準備をしていかなければならないと感じた。

## 3. 今後の課題

今大会前の練習時に左膝前十字靭帯断裂してしまったため、試合では思うように動けなかったため、今後の練習においては身体の弱い部位などはテーピ

ングをするなど自己管理を徹底する。

全く慣れない環境下での生活がかなり大変だったので、モチベーション維持に苦勞した。ストレスを感じる事があったら周りに相談や打ち明けることでストレスを軽減していきたい。

代表としてもっと自覚や責任を感じるべきだった。監督やトレーナーにメダルをかけられないまま、帰国することになり大変申し訳ない気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れずに次の練習からは常に責任と自覚を持って練習に望んでいきたい。

選手 佐藤 正樹

### 1. 当初の目標（自己目標）

今大会の前年2021年にフランスで開催された世界ろう者柔道選手権大会で初出場ながらも準優勝という結果を出し、現実的にデフリンピックで「金メダル」を狙えると目標にしていた。

### 2. 結果に対する評価

私は柔道競技の-66キログ級の選手で、初めてデフリンピックに出場させていただき、長年、柔道が続けてきたことが、きこえない選手の最高舞台であるデフリンピック出場という形で報われ、嬉しい思いだった。また柔道は、日本が生んだ伝統ある武道であり、柔道の基本精神は、「礼に始まり、礼に終わる」という相手に敬意を表する為、心を込めて礼をすることであり、柔道の素晴らしさを体現しようと心掛けて臨んだ。

得意な「粘り強い柔道」を発揮して勝ち進んだが、準決勝、3位決定戦では、外国人選手ならばの変則的な柔道に対応しきれずに敗退してしまい、5位という結果とあと一步でメダル獲得に届かなかったことが悔しく、デフリンピックでメダル獲得することの難しさを痛感させられた。

それでも、柔道の基本精神である「礼に始まり、礼に終わる」を実践し、周りから「素晴らしかった、美しかった」と言ってもらい、柔道の素晴らしさを体現することができたことや、試合後に対戦相手と健闘を称え合い、お互いに仲間として認めあえたときに嬉しい瞬間だった。

### 3. 今後の課題

変則的な柔道する外国人選手に対しての対策や実戦の積み重ねや、確実に技を決めるための技術向上、力負けないフィジカル強化をして、次の大会ではリベンジを果たす。

## 空手競技チーム

監督 高橋 朋子

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

#### 【選手の選考について】

本来であれば、日本ろう空手道協会が主催して選考会を行う予定が、当初の予定だった外部支援が困難だったことにより、日本選手団エントリー締め切りまで延び延びになり、結果的に選考会の実施はされなかった。

全日本ろうあ連盟スポーツ委員会による指針「選手推薦基準」では、アジア選手権大会ベスト2および世界選手権大会ベスト4の選手でしたが、サムスンデフリンピック以降、アジア選手権大会による空手競技は実施されず、また2021年10月にイランで開催された第1回世界ろう者空手道選手権大会では、先に述べたように日本ろう空手道協会による選考会および強化事業が困難であったことから出場を辞退したため、指針に沿った選考基準では適用不可となった。そこで、協力関係にある全日本ろう者空手道連盟（以下、「全日ろう空連」という）の推薦で、派遣を決定した。推薦基準は下記の通り。

・公認初段以上であること（公認とは公益財団法人全日本空手道連盟が公認している資格である）※いわゆる黒帯を指し、きちんとした証明を示すことができることが必須条件

- ・全日ろう空連が主催する強化合宿に参加していること
- ・全日ろう空連が主催するJDKF.空手道競技大会で上位入賞していること
- ・出場年齢条件をクリアしている者

※空手道競技の場合の出場年齢制限について

・形競技 16歳以上

・組手競技 18歳以上

スタッフにおいても、今回は監督を含むスタッフは最低3名は必要だと判断し、これまで全日ろう空連内で行ってきた育成・強化事業及び普及事業に携わっている役員の中から、それぞれ条件に該当する者をスタッフとして派遣することに決定した。

#### 【チーム体制の各スタッフの役割】

チーム体制：監督1名、スタッフ2名

高橋朋子・・・監督

チームに関する全ての責任者、選手の強化計画と指導、監督席着任等の選手帯同、TD会議出席

山崎由美子・・・スタッフ

監督の補佐的な立ち位置、チーム全体の窓口担当、調書とりまとめと提出、移動バス手配、競技ス

ケジュール確認、TD会議出席、国際手話通訳として選手の付き添い、強化合宿の運営スタッフ

海老澤あきつ・・・スタッフ

トレーナー的な立ち位置、チームの広報担当、会計、選手の付き添いやケア、国際手話通訳として選手の付き添い、強化合宿の運営スタッフ

このほかに、現地到着後の状況を顧みたと監督・スタッフ全員が協力して、チーム全体の昼食や補食の買い出し、毎日ご飯の炊き出し、選手への配膳なども行った。

【競技規則】(デフリンピックの情報保障ルール含む)

空手競技では、WKFのルールに準じていた。日本で同年4月から適用された「わかれて-つづけて」の新ルールもすでに適用されていたので、大きな混乱はなかった。審判員については、審判長(ヘッドレフェリー)は国際審判員が起用されており、ほとんどが南米各国から集めた審判員で構成されていた。日本で取れる技が通用しないこともあり、現地入りしてから試合視察で分析・戦略を固め、選手に適切な指示を出す事で勝敗を左右する現場でもあった。また、今回のTD会議にてデフリンピック公式ルールとして「形名の申告を手話で申告することも可」が正式に認められた。デフリンピック史上初、日本代表選手が初めて手話による形名申告を成し遂げた。競技マットはWKF公認よりひと回り小さく、厚さも3cm以上はあった。このことをTDに確認したところ、デフリンピックマークが貼られることが優先事項であることと、マットの手配はSLOに委託しているとのこと。視覚的情報保障では、コートの上に照明器具が装備されており、ステージで使われているような照明によって、会場全体が「赤」「青」「白」に発光され、誰にも分かりやすい演出だった。写真や動画撮影も見映える媒体になっており、ベストな方法だと感じた。

## 2. 総評

本大会の空手競技のルールのポイント

形競技

- ・採点方式(審判7名のうち上位2名・下位2名の点数を排除した合計点数をスコア(得点)とする)

組手競技

- ・トーナメント方式
- ・決勝戦のみVR(ビデオレビュー)方式導入
- ・監督ボックス(ボックスから試合中に指示を出すことが可)

【成績一覧】

日本代表は下記の通り好成績を残すことができた。

※表記(氏名)(ラウンド)(形名)スコア

### ◆個人形競技

北村 陽選手 3位

第1ラウンド:アーナン23.36点(第1G 1位)

第2ラウンド:スーパーリンペイ23.16点(第1G 2位)

3位決定戦:パープレーン23.36点勝利

森 健司選手 3位

第1ラウンド:ニーパイボ23.02点(第2G 1位)

第2ラウンド:五十四歩22.48点(第2G 2位)

3位決定戦:スーパーリンペイ23.42点勝利

小倉 涼選手 優勝

第1ラウンド:クルルンファ22.54点(第1G 1位)

第2ラウンド:アーナン23.52点(第1G 1位)

決勝戦:スーパーリンペイ23.94勝利

湯澤 葵選手 予選敗退

第1ラウンド:アーナン20.2点(第2G 6位)

所感:

男子形においては、スコアが高い選手は24以上を出していた。テクニカルポイントは最高で17.22、アスレチックポイントは最高で7.26で、ウクライナの選手が金メダルとなった。技術面と身体能力面双方の強化をしないと、次の大会のメダル獲得は見込みが薄いと感じた。

女子形においては、湯澤選手の敗退はマットの隙間に躓き、動きがぶれたため、大きく減点されたのが原因だった。マットに左右されない強い体幹と足腰が求められるシーンでもあった。女子選手トータルで見るとスコアが高い選手は3位のチェコの24.26でした。金メダルの小倉選手の最高スコアは23.94とチェコ選手とは大きく差がついている。今回は組み合わせの運もあって小倉選手はチェコの選手と当たることはなく決勝まで進出できたが、今後は男子同様、形競技力のレベル底上げをしないと次の大会のメダルは危ういと感じている。

全体的にスコアの高い選手は、技の極め、精度、流動性が的確であり、立ち方にブレがなく、総合として魅了される演武が出来ていた。より高いスコアを取るためには、採点方式の明確なルールを熟知していることと、自分自身の最高点数を上げるために採点方式を取っている大会に多く出場する事が大事だと思った。

### ◆個人組手競技

男子-60kg

北村 陽選手 5位

1回戦 9-3 対ブラジル

2回戦 2-10 対イラン

敗者復活戦 4-6 対イタリア

女子-61kg

小倉 涼選手 優勝

1回戦 シード

2回戦 5-0 対ギリシャ  
決勝戦 2-0 対トルコ  
女子-55kg  
湯澤 葵選手 3位  
1回戦 0-10 対イラン  
敗者復活戦 6-2 対トルコ

所感：

男子組手は、全体的に上段蹴りを得意とする選手が多く、また相手を倒しての突きも多く見られた。それだけではなく、全体において競技時間3分間に耐えられるスタミナの不足が原因で敗退する選手もいた。国内の大会で競技時間3分ルールを実施している大会は、全日本選手権大会や学連主催の大会くらいしかない。きこえない選手が出場する大会での競技時間ルールは通常1分半～2分のため、普段の稽古からインターバル短めの連続の3分間の競技に耐えられる体力強化と慣れを身につけることが必要不可欠ということを再認識した。

女子組手も同様で、上段蹴りで点数を取る選手がほとんどであり、突きも力強く、パワーのある技を連続で攻撃するシーンが目立った。JKFルールと違うのは、顔面に当たる突きが強いほど、副審の旗が上がるところでした。湯澤選手の1回戦では、上段突きや中段突きを何度も決めたにもかかわらず、副審の旗は1本しか上がり、攻撃を続けても最終的に旗がもらえず、相手からの上段蹴りを受けて敗退した。敗者復活戦では、湯澤選手に「引き手を引いた華麗な突きではなく、顔に大きく接触する突きを意識して」とアドバイスを出した。作戦通り、顔面に思いきり突きが当たり、副審の旗が全て上がり、上段突き有効を先取した。湯澤選手に自信が付いたことで、気持ちも強くなり、得意の上段蹴りや上段突きで副審の旗が上がり、勝利した。

小倉選手の決勝戦の対トルコ戦ではお互いが緊張している様子が見られ、一瞬の油断を許さない状態だった。どちらも攻められずどちらも踏み切れず、どちらも一点先取が取れず睨み合いが続く中、小倉選手の突きが決まったとおもいきや、副審の旗が上がり、咄嗟に私(監督)からVR(ビデオレビュー)カードを出しました。そしてビデオ判定の結果、「YES」カードが出され、今の攻撃は有効であると認められた。小倉選手に有効の1ポイントが入ったことで試合のリズムが変わり、流れが小倉選手に傾いてきました。次いで小倉選手が得意とする上段突きが決まり、残り10秒をもかわしきって金メダル獲得となった。

次の大会に向けて、様々なスタイルで攻めるスキル向上やWKFルールの熟知が不可欠であり、選手自身においては、柔軟性、瞬発力、スタミナ、体幹、

メンタルなどを強化しないとメダルは遠のいてしまうと感じた。同時に監督のVRを用いた戦略や咄嗟の判断も勝利につながる重要なポイントであることを、身をもって実感した。

情報保障面による申合事項は以下の通り。

○審判員による合図

「勝負はじめ」：「続けてはじめ」のジェスチャーで実施。

「ヤメ」：コートの上に設営された照明が赤く点灯される。

「あとしばらく」：デフリンピックでは「残り10秒」で「ヤメ」を出し、選手を元の位置に立たせ、「タイム・10」のサインで知らせる。

○形名の申告

- ・声による申告をしてから形演武を開始
  - ・申告せずに形演武を開始
  - ・手話による申告をしてから形演武を開始(※)
- ※今回のTD会議で、日本代表チームからの提案により、初めて「手話による形名申告」が認められた。これによって空手の競技規則に追加された。

【TD会議】

TD会議は国際手話で進行し、きこえる監督やコーチは、国際手話を読み取る英語音声による言語通訳アプリなどを各自でスマホで聞き取っていた。TD会議では、国際手話が出来よう者の発言が有効だったり、きこえる人が審判員や競技役員に意見を言い始めるところから音声英語のみで進められたりと、各競技でまちまちのようでしたが、空手競技はきこえる人の発言は例外なくNGであり、国際手話が出来よう者の発言のみ認められていた。このルールにはデフリンピックならではの公平性があり、自ら国際手話で進行したブラジルろう者TDのHeron氏を称賛してあげたい。

国際手話が出来よう山崎スタッフを通して、日本代表としての意見や要望を述べた。特に「手話による形名申告」の提案では、反対意見も出たが、台北やイランの賛同意見も出され、結果的に3択による申告で全ての賛同を得ることができた。分かりやすいことに、ウクライナやトルコ、イランは声による申告派、台北やインド、マレーシアは手話による申告派と、同じアジアでも西と東で、意見が分かれていた。ですが、競技が終われば、同じ空手を愛する空手家であり、対戦相手をお互いに敬うスポーツマンシップにより、友好的な交流が出来た。

【全体に対する所感】

実績を残せたのは喜ばしいが、次の国際大会及びデフリンピックが正念場だと考えられる。なぜならば、今回の参加国は過去最大であったにもかかわらず

ず、参加人数は前回大会より減っており、かつ、開催地の特性柄、近隣国でもある南米の各国から参加が新たにあったものの参加人数はそれぞれの国の予算関係もあると思われるが、最小1名という国が多かった。また、今回は強豪国であったロシア、ベラルーシの不在かつウクライナやトルコ、イランからの参加選手人数が前回より減っていた。その中で日本は正直にいうと、過去大会の実績から各国からはノーマークかつ眼中になかったと思う。しかし、TD会議及び競技1日目と2日目の試合を終えた後、各国の監督及びスタッフ達から私のところに挨拶に来られ、監督としての手腕を賞賛された。

「監督としての試合中における指示、判断力が的確で恐れ入る」「日本に若い選手はもっといるのか。」「次にまた会えるのを楽しみにしている」と称賛の声をいただいた。次回から、日本はマークされ、徹底的に情報を収集されて分析されることが想定される。だからこそ次が正念場であり、日本も更なるレベルアップを図るための強化計画を練る必要がある。【今後及び課題】

先ほども記載した通り、世界におけるろう空手の競技レベルの底上げはますます進化されるだろうと、危機感を持っている。世界中の空手競技はまだまだ発展途上であり、ここからが真のスタートです。今回で感じた重要なポイントをいくつか挙げる。

「礼に始まり礼に終わる」

空手道は「礼に始まり礼に終わる」とも言われている。道着を着ている時のみならず、普段の日常生活においても礼儀の心構えが大事である。朝の「おはよう」でチーム全体の活気が高まり、就寝前の「お疲れ様」でお互いを称え合い、日を重ねるごとにチームワークが高まり、結果的に勝利につながる。特定の人にだけ挨拶をすればいいのではなく、日本選手団の他競技チームや、本部スタッフ、メディカルチームスタッフにも積極的に挨拶をすることで、日本選手団の活気も高まる。これは日本代表として最低限身につけるべき習慣であり、常にその心構えが出来る努力が必要不可欠である。

「阿吽の呼吸の掛け合い」

次に、帯同スタッフは次回以降も国際手話ができてかつ手話によるコミュニケーションに長けているのはもちろんのこと、空手競技のルールに精通していることが最低限の前提条件となる。また、監督とスタッフはいかなる時も「阿吽の呼吸」の掛け合いが大事であり、チーム全体のパフォーマンスをあげるに重要となる。

「余るくらい用意する」

今回の開催地が日本の反対側の国かつ南米ということから徹底した事前準備を行い、余るくらい多く

の日本食、薬、補食などを持っていった。結果的に功を奏し、選手たちの栄養補給、疲労回復に繋がられただけでなく最終的には余った薬、虫除けスプレー、日本食などを本部・メディカルチームに寄付し、他競技団体に役立ててもらおう等貢献することもできた。次大会以降も私の座右の銘「余るくらい用意する」を徹底するべきである。ここからは要望にもなるが今後の改善事項として記載する。

【AED】

今回の空手チームにはきこえるスタッフはいなかった。AEDが各競技団体に貸与されたが、AEDは音声ガイドに従っての操作となるため万が一の時に、きこえないスタッフが操作できるのかという疑問があった。AEDにはイラストと文字が表示されるタイプもあるので、次回のデフリンピック以降は、きこえないスタッフも操作ができるように導入するのが望ましいと思う。

最後になりますが、今大会出場にあたり、応援いただいたみなさまには厚くお礼を申し上げます。様々な面において支えてくださった多くの方のみなさまの力なしには今回の成果を日本に持ち帰れることはできなかったと思う。本当にありがとうございました。

スタッフ 山崎 由美子

## 1. 自己の役割とその評価

【役割】

- ・事務局としての業務  
候補選手推薦エントリー、オンライン説明会出席、調書とりまとめと提出、連絡窓口、移動バス手配、競技スケジュール確認等
- ・コーチとしての業務  
強化合宿運営、監督サポートや選手フォロー、国際手話通訳、昼食や補食の買い出しや炊き出し等

【事前準備】

日本代表選手団として派遣決定が正式に発表されたのが開催の2ヶ月前であり、それから急テンポで事務局としての業務を遂行した。空手チームの場合、NF団体である日本ろう空手道協会からの連絡指示を受け、協力関係にある全日ろう空連が取りまとめと提出を行った。他の競技団体とは違ったイレギュラーな体制の中でのタイトスケジュールであったため、時間がとても足りなく、本業の昼休みや土日祝日返上と睡眠時間を削らないと、間に合わない状況だった。

今回はコロナの影響で、これまでとは異なるケー

スだと帯同経験のあるスタッフから伺っており、自分は初めての参加なので、これまでの海外旅行や世界ろう青年キャンプ・世界ろう者会議に参加した経験と、コロナ禍の中で開催したJDKF.空手道競技大会の運営で積み重ねた経験、そしてスポーツ要素を加えた知識をもって、出来る限りの情報を集めて準備をした。スタッフ同士のミーティングを何度も重ね、各自が持つ知識や情報を共有しあい、それを有意義に活用出来たのが、今回の結果につながったと考えている。

#### 【大会期間中】

本部とメディカルチーム、輸送チームのそれぞれのグループLINEの窓口となって連絡を取り合い、空手チームへの伝達と情報共有を行った。コロナ対策のために各部屋1人ずつだったり、部屋での自粛期間でも、LINEでの連絡や選手の健康状態チェックが欠かされなかったため、アクレカードと一緒に渡されたSIMが役に立った。昼食を各競技団体に用意する必要があり、日本からトラベルクッカーを持参し、お米の炊き出しや即席麺、お餅などで食事を賄った。慣れない海外環境の中、おにぎりは食べ慣れているものなので、選手のメンタル面やコンディション面で効果があった。補食は日本から持参したポカリスエットやアミノプロテイン・アミノバイタル等を選手に配布し、疲労回復に繋がった。これらは現地では購入不可のため、多めに持参したが、過酷なバス移動やスケジュールで疲労したスタッフも服用し、エネルギーチャージに役立った。

競技場は観覧席とコート、招集エリアが近く、移動が楽だった。招集は国際審判員が国名ゼッケンを目印にして、選手の肩をたたいて招集するやり方だった。競技ルールはWKF（世界空手連盟）と全く同じで、競技の進行は概ね理解していたが、当日になって変更された競技スケジュールが国際審判員に伝わっていなかったのが原因で、きこえる監督陣と国際審判員の音声による話し合いがあり、国際手話通訳がその場にいなかったため、きこえない監督・選手たちにその情報が入らず、情報格差が生じた。空手の会場は手話通訳者が1名、国際手話通訳者も1名しかおらず、デフリンピックでも手話通訳不足の課題があると感じた。

ドーピングでは決勝戦で金メダルとなった小倉選手が対象となり、試合終了後にすぐ呼び出され、自分は国際手話通訳として付き添った。しかし検査に必要な量に満たなかったため、再検査することになり、表彰式直前に尿意を感じたところで、さきほどのルームで対応し、表彰式のために途中で抜け出した。表彰式後に重要事項確認と署名のために戻る必要があったが、自分はインタビュー対応に追われた

ため、もう1人のスタッフが国際手話通訳として付添った。こんな時は、スタッフ全員が国際手話が出来るとお互いのフォローや交代が出来るので、業務の遂行や連携がスムーズに出来ると考えさせられた。

## 2. 今後の課題

### 【大会を終えて】

今回のデフリンピック派遣は、ろう空手道の発展向上および競技レベルの底上げや選手強化事業に必要なデータ・要素を収集・分析できるチャンスでもあった。これらを元に今後の課題をあげたい。

#### ・監督の選考基準

他の競技団体や他国の監督はほとんどがきこえる人でしたが、デフリンピックではろう者が主体性を持つものであり、監督もきこえない人が望ましいと考える。そのためにはろう者が監督レベルの資格を取得できるような学習環境・支援環境を国内で整備することが最大の課題だと考える。

#### ・帯同スタッフの選考基準

空手競技に精通した者であり、かつ国際手話ができる事が最低条件だと考える。

#### ・選手の選考基準

過去の成績や技術レベルのみならず、強化合宿やMTGへの積極的参加や、選手個人の人間性・協調性・社会性（道徳性）等、技術的レベル、身体的レベル、精神的レベル等総合的に判断した上で、推薦すべきだと考える。

#### ・選手ファーストへの理解促進

競技団体はもちろん、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会やメディカルチーム、コーチやスタッフの「選手ファースト」への理解が大事であり、また選手が競技にベストコンディションで集中できるためには、前者のサポートが不可欠であることを、選手自身に理解してもらう必要がある。相互尊重コミュニケーションによって、試合の結果に大きく影響されることを、今回の経験で実感した。

#### ・個人競技から支え合い全員で戦う競技へ

空手競技は個人で戦う武道だが、デフリンピックでは、選手同士、選手と監督同士、選手とスタッフ同士、いわゆる空手チーム全体が一体となって支え合い、全員で戦う競技であるべきだと考えている。そのためには先に述べた「相互尊重コミュニケーション」を鍛えるための取り組みを強化合宿のみならず、次世代アスリート育成事業等でも実施していきたいと考えている。

## 1. 自己の役割とその評価

### 【役割】

チームの広報担当、会計、選手の付き添いやケア、国際手話通訳として選手の付き添い、トレーナー的な立ち位置

#### a. 徹底した情報収集及び予測からなる事前準備

他競技ではあるが、過去デフリンピックや世界大会のスタッフとして帯同した経験とこれまでの南米への海外旅行の経験と情報を惜しみなくスタッフ内に提供し、共有しあった。ただ、今回は、過去国際大会の帯同スタッフとしてのケースとは違う箇所が3点あった。

- ①選手ほぼ全員が初海外かつ長距離フライト未経験
- ②コロナ禍という今までにない緊迫した状況
- ③全日ろう空連として協力関係にあるNF団体より指示連絡をうけてから情報を把握したりと、他の競技団体とは違ったイレギュラーな体制であった

上記の点を踏まえて怠りなくこまめな情報のチェックを行い、いかなる状況にも臨機応変に対応できるように常にアンテナを張った。そして早朝、深夜、土日祝日返上したりと、時間を工夫して創出してスタッフ同士のミーティングを数多く行いながら、選手に事前準備するべきリストや情報を記載した資料を作成して共有した。また都度、最新版に更新して共有していくことも行った。それに併せてコロナ禍の中で実施したJDKF.空手道競技大会の運営、強化合宿運営での経験と各自スタッフが持つ知識を持ち寄ってこまめに共有した結果、相乗効果が生まれたことをあらゆる場面においてそれを実感することができた。ひいては今回の様々な成果に繋がることが出来たのではないかと考えている。

#### b. 広報

今回は複数のSNSをメインに活用してアピールするというプランを練りに練ってスタッフ内で共有しあった上で遂行した。今大会では空手競技のライブ中継はほぼなく、日本から応援いただいている方々に少しでも状況を届けるために複数のSNSそれぞれの特性を生かしてスマートフォン、タブレット機器を駆使しながらリアルタイムで選手の状況が見えるようにした。かなり好評だったようでSNSでの伝達の仕方のプランニング戦略の重要性を改めて実感した時でもあった。また、これらを遂行するために必要な電波として今回提供されたSIMが大きく役立った。ただ一つ挙げるとしたらSNSは多様化してきており、公開掲載の判断基準が難しい部

分があった。ネットリテラシーについて全体の競技の認識を統一させる必要があると改めて感じた。

#### c. ドーピングにて国際手話通訳として選手の付き添い

2日目の組手決勝戦で金メダル獲得の小倉選手が試合後にすぐ「ドーピング対象」と担当から通告され、もう一人のスタッフをメインに私も国際手話通訳サポートとして付き添った。検査に必要な量を満たせなかった時は再検査を受けるために水分を多く摂るように促した。それ以降は自分は、他の業務遂行中で抜け出せなかったが、もう一人のスタッフが付き添った。そして、最後の重要要項確認と署名のために戻る必要があったときは私が付き添い、無事に終えることができた。このドーピング検査から考えさせられた点が2点ある。

- ①今回はスタッフ全員が国際手話ができてかつ、知識を習得していた。その知識をしっかりと事前に共有しており、誰が同行しても問題ないようにと徹底した下準備とお互いのフォローが出来る意思疎通が出来る関係性が功を奏した。
- ②最後の最終チェックでは如何なる時でも説明して資料を出すことができるようにと、薬の成分表リストの英訳版をあらかじめ用意し、常に持ち歩いていたのが自信にもつながって選手のサポートをしつつ、冷静に対応ができたのでやはりここでも徹底した準備の必要性を感じた。

## 2. 今後の課題

### 【大会を終えて】

今回の最大の収穫は何と言ってもろう空手道の将来にかかっている最大の鍵、「形名の申告を手話で」というのが公式の場で認められたことではないだろうか。「形名の申告を声でしなければならない」という気がかりを気にすることなく、演武に集中することができると考えられる。この成果をあげた監督及びTD会議に参加したスタッフに拍手を送りたい。また今回の実績をあげたことから見ても、伝統派空手道の知識に長けていて、かつ指導経験が豊富、そしてきこえない監督であり、それを支えるスタッフの重要性を再認識しました。今後もそういう体制が望ましいと考える。

薬の成分の英訳用紙の用意については、あらかじめ教えていただいたリンクはかなり重宝した。しかし、英訳成分表が記載されていないものもあり、そこは他のリンク等で自分で調べたため、かなり大変だった。今回のドーピング対応ではしっかり揃えたことが自信につながったので、この経験を次回以降のスタッフや代表選手たちにもきちんと資料の形で



引き継ぐ。

最後に空手チームが参加するにあたって諸々サポートいただいた方々及び応援くださっているみなさまに心より感謝します。本当にありがとうございました。

## 選手 北村 陽

### 1. 当初の目標（自己目標）

今大会が世界大会初挑戦であり、自分の力がどこまで世界に通用するのか試したいという気持ちが大きかった。形、組手の二種目で出場するにあたり、自分は大学時代は形選手であり、得意分野の形では優勝、組手では三位以上を目標に設定した。

### 2. 結果に対する評価

形は3位、組手は5位という結果に終わった。形は第一ラウンドを全体で1位通過し、自分の実力は世界に通用するという自信になった。しかし第二ラウンドでは勝ちを意識しすぎたのか、肩に力が入った演武となった。優勝したウクライナの人と0.06点という僅差で決勝進出を逃し、大一番で実力を発揮しきれなかった自分の不甲斐なさが悔やまれる。3位決定戦では、自分のもてる技術を出し切り最高得点を更新しての完勝だったが、それでも海外勢に比べてパワーが物足りないという課題が残った。

組手は1,2回戦、3位決定戦までトーナメントの組み合わせ的にインターバルが短く、連戦だった。そのため3位決定戦ではスタミナ面で苦しい戦いとなった。また自分はカウンター主体の組手中心だが、ビハインドの展開で攻めのパターンが少なく今後の課題となった。それでも日本とは違った海外勢の組手のリズムや攻撃パターンを間近で見れたことは大きな収穫であったと思う。

### 3. 今後の課題

まずは体作りを大事にしたい。海外勢に負けないパワーと今まで培ってきた技術があれば金メダルを取れるという確信がある。10キロの増量を目指して、食事、トレーニングメニュー等を見直していきたいと考えている。これからは日本代表を経験したデフリンピアンとしての意識を持ち続けながら、3年後のデフリンピックに向けて取り組んでいきたい。

## 選手 森 健司

### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピック初出場に加えて初めての世界大会となるため、自分の競技レベルが通用するかどうか自分の立ち位置を知ることと、しっかりと集中して全力を出し切り、上位入賞することを目標にした。

### 2. 結果に対する評価

3位でした。慣れない環境（気温、マット、初めて外国選手を間近で見た等）で実際には100%の実力を発揮することはできなかった。予選でグループ内1位通過したことで、少し心に緩みがあったと思う。準決勝ではもう一人の選手に大差をつけられて2位通過となった。ここで落ち込んでしまい、気を取り直すのに苦労した。一喜一憂してしまったことについて反省が必要。3位決定戦ではアドバイスを思い出しながら、慎重に落ち着いた演武ができたと思う。初戦からこれくらいの落ち着きが必要だったと思う。今大会出場に向けた普段の練習については、ハイレベルな世界を想定しながら緊張感と向上心をもって取り組むことができたと思う。

### 3. 今後の課題

すべての試合が終わるまで緊張感を持ち続ける集中力が必要。体格の良い選手が上位に食い込んでおり、自分は迫力や力強さという点で劣っていた。対策として食事の量を増やす、筋力トレーニングをすることで体重を増やす等、重厚感のある見た目作りに取り組む。

## 選手 小倉 涼

### 1. 当初の目標（自己目標）

初めての海外試合で、自分の力がどこまで通用するかも分からなかったのも、とにかく今までやってきたことを全部出して、悔いが残らないような試合をすることが当初の目標だった。また、自分は形と組手の両競技にエントリーしたが、練習時間のほとんどの時間を組手に充てたので、形よりも組手の方が思い入れが強く、絶対に負けたくなかった。大学や道場、家族など多くの人に支えられてここまで来たので、恩返しとして少しでも何か結果を持ち帰りたいと思っていた。

### 2. 結果に対する評価

結果は出場競技両方とも金メダルとW優勝を果たすことが出来たが、納得できる試合は出来ず、悔しく思う。

形競技は練習に充てる時間が比較的少なかったのもあり、お世辞にも完成度が高い形とは言えない。

勝てたのは幼い時からコツコツとやって来た積み重ねがあったからであると考えている。

組手競技は、大学からみっちりやって来たその4年半の集大成となる試合のつもりで臨んだが、不完全燃焼に終わってしまったと感じている。普段の自分であれば絶対前に出ている場面も、リスクを負わず下がるのがほとんどだった。勝ちたいがために慎重になりすぎてしまったと思う。もっと攻めて点差をつけるなど勝ち方にこだわるべきだったと反省している。

### 3. 今後の課題

今回、自分は両競技とも金メダルという結果ではあったものの、完膚なきまでの勝利とは言えなかったと思う。形競技では力強さやキレ、組手競技では長身を生かした蹴り技や投げ技という点においては、海外の選手の方が上手だった。他の追隨を許さない試合をするには、日本らしい技の綺麗さを残しつつも力強さやキレにおいて対抗できること、型にはまらない柔軟な組手スタイルに対応できることが必要だと感じた。力強さやキレは、普段から練習で意識したり、筋肉や体幹を鍛えたりすれば自ずと身につくが、柔軟な組手スタイル、蹴り技を中心に使う長身選手に対応するには、工夫や経験が必要である。色々なスタイルの人と試合をして経験値を積む必要だと考えている。

選手 湯澤 葵

#### 1. 当初の目標（自己目標）

自分のベストを尽くす、緊張やプレッシャーに負けずとにかく試合を楽しむことを目標とした。

#### 2. 結果に対する評価

組手で銅メダル獲得したが、形は大きなミスをして予選敗退。組手での反省点は初戦でパニックになったことである。緊張から、周りが見えなくなりコーチングを受けられないまま大差で負けてしまった。このようなことが起きないようにメンタルを鍛えなければと新たな課題が出来た。

銅メダルに関しては奇跡に近い展開だったので実力とは言い難いと自分の中では思っている。相手に様々なミスが重なったからこそ勝てたと思う。実力差では多分向こうの方が上だった。けれど、得意技を入れられたことだけは評価しても良いと思う。形では人に見せられないような不甲斐ない試合をしてしまった。ミスをカバーする技術が無かったというよりも、ミスが無くても予選敗退は確実だった。予

選敗退は当然の結果だと受け入れている。

### 3. 今後の課題

世界のレベルは予想通りというか、自分の実力を理解していたから世界のほうが強いということだけは分かっていた。そして自分の未熟さを思い知った。課題は技、心、体の全てにある。全体的に他の選手と比べてかなり劣っていた。競技期間中、劣等感が胸中を半端なく渦巻いていた。もちろん悪いのは自分。次の開催までは自信がつくまでトレーニングを怠らないようにする。

## 水泳競技チーム

監督 豊田 律

#### 1. 選手・役員の選考基準・方法

##### 【選考基準について】

当協会の指定選手を対象に、選考委員会が定めた前回大会及び2019世界選手権大会の決勝8位相当の記録を基準記録とした。また将来を見据えて中学生までのB基準記録を設けた。

##### 【選考方法について】

2021年4月から2022年3月までの間に、日本知的選手権大会、JP大会、日本パラ水泳選手権大会、パラ春季記録会、日本水泳連盟公認大会（長水路）等、当協会が認めた大会をはじめ、当協会主催の第15回日本ろう者水泳選手権大会を対象とした。対象大会にて基準記録を突破した選手を候補選手として、2022年3月に候補選手を対象に選考委員会にて選考の結果、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会への推薦選手は男子4名、女子3名 計7名とした。選手氏名は以下の通りである。

（男子）4名

- ・金持 義和（メルカリ）
- ・茨 隆太郎（SMBC日興証券）
- ・藤原 慧（三井物産BP）
- ・星 泰雅（マイナビP）※1

（女子）3名

- ・齋藤 京香（山梨学院大学）
- ・中東 郁葉（東海学園大学）
- ・平林 花香（上宮学園中学校）※2

※1＝リレー要員 ※2＝B基準記録

スタッフについては、当協会の選考委員会にて選考の結果、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会への推薦は監督、コーチ、トレーナーの3名体制とした。スタッフ氏名は以下の通り。

- ・監督 豊田 律（京都府）
- ・コーチ 鈴木 しのぶ（静岡県）
- ・トレーナー 佐藤 学（東京都）

#### 【スタッフの役割について】

役職	氏名	役割
監督	豊田 律	統括責任者、TD担当
コーチ	鈴木 しのぶ	選手の管理、総務担当
トレーナー	佐藤 学	選手の管理、身体ケア担当

#### 【目標設定】

金メダル2個、銀メダル2個、銅メダル4個の計10個のメダル獲得、入賞においても全員参加種目決勝進出及び入賞という目標を設定した。

#### 【結果と評価】

金メダル7個、銀メダル4個の計11個、入賞においても8個、そして全員決勝進出と目標を果たす等、強化合宿の成果を出すことができた。

## 2. 総評

今大会は30カ国、132名参加。コロナ禍や国際情勢により、不参加が目立った。日本選手の成績は次の通り。

※表の見方

(WR) 世界新、(DR) 大会新、(AR) アジア新、(NR) 日本新、(BR) 自己ベスト

### 茨 隆太郎（SMBC日興証券）

種目	結果	順位
50M自由形	-	棄権
200M自由形	1-54-82	優勝
200M個人メドレー	2-07-90	優勝
400M個人メドレー	4-35-46	優勝
50Mバタフライ	25-33(NR)	2位
100Mバタフライ	56-18	優勝
200Mバタフライ	-	棄権
400Mリレー	3-38-84	2位
800Mリレー	-	棄権
400Mメドレーリレー	4-00-82	2位
混合400Mリレー	-	棄権
混合400Mメドレーリレー	-	棄権

茨選手は4回目の出場であり、去年からベストタイムを出しており、安定していることからメダル獲得への期待がかかっていた。予想通り安定なレースでリレーとメドレーリレーも含む全種目メダル獲得できたのは大いに評価できる。しかし、コロナ感染により途中参加辞退となった。競技続行できていれば、あと5個はメダルを獲得できたレベルだった。とても残念ですが、その悔しさをバネに今後のさらなる活躍を期待している。

### 藤原 慧（三井物産BP）

種目	結果	順位
200M自由形	1-55-22	2位
400M自由形	4-07-52	優勝
800M自由形	-	棄権
1500M自由形	16-21-29	優勝
400Mリレー	3-38-84	2位
800Mリレー	-	棄権
400Mメドレーリレー	4-00-82	2位
混合400Mリレー	-	棄権

藤原選手は2回目の出場だったが、今大会が延期になった時点でスランプになってしまい、記録の低迷が続いていた。まずはメンタルをコントロールし、少しでもモチベーションを上げるために直前合宿にて色々工夫した。そのおかげで少しずつモチベーションが上がり、初日である400M自由形で決勝の前に「失敗してもいいから楽しんでこい」とハッパをかけた。気持ちが楽になったせいで、泳ぎにキレが出てスピードも落ちずにそのまま優勝を果たせた。これで長いトンネルから脱出し、その勢いに乗って1500M自由形にも優勝、200M自由形もリレーもメドレーリレーも銀メダルを獲得したのは大いに評価できる。しかし、コロナ感染により途中参加辞退となった。競技続行できれば、あと2個はメダルを獲得できたレベルであった。今後はしばらく休養に入ると聞いているが、リレーメンバーの要員でもいいので休養後は復活、引き続き活躍されることを期待している。

### 金持 義和（メルカリ）

種目	結果	順位
50M背泳	-	棄権
100M背泳	59-03	4位
200M背泳	2-10-18	4位
400Mリレー	3-38-84	2位
800Mリレー	-	棄権
400Mメドレーリレー	4-00-82	2位
混合400Mメドレーリレー	-	棄権

金持選手は3回目の出場だが、現地に着いてからコンディション状態があまりよくなかった。メインの背泳で4位と惜しくもメダルを逃してしまった。特に200M背泳ではメダル獲得まであと0.13秒だった。しかし、リレーとメドレーリレーで銀メダルを獲得したことは大いに評価できる。今後はコンディションの維持を工夫をされる等、今後のさらなる活躍を期待している。

### 星 泰雅（マイナビP）

種目	結果	順位
100M自由形	1-01-00	24位
50M平泳	31-77	9位

100M平泳	1-11-12	7位
400Mリレー	3-38-84	2位
800Mリレー	-	棄権
400Mメドレーリレー	4-00-82	2位
混合400Mリレー	-	棄権

星選手は前回に続いてリレー要員として参加した。去年から社会人となり、練習拠点がなかなか見つからずに困っていたが、今年に入ってようやく見つかり、本格的に練習を始めたばかりにもかかわらず、個人種目においてメインである100M平泳で7位入賞、リレー、メドレーリレーにおいて銀メダルを獲得できたことは大いに評価できる。今後のさらなる活躍を期待している。

### 齋藤 京香 (山梨学院大学)

種目	結果	順位
50Mバタフライ	-	棄権
100Mバタフライ	1-06-98 (BR)	優勝
200Mバタフライ	-	失格
200M個人メドレー	2-32-70	6位
混合400Mメドレーリレー	-	棄権

齋藤選手は2回目の出場で、去年はベストタイムを出しており、期待がかかっていた。大会前に手首に怪我をしたため、少し不安はあったが、100Mバタフライでは予選から好タイムを出して1位通過した。その勢いに乗り、決勝では自己ベストを出して念願の金メダルを獲得した。メンタルの強さが金メダル獲得につながったと大いに評価できる。今後は社会人スイマーになるが、環境が変わっても活躍されるのを期待している。

### 中東 郁葉 (東海学園大学)

種目	結果	順位
400M自由形	-	棄権
800M自由形	-	棄権
1500M自由形	15-58-96	4位
100M背泳	1-12-24	4位
200M背泳	-	棄権
混合400Mメドレーリレー	-	棄権

中東選手は齋藤選手と同じ2回目の出場である。しかし、今年に入って大学の都合で練習不足と多少不安があった。100M背泳で4位とあと0.18秒で惜しくもメダルを逃してしまった。その勢いが次につながると思ったが、得意の1500m自由形の決勝では予選より泳ぎが重かった。ベストタイムに遠く及ばず、残念ながらメダル獲得はできなかった。その直後、体調を崩してしまい、発熱する等、レース復帰できないまま終わってしまった。とても残念だが、思い切って気持ちを切り替えて今後も活躍されることを期待している。

### 平林 花香 (上宮学園中学校)

種目	結果	順位
50M自由形	30-51	14位
100M自由形	1-06-01	9位
50M背泳	33-89	6位
100M背泳	1-15-09	8位
200M背泳	-	棄権
200M個人メドレー	2-45-37	12位

平林選手はまだ中学生であり、B基準記録を突破して初めての国際大会参加となる。13歳の若さと様々なプレッシャーのため、大会前から緊張が続いていたが、すぐ雰囲気に慣れたようでリラックスできるようになり、2種目入賞を果たすことができた。様々なプレッシャーの中で入賞を果たしたことは高く評価できる。その経験を活かして、体力と泳力の向上、そして実績を積まれることで、今後のさらなる活躍を期待している。

#### 【まとめ】

今大会は金メダル7個、銀メダル4個の計11個、入賞8個、そして全員決勝進出と目標達成を果たすことができたが、2つの課題が浮かび上がった。

一番の課題は「帯同ドクターの必要性」。大会期間中にコロナ感染してしまったことが大きかった。大会前にコロナ感染対策を講じ、大会期間中もできる限り他者との接触を防ぐ等、努力をしてきただけに、本当に残念な結果になった。帯同ドクターがいれば状況が変わったかもしれないと思う。大会会場の予防対策について、帯同ドクターが組織委員会へ強く意見を出せば予防できたと思う。

二つ目の課題は「コンディション」。大会に合わせてコンディションをうまく調整できなかった選手が数人いた。今までにない長い飛行時間、宿泊ホテルから会場までバスの時間が1時間近くかかったことから体調を崩してしまうことがあった。トレーナーが懸命のケアをしたものの、コロナ対策であまり時間をかけられなかった。常に良いコンディションを維持するためには目標大会に合わせる、または長時間の移動を想定し、計画的に練習プランを立てなければならない。コンディションを管理することが怪我や疲労の防止に繋がることを選手達に認識させることが必要である。

#### 【今後に向けた取組み】

圧倒的な強さを誇ったロシア、女子選手が豊富なベラルーシ、アジアでレベルの高い中国が国際情勢により不参加となり、大会のレベルは下がるだろうと思っていたが、ウクライナやポーランド、イタリアから若い選手が台頭した。将来的な動向を踏まえると、日本は現状維持では済まされない。さらにレベルアップしなければならない。

今後の取組みとして、①海外遠征を積極的に実

施して海外でのコンディショニング力を身につける。②レースで力を100%発揮できるようにレーススピードを中心とした練習を取り入れて常に力を100%発揮できる力を身につける。③技術だけでなく筋力アップもフォーム改善につながるのでウェイトトレーニングを積極的取り入れる。④回復力強化および自己管理徹底化。⑤ドクターの帯同義務化。

以上の5点に取り組んで次回の国際大会につなげたいと考える。また指定選手の平均年齢が高くなってきていることから、今後は選手発掘のさらなる強化策を早急に考えないと、次大会ではメダル獲得は難しくなりかねないと思っている。

トレーナー 佐藤 学

## 1. 自己の役割とその評価

トレーナーとして、チームのメディカル担当として、大会前より選手とコミュニケーションを取り、体調面の情報収集、アンチドーピングの啓発、相談などを受けることができ、ドーピング検査対策として事前に使用している薬剤やサプリメントの確認をし、仮にドーピング検査対象となったとしても万全な体制を整えることが出来た。ご指導いただきましたスポーツファーマシスト様に感謝致します。

現地の食事例えば飲み水、生野菜など注意を払いう事で食事面での問題はなかった。

ケアの面ではかなり苦戦を強いられた。試合会場のアマリの狭さにトレーナーベッドを置くのが精一杯の環境でした。当然他国の選手やスタッフとの距離もかなり近く密であると言わざるを得ない状況で、マスクや手指消毒をするように指導をしたり、ベッドや触れる物の消毒も当然欠かせない状況でした。

ホテルでのケアも状況がコロコロ変わり、いくら行ってみないと分からないとはいえ、トレーナーへのあまりの理解の無さ、待遇の悪さ等辟易したのは否めません。しかし、コロナ感染したことにより事態は一変し、本部、本部メディカルに頼らざるを得ない状況になりました。メディカルという面では助けて頂いたことも数多く、大変お世話になりました。しかし、スポーツ大会の本部メディカルというには疑問点も多々あり、一つ挙げるならば、選手を安心させられるメディカルであって欲しかったと思う。自分自身としてはコロナに感染した時点でその役割をほぼ果たせていないと言えるだろう。しかし、何事もそうであるがマイナス面があればプラス面もあり、同じく感染した選手と話す時間をたくさん取ることができ、何をどう感じ、考えているかなど、こ

れまで以上に深く理解する事が出来たのは大きい。感染せずに帰国する事が出来た選手ともやり取りをする中で、こういう考え方をするのか、などやはり得るものも大きかった。

## 2. 今後の課題

今後の課題としては、やはりコロナ対策に尽きる。今後コロナが無くなる事はもはや望めないとして、今回のことを反省し、誰一人感染せずに大会に参加し、帰ってくる。これが第一になるだろう。今大会はお世辞にも選手ファーストとは言い難い大会であったと言えるので、少なくとも競技団体として選手を守り、選手ファーストであると言えるようにして行きたい。

総務兼コーチ 鈴木 しのぶ

## 1. 自己の役割とその評価

渡航前までの総務業務を引継ぎ、現地での総務及び女子担当コーチを担当した。主な役割としては、日本選手団本部との連絡調整及び選手・日本国内スタッフへの伝達、主に女子選手に対する練習・レースサポート、ドーピング対応だった。これまでの経験上、総務を兼務してのコーチは安易ではないことは覚悟していたが、今回は想像以上に難しいと感じた。会場では可能な限り、選手の練習サポート及びレースサポートに徹し、総務の業務はホテルにいたる間に行おうとした結果、長時間の移動時間であったことも重なって、ほぼ睡眠時間も取れない日々の連続だった。以下、2つの業務それぞれの報告を行う。(1) 総務として

所属団体における渡航前までの総務担当(全日本ろうあ連盟窓口)がデフリンピック期間中は、日本でのサポートスタッフであったため、渡航後の総務を担当しました。派遣元である全日本ろうあ連盟のみなさまとは、現地からの関わりだったため、うまく連携が取れなかった部分が多々あったと思う。事前より、連携を取り関係を深めていればもう少し理解し合えた部分があったかもしれないと反省している。現地総務としての大きな役割の一つが本部(メディカルチームとの連携も含む)・輸送関係等を含む旅行会社との連絡調整だった。コロナ感染対策もあり、主にラインを通しての連絡調整だった。本部の中で様々な情報共有をしているという前提で対応してきたが、情報・指示系統の一本化が感じられず、困惑する場面が多々あった。また、早急に回答を求める質問に対する対応も遅れがちで、おそらくそれらが原因で、結果、誤解を生じていたりトラブルが発生したりしていることも多々あると認識して

いる。コロナ拡大の対応で多忙・過労状態であったことは重々承知しているが、これは事前に想定できることであり、その準備も不足していたと感じている。上記を背景に、総務としての自己評価は低く、本来したかった総務の責務を果たせていないと思っており、これまで努力を重ねてきた選手に深くお詫びしたい。総務の責務としては、どんな状況下におかれても、選手が思う存分に練習の成果を発揮し、最高のパフォーマンスを表現できる環境を整えることであると思う。しかしながら、今回納得のいく業務ができなかったことは大変残念なことです。

## (2) コーチとして

選手の練習サポートとして、中学生選手に対しては、メニュー提示を含む全般的な練習指示、大学生選手に対しては練習の見守り及び記録計測のサポートを行った。日常、選手たちの練習を見ていないという遠慮から思う通りのコーチングはなかなかできず、自身の中でも葛藤と戦いながらの業務遂行となった。

レースサポートとして、女子選手全員のレースへの見送り・出迎え、選手全員のラップ管理が主な業務となった。選手がレースに向かう大事な局面においてどのようにコーチングするかは、その時その時の状況によりとても難しいことだといつも感じている。今回も自身のできる範囲での状況判断をし、選手と面したつもりである。

今回、残念だったことはひとつの失格を出してしまったことである。日本国内と国際のジャッジ基準の相違を改めて感じ、今後それらを加味した指導が必要だと強く反省した。加えて、聴力検査及びドーピング検査に立ち会った。聴力検査の立ち合いは初めだったが、検査の流れの終始を確認できたことは大きな収穫だったと思う。ドーピング検査の立ち合いについては経験があり流れは理解していたため、スムーズに立ち会うことができたと思う。

競技総務としては、スタートリスト、リザルトの確認・管理、日々のスケジュール管理を行ったが、大会運営側のリザルト掲示の遅れ、バスの輸送計画の問題等でスムーズな業務には至らなかった。

## 2. 今後の課題

競技団体として、チームとして、もっともっと組織力を研磨し、どんな状況下においても選手が最大限のパフォーマンスを発揮できるような力をつけていくことが必要であると感じた。4年間という年月をかけて、派遣元である全日本ろうあ連盟との連携、意見のすり合わせ等を行い、相互の理解を深めながら、デフアスリートにとって世界最高の舞台であるデフリンピックに備えていくべきだと強く感じてい

る。具体的な事項については、所属団体で協議し、改めて必要事項を伝えたい。また、この大会の中で、他競技のスタッフのみなさんの熱い思いや真剣なご対応、これまでのご苦勞や思いなどを拝見・拝聴する場面があった。選手を思う気持ちは、どの競技も同じであり、これらの思いを実現すべく、全日本ろうあ連盟との連携を深めていくことが喫緊の課題だと考える。最後に、大会期間中、失礼な言動があったらうこと、大変な状況の中、多くのご苦勞を与えてしまったこと等をお詫びし、大変世話になり、派遣いただいたことを心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

選手 茨 隆太郎

## 1. 当初の目標（自己目標）

- ・今大会では12種目にエントリーしており、200m個人メドレー・400m個人メドレーで金メダル、2種目以外でも3位に入る、日本代表選手史上最多メダル獲得数の9個を上回る10個のメダルを獲得することを目標に設定していた。
- ・コロナ禍のため、選手団が集まりコミュニケーションを取る機会がほとんどないため、大会前半の2日から9日まで行われる水泳の試合で自分が結果を残し、全体にいい流れを作ることが主将としての責務であると考えていた。

## 2. 結果に対する評価

今大会が延期されると決まった時に、自分の中ではまだ練習できる期間があると前向きに捉え、いつ来てもいいように万全な状態で臨めるように日々の練習で最大限に自分ができることを積み重ねてきた。今年の1月に専門種目の自己ベストも更新できたので、心技体とも今までで1番いい状態で臨むことができた。

しかし、現地に入ってからからはコロナ対策として試合以外はホテルから外出できない、ホテルから会場までの移動距離が長いことから睡眠時間の確保が難しい、準高地による疲労の蓄積など、制限された環境下で確実に金メダルを獲得するためには、いつものレースパターンではなく、前半は抑えて後半に追いつけるといった作戦を徹底したほうがよいと判断した。得意とする専門種目は自己ベスト更新には届かなかったが、目標としていた金メダルを13年ぶりに獲得することが出来て素直に嬉しく思う。

## 3. 今後の課題

- ・デフリンピックにてそれぞれの選手が最高のパ

パフォーマンスを発揮できる環境作りを進めていくことが必要であると考えている。

- ・次回の大会は日本も開催候補地に挙がっているので、出場する選手が辛い思いをすることがないように、出場した日本選手団の全員で今大会の問題点、改善点を話し合う場を早急に設ける必要があると考える。日本選手団の1人1人が、今後のデフスポーツの在り方について考えていくきっかけになればと思う。

#### 選手 金持 義和

##### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・個人種目メダル獲得（50m,100m,200m背泳ぎ）
- ・リレー種目メダル獲得（4×100mメドレーリレー、4×100mフリーリレー、4×200mフリーリレー、4×100m男女ミックスメドレーリレー）

##### 2. 結果に対する評価

普段の練習で腰を痛めており、前回参加したデフリンピックの時は、トレーナーさんに治療を受けながらも痛みを耐えていた。その痛みをなんとかしたいという思いで、理学療法士との出会いもあり、身体の使い方や練習内容、トレーニング内容等を変えていった。4年に一度しかないデフリンピックでいい結果を出すためには、泳ぐ練習だけでなく、腰痛予防も含め、自分の専門種目である背泳ぎに特化したトレーニングを重点にして、計画的に積み重ねながら行ってきた。デフリンピック直前の国内大会では、ベストタイムに近づけることができ、確実にメダル獲得できる範囲に届くことが大きな自信になった。デフリンピックで自己ベストタイムを更新し、メダルを獲得することをイメージしていたが、今大会では心身ともに良いコンディショニングを出せることがなかなか難しい状況であり、個人種目ではメダルを獲得することができなかった。自分の結果に対して、ここまで不甲斐ない気持ちになると思わなかったが、1つだけ嬉しかったことは、チームのリレーでメダルを獲得できたことである。ここまで一緒に戦ってきた仲間には感謝している。

##### 3. 今後の課題

自分の結果を出せなかったことで、気持ちの整理に時間がかかったが、少しずつ前に進んでいきたいと思う。次のデフリンピックに向け、これまでどおりと変わらず、自分の決めてきたことを大事にしながら、練習やコンディショニング、トレーニングを

継続していきたい。

#### 選手 藤原 慧

##### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・400m, 1500m連覇

##### 2. 結果に対する評価

- ・目標達成

##### 3. 今後の課題

- ・自身の課題は特にないが、日本選手団の運営に課題、問題が多数あります。

###### ①選手ファーストではない

コロナ感染対策を行うのに密になる1箇所選手を宿泊させる事に疑問を感じた。また、ホテルを1箇所に纏めた結果、片道1時間かかる移動となり、休む時間が大幅に削られた。⇒パフォーマンス低下、疲労回復が追い付かない（体調不良）

###### ②コロナ感染対策の欠陥

今回の大会はコロナ感染リスクがあるため、日本チームとして、参加の決断をギリギリまで悩み、参加に至った経緯がある。しかし、大会期間中に帯同するスタッフにコロナ感染症専門医がいなかった事は疑問に感じる。また、選手を集め、コロナ感染防止の為にミーティングがあったが、選手の不安を煽るような話ばかりだった。

#### 選手 星 泰雅

##### 1. 当初の目標（自己目標）

今回のデフリンピックの目標は、個人種目決勝進出することと、リレー種目でメダル獲得することでした。また最低でも自己ベストを更新するという目標も掲げていた。

##### 2. 結果に対する評価

結果としては個人種目で決勝進出でき、リレー種目でメダルを2つ獲得することができた。また自己ベストを更新することができ、充実した大会になった。

##### 3. 今後の課題

今後の課題として、今大会に出場して改めて思ったことをまとめた。今回はコロナ禍の中で開催され、十分対策はしていたものの、競技会場で他の国々の選手、コーチ、一般人のマスクの着用なし、コロナに対する考え方がすごく甘いと感じた。また競技会

場の場所から日本選手団宿泊ホテルまでの距離もすごく離れており、疲れがなかなか取れず、もう少し近い場所であれば睡眠時間やストレッチの時間など確保できた部分もあったのかなと思う。結果として体調を崩してしまったり、睡眠時間の確保が全くできてない状況になった。コロナの影響もあり、場所や感染対策を考慮して会場から遠く離れたのは仕方がないが、今後はしっかり感染対策を防ぐあるいは選手優先に負担をかけないように工夫していただきたい。今回の経験から2025デフリンピックで同じことが起きないようにしてほしいと思う。

## 選手 齋藤 京香

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回のデフリンピックの目標は、全種目で決勝に残り、自己ベストを更新してメダルを獲ることだった。

### 2. 結果に対する評価

100mバタフライで、自己ベストを更新して念願の金メダルを獲得することができた。200m個人メドレーは6位、200mバタフライは予選で失格という結果になった。初日の200m個人メドレーの結果があまり良くなく落ち込んでしまうこともあったが、その日のうちに気持ちを切り替えて2日目の100mバタフライに向けてレース前の過ごし方やアップの内容を見直すことができた。その結果、緊張も少々ありましたがリラックスしてレースに臨むことができた。

### 3. 今後の課題

ホテルから競技会場までの移動に1時間かかるということが私にとって1番負担が大きかったと感じた。朝出発する時間がとても早くて、帰ってくる時間も非常に遅かったので睡眠時間も足りなかった。その状況の中でもこのような結果を残すことができたのは良かったと思うが、もう少し選手の体調やコンディションを考慮した環境にしてほしかった。今回のことを踏まえて、次回大会はさらにパワーアップした環境になることを期待しています。

## 選手 中東 郁葉

### 1. 当初の目標（自己目標）

4年前のサムスンデフリンピックでは決勝に上がった種目が200m背泳ぎだけという結果で世界の速

さに圧倒されて終わってしまったので今回はまず、全種目決勝に上がることを大前提とし、世界選手権で銅メダルを取ることが出来た1500m自由形、4×100m混合メドレーリレーは必ずメダル獲得することを目標とした。そして、良い結果を残し、日本でデフリンピックの認知度を上げる、世界のろうアスリートと交流を深め国際手話や文化などを学ぶことも目標とした。

### 2. 結果に対する評価

自分が出場できた種目は2種目であり、どちらもメダル目の4位入賞、また3日目に自分の中でメインだった種目が終わり、4日目はオフだったことで気を抜きすぎてしまい体調を崩し、最終的にコロナに感染し5日目以降の種目をすべて棄権という形になってしまい、チームメイトや応援して下さった方の期待に応えることが出来ず、とても悔しい気持ちでいっぱいです。練習では1500m自由形にほとんど力を入れていたため、背泳ぎの練習をあまりしていなかったことが背泳ぎのレース結果に響いた。たくさんの方と交流し触れ合う中で自分が将来やってみたいこと、興味があることをたくさん見つけることが出来た。

### 3. 今後の課題

今回起きたことを辛い経験だけで終わらせず、人生の糧にしてこれからもアスリートとしての競技人生に活かしていきたい。一つの種目だけに絞るのではなく他の種目の可能性を広げるために2025デフリンピックに向けて改めて土台作りから始め、練習に励んでいきたいと思う。また、自分が思っていた以上に様々なストレスを抱えていたので、多少のストレス発散もしつつ、体調管理、コロナウイルス感染予防対策を徹底していきたい。

## 選手 平林 花香

### 1. 当初の目標（自己目標）

背泳ぎ50m・100m・200m

自由形50m・100m

個人メドレー 200m

いずれも自己ベストを出し、決勝に進出し、デフリンピック最年少記録を出すことを目標としていた。また国際大会に出場するのは初めてだったので、今後の練習の参考に世界の選手の泳ぎを観察し吸収することを目標にしていた。

### 2. 結果に対する評価



50m背泳ぎ・100m背泳ぎは決勝に残ることができた。世界の選手と競うのは初めての経験でたくさんの方が見ている中、入賞という結果が残せたことは自分自身の大きな自信に繋がった。100m自由形では大幅に自己ベストを更新することができた。決勝進出まであと0.2秒だったので予選の泳ぎはもう少し周りを見て出せるタイムを考えるべきだった。200m背泳ぎは残念ながら出場辞退となってしまった。エントリータイムや結果を見ると出場していれば表彰台は狙えたのではないかと思う。

### 3. 今後の課題

初めての国際大会に出場し、すごくいい経験になった。日本を代表して世界の人と同じ舞台に立つことができたこの貴重な経験は忘れることができない思い出となった。また今回の試合で新たに自分の中で課題を見つけることができた。その課題を基に日々練習に励んでいきたい。そして次の2025デフリンピックで日本新記録を出し、女子で日本人初の最多メダルを獲得したいと思う。

## 卓球競技チーム

監督 梅村 正樹

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

選考基準については、

- ・ランキング大会で優勝した者
- ・選考会で優勝した者（2名）
- ・強化部の推薦

スタッフは前回のデフリンピックに参加したコーチが女子のベンチなどに入っていたこともあり、今回も特別アドバイザーとして同行してもらった。今回は手話通訳そして選手のケア等のためにトレーナーも同行してもらい、そして事務局1名（結果報告やビデオ等）と自分（監督）で参加した。

### 2. 総評

今回はコロナ対策のこともあり、大会が始まる5日前に現地に着いて大会終了後はすぐ帰国出来るようにお願いした。また他の国と被らないよう日本選手団のみのホテルにしたことに、多少安心はあったが、送迎バスや密にならないよう食事時間の調整が難しく、かなり連絡を取りあったのが大変だった。また昼食が思ったより少なく、選手には物足りない量でした。食事も思ったより食べられなかった選手が多く、特に男子は体重が減っていた。現地も標高

が高めなのか、1日目の練習の時にフットワークを開始して5分もしないうちに息切れしていたので、相当、酸素が薄いと思った。

（目標）

男女ともメダルを獲ること

（成績）

男子団体戦 銅メダル（21年ぶりメダル獲得）

女子団体戦 銀メダル（前回の銅メダルを上回った）

女子ダブルス 銅メダル（前回に続き）

混合ダブルス ベスト8（2組）

男子シングルス 2名予選通過（2名予選敗退）

女子シングルス 3名予選通過（1名予選敗退）

※シングルス決勝トーナメントはコロナ感染者が増えたため日本選手団全競技棄権

ブラジルは卓球が盛んな国ではないため、雨漏りや停電や床など設備はあまり期待できないと思っていたが、予想通りだった。日本や韓国、台湾以外は全くマスクをしておらず各自で対策するよう呼びかけた。ところが、無観客と聞いていたのに地元の小学生や中学生が応援に来てコロナ対策が全くなされていないことに気付き、選手が感染しないか心配になった。タイムテーブルに関しては待ち時間を無くすために空いているコートで試合を進めたり等良かったと思うが、日本選手3名、同時に試合が入ったこともあり、ベンチに入れなかったときもあった。大会に入る前から故障者が出たり、初出場の中学生の選手が緊張のためか、飛行機の中で腹痛になったり、大会中に腹痛となった選手もいた。

なお、今回は中国やロシアが参加していないこともあり、メダルのチャンスは充分あった。女子団体戦は難なく決勝まで進み、決勝でウクライナにストレートで敗れたが、内容はほぼ互角だった。男子団体戦は初戦で韓国に3-2で敗れ、続く台湾も敗れ、自力での決勝トーナメント進出は無くなったと思ったが、韓国がオーストリアに敗れたため、チャンスが回ってきた。ただ、2位になるためにはオーストリアに3-1で勝つこと。まともに打ち合っても勝ち目はないと分かっていたので作戦を変えて競り合いをものいにし、2位通過で決勝トーナメント（銅メダル以上確定）に進出できたのはすごく頑張ってくれたと思う。団体戦では負けれないと緊張感を持ちながら戦ったせいか、その後から何人か疲れや筋肉痛などが発生し、混合ダブルスからは思い通り動けなかった面が見られた。

課題は体力が長期間持続できなかったこと、戦術や戦略面の強化、全ての面において上位進出した選手より劣るところがはっきり見られた。また、相手の心理面や追い込まれた時に雰囲気呑まれた面も

あったのでそこは克服しなければいけないと思う。そして普段の練習でも緊張感を持つことがいかに大事であるかを、もっと選手とコミュニケーションを取りながらやっていかなければいけないと思った。またチームワークが乱れたと見受けられる部分もありましたので、これからの合宿でもチームワークをつくることも含めてもっと考えなければいけないと、そこも反省すべきだと思う。

トレーナーには、今までずっと帯同していたトレーナーが参加できなくなり、急遽代理として参加していただいたのにもかかわらず選手に対するケアをすごくやって頂いてありがたく思っている。ただ、本番までの帯同期間が短かったため、意思疎通がうまくできていなかった面もあったので、これからトレーナーは2名体制にする等、リスク管理もしていく必要があると思う。

## ゼネラルマネージャー 大平 静也

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

全日本ろうあ連盟の派遣基準を基に、監督より男女4名ずつエントリー希望の提案を頂いたが、日本ろうあ者卓球協会理事会にて協議した結果、提案通り男女4名ずつを派遣させることに決定した。但し4人目は2025デフリンピックに向けて有望な若手選手を発掘し登用したいと思う。

(日本ろうあ者卓球協会の推薦基準)

- (1) デフリンピック日本代表1次選考会 優勝  
男女1名
- (2) デフリンピック日本代表最終選考会 優勝  
男女1名
- (3) 強化部推薦 代表候補者 男女2名

2020年度の強化合宿の様態及び各種大会（国際大会、一般の国内大会、聴覚の国内大会）での実績にて強化部にて決定、なおかつ推薦基準として下記について十分考慮し、推薦。

- ・世界に通用する技術力、戦術力を持ち、活躍が期待できる選手
- ・国際大会で長期間戦える体力に鍛えられている選手
- ・将来は伸びしろが大きく期待できる選手（2025デフリンピックに向けて）

- (4) 上記(1)～(2)において該当者が辞退した場合は、(3)の強化部推薦を増員する。

ただ、これまでと違い、開催国がなかなか決まらない状況の中、2020年春からコロナが世界規模で拡大したため、2020年7月開催の世界ろうあ者卓球選手権大会が中止となった。そして1年延

期となった東京オリンピック・パラリンピックと同じく、今大会も2021年12月開催から2022年5月に延期された。そのため、選考基準を何回も見直した。また、国際大会へ参加させる機会がない状況であったため、強化合宿にて十分に準備した。

### 2. 役員の基準・方法

(チーム体制と各コーチの役割)

日本卓球チームは、まず監督、総合コーチは強化部からそのまま派遣し、手話通訳は大倉総合コーチ専用とした。前回のサムスン大会では、団長、監督、コーチ、手話通訳4名だったが、ゼネラルマネージャー（GM）は、以下の理由により、日本ろうあ者卓球協会は、サポートするスタッフを2名追加派遣させることに決定した。

監督は現役選手時代に何回も国際大会に参加したことがあるが、今大会はスタッフとして初めての参加、また国際手話もあまり十分でないため、経験豊かなGMがサポートする必要があると考えた。また、次大会のスタッフ育成を含めてスタッフ1名を追加派遣することに決定した。（残念ながら会社の許可が下りなかったため辞退された）。トレーナー参加を必須とする全日本ろうあ連盟の方針に基づき、当初は女性トレーナーを参加させることに決定したが、最終的に勤務先の許可が得られず、急遽、男性トレーナーを派遣させることを決定した。

ブラジルではコロナが再拡大しており、死者が多く出ている。現地の医療体制の不備による参加メンバーの安全を保障できないリスクがあるため、派遣を取りやめるべきか悩んだが、5年間努力を積み重ねていた選手たちの思いを組み、当協会はこれまで実施した強化合宿でのコロナ感染対策の経験を生かして十分に準備し、派遣させることにした。

GM：大平静也

監督：梅村正樹

コーチ：大倉峰雄

手話通訳：井出敬子

トレーナー：小森園一樹

### 成績

男子団体 銅メダル 男子では、21年振りのメダル獲得

女子団体 銀メダル 13年振りの銀、14大会連続メダル

女子ダブルス 銅メダル（亀澤・川崎）2大会連続メダル

男子シングルス

亀澤 予選2位通過 決勝トーナメント1回戦 棄権

灘光 予選2位通過 決勝トーナメント1回  
 戦 棄権  
 井藤 予選リーグ敗退  
 川口 予選リーグ敗退  
 女子シングルス  
 亀澤 予選1位通過 決勝トーナメント1回  
 戦 棄権  
 川崎 予選1位通過 決勝トーナメント1回  
 戦 棄権  
 立石 予選2位通過 決勝トーナメント1回  
 戦 棄権  
 山田 予選リーグ敗退  
 男子ダブルス  
 川口・井藤 2回戦 敗退  
 亀澤・灘光 1回戦 敗退  
 女子ダブルス  
 立石・山田 1回戦 敗退  
 亀澤・川崎 準決勝 敗退 銅メダル  
 混合ダブルス  
 井藤・川崎 ベスト8  
 川口・山田 ベスト8  
 灘光・立石 2回戦敗退  
 亀澤・亀澤 1回戦敗退

#### 目標と評価

目標：メダル2個以上獲得すること

今回の大会は、ロシア、ベラルーシ除外、中国、  
 香港の不参加とメダル獲得率のチャンスが上がっ  
 た。しかし、男子団体の抽選にて、運悪く強豪チ  
 ムである台湾、オーストリア、韓国が入る死の組  
 のグループに入ってしまう、メダル獲得は絶望的  
 となったが、絶対エースがいる韓国がオースト  
 リアに敗れるという波乱があり、三つ巴の状態  
 となった。最後のオーストリアとの試合では選  
 手たちの頑張りによって3-1で勝ち、得失点の  
 差で準決勝に進出し、21年振りのメダル獲得  
 に繋がった。最後にシングルスでもメダル獲  
 得のチャンスはあったが、残念ながら日本選  
 手団のコロナ感染者増加により最終日である  
 男女シングルストーナメント戦の出場を辞退  
 (棄権)した。しかし、メダル2個以上の目標  
 を達成できたことは評価したい。

#### ・スケジュール

出国	4月29日
入国	5月1日
開会式	5月1日
公式練習	5月2日～4日
TD会議	5月4日
男女団体	5月5日 予選リーグ
男女団体	5月6日 決勝トーナメント
表彰式	5月6日

TD会議、練習	5月7日
混合ダブルス	5月8日
男女ダブルス	5月9日
表彰式	5月9日
男女シングルス	5月10日 予選リーグ
男女シングルス	5月11日 決勝トーナメント
表彰式	5月11日
帰国	5月13日～15日
閉会式	5月15日

#### 大会の競技運営などの報告

##### ・卓球会場

ITTFルール通り、準備していると通知があ  
 ったが、公式練習時、屋根からの雨漏りや寒  
 いという悪環境で、これではプレーに支障  
 が出ると不評だったが、幸い、試合当時は  
 好天に恵まれ、プレーに支障はなかった。  
 TD会議での抽選では、サムスン大会の失  
 敗を活かし、サッカー競技の抽選会の一  
 通りにスムーズに進んだ。しかし、卓球会  
 場ではコロナ感染対策は全くされておら  
 ず、審判たちはノーマスク状態だった。  
 ITTFのガイドラインでは卓球台や  
 ボールの消毒等が書かれているが、今大  
 会では全く実施されていなかった。地元  
 の子ども達や高校生が大勢見に来られ  
 たが、バブル方式は全く取られてない  
 状況だった。組織委員会は、選手にコ  
 ロナに感染させない体制を整えていな  
 かったのだろう。

##### ホテル対策

日本のホテルにあるような備品が無いと想定し、  
大会対策として以下の通り準備した。

- ・海外用電気ケトル、電気ロンコ購入
- ・スポーツ飲料等持参
- ・体重計
- ・WiFiルーター
- ・試合ボール多数
- ・アルコール消毒液
- ・マスクなど
- ※各自選手で自主的に準備
- ・風呂、マットなど
- ・日本食、栄養食品

写真撮影、ビデオ撮影、ツイッター等で発信を行  
 ったが、現地の通信環境が良くなく思うようにでき  
 なかった。

## 2. 総評

デフリンピック参加は2回目だが、過去の大会と  
 違い、コロナ感染防止への対応等、多くの課題が残  
 たまま、ICSDや組織委員会は強行したのではない  
 かと非常に残念である。なお、30時間以上もか  
 かる移動は、体にストレスが非常にかかるもので  
 あり、席の振分けについては、選手とスタッフに分け

るなどの配慮をすべきではないかと思う。特に異性に挟まれたため、慣れないストレスで体調を崩してしまった選手もいた。数時間程度の渡航は耐えられるが、30時間以上は耐えられない選手もいることに十分に配慮する必要があるだろう。

日本選手団から23名の感染者が出てしまったが、その中で卓球メンバーからもまさかの5名の感染者が出た。競技会場でバブル方式をしていなかったため、通路内に観客と選手が多数混在していた状態であり、マスク無しの観客から写真、サインを求められて応じてしまった選手も多くいた。台湾、韓国はマスクをしていたが、欧米、南米はノーマスク。台湾も非常に警戒しサインを拒否していたが、結局、台湾でも感染者が29名（台湾の卓球選手3名含む）も出てしまったそう。他国でも感染者が出たかどうかは情報も無く全く不明。ITTFガイドライン通りに実施されたらこんなに感染者は出なかったのではないかと思うと残念である。本部が抗原検査キット100個準備していたが、多数の感染者や濃厚接触者が出たため、使い切ってしまった。抗原検査キットを持参した他競技団体もあったと聞き、当会でも抗原検査キットを準備できれば、多少感染者拡大を防ぐことはできたのではないかと思うと残念であった。今に思えば、本部任せにせず、当会も自己防衛策として、アルコール消毒液持参のみではなく抗原検査キットも購入し対策すれば良かったと反省した。

他に当協会から初めてデフリンピックに男性トレーナーを帯同させたが、トレーナー業務内容について十分に共有確認しなかったため、女性選手に対する配慮やきこえない人に対する配慮が足りなかった面が見られた。次回から男性トレーナー、女性トレーナーを2名帯同するべきだろう。またきこえない人に対する配慮も理解してもらう必要もある。

コロナ感染者5名を出してしまったため、私が残ることになり、隔離期間が終わるまで各メンバーを世話することになった。現地の買い物などに色々苦勞されたが、現地の日本人団体よりほぼ毎日差し入れを頂き、大変感激した。また帰国するまで手配など色々として頂いた看護師、旅行会社等大変感謝している。

そして、デフリンピックまでいろいろと各選手を鍛えあげ、メダル獲得まで至った梅村監督、大倉コーチらに感謝したいと思う。ありがとうございました。

総合コーチ 大倉 峰雄

## 1. 自己の役割とその評価

日本代表チームのスタッフ（卓球総合コーチ）と

して2回目のデフリンピックに参加した。今回のデフリンピックは、コロナ禍の中で行い、選手やスタッフに対して、とても貴重な経験になったと思う。目標は日本チームの目標であるメダルを取ることとは勿論、更に前回よりメダルの数やメダルの色も良くなることである。

この4年間に国内で強化合宿や選手・スタッフ間のミーティングを何度も行い、選手自身がデフリンピックに対する意義を深く理解し、士気を盛り上げる姿勢を作り、最終的に選手とスタッフ全体の目的意識を明確にして大会に臨むことができた。そのことが大会の好成績に繋がったものと考えられる。

結果的に女子団体は、銀メダル・女子ダブルスを銅メダルに加え、男子団体も銅メダル（前回未参加）を獲得することができた。これも、ひとえに選手自身の努力とスタッフ全員の一致団結と言える。また、選手たちの力を最大限に発揮できたことによって、日本ろうあ者卓球協会及びスタッフをはじめ、合宿の時に良い環境を提供いただいている施設、練習相手をしてくれた大学生、そして選手の体調管理やパフォーマンスを維持管理してくれたトレーナーやお互いの意思疎通を図るために懸命に手話通訳をしてくださった方に心から感謝している。

コーチとしての私の役割は、選手個々の技術力の向上、日々の練習への取り組みを通じての調子のチェック、そして試合中における臨機応変な戦術運用などが主なものになる。何よりも大切なのは、監督とのコミュニケーションを十分に図りながら、チーム一丸になって戦うことが勝利に導く第一の要因だと考えていた。客観的な評価をしてみると、今回のチームは、技術的にはまだまだ未成熟な状態であったのをスタッフ全員の役割を果たした総合力で手に入れたメダルだったと言えるだろう。

## 2. 今後の課題

今大会は、世界でもトップレベルの技術を持っている選手が集まり、結果的にみると一番重要な男子団体と女子団体はウクライナが金メダルを独占した。具体的に戦術や戦略を分析すると、わが国の選手と世界トップレベルの選手との間には、克服すべき課題がかなり多くあり、技術的にも大きな差がある。わが国が金メダルを取る条件を想定してみた場合、必要な環境の整備、充実した設備の提供、合宿等を含めた練習時間、そして国際大会クラスに出場する経験を積みあげることなどが重要な課題と考えられる。

特に、ヨーロッパの若手選手の育成、韓国のベテラン選手の活躍を活かし、台湾やスロバキアやポーランドなど、技術・体力・精神面において、わが国

の選手の実情と比べると決して楽観的な状況ではない。今後の課題として、金メダル獲得の目標を達成するためには、卓球協会等を中心的にした組織力の向上ときこえる者の大会に積極的に参加する機会を設けて早い段階からの若手の育成が不可欠だと思う。選考された一人ひとりの選手が、自分の体力や精神力及び技術力のアップを図ると同時に、指導者養成研修の実施や研究体制の確立、スタッフのサポート体制の充実を図りながら、各々が自分の置かれている立場を自覚し、自分の役割を果たすことが何よりも優先されるべきだろうと考える。こういう万全な体制づくりは、決して非現実的なことではなく、金メダル獲得は決して夢物語ではなくなるだろうと確信している。

## 手話通訳 井出 敬子

### 1. 自己の役割とその評価

手話通訳として情報保障を担当した。チームスタッフとして、選手が実力を発揮できるよう環境作りを心砕いた。チーム構成はろう選手8名、ろう者スタッフ2名、きこえるスタッフ3名。内容はスタッフ間、選手とスタッフ、審判と選手スタッフ、会場ボランティアと選手スタッフ、選手とメディカルチームのコミュニケーションを手話通訳。他にメディア取材、旅行会社・看護師の全体説明、本部（挨拶・ミーティング）、ドーピング検査同行等があった。2021年そして、2022年本大会まで行った合宿は9回、延べ23日間。手話通訳者としてほぼ全てに参加できたので、選手とのコミュニケーション、通訳方法は迷いなくできた。中でも、試合中の1分間のベンチコーチの手話通訳は最も緊張を強いられる瞬間である。1分間という短い時間に、ベンチコーチは次に何をやるのかを具体的に選手にアドバイスを。冷静に相手選手を分析しつつ、選手のプレイスタイル、性格を熟知しているからこそその言い回しになる。選手、コーチ、手話通訳者のイメージを一致させるために、専門的な知識や技術が要求される場面です。

競技と国際交流が特徴のデフリンピックですが、今大会においてはコロナ禍での開催であることから、積極的な国際交流は叶わなかった。それでも、現地の審判、ボランティア、TDに相談する、協力を仰ぐことが多々あった。ジェスチャーやスマホの翻訳機能を駆使したが、改めて、国際手話の必要性を痛感した。国際大会の前にはいつも講習会に参加するが、より実践の場数を踏むことが大切だと感じる。

追記：今大会、卓球競技において、手話通訳を帯同していたのはブラジル、韓国、日本の3ヶ国。表彰式の国歌に手話通訳がついたのはウクライナと韓国でこのときは非常に盛り上がっていた。（一部映像あり）

### 2. 今後の課題

まず、このような貴重な機会を頂いたことに深く感謝します。卓球日本代表選手、及び日本ろうあ者卓球協会強化本部の活動に、多大なるご支援、ご協力いただいた皆様に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

コロナ禍のデフリンピック開催に、どの競技団体も感染リスクと出来る準備を鑑みて、議論に議論を重ね派遣を決断している。卓球チームにおいても選手スタッフ全員が3回のワクチン接種をし、合宿前後にはPCR検査をし、日々の生活でも感染防止対策を徹底してきた。そして、ブラジルの卓球会場に行き思わされたのは、そもそも文化が違う！ということだった。満席の観客席、地元ブラジルチームの勝機に地響きがするような歓声。審判、ボランティア、他国選手団、ほぼノーマスクだった。台湾、韓国、日本は練習中もマスクをし、こまめにアルコール消毒を行った。（後日、台湾チーム5人全員の陽性が判明）試合が始まって7日目、日本選手団は全競技すべての試合を出場辞退することになり、卓球競技は最終日、シングルス決勝トーナメントを棄権。翌々日（帰国前日）のPCR検査で13名中、5名の陽性が判明した。そのひとりが私であり、多くの方々に心配していただき、ご迷惑をおかけしてしまいました。いつ？どこで？気の緩みがあったのか。隔離期間中、ずっと同じことを考えた。例え落ち度がないとしても、感染してしまったことで試合を棄権した事実は変わらない。

デフリンピックは選手の夢の大舞台。そこで、多くの選手の夢を奪ってしまった。選手を泣かせてしまった。ずっとスポーツ通訳に関わってきて、余りに辛い現実に打ちのめされた。ただ、多くの方々のサポートのお陰で無事に帰国できたことには、感謝しかありません。隔離期間中、ずっと寄り添ってくださった看護師の染谷さん、新谷さん、日本食を届けてくださった南日伯援護協会の皆さん、温かい食事を手渡ししてくださったホテルのスタッフ、グロリアアーツの皆さん、卓球チーム陽性者5名分の水や食料調達のため、毎日スーパーを往復してくださった大平さん、ありがとうございます。人の温かさや優しさが心に染みしました。

## 1. 自己の役割とその評価

今回、私に与えられた役割としては以下の通りである。

### ① トレーナーバッグ物品の管理

卓球は競技特性から出血対応なども少ないため必要最低限の外傷処置の補充、汎用性の高いテープを準備した。常備薬としてはブラジルという場所での食事環境への不適応を考え整腸剤や下痢止め剤をはじめ、痛み止め、解熱剤を多めに持参した。

### ② 選手教育資料の作成

今回はブラジルまでの長時間のフライト、時差が-12時間もあるため早期の現地適応が求められた。そのため日本出国前から時差対策、コンディション維持のために行なって欲しいことを資料にまとめて選手に配信した。この資料に合わせて食事のタイミングについても説明した。また、今回参加選手の多くはドーピング検査未経験であるために、ドーピング検査方法の手順についても資料にまとめ口頭での説明も行なった。これ以外に、食事を全く取れない選手がいたために食事に関する資料を作成した。

### ③ ドーピング関連（服薬中・持参する薬、サプリメントの確認と、英字資料作成）

大会期間中にドーピング検査の対象になるかは完全にランダムであり、今回はメダル獲得した選手というのが基準だったように思える。ドーピング検査にあたり、過去1週間の服薬状況を求められるために、選手の服薬状況を日本出国前から細かく確認しリスト化し、主成分を英字にしたものの準備が求められた。そして今回は、団体戦でメダルを獲得した2名が初めて検査の対象となった。

### ④ コンディショニングチェックシートの作成

今回、日本国内でのコンディショニングチェックと、ブラジルでのコンディショニングチェックシートを作成した。これをまとめ選手にフィードバックすることはしなかったが、体重の変化や睡眠の状況については確認し対応をした。今回は時差適応ができたかを確認したいという目的もあり、さまざまな項目の回答を求めていたが、気になれば口頭での確認を行い、質問項目を減らすべきだったと感じた。

### ⑤ コンディショニング対応

今回、ケアの要望が高くなることは予想できたために、ブラジルに入る前に全選手の体を確認し、トレーナー側としてのケアの準備を行なった。この確認は日本とブラジルとの体の比較ができ、有用な確認であった。このケアについては選手8人に対して1人のトレーナーで行う必要があったために、選手1人あたり20分程度の時間しか設けることができ

なかった。そのため、普段から必ず行なって欲しいケアの内容をブラジル到着後に全体ケアとして指導し、可能な限りでセルフケアを行い、+αとして私のケアを行うようにと忠告した。その他の仕事として役割としてウォーミングアップ指導も行った。今回気づいた点として長時間のフライト移動のためか、横隔膜の働きが弱くなり、姿勢が崩れ、腹部への力が入りにくくなった選手が多くいた。そのため、毎回のウォーミングアップ時に呼吸エクササイズと腹圧エクササイズを必ず行なった後にいつものアップ内容を実施した。

## 2. 今後の課題

今回、私は初めてのデフリンピックの帯同であったために、トレーナーとしてだけでなくチームスタッフの一員としてどのような対応を求められるのか把握し切れていないところがあった。そのためその場その場の対応ばかりになってしまった。基本ではあるが、密な連絡を徹底すべきだと感じた。また、今回チームにおいてトレーナーがつく初めてのデフリンピックであった、これまでに様々な関わりを選手に対して行ってきたが、今回のデフリンピックは一つの区切りになる。早急に今後の短期・長期目標を考案し、チーム全体で共有し目標におけるプロセスを実行に移す必要があると考えられる。

選手 井藤 博和

### 1. 当初の目標（自己目標）

男子団体、混合ダブルス、男子ダブルス、男子シングルスのうちいずれか2つ以上でメダルを獲得する

### 2. 結果に対する評価

男子団体：3位

混合ダブルス：ベスト8

男子ダブルス：ベスト16

男子シングルス：予選リーグ敗退

自己目標にはあと一步届かなかったが、初参加のデフリンピックでメダルを獲得できた点は嬉しく思う。特に混合ダブルスは優勝したウクライナのペアに接戦で負け、悔しい思いをしたが、その反面で対等に戦えるんだという自信にもなった。概ね実力相応の結果になったとは思いますが、満足はしておらず、もっと勝ちにこだわったプレーができるようにならなければならないと感じた。

### 3. 今後の課題

初めてのデフリンピックだったが、男子主将に任命され、プレッシャーに襲われる日々が続いていた。しかし、そういったことも含めて、良い経験をする事ができたと思う。世界で勝つためには、技術面で何らかの秀でた特徴が必要であり、変化・変革を恐れずに挑戦し、進化することが大切だと感じた。私は年齢的にベテランではありますが、今のままのプレースタイルではなく、勝つために内容を変えて今後に向けて練習に取り組もうと思う。他の国の強い選手を見ていると足がしっかりと動いており、トレーニングの重要性も改めて認識した。また、緊張のため、サーブのコントロールが悪くなり、普段の練習や試合でのメンタルの持ち方も工夫しなければならなかったと感じた。今大会の特徴としてコロナ感染対策が挙げられる。国によって対策のレベル差があったが、日本を含めたアジア圏の国はマスクや消毒等の対策ができていたように見受けられた。ストレスを感じた部分はあったが、落ち着くまでは日頃からコロナ感染対策をしながら体調管理等を今後も継続していかなければならない。

スタッフや仲間、家族、会社のバックアップなどご支援・応援いただいた皆様のおかげで今大会に臨むことができた。本当にありがとうございました。

選手 亀澤 史憲

### 1. 当初の目標（自己目標）

種目を問わず、「メダル獲得」を目標とした。それを通じて、子どもたちに夢や希望を与えること、またデフリンピックでの結果を報告することで、これまでお世話になった多くの方々への恩返しをすることを目標とした。

### 2. 結果に対する評価

男子団体戦で銅メダルを獲得することができ、「メダル獲得」を達成できたことは十分評価できる。さらには男子としては21年ぶりのメダルということで大きく前に進むことができた大会であった。自分自身も団体戦で要となって試合に出たので、そこで貢献できたことは嬉しく思う。しかし、個人種目では途中棄権になった種目もあるが、メダル争いに絡めずまだまだ自身の実力不足を痛感した。また日本男子としては国際経験が少ないメンバーが多く、今回の大会ではイメージがしづらいこともあったかもしれないが、この経験を機に次大会へ向けて貴重な経験を積むことができたことは収穫である。

### 3. 今後の課題

男女ともに世界のレベルが年々上がっている状況である。今回の上位諸国は卓球を生業とし、高いレベルにその身を置いていることが常識となっている。このままでは日本も世界に置いていかれることは目に見えている。次回デフリンピックに向けて、国内競争をさらにレベルアップさせ、世界を見据えたステップアップを図らなければいけないと考える。

選手 川口 功人

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・団体戦メダル獲得
- ・ダブルスベスト8
- ・ミックスダブルスベスト8  
シングルスベスト8

### 2. 結果に対する評価

- ・団体戦3位
- ・ダブルスベスト16
- ・ミックスダブルスベスト8
- ・シングルス予選敗退

自分が定めていた目標とほぼ達成できたのではないかと思う。ただシングルスは予選敗退となり、とても悔しい結果となった。

### 3. 今後の課題

今回始めてデフリンピックに出て、世界のレベルを自分で体感することができ、今のままだと今後勝てないというのがわかった。今持っている技術では世界には通用しないので、まずは技術力を上げていくことと試合の戦術面を増やしていくことが今後の課題だと思う。また、今回のデフリンピックを通して、本部や監督をはじめスタッフの方々が僕たちのためにサポートや様々な準備をして頂いたおかげで、集中して試合に臨むことができた。本当にありがとうございました。

選手 瀬光 晋太郎

### 1. 当初の目標（自己目標）

どの種目でもいいので銅メダル以上を取る。デフリンピックの卓球競技のレベルを考えると、正直金メダルは殆ど目標にしていなかった。

### 2. 結果に対する評価

団体戦で銅メダルを取ることができたが、他の種目ではメダルが取れなかった。今後は一種目だけで

はなく、複数の種目でメダルが取れるような目標設定をして、自分の行動を変えていくべきだと感じた。しかも、団体戦の銅メダルも、メダル決定戦で3:1以上のスコアで勝利しないとメダルを獲得することが出来ない状況等、本当にギリギリでの獲得だったので、現状に満足することは決してできない。むしろ、当初の予想では男子の種目でメダルを獲得するのは厳しいだろうと言われていたように、自分たちの実力が足りないことは明白であり、奇跡的にメダルを獲得できたことは本当に嬉しいし、評価すべきことであるが、次も同等またはそれ以上の結果を残すことは相当厳しいので、大会が終わった瞬間から次大会で再びメダルを獲得するために自分は何ができるか、本当に真剣に考えて行動する必要がある。

### 3. 今後の課題

メダルの獲得がギリギリだったことも踏まえて、今後はより確実にメダルが取れるような実力を次回までに身に付けていかなければならない。体調を崩したり、コンディションが万全でない状態で試合することが今大会では多々あったので、アスリートとしての普段の自分の行動を見直すことが、コンディショニングや、実力の向上につながると感じた。そして、このことを忘れてしまわないように、日頃から意識をする等も併せてやっていく必要がある。

選手 亀澤 理穂

#### 1. 当初の目標（自己目標）

私にとって4回目のデフリンピックだが、ママアスリートとして出場するのは初めて。前回までは全種目のうちに2個ずつ獲得したが、今回はどの種目でもいいので一つでも金メダルを獲得すること。でもそれよりも何色でもいいので全種目のメダルを獲得することを目標にした。

#### 2. 結果に対する評価

今回は強豪の中国とロシアが出場しておらず、チャンスはあった。しかし競技結果としては、団体準優勝、女子ダブルス3位、ミックスダブルス1回戦敗退、女子シングルス決勝トーナメント（ベスト16）で棄権という結果になった。ママアスリートとしてメダルを獲得する事が目標だったので、達成した時は「努力は裏切らない」という言葉は本当だと実感した。やはり金メダルが欲しかった。この2個のメダルは、ここまで私を応援して下さった方々と一緒に獲得したメダルです。私をアスリート雇用として採用し、たくさんの支援等して下さった会

社、私を支えてくれた家族、仲間、友人には本当に感謝いっぱいです。そして現地で動いて下さった方々もありがとうございました。

### 3. 今後の課題

今回、自分自身に一番感じたことは今まで味わったことがなかった『1本の重み』。あと1本なのになかなか取れない、逆転される場面が多かった。苦しかったけど、それを味わえたことが次の成長につながると信じて、反省を生かしながら今後の練習やトレーニングを頑張りたい。そして今大会は今までと違ってコロナの中で様々な規制があり慣れない環境で高ストレスに悩まされた。選手がベストパフォーマンスに持つていくために精神面でのコントロールをすべきだったが、それが出来てなかったことが大きな要因。選手には負担かからないようにもっとサポートすべきだと思うので協会の方もきちんと体制を見直して、2025デフリンピックはよりよいサポートになればいいと思う。

選手 川崎 瑞恵

#### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピックでの目標は、全種目メダルを取ることだった。その中でも1番の目標は、シングルスでメダルを取ることを目標にしていた。

#### 2. 結果に対する評価

コロナが流行っている中、延期になり、やっとデフリンピックが開催されたことはとても嬉しく思う。今大会はしっかりと気持ちが入り、自分のプレーができてよかった。初日からいろいろあり、精神的に悩む場面もあった中、試合では今まで以上に自分のプレーを発揮できたと思う。女子団体戦、女子ダブルスではメダルを獲得し、ミックスダブルスも良い結果を残せてよかった。団体戦については、正直なところ、今回はうまくまとまっていなかったかなと思う。改めて団体戦では心一つに、チームワークが大切であると実感した。今大会で1番印象に残ったのはシングルスです。シングルスでメダルを取ることが1番の目標だったが、予選リーグで韓国選手に負けそうなところから巻き返し、勝てたことに自分の成長を実感した。ただ、決勝トーナメント戦が棄権になり、目の前のチャンスを逃したのは非常に悔しい思いである。

### 3. 今後の課題

今回の試合では全てウクライナ選手に負けた。身



体作りをしっかりとやって、1週間でも丈夫な身体を作ることが重要だと思う。今回のデフリンピックよりも最高のパフォーマンスを発揮し、2025年デフリンピックには最高の色のメダルを取れるよう頑張っていきたい。

## 選手 立石 里吏

### 1. 当初の目標（自己目標）

デフリンピック日本代表に選出させていただき、メダルを取得することを目標に向けて、平日と土日を含めて週3、トレーニングをケガしない程度で取り組んだ。日本代表に選出させていただいた協会の皆様に恩返しできると思い、結果を残し、今までの力を果たせるようにしたいと思った。日本代表の良い点はチームワークが良いことなので、切磋琢磨して、メダルを取れると信じて、試合に臨んだ。試合前に緊張して体調不良になりやすいので、ブラジルで体調不良にならないように、日本での生活で気を付けた。

### 2. 結果に対する評価

ブラジルに着いて4日目の朝から体調不良になり、2日間部屋から出られず、休養したことが悔やまれる。また今大会は強化合宿でいつもお世話になっていた女性トレーナーがおらず、関係もあり、男性トレーナーだったのが残念。チームワークがうまく取れなかったことが自分の集中力に影響したことが悔やまれる。2025年デフリンピックではそういうことが起こらないよう望みたい。

### 3. 今後の課題

自分の集中力やパフォーマンスを高めたいので、トレーナーは男女別に一人ずつ手配いただきたいと思う。日本代表はチームワークや態度もその立場にふさわしいものであり、競技に集中してほしいと思う。

## 選手 山田 萌心

### 1. 当初の目標（自己目標）

団体戦・・・メダル獲得  
ミックスダブルス・・・ベスト8  
ダブルス・・・ベスト8  
シングルス・・・予選突破

### 2. 結果に対する評価

団体戦・・・2位

ミックスダブルス・・・ベスト8

ダブルス・・・1回戦敗退

シングルス・・・予選敗退

団体では銀メダルを取り、ミックスダブルスではベスト8入りと、この二つの目標を達成出来たので良かった。団体戦の準決勝では自分の勝利でチームの勝利に貢献できたが良かった。だが、シングルスは予選敗退、ダブルスでは1回戦敗退となり、とても悔しい結果になった。

### 3. 今後の課題

今回、初めてデフリンピックに出場し、様々な世界の選手と試合をすることができた。もう少しで勝てそうな場面があったが、サーブやレシーブ、ブロックミスなど、単純な自分からのミスが多かったと思う。また、世界の選手の球は回転量が多く、そのスピードにうまく対応できなかったことなども敗因の原因と思う。その点を今後の課題とし、次大会に向けてクリアできるように練習を重ねていきたい。

## バレーボール競技男子チーム

監督 村井 貴行

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

選手の選考について

以下の内容を選考基準に設定した。

- ・日本代表として自覚を持った行動や言動が伴っていること
- ・メダル獲得に必要なスキルを持ち合わせていること
- ・国内合宿に定期的に参加でき、地元や所属先でバレーボールスキルの向上に励むことができること
- ・チームの規律を重んじることができる人物であること
- ・チーム内での自分の役割を理解し、その役割に徹することができること
- ・誰からも応援される選手であること
- ・チーム戦術を理解し、チームを意識したプレーに徹することができること

スタッフの選考について

- ・チームの置かれている現状や目標を理解し賛同して協力する志があること
- ・チームのために自分の持っているスキルを発揮してくれること

- ・アスリートファーストで行動することができること
- ・集団での規範意識を持ち合わせていること

(選考方法)

2017年度から約5年にわたり強化選考合宿（月に1回程度）を行った。途中、コロナ禍の影響もあり、合宿や強化試合の中止も余儀なくされる状況であったことは、チーム強化計画において痛手となったことは確かである。特に対外試合の中止は実戦経験の乏しいチームにおいては苦しかった。意欲を持って合宿に参加してくれた選手は30名を超えた。しかし、いざ選手選考を絞ろうとした時に、チームに必要な人材であっても、その選手の取り巻く環境や選手自身のモチベーションが影響し断念せざるを得ない状況が数名いたことは残念ではようがない。選手を取り巻く環境においては、デフスポーツ全体で取り組んでいけないといけない課題ではないだろうか。内容としては、

- ・地元でバレーボールをする環境がない
- ・就職先に許可を得られることが難しい
- ・金銭的に家族の理解を得づらい

である。これは、選手に最善の支援ができたのであれば解決できたのではないかと考えられる。選手発掘においては、きこえない者の大会の視察を定期的に行ったり、きこえる者の中にも埋もれている選手がいなかった各県のバレーボール関係者に情報収集したりする等働きかけてきた。その結果、きこえる者と一緒にバレーボールを高いレベルでプレーしてきた選手を2名獲得できたことはチームにとって大きな収穫であった。

ただ、男子バレーボールチームは国際大会での経験が乏しい部分もあって、前述した日本代表としての自覚を持たせることには最後まで苦心したのが本音である。

## 2. 総評

結果として、途中棄権という最悪な結果となってしまったことは選手に申し訳ない気持ちでいっぱいである。しかし、今大会世界の強豪チームに対してもセットを奪取するなど、日本チームが世界に通用するレベルにまで向上した姿を見せられたことは喜ばしい限りである。

### ①事前国内合宿

デフリンピック本番を見越してチームコンセプトをはじめに周知して計画的に行ってきた。

チームコンセプト

- ・どのチームよりも速く、粘り強く、諦めないチーム

そのためには、個人の技術体力の底上げが始めの

課題であった。合宿だけで向上を図ることは困難であったため、各選手に必要なトレーニングや次の合宿までに解決すべき課題を設け、地元に戻ってからも努力することを課してきた。地道に努力する選手もいれば、仕事などの環境によって難しい選手もいた。最終的には、努力を続けられた選手が選考に残っていった。そして、チーム力向上に照準を絞ろうと舵を切った矢先にコロナが蔓延し、合宿が中止に追い込まれる状況となった。未知のウイルスとの闘い、デフリンピック自体が開催されるか、参加したときに感染するかもしれないという不安から、モチベーションを理由に辞退する選手がいたことは残念であるが仕方のないことであった。合宿再開後も、国内の感染状況や政府の発令する内容を加味して選手の安全を第一に考え急遽中止することもあった。また、合宿を行えたとしても参加選手が10名に満たないことも多々あった。チーム練習をするのには困難な状況が続いた。それでも、選手たちは前向きに自分のすべきことを考え努力してくれたことは嬉しかった。実際、フルメンバーが揃った合宿を行えたのは2022年の3月であり、デフリンピック本番まで1ヵ月を切っていた。選手たちにはどこの国も困難な状況で参加しているのであって、自分たちだけが辛い状況でないことを説明し、前向きに考えるよう促した。実際、フルメンバーが揃った3回だけの合宿でチームの戦い方を浸透させることはとても難しかった。このコロナ禍の中で、対外試合に応じてくれた高校や大学、社会人チームにはとても感謝している。

### ②ブラジル大会参加にあたっての事前確認

大会参加にあたって、男子バレーボールチームは個人競技とは違い団体競技であり、選手の安全や補償面での折り合いを含め最後の最後まで迷ったのは確かである。しかも、多額の個人負担金もある中で参加である。男子チームとしては、事前にくつかりの確認をろうあ連盟と行っただけで少しでも選手の不安を解消してから行くべきだと判断した。いくつかの質問を全日本ろうあ連盟に投げかけ、回答をもとに最終的には、選手の5年間の頑張りも含め参加する判断に至った。それでも、ウィズコロナと肝に銘じて参加する覚悟であった。

### ③ブラジル現地入りしてからの生活

チームの規律、日本代表としての振る舞いについてどうあるべきかをそれぞれに考えさせた。世界からリスペクトされるチーム、応援をしたくなるようなチームになろうと意識づけた。実際選手の姿が現地の観客の心を掴み、他国の日本であっても応援してくれる人が多かったのは嬉しかった。長旅の疲れや、行動制限などのストレスからか体調を崩す選手

が多くいた。実際、初戦のポーランド戦前日練習に主力二人を体調不良で欠く状況となったことは痛手であった。

#### ④試合

##### 初戦 対ポーランド

セットカウント2-3の惜敗であった。前日練習で詰められなかった所が如実に露呈される結果となり悔やまれる。選手たちはこの試合で始めて190センチ以上の相手と対比し世界の高さを感じるようになった。それでも、勇敢に多々会う姿勢は頼もしかった。いずれのセットも20点以上の攻防で、そのうちの3セットはデュースという僅差であった。また、全選手が出場し、それぞれ活躍したことは全員で戦うことを体現することができた。勝負の分け目となったのは、ローテーションミスやネットタッチなどの防ごうとしたら防げたミスである。ただ、戦いの中で選手たちの中に体格に上回る相手にも対等に戦える自信が生まれたのも確かである。

##### 2戦目 対ブルガリア

世界ランキング的にも日本より世界ランキングが下位のチームとの対戦となった。ただ、チームの平均身長は10センチも高い相手であった。序盤から、日本チームのスピードや守備力で相手を圧倒することができた。控え選手も多く出すことができ、それぞれの役割を果たすことができた。途中、流れが悪い場面もあったが、要所で展開を打開するスパイクやサービスエースを奪うことができ、地力の差を見せることができた。結果、3-0のストレートで勝利を収めることができた。

##### 3戦目 対ガーナ

2戦目に続き日本より世界ランキングが下位のチームとの対戦となった。試合前に相手チームにリスペクトの気持ちを持って手を抜くことが無いように釘を刺しておいた。ガーナチームは発足して間もないこともあり、3-0のストレートで勝利することができた。試合後、背が決して高くない日本チームの戦いぶりや技術力に感銘を受けたガーナチームが、日本と交流して自チームを強化したいと申し出を受けた。お互いにリスペクトできる関係になれたことは国際交流という意味でも価値があった。

##### 4戦目 対ウクライナ

世界ランキングも常に上位で、メダル獲得常連の強豪国との対戦となった。今まで日本は競うこともできなかった相手だったが、平均身長が15センチ以上高い相手にも選手たちは臆することなく立ち向かった。相手の攻撃を何度も何度も粘り強くレシーブし、魂をこめて攻撃する選手の姿は、ベンチから見ていて大変感動するものだった。何よりも、選手たちの熱き姿が会場の観客の心を動かし、いつしか

日本を応援する声が大きくなっていったことを覚えた。結果は1-3の惜敗だったが、収穫が多く、日本チームの可能性を期待させる試合だった。しかし、悔やまれるのが2セット目、23-20でリードしているにも関わらずに、セットを落としてしまったことであった。

##### 5戦目 対トルコ

前大会王者、そして今大会も連覇を果たしたトルコとの対戦であった。結果は0-3のストレートで敗戦となってしまったが、内容は相手チームにも見劣ることのないものであった。いずれのセットも20点以上取ることができ、リードする場面もあった。ただ、勝負を分ける場面での自チームのミスや相手チームの集中度が高まったプレーに屈したことは、今後の日本チームの課題として突き付けられた。

##### 決勝トーナメント1回戦 対イタリア

Bグループ1位通過、ヨーロッパ選手権3位の強豪校との対戦となった。連戦の疲れからか、選手たちの動きは決して良いものではなかった。結果0-3のストレートで敗戦となった。それでも、どのセットも拮抗した戦いができたことは収穫である。ただ、敗戦の原因としては、ミドルの攻撃が日本チームは思うように機能しなかったことに対して、相手チームは機能していたことと、日本が長所としている粘り強さを発揮できなかったことにあるだろう。

##### 決勝トーナメント 5-8位決定戦 対ブラジル

不戦敗。

日本選手団本部からの通達により棄権となった。試合会場においては、日本独自の感染対策を行い他国の選手と接する機会はなかったのにもかかわらず危険となったのは正直、いまだに納得いかないし、しっかりと説明責任を果たしてもらいたい。何よりも選手を裏切ったことには非常に遺憾である。

しかし、これらの試合を通じて、選手達は世界と対等に戦えるという強い自信を得ることができたと感じた。そしてこのような僅差の中で勝つためのあと1ピースをどのように埋めるのか、それを確認するために残り2試合を全力を挑もうと準備をしてきた。特に、ウクライナ戦で見せた戦い方は今後の日本代表にとって明るい材料であることは確かである。戦力で勝る相手に対し、試合に出ている選手、ベンチメンバー、スタッフが丸となって奪った象徴的なセットで、今後の日本チームが目指す戦い方であった。

### 3. 今後の課題

チームについて

今回の大会で世界との差がぐっと縮まったのは確かである。しかし、課題も多く見つかった。今後ど

のような強化が必要かをまとめていきたい。

### ①継続的・持続的に強化合宿時に選手が集まれる環境づくり

日本チームの戦いはチームの習熟度による、他国に無い連携攻撃や組織的な守備にあると考える。そうしたものを作り上げるにはメンバーが揃っての強化合宿が必須である。しかし、今回の大会までの期間にて、選手の職場や学校の都合で参加できないケースが多く見受けられた。所属先の協力をもっと仰がなければいけない。こちらも企業にとって有益になるようなバレーボール教室開催や講演会活動なども必要になるだろう。

### ②ファーストテンポ攻撃の強化

今回の大会で日本チームはファーストテンポ攻撃の比率が非常に低かった。要因としては、精度の問題や海外の高いブロックを対比したときに使う信頼感が低かったことにあるだろう。それを解決するためには、セッターとミドルブロッカーの連携強化と、個々の技術の向上があげられる。特にセッターの技術向上はファーストテンポに限らず、すべての攻撃を担うものであり必要不可欠なものである。

### ③試合の勝敗を分ける終盤の戦い方

今大会ではどの強豪国に対してもセットの終盤までは競ることができた。しかし、終盤になると失速してしまう傾向にあった。その要因としてはいくつか挙げられる。

- ・攻撃のバリエーションの少なさ
- ・対外試合経験の少なさ
- ・終盤になっても怯まずに戦う勇氣

最後の怯まずに戦う勇氣はとても抽象的になってしまったが、勝敗を左右するにおいては重要な要素である。

#### 選手のサポートについて

デフバレーボールに限らずデフスポーツ全体の課題であるかもしれないが、国を代表して戦いに臨むにあたって選手やスタッフの負担がある現状は全く改善されていない。オリンピック、パラリンピックと同列に位置するデフリンピックでこのような現状は許されない。

#### 普段の環境

代表合宿は月に1回程度しか行うことができず、直接的な指導は年に多くて12回程度となってしまう。世界と戦うためには個々の強化が必須である。しかし、地元で十分に定期的にボールに触ることができる選手は何人いるだろうか。恐らく2、3名であろう。今後、選手が時間と場所を確保できるかが重要である。そのためにも、各県のバレーボール協会や高校などにも練習の傘下の許可も含め協力をお願いすることが需要である。

#### スタッフのサポート

ブラジルデフリンピックに参加するにあたって、スタッフのサポートなくしては考えられなかった。しかも、本業とは別に莫大な時間を割いてほぼ無償状態で働いてくださった。感謝しても感謝しきれない。

#### 最後に

この大会に向けて、男子チームは足掛け5年をかけて準備してきた。途中、コロナ蔓延によって合宿の中止や縮小が余儀なくされ、それでも選手たちは腐らず言い訳することもなく、チームが勝つために自分の役割を精一杯こなしてくれ、チームが一体となる手応えを感じていた。選手のこれまでの努力や大会に懸ける思いを考えると、何とかして試合を続行させたかった。バレーボールチーム独自の感染症対策を提案するなど、本部とも連日連夜の交渉を行い手を尽くしたが、残念ながら決定は覆らず、今回の棄権という結論に至り自分の非力さを恨んだ。次回の大会ではこの悔しさをバネにメダル獲得という悲願を必ず達成してくれると信じている。最後に、選手・スタッフのご家族や関係者の皆様、応援してくださった全ての皆様には厚く感謝の意を表する。

コーチ 竹内 準

### 1. 自己の役割とその評価

今大会において、男子バレーボール競技のスタッフ（コーチ）として初めて国際大会に帯同し、コーチの立場から選手に対するテクニカル面でのフォローの他、大会期間中は対戦相手のスカウティングを中心に担当した。まず、テクニカル面では監督との事前打合せに基づくチーム戦術・戦略に沿った活動計画や練習メニュー提案の他、実際の練習・試合に於ける選手プレーへの技術的なアドバイスと各選手の課題創出から解決に向けたサポートをした。また、スカウティングについては、大会期間中、競技会場に於いて対戦相手の情報をビデオ撮影及び目視により収集し、ホテル自室にてデータ分析から抽出した対戦相手のプレーや基本戦術の傾向と対策を次試合までに纏め、試合前のチームミーティングで情報を共有することでチームの勝率アップに繋げた。

今大会に向けた準備期間から本番に至るまでの自身行動について自己評価すると、全体観としてコーチとしての役割は果たせていたものと思料している。特に大会期間中のスカウティング面に於いては、データ分析から用意した対戦相手の対策が試合中の1点に繋がったシーンも多くあり、非常に効果的であったと感じた。一方、大会迄の準備期間に於

いて、コロナ禍による活動制限がある中でのチームプレー強化については、自身も不安に感じていたことであり、実際、本番の試合でもチームプレーが噛み合わないことで失点に繋がるプレーも見受けられた。この点は何か有効なアクションをもっと図れると良かったと感じている。

## 2. 今後の課題

次回デフリンピック大会に向け、デフバレーボール日本代表チームが今大会以上の成績を残す為には以下①～⑤が今後の課題と思料する。

### ①デフバレーボール競技の周知

日本国内に於けるデフバレーボール競技の認知はまだまだ低いものと考えている。次回大会に向け、今以上に本邦デフバレーボールの周知を図り、若手選手層を中心に日本代表に興味を示す選手を多数集めることでよりバレーボール能力の高い選手を選抜することを目指す。

### ②スポンサー獲得

日本代表チームが世界の代表と戦う為にスポンサーの存在は非常に大切であると考えている。まだまだデフバレーボール日本代表チームのスポンサーは少ないため、今後もサポートいただける企業との交渉は注力すべきことと思料する。

### ③選手のフィジカル面の強化

今回初めてデフリンピックにコーチとして帯同したが、世界の選手と比べて日本代表メンバーは体格面で非常に劣っていると感じた。身長が小さいことは人種の壁もあるため、解決は難しい課題だが、筋力や瞬発力等、トレーニングでクリアできる課題は多々あると感じている。

### ④選手のテクニカル面の強化

③で述べたように日本代表メンバーは世界に比べて小さい選手が多いため、フィジカル面とは別にバレーボール技術でも特にレシーブ力の強化は必須であると感じた。

### ⑤日本代表としての自覚を持つ

今大会に於いて、日本代表メンバーは初参加となる若手選手も多く日本代表として考え方が足りないと感じる選手も少なくなかった。次回大会に向け、気持ちの面も含め、日本代表としての自覚を持つことをテーマに代表合宿ではカリキュラムを組むことも必要だと感じた。

トレーナー 西原 翔太

## 1. 自己の役割とその評価

今回、第24回夏季デフリンピックに男子バレー

ボールトレーナーとして参加した。トレーナーに選出されたのは3月であり、代表選手スタッフと関係性信頼性を構築する前に大会派遣となったが、普段から様々なカテゴリーのバレーボールトレーナーをしている立場として自己の役割とその評価について報告する。自己の役割は、①バレーボールチームトレーナーとしてウォーミングアップ、クールダウン、プレー前のテーピング、練習後のケア、試合前後の補食指導、②遠征期間中の栄養指導やコントロール、③日本選手団メディカルチームと連携してコロナ対策や体調管理、④日本選手団メディカルチームと連携して聴力検査フォローやアンチドーピング指導を行った。①では、ウォーミングアップではダイナミックストレッチを取り入れ全身の動きやすさとウォーミングアップ終盤では心拍数を上げて練習や試合に入りやすい状態を作ること意識した。選手からは動きやすいと好評であったが、一部靴ひもを締めずにアップに参加して、紐を締めるよう声掛けしても是正することが出来なかった選手もいたことが課題である。クールダウンは今大会の大きな成果の一つであると言える。元々ダウンの意識も低く、行わない選手などがいた。今回メニューを決め、チームで輪になってクールダウンを行うよう徹底し、大会期間中には選手たちにもメニューを覚えてもらい、当番制でクールダウンを実施した。選手たちで主体的に完遂できるところまで指導できたことは大きい成果であると言える。テーピングは、指の関節を捻挫している選手、肩が痛い選手、腰が痛い選手、ふくらはぎが攣る選手などおり、毎日5～6名対応した。テーピングのあるなしで痛みが変わることや移動のバスの中でテーピングを行い練習にすぐ入れるように行うことが出来たが、半分以上がテーピング必要者が多い状態であったので遠征前からテーピングの必要ないレベルまでトレーニングなどを実施し、試合に臨めれば理想的だと考える。練習・試合前後のケアやコンディショニングに関しては、1日5～6名と予定より少ない対応数となってしまった。当初のシミュレーションでは、ホテルのトレーナー自室にて対応予定であったが、感染対策上、本部メディカルよりトレーニングスペースでのケアコンディショニングを行うよう通達があった。チームの試合スケジュールとスペースの時間が合っていないこともあり、選手の対応件数を絞らざるを得ない日が出てしまった。5連戦1人の欠場者も出さず対応できたが、出国前から本部メディカルとの取り決めを密に行っておくべきであったと考える。試合前後の補食指導や②の栄養指導なども今大会で苦労した点である。年代別の県代表選手などは事前の学習や国内大会での対応などで経験しているところである

と思われるが、今回初選出の選手も多く、試合が重なっているタイミングで炭酸ジュースを飲んだり、夜中にカップラーメンを食べ、嘔吐するなどがみられた。ドーピング検査に引っ掛かりそうな事象は防げたし、検査対象もなかったが、初の海外遠征や普段と環境が変わると思ってもよらないことが起きることを肝に銘じ、今後も試合に出場できない、ドーピング検査に引っ掛かるなどがないように対応していかなければならない。③、④のところでは、特にブラジルでの感染対策においてNFトレーナー、本部メディカルともに苦労したと思う。バレーボールでは2週間前からの体調管理・報告はもちろん、現地試合会場とも協力して、日本チームは動線を分けてもらったり、試合中のチェンジコートは行わないなど徹底した管理を行った。国際大会の楽しみである観客や相手チームとの交流も最低限にし、楽しみは半減にしながら感染せず試合を行うことに尽力した。ホテルでの対応も本部メディカルの決定に従いながら行い、必要に応じて競技団体の意見も伝えさせてもらった。時には根拠もわからず一方的に通達されるように感じることもあったが、ただ、たくさんある団体の意見を反映する余裕はあの現状ではなかったため、こちらもやはり事前の話し合いや取り決めを密に行っていくべきであったと思う。棄権という結果は大変残念であり、本部メディカルチームもNFも大変だったのは間違いないが、当時の対応と事前の取り決めなどが適切だったのか多角的に検証していく必要があると考える。

当初の想定よりも、たくさんの業務があり大変であった。イレギュラーなことに柔軟に対応できず、チーム目標の金メダルに届かなかったため課題の残る大会であったと自己評価する。しかし、想定通りのことばかりでない方が人は成長すると考えられるため、今回の経験を糧に次回以降活かせるようにトレーナーの立場から取り組んでいきたい。

イレギュラーなことが多い大会派遣であったが、総じて伸びしろが多く、成長の機会ととらえ経験を活かしていきたい。

マネージャー 鶴見 将史

## 1. 自己の役割とその評価

### 【役割】

#### ①チームの派遣準備に関する諸業務

##### (1) 派遣に向けた各種手続き、確認

- ・必要事項、書類の取りまとめ
- 名簿、写真、パスポート、ワクチン接種証明書等

・派遣に関する質問事項の取りまとめならびに本部確認

- 派遣判断基準、感染症対策、セキュリティ、負担金等

・各チーム手配の食事、通信についての準備

- 非常食、Wi-Fi、周辺店舗調査等

#### (2) 旅行会社との移動、宿泊関連の調整

- ・個人およびチーム荷物の取りまとめ
- ・航空会社ごとのルール確認、周知
- ・国内移動および成田での宿泊調整

#### ②チームの滞在中の各種マネジメント、サポート業務

##### (1) 日本選手団本部、メディカルとの各種連携

・競技日程およびバス手配依頼

- 旅行会社との毎日の競技/練習予定の共有、バスの時間調整、チームメンバーへの周知

・感染症対策や体調不良者対応、帰国時手続き等についての各種共有、調整

##### (2) バレーボール競技会場、TDとの各種連携

- ・TD会議出席、競技日程/結果確認

- ・会場利用、感染症対策についての調整

##### (3) 現地における宿泊、食事、競技全般のサポート

- ・食事、水、ランドリーの手配調整

- 毎日の夕食の時間調整/チームへの共有、昼食の買い出し/配布、水の買い出し/配布、洗濯物の提出/回収

#### ③広報およびスポンサー等対応業務

- ・選手所属先およびスポンサー、サプライヤーとの支援調整等各種コミュニケーション

- ・派遣期間を通じてのSNSを通じたチーム、競技等情報発信

### 【評価】

#### ①チームの派遣準備に関する諸業務

派遣に係る事務的な準備についてはワクチン接種証明書など慣れない手続きがあったものの、選手、スタッフ16名分を滞りなく完了した。

#### ②チームの滞在中の各種マネジメント、サポート業務

日々状況が変わる中で、選手団、メディカル、各チームが常に連携する必要があり、コミュニケーションコストが高い滞在となった。現地での外部との意思疎通に関して、手話、国際手話、英語、ポルトガル語が飛び交う状況で、手話通訳やアプリ等を介して行ったが、健聴者である自身としては今後基本的な手話と英語のスキル向上が必須であると感じた。

#### ③広報およびスポンサー等対応業務

選手所属先やチームメンバーの関係者など、以前

から競技や選手を知っている方や支援者には直接的に各種情報を発信することができた。反面で一般的な知名度はまだだと感じているため、今後とも大会前後の期間も含めた広報、プロモーションを強めていくべきである。

## 2. 今後の課題

- ・チームの派遣準備に関して、時間的にかなりタイトであり、コロナ禍での派遣に際し懸案となっていた派遣判断基準/感染症対策/セキュリティおよび現地情報全般の情報が少ない、急な負担金の回収も発生する等、事前の準備内容の課題は多い。
- ・滞在中の本部、メディカル、各チームの連携に関して、目的別にLINEが複数立ち上がる中で、「本部→代表者（またはトレーナー）→チームメンバー」という連絡が多く結果的に共有遅れや漏れが発生した。日本選手団としての効率的なコミュニケーションのあり方の設計が必要と感じた。
- ・昼食、水についての準備はチームにとって金銭的にも人的にも負担が大きかった。日本選手団のバブルを形成する中で本来は本部と現地事業者での手配がベストと思われるが、準備期間や現地との連携の難しさがあったように思う。（次大会での改善を期待したい）
- ・今大会の中継、アーカイブ対象の試合が少なかった点は広報面で大きな機会損失であり、日本選手団として独自の交渉、対応が取れるとよかった。また、過去最高のメダルを獲得した大会の反響としては寂しいものであり、今回の実績や選手、チームにフォーカスしたコンテンツなどをしっかりと大会前の各種PR、メディア展開に活かす必要がある。

### 手話通訳 長松 郁弥

#### 1. 自己の役割とその評価

監督、コーチ、マネージャーやトレーナー、その他現地のTD（競技責任者）や試合会場における関係者、審判等とのチームにおける手話通訳を担当した。このチームにおいては5年間手話通訳を担当し、スタッフにおいては全員きこえる者であり、スタッフの特徴を把握した上で手話通訳を行うことができたと考える。また、バレーボールは男女それぞれにチームがあり、TD会議においては男子チームのスタッフが出席し、そこでの通訳を担当した。国際手話とスライド、また会議場においては多言語通訳が

準備してあり、英語とポルトガル語を選択することができたため、英語を選択しそれを聞きながらチームにおいて重要事項を日本語に翻訳等を行った。国際手話と英語については単語や文脈で把握する程度となり、十分に通訳ができたとは言い難いものとなってしまったことは反省点であった。バレーボール競技において、手話通訳者はベンチの後ろに位置していなければならない、タイムアウトなどの時を除き席から立ってはいけいとされている。そのことから試合中の監督やコーチ等の指示を座りながら大きく表出したが、距離が遠いために選手に伝わりにくい場面があった。コロナ禍ということもあり対外試合、特に国際試合の経験がチームとして不足しており、そのことに伴う試合中の指示等の対策が不十分であった。

## 2. 今後の課題

今回、チームにおいて最も課題となったことは「国際手話」であったと感じている。TDとの交渉等においては何とか読み取ることはできたとしてもこちらの意思を伝えきれない場面が多くあった。日本国内において国際手話が堪能な人は多くはおらず、選手の中にはある程度はできるかもしれないが、スタッフとして同行できる者の確保が困難である。特にバレーボールにおいてはベンチに入れるスタッフは手話通訳を除く4名までとなっている。監督、コーチ、トレーナーは必須となることからあと1名のみとなる。しかし、派遣できるスタッフ数も選手の数に左右されてしまうことから必ずしも同行させることができるとは言い難い。そのことからやはり手話通訳として同行する者が国際手話を身に着け、さらには表出できるようにしなければならないのではないか。書籍では刊行されているものの日本において国際手話を学ぶ機会は多くはない。今後もデフリンピックに関わることも想定し、普段から情報収集し、学習機会の確保に努めたい。また、国際手話のみならず英語の必要性も感じた。審判については英語でのやり取りが生じることがまれにあった。その際には簡単な英語や身振り等でやり取りしたが、込み入った話になった場合はやはり難しくなってしまう。国際手話及び英語について各国の様子を見ると堪能なスタッフが同行し、情報保障をしている様子が窺えた。他競技においてはどのような状況であったかは定かではないが、国際大会に参加する以上はそのような人材の確保、さらには競技団体において人材の育成等を行っていく必要があると感じた。

バレーボール競技とは異なるが、日本選手団と各スタッフ（代表者やトレーナーなど）との連絡調整がその担当スタッフのみのLINEグループとなり、

他のスタッフに情報が回ってくるのが遅くなる、またはそのスタッフの確認が遅れたなどの事案が発生した。日本選手団とスタッフについては全体の流れが把握できるような情報共有体制があればよかったのではないだろうか。そうすることで各担当スタッフの負担軽減、さらには情報共有が迅速になり、競技団体内での対応協議もより円滑にできると考える

### 選手 黒木 歩夢

#### 1. 当初の目標（自己目標）

高校の時、デフバレー世界選手権に出場し、そこで多くの国と試合したことがある。そこでは、日本で練習してきたテクニックを活かしたものの、世界で戦うことの厳しさを実感した。

そこから、スパイカーとして、高いブロックに対して、どのように攻略できるかを考えるようになった。その反省を踏まえ、日本でトレーニングし、更にテクニックを磨きあげてきた。そのテクニックを今大会で活かしたいと考えた。

#### 2. 結果に対する評価

今回のチームは、デフリンピック初出場のメンバーが多かったが、それに関わらず、ウクライナとポーランドの強豪チームから1セット以上勝ち取ることができたのは、本当に嬉しく思う。日本では21年ぶりのことであり、今回のチームに誇りを感じた。

決勝トーナメントではイタリアに負け、悔しい思いをしたが、それでも次は5位を目指して切り替えた。しかし、その翌日に全競技辞退となり、正直腹立たしく思った。今までのトレーニングの成果を発揮できず、中途半端に終わってしまうことが、どうしても納得できなかった。やるせない気持ちで終わってしまったが、決勝トーナメントまでいくことが出来たのは、本当に嬉しく思います！

#### 3. 今後の課題

個人の課題としては、今大会ではディグをあまりできなかったことです。今までのトレーニングで攻撃面に特化してきた分、守備面のトレーニングが足りなかったかなと感じている。今後は、守備面のテクニックを更に磨き、攻撃と守備のバランスが取れるようにすることが課題です。チームの課題としては、試合中のチーム内の雰囲気が悪くなった時に、あまり盛り上げられなかったことだと思う。今後は、チームの中で雰囲気作りについて話し合ってみることも課題だと思う。

#### 1. 当初の目標（自己目標）

日本男子史上初のメダル獲得と個人の役割を全うする。

- ①まず初めにメダル獲得について、チーム全体は金メダルを取ることを目標にしていたが、個々の選手たちと話し、メダル獲得という目標を立てた。（金・銀・銅メダルどれか）
- ②個人の役割については、主にチーム内ではメダル獲得の為に、プレー面等の細かい所までのアドバイスをし、チーム強化・個々のスキルアップを教授した。

#### 2. 結果に対する評価

今大会の結果は、ベスト8という結果に終わった。5～8順位決定戦を行う予定でしたが、残念ながら日本選手団の諸事情により、残り試合は棄権となった。個人としては、グループリーグ・準々決勝（イタリア戦）は、正直、勝てる試合だったにも関わらず、勿体ない試合だったと思う。特に試合中で、普段練習通りにやっているはずが、「何も無い所でのミス、または気持ちで負けている」といった試合が多く見受けられたので勿体なかったと感じている。また今回の結果についても納得していない。

#### 3. 今後の課題

まず2024世界選手権、2025デフリンピックが日本開催となっているが、正直時間が無いと思う。金メダル獲得を目指すのであれば、2024世界選手権で結果を残さなければならないと思う。（最低順位は4位以上）個人としては、今大会初出場であったが、特に格上チームとかなりの差は無いと思うし、正直に言ってメダルを取れたと思う。今後、メダル獲得を目指すためにはプレー面や精神面のスキルアップをした方が良いと思う。

### 選手 加賀 辰樹

#### 1. 当初の目標（自己目標）

メダルを獲ること。

#### 2. 結果に対する評価

- 8位となり、満足のいく結果、内容ではなかった。
- ・連続した試合のせいか次第にパフォーマンスが落ちた。最後のイタリア戦では技術もそうだが、体力的にも落ちていったのも要因の一つ
  - ・サーブが攻められず、ブレイクできない場面が



多かった

- ・長身の選手に対しての攻略ができていなかったり、慣れていない部分があった
- ・控えの選手こそ重要なポジションというのは理解してるが、うまく機能せずチームの一体感の醸成が進められなかった
- ・デフリンピックに近い環境でのストレス耐性、リスクマネジメントを身につけることができなかった

### 3. 今後の課題

- ・フィジカルトレーニング、スタミナ強化につながるトレーニングの徹底
- ・練習試合の相手チームに長身の人がいったり等、世界レベルに近いチームとの練習試合を組むことができるスタッフのマネジメント力
- ・選手—スタッフ、選手—選手間でのコミュニケーションの重要性
- ・長期間での合宿、連戦を設けることの必要性（デフリンピックに近い環境を作る）
- ・日本代表である自覚、覚悟と責任感が持つようにはどうしたらいいか改めて考える必要がある
- ・デフリンピック、デフバレーの知名度をあげる行動、運動をすることの重要性

## 選手 加賀 充

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・メダル獲得。そして前大会では7位だったが、強豪国に勝てないという思い込みをなくすこと
- ・強化合宿で取り組んだ、流れが悪くなった時に次のプレーにつながるようにチームを鼓舞すること
- ・私のポジションはセッターであり、試合中に選手の顔を見るように努力し、丁寧にトスをあげる役目である

### 2. 結果に対する評価

- ・予選リーグでは2勝3敗、4位で決勝トーナメントに進出したが、決勝トーナメントではイタリアに敗戦。順位決定戦では途中棄権したため、順位は8位である
- ・強豪国であるウクライナに1セットを奪取することができた
- ・しかし、当初の目標を達成出来なかったことは悔いが残った
- ・全体的に連戦が続き、決勝トーナメントまでの選手の体調不良やスタミナを維持することがで

きなかった

- ・本番が近づくとスタッフの焦燥が選手にも伝わり、采配ミスが目立ったり、伸び伸びとプレーしにくかったりして、選手としては何にもできなかったことに悔やまれる
- ・サーブが弱く、簡単にブレイクすることができなかった
- ・個人としてはスターティング起用でセッターとして試合に出場し、前大会までのセッターの経験を活かし、丁寧なトスをあげることに集中した
- ・結果的にはプレッシャーに負けて常に正確なトスをあげることができない、また強いサーブを打てなかった
- ・どんなボールも諦めずにあげた選手、どんなトスでも打ちきって決めてくれた選手、暗くなりつつあるチームを元気づけようとした選手たちには感謝している
- ・そして、何より若手たちがのびのびと活躍してくれたことに嬉しく思う

### 3. 今後の課題

- ・海外では様々なハプニングがあって当然だが、それでも動揺しないスタッフの体制を整える必要がある
- ・練習での球出し、スキル向上につながるような助言できるスタッフ（監督も含めて）
- ・地方における合宿の計画、地域の人々の協力、練習相手などを準備、段取りできるスタッフ
- ・連戦でも体力が維持できるような長期的なプランを考えられる強化合宿（一泊二日のみの合宿では戦力アップには繋がらないと痛感）
- ・強化合宿に参加する重要性を説明できるスタッフ
- ・強化合宿内での肉体改造におけるトレーニングを取り入れる

## 選手 狩野 拓也

### 1. 当初の目標（自己目標）

金メダル

### 2. 結果に対する評価

男子初となるメダル獲得を目指して渡航するも、決勝トーナメント初戦で敗退し、メダル獲得には至らなかった。コロナ感染拡大による棄権で、順位決定戦を行うことは出来なかった。

### 3. 今後の課題

今後もwith COVID19での大会運営となる事が予期される。医療ガイドラインの制定、感染後の対応、棄権の判断基準を事前に明記する必要がある。大会開催後の現場判断では混乱・反発が生じるのは明らかであり、全体を通して運営に関して準備不足が目立つ大会であった。

選手 坂下 真一

#### 1. 当初の目標（自己目標）

金メダル

#### 2. 結果に対する評価

前大会に続いて、決勝トーナメント進出果たすもトーナメント1回戦でイタリアに敗れ、5・8位決定戦の前に棄権になり、今大会はベスト8となった。非常に悔しい結果に終わったが、選手・スタッフ丸となり試合日程に合わせたコンディション管理を徹底したため、選手個々がベストパフォーマンスを発揮することができたと思う。予選リーグ戦では、今大会優勝国のトルコをはじめ、ウクライナ、ポーランドが同グループになるかなりハイレベルな戦いになった。平均身長も10cm以上、上回る相手だったが、臆することなく対等に戦うことができたと思う。結果はいずれも敗れたが、欧州諸国のパワースパイクを何度も拾い上げ、高さのあるブロックを打破する、日本らしい粘り強いバレーボールができ、我々にとって自信になり、決勝トーナメント戦に向けて手応えを感じた。決勝トーナメント1回戦では、2021年ヨーロッパ選手権3位のイタリアが相手だったが、事前ミーティングで弱点部分を研究し、スパイクの打つコースやサーブ・レシーブ位置を何度も確認し、対策をとって臨んだ。しかし、想像以上にイタリアのサーブが強く、レシーブも簡単に崩すことができず、流れをつかめないままストレート負けを喫した。

### 3. 今後の課題

個々のレベルをこれまでより上げていくことが必要不可欠である。選手・スタッフ含めてのチームワークは大変素晴らしいものであったと感じたが、選手個々のレベルがもう一歩足りなかったのではないかと考えている。自分自身は、今大会リベロプレイヤーとして出場した。レセプションの正確性が求められたが、大事な局面での返球率が良くなかったり、乱されたりしたため、今後もレセプション改善に取り組んでいきたいと思う。

今大会までの約5年間、特に大会前の2年間はコロナの流行により、月に1度の合宿でも選手・スタッフがなかなか集まることができず、バレーボールやトレーニングさえ制限され、非常に苦しいときを過ごした。バレーボールだけでなく、他競技団体も同じような苦難を強いられたと思う。にもかかわらず、日々の鍛錬を重ねてこられ、メダルを獲得された皆さんは大変素晴らしく、過去最多のメダル獲得に繋がったと思う。最後に、途中棄権という悔しい結果からなかなか立ち直ることが難しいのが現状だが、今大会から得たものはとても大きく、応援していただいている皆さんをはじめ、ともに戦ってきたチームスタッフとメンバーがいなければここまで戦い続けることができなかったと思う。誠にありがとうございました。

3年後、2025デフリンピックで再び日本代表に選出いただけるよう、男子バレーボール史上初初の金メダルを目指して、今日からまた一日一日を大切に、努力を積み重ねていきたい。

選手 篠崎 賢大

#### 1. 当初の目標（自己目標）

今までの成績を調べたところ、メダルを取るという経験が女子に比べて圧倒的に少ないことがわかった。そのため、チームとしてはメダルを取ることが目標としてやってきた。私個人の目標としては今回が初出場となるので、歴代の代表選手達が築いてきたものを超えるような活躍を応援してくださる方達に届けることを目標とした。

#### 2. 結果に対する評価

結果としては決勝トーナメント初戦イタリアに敗戦して5～8位決定戦というところで棄権という形になってしまい、非常に残念である。今大会の1～3位であるトルコ、ウクライナ、イタリアを相手に戦えるということがわかったのは、とても良い経験だったと思う。ですが、結果を求められる世界です。勝たなければいけない試合を勝つことができなかったのも個人としては力不足だったと感じている。

### 3. 今後の課題

まず、きこえる世界のバレーボールとデフバレーボールのレベルの差がありすぎると思うので、選手達は日常的にきこえる世界のバレーボールに触れることが課題だと思う。

## 選手 高橋 竜一

### 1. 当初の目標（自己目標）

目標はメダル獲得だが、自身の目的である「目の前の試合に勝って、みんなで笑顔になりたい」を忘れずに今大会に挑んだ。

### 2. 結果に対する評価

世界のレベルが向上している中、予選突破し決勝リーグまで行けたことは素直に嬉しい。試合以外でも一人一人がチームのために何が出来るのか考え行動したことは、人間性を高める良い経験となった。現地の方にもたくさんの応援を頂いた。デフバレーの魅力は「身体を使って喜びを表現する」だと改めて気付かされた。

### 3. 今後の課題

4位～5位に喰い込むためには、サーブを強化し、相手チームに速攻を打たせない様にすることが必須だと感じた。メダル圏内に入るためには、ブロック強化と多彩な攻撃バリエーションを増やすことが重要であり、高身長のみドルブロックと高身長セッターを発掘・強化すれば強豪と渡り合えることが出来ると思う。競技以外での環境面になるが、事前情報が少ないため、準備不足が露呈してしまった様に感じた。日本の環境を当たり前だと思わずに、些細なことでも事前にヒアリングしておけば、環境面のストレスが軽減されたと感じた。次世代にアドバイス出来るよう心に留めておきたい。日の丸の重みを感じながら日々闘った選手の方々、献身的に支えて下さったスタッフの皆様、いつもエネルギーを注いでくれる応援の皆様、ありがとうございました！2025デフリンピックでも皆様と一緒に闘える事を願いながら日々成長出来るよう精進したい。

## 選手 田中 友祈也

### 1. 当初の目標（自己目標）

メダルの獲得、そして前大会の成績（7位）以上となることだった。今大会は自分にとって初めての世界大会となり、出国する日にちが近づくにつれてとても緊張し、不安でいっぱいだった。今まで練習してきたことを信じ前向きに捉え楽しむことを考え試合に臨んだ。みんなと一緒にだったので道中はとても楽しく、現地での試合もリラックスした状態でコートに入ることができ、試合を存分に楽しむことが出来た。

### 2. 結果に対する評価

棄権により8位になった。しかし、全試合できていれば、6位以上そしてメダル獲得も十分に狙うことが出来るという可能性を大きく感じた。個人プレーでは、コートに入って相手選手と対面した時、体格の大きさに圧倒されそうになったが、臆することなく自分の持っている力を発揮できたのではないかなと思う。初戦のポーランド戦では試合の後半からの出場だったが、チームの流れを大きく掴む最高のブロックを決めることが出来た。全試合できなかったのは残念だが、自分の持ち味であるブロックを出し切れたので悔いはない。また国内では味わえない世界大会での海外の選手と交流できたのも大きな経験のひとつとなった。

### 3. 今後の課題

全員集まって練習をできたのが3回と非常に少なかったため、土壇場での連携力や簡単なミス等全員でサポートしきれなかったプレーが目立った。簡単なミス等防げるところが多かったのをなくしていけるように頑張りたい。個人としては持ち味であるブロックの精度を落とすことなく、今まで以上のブロックができるようになることと、速攻の決定率をあげていけるように頑張りたい。

## 選手 寺井 捺貴

### 1. 当初の目標（自己目標）

世界大会初出場にあたり、世界のレベルを理解するとともに、個人の能力や今のチームのレベルが世界にどれだけ通用するのかがどうかを実感すること。また、これまでの強化合宿の練習の成果を発揮し、今まで自身の競技においてお世話になった方々に感謝をこの世界大会の場で届けようと全力で戦う。そしてメダル圏内の3位以内に入賞することが最終的な目標であった。

### 2. 結果に対する評価

結果的にはメダル獲得には至らず、順位決定戦の前にコロナ感染拡大による途中棄権という形になった。メダル獲得はならなかったが、その代わり感じたものが多く印象に残っている。世界のレベルを知り、自分自身やチームがどこまで世界に通用するのかがかなり感じる事ができた。大会運営についても身近に感じ、一人ひとりの働きかけのおかげでここまで来ることができたと実感した。また、このデフリンピックの期間を通して自分自身の成長になるものが大きく、これからの活動の糧になる良い経験

を得ることができた。

### 3. 今後の課題

今後の課題については、今回の世界大会を通して自分自身の取り組み方や足りない部分、チームの働き方を改めて見直していく必要がある。また、強化合宿の内容も世界のレベルに対応しているかどうかといえばそうでもなかった。今回で世界のレベルを痛感したため、世界に対応することができる練習内容や戦い方を2025デフリンピックに向けて改善していく必要があると感じた。

選手 遠山 順平

#### 1. 当初の目標（自己目標）

今大会では主に気持ちを全面に出してプレーし、全力でバレーボールを楽しむことを目標とした。全て終わった後、目標を達成できたかどうか考えると自信を持って達成できたとは言えない。序盤は純粋にバレーボールというスポーツを楽しもうと自然とできていたが後半は淡々とプレーしていただけたように感じた。このことから純粋に楽しむというのは持続させるのは意識が必要なことかもしれないと実感した。

#### 2. 結果に対する評価

結果としては残念だったが経験としてはたくさんの得るものがあったと感じた。強豪チームに互角に戦えたこと、試合までの準備の大切さ、栄養面も含めた体調管理の大切さ、スタッフをはじめとする支えてくれる方々や応援して下さる方々の大切さなど身に染みるほどに学ぶことができた。自分のためだけでなくチームのため、応援して下さる方々のために自分に何ができるかを考えさせられる期間だった。良くも悪くも全てひっくるめて人として成長できる貴重なきっかけとなったのではないかと考える。

### 3. 今後の課題

今後の課題としてはまずは2mという相手を想定しながら練習に取り組む、または戦術を考えるなどが必要だと感じる。スパイクの工夫の方法、サーブの狙いところ、ディグのポジションなど積み重ねの練習が必要だと考える。また、本番を想定したチームでの雰囲気作り、立て直し方など選手のみでできるように工夫が必要だと考える。特にコートに出ているメンバー1人1人がリーダーシップを発揮するほどの気持ちでコートに立たなければならない

と感じた。これら全てを合宿の時点からスタッフを含めたチーム全員で強く意識して取り組むことが今後の課題と考える。

## バレーボール競技女子チーム

監督 川北 美雪

### 1. 選手・役員の選考基準・方法

選手選考基準は以下の通り。

- ・日本代表としての自覚を持ち、チームとしても個人としても誇りをもって海外のチームと戦えること
- ・デフリンピックで日本チームが金メダルととるために自分の役割を理解しチームプレーに徹することができること
- ・技術・体力面で優れていて、戦術を理解できること
- ・スタッフの指示を理解し、実践できること
- ・チームメイトとコミュニケーションをしっかりとることができる、またはとる努力ができること
- ・チームメイトや対戦相手へのリスペクトができること
- ・将来性があること
- ・健康であること 他

役員の選考基準は以下の通り

〈コーチ〉

- ・バレーボールの専門知識に優れ、自身も選手以上に技術を持ち合わせていること
- ・国際大会及びそれに準ずる経験が豊富であること
- ・監督の戦術やチームの方針を理解していること
- ・試合中のベンチワークを把握できること
- ・スカウティング、分析ができること。

〈トレーナー〉

- ・フィジカル、メディカル、メンタル面他の知識に優れ、経験が豊富でそれらを実践できること
- ・選手とのコミュニケーションを積極的に測り、選手が話しやすい環境を作れること
- ・医療スタッフとのコミュニケーションを積極的に取れること

〈通訳〉

- ・きこえない者、きこえる者の互いの伝えたいことを正確に伝える技術があること。
- ・バレーボールの専門知識や戦術を把握し通訳できること。

全スタッフに共通して言えることは、チームの方針を理解し、デフリンピックという特殊な環境下において時に専門外の仕事や、イレギュラーな出来事に対応できる十分な経験と人間性を兼ね備えていること。

- ・チームのために常に行動できること。
- ・きこえない者でもきこえる者であっても分け隔てなく対応しコミュニケーションをとる努力ができること。
- ・長い海外遠征の中で選手のために尽くせるだけの体力があり健康であること。

以上の条件はすべて必須なわけではないが、バレーボールチームにおいて選手・スタッフは結果として全員が持ち合わせていた。これらを踏まえて前回のデフリンピックから約5年間、月に一度の合宿で適性を判断した。実際に前半は多くの選手が自ら合宿参加してくれたが、こちらから適性がないと判断したものいれば、自ら辞退したものも多かったです。

## 2. 総評

はじめに、今回のデフリンピックは結果として非常に残念な事になってしまったが、2017年に金メダルを獲得して以降2大会連続の金メダルを獲得するために選手もスタッフも本気で信じ、準備を重ねてきた。指導の現場でもそれまでとは違う、新しいスタイルを常に模索してチーム作りを行ったが、コロナの影響により2020年の3月からの7ヶ月は全く強化合宿を行うことができず2021年の1月合宿の中止（緊急事態宣言の影響）を含めて思うような強化を進めることが難しい時期があった。不要不急といわれる中で、自分たちの活動や存在にどのような価値や意義があるのかを問われる時期となった。本格的なチーム作りがかなり遅れた中でも、選手一人一人が地元で練習し、オンラインでのトレーニングやミーティングを重ね選手のモチベーションを保つ努力を重ねてきたが、残念ながらその期間に気持ちが離れてしまった選手がいたことも事実であり、多くの戦力が失われていく中でも最終的に残ってくれた10人のメンバーには本当に感謝している。合宿再開以降も以前のような練習スタイルは難しく、チームスポーツとしては最低限の状況下での強化を余儀なくされたが、感染対策をしっかり行い、一度もクラスターを起こすことなく無事に今大会を迎えることができたのは、スタッフ・選手の努力の賜物でデフリンピック同様に素晴らしい結果であったと思う。

### ウクライナ戦

前回大会後にこのチームが発足して初めての試合となった。48時間以上の移動と12時間の時差によ

る時差ボケにより、選手一人ひとりのコンディションは決して良いものではなく強豪ウクライナとの戦いということで、かなり緊張もあったが1セット目の入りはまずまずで、一本目のスパイクが決まったことで少し緊張がほぐれ、1セット目は奪うことができた。しかし、徐々に相手の高いブロックを過剰に意識してしまい、2セット目以降自らのミスを連発。なんとかギリギリで2セット目も奪うことはできたが、リズムが崩れ、中々自分たちで立て直すことができなくなり、3・4セットを落としてしまう。最終セットはなんとか立て直しシーソーゲームの展開で序盤リードを奪っていたものの、10点以降でタッチネットのような単純なミスも2回してしまい、結果悔しい逆転負けとなった。全てが初めてだったこともあるが、相手の高さのあるブロック、外国人の放つパワーのある強打に対して落ち着いて冷静に対処することができず、焦って自分たちからミスを出してしまった。勝てる試合を落とした悔しさもあったが、同時に自分たちのバレーボールが世界に通用することにも気づくこともできた。また、初戦を落としてしまったことでチームとしてはより一層気持ちは引き締める良い機会となった。

### メキシコ戦

日本チームとしては格下の相手となり、いかに自分たちのコンディションを取り戻すかが鍵となった。実際に力の差は歴然としているので相手のペースに合わせず、自分たちのペースにいかにか持ち込めるか、とは言え自分たちよりは高さがあるのでそれにいかに対応していくかが試された。結果としてはストレートで勝ったが、コンディションは良いとは言えず、強豪国に勝てるまでの状態にはまだまだ持っていていないと感じた。ただ、ツボにハマった時のスピード感は相手を全く寄せ付けなかったので、自分たちの力を信じて進んでいけば、間違いなく良い結果が得られるとも感じることもできた。

### ブラジル戦

開催国地元のブラジルとの一戦は会場に多くの観客がおり、その前までとは違う雰囲気で行われた。ブラジルチームも私たちにとっては格下となるので、次の準々決勝に向けていかに状態を上げていくか、出せるだけの膿をしっかりと出して次につなげることが課題となったが、やはり会場の雰囲気にもまれてしまった部分もあり、単純なミスが頻繁に出た。レセプション・チャンスボール・二段トスを含めたトスマス、スパイクミス等で連続失点する場面があり、コンディショニングはもちろん再度意識改革を行う必要性を感じた。その後の練習時間などで選手に対して心の甘さや意識の低さを指摘し、厳しい指導になったかもしれないが金メダルを取ると

いうことは普通ではダメだということは何度も話した。この頃から日本選手団にコロナ陽性者が増えはじめたので、会場の係の方とコミュニケーションをとって、入口・更衣室（室内にトイレ有り）・アップゾーンなどの動線を完全に他の国と分けてもらい、試合中も全員がマスクをして試合に臨んだ。ブラジルということで当初はあまり対応してくれないのではないかと心配したが、会場に方々のご尽力で試合以外に他チームや観客を交わることは一切なく安心して試合に集中することができた。

#### アメリカ戦

アメリカには2016年の世界選手権に負けて以来、初めての対戦となった。身長が高く組織的なバレーボールをやってくるチームで、大黒柱の長身セッターからのツー攻撃を警戒し戦術を組んだ。1セット目の序盤から高い集中力でリズムを掴み、セッターからのコンビネーションが面白いように決まり、途中相手の高い攻撃に何回かやられることはあったが、粘り強く集中力を切らせず、結果としては相手を寄せ付けることなくストレートで勝利することができた。心配していた相手のツー攻撃に対してもしっかりと対応したことで、相手のペースが乱れ途中のセッター交代につながった。バレーボールにおいてセッターは要となるので、セッターが交代することによってペースが崩れることが良くある。

この試合ではチーム一人一人の意識がしっかりと統一され、役割分担を全うできる体制が整ってきたと感じた。ウクライナ・メキシコ・ブラジルと、前半はコンディション調整にかなり苦労して自分たちの力が出しきれない場面が多く見られたが、準々決勝ではコンディションも上がり次の試合でさらにパワーアップできると期待を持てる試合となった。結果としてはこの試合が今大会での最後の試合となってしまったが、自分たちのやりたいバレーボールができたことは本当に良かったと思う。残念ながら5月11日以降の棄権が決まり準決勝を戦うことができなくなってしまい、選手にとってはあまりに突然の出来事で発表後の選手の落ち込みは激しく、心のケアが必要だと感じた。本部からの事前説明は十分なものとは言えなかったこともあり、選手にも気持ちを吐き出させる機会を作り、選手が直接本部と話をさせていただきました。その際にはあえてきこえるスタッフは席を外し選手が遠慮なく発言できる環境作りを心がけた。とは言え決定事項が覆ることがないことは分かっていたので、帰国までいかに過ごしていくかトレーナーと相談して引き続き全体でのトレーニングを続行し、感染対策を徹底しながら活動を続けた。決まったことや自分でコントロールのできないことに対し落ち込んでも仕方がないので、

棄権への不満や金銭面での不安に対する対応は帰国後にしっかり検証してから行い、現地では最後まで明るく元気に過ごすというチーム方針に切り替えた。選手もスタッフもいろいろと言いたいが、あったと思うが、ブラジルの現地では我慢して明るく過ごしてくれたこと、結果として全員で帰国できたことはとてつもない偉業といっても過言ではないと思う。また、渡航時の集団行動や荷物の管理などできばきと行動し、前回下の立場で先輩の行動を見て学んだ選手たちが、進んでチームのために行動できていて、このあたりが女子バレーボールチームの本当の強さ、良い伝統として次の世帯にもしっかりと継承して欲しいと感じた。金メダルを目指してきたチームとしては、本当に本当に残念な結果になってしまい、選手の心の傷はいかほどかと心配するばかりだ。

それでも、選手やスタッフと過ごした19日間は単発の合宿では気が付かなかったみんなの数々の魅力を発見でき、成長を目の当たりにできる幸せな時間だった。本来であれば国内にいるときからもっと多くの時間を共有するべきで、今後の強化には絶対に必要なことです。マイナーカテゴリーゆえに、強化も難しい現状の中でとデフスポーツの課題が浮き彫りになった今大会だったが、責任は本当に重いと思うし、もちろん本部だけにデフスポーツ全体の課題を押し付けるわけではないが、今回のデフリンピックに関してはしっかりと反省して次の大会では必ず選手に力を発揮させるためにご尽力いただきたい。今回の現場での棄権という判断は、あの時点では間違っているとは思いません。メディカルの状況などを踏まえると致し方ない部分もあると思うが、そこに至るまでの準備の段階で、見積もりや予測が甘すぎる、情報の開示や共有が遅すぎる、気が付いた後の対応がなすすぎる等。ホテルもバブルといわれていたが、一般のお客様も多くいたように思うし、三食提供されると聞いていたがいきなり昼食は自己調達なんて、国際大会で聞いたことがありません。事前から入念に下調べできればまだしも、異国の地でいきなり15人分の昼食を調達することは、スタッフにとってはかなりのストレスとなり金銭的にも負担でした。本当に競技に集中させたいのか疑問です。メディカル体制も、医療従事者の方がコロナに感染してしまうことは昨今予測範囲内だと思いますし、感染者が予定通り帰国できないことも分かっていることです。現地組織委員会が検査をしないのであればそれに気づいた時点で、遅く出発する便の人たちに検査キッドを持たせるなどできなかったのでしょうか？やれることはすべてやったうえで判断だったのなら仕方がないと思う。デフリン

ピックは非常に価値のある大会だとは思っている、それを運営する組織がもう少しプロフェッショナルであってほしい、選手が競技で力を発揮するために組織や現場はどのようにすべきかをきこえない者・きこえる者関係なくもう少し専門家を交えて検討していく必要があると強く感じた。本部のスタッフの皆様も大変疲弊されたと思う。それだけ大変なポジションだということも十分に理解をしているが、デフリンピックで戦うということはデフアスリートにとって本当に夢であり一生に一度の機会。泣くのは選手です。ぜひ今回本部で同行した方々には、職を辞することなどではなく次回の大会を成功させるということを責任の取り方にさせていただきたいと思っています。我々女子バレーボールは2017年のサムスンデフリンピックで金メダルを獲得したが、今思うと金メダルを獲得したことで、課題が見えにくくなって、本来改善しなくてはいけない点が見えていなかった部分もあると感じている。スポーツ人も日々進化し、以前正しかったことが今は違うかもしれない。チームとしての個人としても常にアップデートをして、次回のデフリンピックでは圧倒的に勝てるチームになってほしいと思う。

スタッフ 大川 裕二

## 1. 自己の役割とその評価

バレーボール競技の男女代表チームのスタッフ(各5名)は、私を除ききこえる者を派遣することに決定した。役割は、スタッフ(チーム)とICS Dバレーボールテクニカルディレクターや日本選手団本部とのつなぎ、各チームが試合に支障なく臨めるよう関係者との調整を担った。また現地滞在経費(食費・消耗品等購入)の管理と本国(協会事務局)との調整を行った。コロナ対策等の現地情報の不足や派遣費請求の連絡が発発直前になるなど、ゴタゴタ続きでその調整で、本来の強化やチームマネジメントに集中する時間を大きく削がれた。現地入りしてからは、恒例のアクレディテーションカードの取得で、長時間、他国選手と密状態での待機があり、ここでの感染も否定できない様相であった。練習、試合、現地滞在においては、スタッフが各々の業務をこなし、大きな問題は生じなかった。日本選手団本部からの競技辞退に関する提案があり、辞退を決定するまでの過程において、バレーボールは競技結果が出ていないこと、辞退決定日にコロナ感染者がいなかったこと、高額な派遣費の自己負担があったことなどから、スタッフ・選手の気持ちを整理させ、コントロールすることは容易でなかった。帰国後に

選手団リーダーと顔を突き合わせての検証がなされていない中で、日本選手団の総括が公表されたことは遺憾に思う。

## 2. 今後の課題

過去7大会デフリンピックに出場してきたが、今回の大会はコロナ禍での開催のため特殊なケースと言えども、再度団長及び各競技リーダー等が集い全体での検証が必要であると考え。次回以降の大会派遣に向けて、事前に競技団体に情報を共有し、透明化の高い派遣事業を行うよう改善をお願いしたい。

トレーナー 中川 菜保

### 1. 自己の役割とその評価

遠征にあたりチーム内での役割としては、チームメンバーの体調管理、怪我や病気罹患の予防、コンディショニングが主だった。若い選手の半数以上が初の海外遠征、日本から真反対の地域ブラジルでの滞在、加えてコロナ禍という遠征前から非常に厳しい環境が予想されていた状況下で、日本出発から帰国までの全日程を通してチーム全員が大きな怪我や病気をする事なく過ごすことができたのはチームとして大変意味のある成果だったと捉えている。競技としてはこれからが選手の力を発揮する時、という矢先に試合参加を断念せざるを得ない状況になってしまいましたが、目標を失ってしまってもなお選手たちは選手らしく最後までチームとして活動を続けた。

#### ・コンディショニングの成果

今回痛感したのは、遠征先の通常とは異なった環境でいかに体調(心身共に)良い状態で過ごせるか、が競技で結果を出すためにも、滞在期間の健康維持のためにも重要である、ということです。そのためには体調を記録したり自分自身が身体の変化に早めに気づいたり、対処法を知っていたりすることも必要で、女子バレーボールチームでは5年間の準備期間の間に、選手が自分の身体のことに関心を持つようになり取り組んできた。今回の遠征で初めて連日トレーニングやコンディショニングに取り組む機会が得られ、ブラジルへ移動してからの数日間で競技パフォーマンスにおいて、選手それぞれの弱点や未熟な点などを見つけ出して強化することもできた。事前の情報収集や準備した食料品、チームスタッフの協力などもさることながら選手たち各々が試合のためだけでなく日常生活においてもより元気により安全に過ごすための努力をし続けたことが、帰国まで全員が元気に過ごせた最大の要因だったと言え

る。時差による不調や、食事環境の変化による胃腸の不調、生活環境の変化により生活リズムを掴めない、などの少々の変化はあったが、トレーニングやストレッチの時間を欠かさずに確保し食事対応を工夫することで、大事に至らずにどの選手も翌日には回復しチーム活動に戻ることができた。遠征前の国内合宿では2日間の短期間を毎月重ねるスタイルで長期遠征にどこまで対応できるか不安な面もあったが、栄養スタッフのサポートで何を食べたら良いかなどの指導内容を選手達自身が身につけていたことも、コンディションを崩さずに過ごせた大きな成果だった。行き届かなかった部分は、選手との個別のコミュニケーションだと感じている。部屋が一人部屋だったことに加えて部屋間の行き来ができなかったこと、トレーナールームの設置が難しかったことで、隙間時間にリラックスタイムを設けて個々に話をしたり聞いたりなどの場が作れなかったことは残念だった。

## 2. 今後の課題

### ・セルフコンディショニングの啓蒙

今回の遠征ではチームで取り組んだコンディショニングが結果としてうまくいったが、普段から個人個人が持つ体調不安に全て対処できたわけではない。今後、より選手自身に自分のことをよく知ってもらい、アスリートとして良くなるための対処法を身につけてほしいと願っている。そのためにも引き続きコンディショニングに関する情報提供やサポートを続けていきたい。

### ・メディカルサポートとの連携

選手団として派遣される大会においては、日本選手団メディカルチームとの連携が特に重要となる。女子バレーボールチームは、相談事にすぐに善処いただき大事に至る案件はなかったが、選手団全体の中でどのようなことが起きてどういう状況なのか、どんな対応が可能なのか、がもう少し分かればチームとしての行動や対応もさらに迅速にできたのかなとも考える。遠征先での競技参加は怪我也病気も起こりうる環境にある。情報収集やチーム内への注意喚起や対応策などの観点から、毎日のメディカルレポートの発信と事前のメディカルチームガイドラインの策定を、チームの健康管理を預かるトレーナーとして切に願う。

コーチ 安田 恵視

## 1. 自己の役割とその評価

### 監督の補佐

監督のゴール設定の金メダル獲得・連覇に向けて5年間やってきた。コロナで大会がすべてなくなり、このデフリンピックが初めての大会となったなか、大会期間中は大きなミスもなく目標に向かっていったことはとても良かったと思う。監督とはしっかりと話をしてきていたので監督の意図をくみ取り行動できていたのではないかなと思う。それでも細かなところでは足りないこともあり、監督の精神的な部分での支えになれていれば大変な部分を減らせることへ繋がったのではないかなと思う。

### 選手への技術指導、メンタル面の指導、フォロー

この5年選手の技術アップ、メンタル面での強化に取り組んできた。大会期間中は大きなミスや怪我也もなく金メダルに向かって戦えたことは良かったと思う。試合を重ねることでメンタル面での悩みや長く一緒に生活することで見えていなかったことが見え、選手間の小さな問題も出てきたがしっかりとコミュニケーションをとり、問題解決、気持ちの整理をすることができ準々決勝ではチーム一丸となり素晴らしいゲームをすることができた。

### チームサポート

スタッフ5人という中、バレーボール以外でのサポートは覚悟していたことではあったが現地に入り、全く聞いていないことや変更がありすぎて対応にはとても苦労した。特に食事面とコロナ対応の部分でホテルはバブルだと聞いていたのに他のお客さんがいたり、昼食の準備がされておらず、バブルだというのにスーパーや飲食店への買い出しが必要となっていた。選手にはとにかく他の人との関わりをなくしてもらいたかったのでスタッフだけの買い出しの往復が大変で特に水の準備もされていなかったの5リットルボトルの水の買い出しは体力も必要だった。

会場ではマスクをしていない観客への対応は全てスタッフで行い、バスから体育館までの動線の確保、試合前の全てのベンチの消毒、たくさんの人との関わりが多くなってしまっていたので私自身のコロナ対策もかなりの神経を使った。このことは女子バレーボールチームだけコロナ感染者を出さずに全員帰国できたことが最大の評価ではないかなと思っている。

## 2. 今後の課題

今大会は1年の延期があったのも関わらず、このような結果に終わったことが全てではないかなと思う。選手の安全よりも歴史や今までやってきたからと、これまでなんとかあったから今回も大丈夫だと判断してしまっていたことはなかったか。今回ブラジルに残ることへの不安は全選手、スタッフが感じ



たと思う。そのことを一番に考えるべきではなかっただろうか。だからこそ、同じ過ちをくり返さないよう取り組んでほしいと思う。初めの頃、現場以外での仕事を手伝ったときに余計なことをしないでくれと言われ、悲しい気持ちになったことがある。私たちの仕事を取らないでくれとも言われた。とてもショックで差別されてると感じた。それからこんな悲しい気持ちになるくらいなら何もやりたくないとさえ思った。このようなすれ違いを起こすことはもったいなく、同じ目標、目的があればそこにはきこえるとかきこえないではなく達成のため力を使える人たちの集まりであるべきと考える。選ばれた人には責任があり、選んだ人にも責任がある。だから、きちんと目標や目的の意思の疎通をはかり、みんなで助け合い頑張っていくことが今後必要ではないかと私は思う。選手がこれからの人生でデフリンピックに出場したこと、日の丸をつけてプレーしたことを誇りに思えるそんな団体であってほしい。

#### 手話通訳 岡田 直樹

### 1. 自己の役割とその評価

きこえるスタッフときこえない選手・スタッフとのコミュニケーションの仲介をおこなった。選手のコミュニケーション方法は、手話や口話、書記日本語など多様なため、通訳スタイルを日本手話や手指日本語などひとりひとりに合わせられるよう工夫したり、座学や面談などでは、音声認識による文字起こしアプリを活用するなど調整し、手話通訳と併用した。また、事務局スタッフが必要にある場面に対応できるよう事務局付きの手話通訳者を増員した。分業したことで、コート内での手話通訳に徹することができたのは一定の評価ができる。また、事務局スタッフとしても、電話通訳など即時に必要な情報保障が可能になった成果も挙げられる。ほかにも派遣の直前は、きこえる指導スタッフが増え、コミュニケーションがより密になったため、コート内の手話通訳者を1名増員し、各所で同時にコミュニケーションが発生しても、通訳がおこなえる結果となった。この手話通訳者はバレーボール経験者であるため、連携も円滑におこなえた。

このような体制でスタッフを続けてこれたのも、デフバレーボール協会の理事の皆さんをはじめ、監督、コーチ、トレーナーのご協力があったからこそです。どうもありがとうございました。

### 2. 今後の課題

以前から課題になっているが、若い手話通訳者の

育成が急務である。コロナ禍を経て、横のつながりの重要性を知ることになったデフリンピックでもあった。各競技の手話通訳が孤立することがないよう早い段階で情報交換をすることで、今後のスポーツ通訳のあり方を確立していけるのではないかと考える。

#### 選手 石原 美海

### 1. 当初の目標（自己目標）

まず最大の目標としては、全員で金メダルを獲りに行く。この目標を掲げ、日々練習を積み重ねてきた。そして、私は、セッター、ピンチサーバー、レシーバーなどどのポジションに入れるように常に準備をしておくこと。コートに立つ時間が短い分、ベンチから相手チームを偵察し、選手のみんに伝える。選手に対する声掛けや鼓舞をして気持ちを高めていく。点数が決まったら、思いっきり喜び、ミスが出て切り替えとベンチからコートの雰囲気につけられないぐらいの盛り上がりを見せる。コートに立った時は、落ち着いて深呼吸をして自分の実力を発揮できるようにする。

### 2. 結果に対する評価

ウクライナに2勝3敗、メキシコにストレート、ブラジルにストレートで勝ち、予選2位で決勝トーナメント進出。準々決勝アメリカにストレートで勝ち、準決勝トルコで金メダル目前、出場辞退となり、最終的に4位という結果に終わった。今回の夏季デフリンピックは、新型コロナウイルスの影響を受け、延期となり、チーム内でそれぞれが葛藤しながら苦しい事や辛い事も一緒に乗り越えて「金メダル2連覇」を目指して走り続けた。チームの大半がデフリンピック初出場で、緊張やプレッシャーを感じる反面、念願のデフリンピックに日本代表として出場できることの喜び、今までずっと一緒に頑張ってきた仲間とやっと世界と戦えることに高揚感を感じた。だからこそ、全競技棄権という判断にとっても納得できない。個人の評価としても満足いくプレーを発揮することができなかった。だが、世界に触れ、貴重な経験を沢山させてもらった事に感謝を忘れず、素敵な仲間と一緒に戦えたことに誇りを持つ。

### 3. 今後の課題

自分の実力不足というのがこの大会で実感したので、トス、レシーブ、サーブ全ての技術を底上げできるよう努力する。コロナがいつ終息するか分からないが、今後このような終わり方にならないよう誠

実な判断をしてくれることを願う。

## 選手 戊丸 奈美

### 1. 当初の目標（自己目標）

- ・ブラジルデフリンピックで金メダル獲得し二連覇を果たすこと
- ・リベロの役目を果たし、スパイカーたちに託せるよう全力でプレーを発揮する

### 2. 結果に対する評価

前回のサムスンデフリンピックに選ばれず悔しい思いを持っていた。次大会では選ばれるようリベンジしたいと必死に練習し、今大会で選ばれたのは大変光栄だった。こういう結果に至り、金メダルを獲得することが出来ず非常に悔しい。それ以上に狩野監督、船崎コーチ、岡田手話通訳士、中川トレーナー、大川理事、選手たちとデフリンピックの最高の舞台上で戦えたことが私にとっては忘れられないデフリンピックとなった。今大会を通して、今までよりもさらにチームワークが一層強く深まり、団結力が高まったのではないかと感じた。最後まで全員と戦い、どの国にも負けない日本らしいプレーが発揮でき、応援してくれている人々や子どもたちにも良い影響や夢を与えられたらいいと思う。

コロナ渦の中でデフリンピックを開催するのは今回が初めてだと思うが、本部の方々もご多忙中の運営や派遣手続き、交渉など本当にありがとうございました。

### 3. 今後の課題

当たり前が当たり前ではないということが改めて身に染みた。次大会では二度とこういうことがないように、改善していくべきだと思う。今大会で感じた課題は、コロナのガイドラインの改善や医療者の人数、情報の共有等、随時連携して頂きたい。そうすることで、次のことを考えられるし、対応できるものは対応していくべきだと思う。あまりにも情報が少ない状態で派遣するのは厳しいと思った。コロナがいつ収束できるかも分からないからこそコロナと共生していくことで、選手たちや将来の子どもたちにも後悔のないよう最後まで戦って欲しい。

## 選手 梅本 綾也華

### 1. 当初の目標（自己目標）

合宿は月に一回しか集まらないので、そういう時

にこそ一人一人とコミュニケーションを取って、日本代表であるという意識や自覚を高め、みんなで信じ合えるチームを作ろうと思っていた。個人的にはミドルとして、攻撃では早いコンビを使って相手のバレーを崩すとか、守備では自分にレシーブでチームに貢献して欲しいと期待されたので、それらを活かして、みんなから頼りにされる選手になることを目標とした。

### 2. 結果に対する評価

初めてのデフリンピック出場だった。チームのスパイカーで身長が一番低いけれど、冷静さがあり、スパイクでコースの打ち分けが得意なので、その技術を活かして、点を取ってチームから頼りにされる選手になることが出来たことは自信になり、すごく嬉しかった。世界と戦ってブロックで止められたり、サーブで狙われたりと色々メンタルでやられたことがあったけれど、監督やコーチやスタッフや選手たちの支えがあったから自分の気持ちもすぐに切り替えることが出来た。日本から応援してくださった方々も含めて周りの期待に応えることが出来たと思っている。途中で全競技棄権は受け止めるが、もっと最後まで戦い、自分の力を出し切りたかった気持ちがある。

### 3. 今後の課題

今後の課題は、今大会は気持ちの面で自身のプレーやチームの雰囲気に影響されたので、どんな時でも気持ちを強く、そして、チームの仲間の信頼性も高めていかないといけないと思った。攻撃で積極的に早いコンビを使うことで、より良いプレーを見せることが出来るし、守備でも自身の持っているレシーブ力をさらに鍛えていきたいと思う。今大会は途中棄権という悔しい結果で終わったが、2024世界選手権が沖縄、2025デフリンピックも東京でやると聞いている。日本にとっても一番重要な大会になると思うので、今度こそは金メダルにふさわしいチームを目指したい。

## 選手 梅本 沙也華

### 1. 当初の目標（自己目標）

初めてのデフリンピック。前大会では、日本は16年ぶりの世界一だったので、それに続く二連覇を目指した。日本チームは優勝候補で、世界から注目されていたので、プレッシャーもあったが、それよりも全力でプレーすることを常に心掛けていた。

## 2. 結果に対する評価

予選でいきなりウクライナに負けるというスタートだったが、その後の1戦1戦を勝ち進み、予選2位で決勝トーナメント戦に進むことが出来た。準々決勝でアメリカにストレートで勝ち、これから準決勝でトルコにも勝って決勝に行くことに意気込んでいたのに、日本選手団でコロナが蔓延したために、全競技棄権という結果になった。女子バレーは選手もスタッフも誰1人コロナにかかっていないので、日本選手団本部からの通知にショックや怒りなどの感情が溢れたまま終わった。自分にとって、デフリンピックは今まで支えてくれた方々にバレーボールで恩返しをする場所だと思っていた。5年間みんなで頑張ってきたことを発揮する機会を与えられないまま終わってしまい、5年間の努力と思い、そして私たちの夢だった2連覇そして金メダルを奪われたと感じた。残念だけれども、気持ちを切り替えて、それからの日々をコロナにかからず選手もスタッフも含めて全員が陰性で無事に帰国することが出来て良かった。

## 3. 今後の課題

私は、これから2024世界選手権と2025デフリンピックで金メダルを獲ることを誓う。そのために今以上に上手くなって強くなることを約束する。2025デフリンピックもコロナが終息していないことを想定し、今回のようなことが2度とないよう、世界にも劣らない組織力をお願いしたいと強く思う。

選手 尾塚 愛実

### 1. 当初の目標（自己目標）

チームの中心になって、コートの中や外でも周りに気を配りながら、雰囲気作りや一人ひとりが慌てることなく落ち着いて、プレーができるように常に声掛けやコミュニケーションを取って、もちろんプレーをしながら、良い流れを作っていくようにすること、世界大会やデフリンピックを経験している者として、どんなプレーでも不安なところを表に出さないようにこれまで練習した成果を、自信を持って試合に臨もうと思った。

## 2. 結果に対する評価

今回は選手としてだけではなく、代表チームのキャプテンとして出場することになり、このチームでも、大会連覇・金メダル獲得するという目標もあり、色々プレッシャーも感じていましたが、どんな時も周りのみんなが協力してくれたり、フォロー

をしてくれて色々な面で助けられた。予選から準々決勝までの一戦一戦、これまで練習してきたことをコートの中で精一杯、出し切ることができたと思う。毎合宿で外国人選手を想定したサポートスタッフ達に試合の相手をしてもらい、その方から容赦ない力強いスパイクを受けたり、何度も高いブロックで止められたり、精神的にきつい部分もあったが、それでも切り替えて、取り返したり、お互いにフォローして繋いで決めにいくチームプレーで本番でもどんなに苦しい接戦でも、みんなで1点を大事に繋いで点を取りに行くことが出来た。

## 3. 今後の課題

今回は準決勝前で無念の棄権という残念な結果だったが、準決勝まで行けたこと、これまでこの選手みんなとスタッフで毎合宿、厳しい練習を乗り越え、自分たちのバレーが世界に通用するレベルに持っていったのは良かったと思う。まだここで満足せず、通過点としてここからさらに2024世界選手権、2025デフリンピックに向けて、これまでよりもレベルアップした日本デフバレーを世界に魅せられるように、チームも個人も練習を頑張って、次こそは金メダル獲得したいと思う。

選手 栗林 愛美

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回、初めてデフリンピックに出場させていただき、とても良い経験になった。高校2年生から合宿に参加したが、当初、私は手話ができず、先輩方とのコミュニケーションをとるのができなかった。また練習も全く追い付けず、とても苦労した。しかし、先輩方からゆっくりわかりやすく手話を教えてもらったり、監督、コーチからできてないところを出来るまで教えてくださった。そのおかげで手話ができるようになり、また練習も追いつくようになった。そしてチームの目標であった「金メダル」に向けて必死に練習に励むことができた。目標は「みんなの雰囲気を明るくさせること」。もちろん技術も大切だが、私が一番チームのためにできることが何かと考えたら、持ち前の明るさで雰囲気を換えられるようにしよう！と思い、その目標に向かって試合へ挑んだ。

## 2. 結果に対する評価

4位となった。準々決勝でのアメリカ戦との試合がとても良かった。長い移動時間、時差調節などでコンディションを戻すのにとっても時間がかかり苦勞

した中で、自分たちらしくプレーできたと思う。選手、監督、スタッフみんなで、全力で戦うことができ、ほかの国よりとてもよいチームワークだったと思う。しかし、5年間金メダルに向かって練習してきたのに、取れなかったのはものすごく悔しい。ですが、この結果は私たちの技術で負けたわけではありません。コロナに負けたのです。棄権という結果はまだ今でも受け入れられませんが、この悔しさとたくさん涙を流した分、さらに強くなれる。デフ日本代表とし、デフリンピックに出場することができたのはとても誇りに思う。このような結果だとしても、世界のバレーを経験することができ、すごく勉強になり、私にとっては、最高の結果だったと思う。

### 3. 今後の課題

今回の経験を生かして、今度こそは「金メダル」をとるため、次大会も出場したいと思う。今の私の技術では世界では通用しないので、強豪の大学へ進学し、より強くなっていきたい。今のチームでは身長が平均160台で、世界で一番低いチームでした。しかし、低い分速攻やサーブ強化、レシーブの粘り等に取り組みました。私も身長も低いので、ジャンプ力、レシーブなどを強化したいと思う。そして、日本代表にふさわしいプレー、行動力をし、世界へ羽ばたいていける選手になり、たくさん応援してくださった皆様に恩返しをできるようにしたい

選手 高濱 彩佑生

#### 1. 当初の目標（自己目標）

当初の目標は、「挑む」と「よりたくさんの人々にデフリンピックを知ってもらおう」だった。今回のデフリンピックで初参加であり、技術面や思考力等まだまだ未熟な点はあるけれど、このメンバーで練習してきた成果を出して金メダルを取りたいと思い、学校の部活や合宿でも、たくさんの方々にお力添えを頂きながら、着実にステップアップをしてきた。人から言われたことをきちんと頭に入れながらプレーやベンチの仕事に全身全霊を捧げていこうと一生懸命に練習をした。しかし、メンバーのみんなみたいに上手く打ったり、レシーブをすることができず、合宿に行くたびに、みんなに迷惑をかけてしまっている自分が嫌だった。日本代表のメンバーに選ばれたときは不安でいっぱいだったが、「人生最初で最後のデフリンピックになるかもしれない」と思い、「まずはデフリンピックという大会を楽しもう」という気持ちで挑んでみようと思った。そして、今大会に参加して、たくさんの人々に「デフリンピッ

ク]のことを知ってもらうのも、もう一つの目標だった。私が中一の時、当時、高校生だった先輩の二人が2017年にデフリンピックで金メダルを取られたことがニュースにもなり、デフリンピックの知名度が上がりました。しかし、最近、私の学校の中学生や小学生はデフリンピックという言葉すら知らない人がたくさんいます。なので、今の中学生や小学生の子たちに、世界で戦える夢や元気を少しでも与えたら良いと思う。

#### 2. 結果に対する評価

1回戦はウクライナに負けてしまい、ベンチの仕事も、前もって仕事の役割やこの仕事に必要なものなどの確認が足りなかったため、あまりスムーズに出来ずバタバタしてしまい、コートに立っている選手を楽にさせることが出来なかった。その後の2回戦、準々決勝は1回戦の反省を踏まえ、役割などの確認もきちんとやることができ、スムーズにやり切ることが出来た。そして、良いプレーがたくさん出たことで会場全体がとても盛り上がり、チームの雰囲気も良くなり、準決勝まで進むことが出来たが、突然の棄権通告にあまりにも動揺を隠せなかった。悔しい結果となってしまったが、失敗してしまったことやスタッフ、メンバーに言われたことをメモに残して、それを将来、また同じ失敗を繰り返さないように意識しながら過ごしていきたいと思う。また、当初の目標の、「よりたくさんの人々にデフリンピックを知ってもらおう」で、デフリンピックで得た事や経験したことを、学校の後輩たちや部活、生活に活かしていきたい。

#### 3. 今後の課題

今大会では、ほとんどベンチに立っていたが、タイムの時は選手たちにタオルや飲み物を素早く配ったり、床に濡れているのを見たらすぐ拭いたりし、仕事をやりながらみんなを応援した。今まで約6年間バレーをやってきて、ベンチに立った経験は少なく、慣れないところもあったが、ベンチの仕事ってそんなに大事なのかと、初めてベンチにいるメンバーの大変さと大切さを感じる事が出来た。今大会は、本当にとても濃い思い出となった。今大会で得たことなどを無駄にせず、これからの生活に活かしていきたい。そして、2024世界選手権、2025デフリンピックに参加し、今回の私より長くコートに立つことができるような選手になれるように、今後の部活や生活に心がけていきたい。

## 選手 中田 美緒

### 1. 当初の目標（自己目標）

オリンピックも含めて日本史上初の2大会連続金メダル獲得することを目標にし、普段の大学の練習で技術・体力を向上すること。また、セッターとして、速い攻撃や多様攻撃を組み合わせた速いテンポでバレースタイルを作り上げていくと共に、毎合宿で映像を撮り、選手内で改善すべきことを共有していくことで自分自身の課題に取り組む時間をさらに増やすこと。長時間の移動となるため、自分でコンディション管理ができるように合宿の際にトレーナーからの重要ポイントを教えて頂き、それを意識していくことを目標にした。

### 2. 結果に対する評価

現地の生活リズムが変わっていく中で、私たちは最高のパフォーマンスを発揮するために、練習や試合前のトレーニングに、アジリティを高めるトレーニングや筋肉に負荷をかけるトレーニングを取り入れる事で集中力を高めて、心と体を整えることが出来た。そして、初戦のウクライナでは猛烈なスパイクを高いブロックで止められフルセットで敗れた。予選リーグの全試合内容としては選手達が得意とするサーブで多くの点数をとる事が出来たと考える。準々決勝のアメリカでは、身長差にも関わらず安定のレシーブで自分達のリズムに乗りながら、多彩な攻撃パターンで最高のパフォーマンスを出し切れたと思う。また、経験者と初出場者がうまく融合して世界で戦えた事がチームとして貴重な経験が出来たと思う。個人としては、前大会より技術と体力のレベルアップだけではなく、コート中にある選手一人ひとりに声かけをする事でリラックスした雰囲気を作っていった。一瞬だけしかコミュニケーションが取れないため、限られた時間の中で選手同士で情報を共有し、信頼関係をさらに深められたと考える。途中棄権により4位でしたが、合宿時から支えて下さった皆さんのお陰でここまでやって来られたことに感謝致します。

### 3. 今後の課題

今大会に出場した選手の平均年齢は20.5歳でした。これ迄の大会と比べるとかなり若い選手が多い。年齢に関わらず、自分が持っている力が世界大会で通用するかを挑戦する気持ちを持つことが大事だと改めて感じた。結果を残すことはもちろん重要ですが、デフバレーを通して何を得られたのか、何を学ぶ事が出来たのかを自分の中で振り返って、今後の大会に向けて新たな目標を持って励んでいき

たい。そして、デフリンピック普及活動やデフバレーにおいてのデフスポーツの楽しさや魅力を日本中の皆様に感じてもらえる様、デフバレーの歴史を変えていきたい。

## 選手 長谷山 優美

### 1. 当初の目標（自己目標）

チーム目標：金メダル2連覇

個人目標：ミドルブロッカーとしての役割を果たす

### 2. 結果に対する評価

前大会では16年ぶりの金メダルを獲得し、2連覇を目指して練習に励んだが、コロナ禍で合宿が中止となり、みんなと揃って練習ができない状態が続いた。合宿再開後、コミュニケーションを中心とした練習が増え、「多様な攻撃パターン」「スピードを重視したプレー」が強みであるチームを作り上げることが出来た。2016年に開催された世界選手権ではアメリカに敗れたが、今回はストレートで勝つことができ、自信につながる試合だった。チームの士気が高まったところで、全競技棄権となったため、準決勝を戦えず、悔しい思いが残る大会となった。

### 3. 今後の課題

2連覇するという目標を達成することはできなかったが、今大会は選手10人のうち5人は初出場で、良い刺激、経験ができたと思う。自分もミドルブロッカーとして他の選手が最高のプレーを発揮できるように全力でフォローしたい。次大会までにレベルアップし、金メダルを獲得し、皆様に良い報告ができるようにしたいと思う。

## 選手 平岡 早百合

### 1. 当初の目標（自己目標）

今回2回目のデフリンピックで前回大会に続き、絶対に金メダルを獲得、2連覇することを目標にした。また、前大会から半分かくらいのメンバーが変わり、経験者として海外の選手の高さに対しての戦い方などを伝えていく、コートの中ではスパイクを決め、声を出して盛り上げて行くことを目標にした。

### 2. 結果に対する評価

とても悔しい結果になったが、アメリカ戦まで良い試合ができたと思う。しかし、初戦はウクライナ

でフルセットの末、負けてたことは、とても悔しい初戦だった。準々決勝はアメリカと戦い、チーム全員が今まで以上に1点1点を大切にし、ウクライナ戦の時にあったミスを修正できたことが勝ちにつながったと思う。海外の選手は日本と違い高さがあるが、それに負けず速攻やブロックアウトで点を取りに行った。ブロックされてしまうこともあったが、日本の粘り強い繋ぎのバレーで最後決め切り、勝つことができたと思う。準決勝は途中棄権で戦えなかったことは残念だが、このチームでここまでこれたことをとても誇りに思う。

### 3. 今後の課題

今大会は、前回出場した時よりたくさんの方々に応援していただき、よりデフリンピックのことを知ってもらうことができた。デフリンピックを広めることも大切だが、若い選手が今後デフリンピックを目指していきたいという気持ちになる、あの選手のようになりたいと思ってもらえるように日々努力していきたい。悔いが残る大会となったが、次大会に向けて、金メダル獲得を目指し練習して行きたい。また、試合に勝つために海外の選手に負けないよう、5セットになっても勝てる体力と持続できるパワーを次に向けて作ります。



2021 # CAXIAS DO SUL # BRAZIL  
SUMMER  
**24 DEAFLYMPICS**  
1<sup>st</sup> TO 15<sup>th</sup> OF MAY 2022  
OFFICIAL WEBSITE

カシヤス・ド・スル 2021 デフリンピック  
日本選手団ハンドブック

大会期間：2022年5月1日（日）～5月15日（日）  
派遣期間：2022年4月26日（火）～5月18日（水）

一般財団法人全日本ろうあ連盟  
デフリンピック派遣委員会

## 【日本選手団遵守事項】

### 1 はじめに

皆さまは大会へ出場するにあたり、自分の技術の程度や海外遠征など、不安な状態にあることでしょう。参加決定後、選手団本部、競技団体やコーチからいろいろと注意、指示があると思いますが、項目が多すぎたり、メモに書き落したりということがあつては、折角のチャンスを十分に生かせない結果になります。以下に、選手団の心構えや準備から帰国後まで遵守すべき内容を記しておきます。

### 2 日本選手団行動規範

- ★ 日本選手団は「公人」であり、自分の行動や発言（SNS等の発信含む）はすべての人から常にどこかで見られていることを忘れず、本ハンドブックを遵守し、日本代表選手としての自覚を持って規律ある行動をする。
- ★ フェアプレーの精神を重んじ、インテグリティ（誠実性、健全性、高潔性）やアンチ・ドーピングの理念を持ち、日本選手団として心を一つにして行動し、ベストを尽くして戦う。
- ★ デフリンピック・ムーブメントの先導者として、大会参加の経験を社会のために活かし、デフスポーツを通してきこえないことへの理解やデフスポーツの発展に貢献していく。

### 3 大会参加まで

#### 1) 選手団本部や監督、コーチからの連絡事項

- ① 身体に関すること
  - ・健康状態の確認
  - ・常備薬、排便などの生活習慣チェック
- ② 競技に関すること
  - ・エントリー種目の決定
  - ・競技規則の熟知

#### 2) 生活態度に関して

- ① 本部からの指示事項は必ず守る
- ② 集団生活のマナー（ルール）を守る
  - ・時間の厳守
  - ・私物の管理（持ち物に名前を付ける）
  - ・あいさつの習慣
- ③ 規則正しい生活習慣、集団行動を行うこと
  - ・食事、シャワー浴、ベッド（メイキングも含む）
  - ・バランスのよい食事に気をつけること
  - ・貴重品は各自で管理すること
  - ・時間的、場所的にも制約を受けることが多くあるが、お互いのペースを尊重し

ながら、睡眠、食事、トレーニング、競技、応援、ミーティング、洗濯、排せつ等の生活リズムを自分でコントロールし、規則正しい生活に心がける。

#### 3) 所属するろう協会、居住する都道府県障害福祉課への連絡について

- ① 所属するろう協会や都道府県・指定都市の障害福祉課等と十分連絡を取り、挨拶などを欠かさないこと
- ② その他
  - ① 国際手話に慣れておき、簡単な会話を学習しておくこと

### 4 大会前までの練習について

- 1) 大会に合わせた練習計画を立て、質の高い練習をすること
- 2) 初めての国際大会では、雰囲気になれなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておく
- 3) 選手1人になっても競技に参加できるように、競技会の仕組みについて理解しておくこと
- 4) コーチの指示をメモし、頭に入れておくこと
- 5) 大会参加までの練習で困ったこと、わからないことがあれば、選手団本部や競技チームに連絡、相談すること
- 6) 練習終了時に身体のチェックを行なうこと

### 5 日本選手団公式服装の着用について

日本選手団として参加する者は、その自覚と誇りを持って選手団公式服装（以下「公式服装」）を着用しなければならない  
日本選手団より支給された公式服装は以下の通りである

#### 【公式服装（ユニフォーム上下、ポロシャツ、公式シューズ）】

##### 1) 公式服装の着用について

結団式、開会式、閉会式及び表彰式、解団式は公式服装を着用すること  
※この公式服装は他人に譲ったり交換することはできません

##### 2) バッジ

選手団員にはバッジを1個配布するので胸もしくは襟元に付けること

### 6 大会会場

- ・競技場、食堂、宿舎、その他の関係施設の位置を確認すること
- ・大会では、雰囲気に慣れなかったり、あがったりするので、各自で競技に集中する方法を持っておくこと
- ・日本チームの一員として責任を持った行動をすること
- ・自分の競技が終了しても、日本チームの他の人でまだ競技を控えている人もいるので、他の人への心づかいを忘れないこと
- ・無断で宿舎や競技場を離れないこと、また単独行動はとらないこと
- ・部屋をきれいに使うこと
- ・パスポート、現金、貴重品の管理をしっかりすること

・生水は飲まないこと

### 7 毎日の報告について【重要事項】

#### 1) 毎日の健康チェックについて

- ① 各チームとも、毎朝出発前までにチーム全員（選手・スタッフ）の健康状態を「らくらく健康観察」アプリに入力して下さい。
- ② 体調のすぐれないメンバーがいた場合、速やかにメディカルスタッフと相談すること

#### 2) 毎日の試合結果について

各チーム監督は毎日のチームの行動日程及びリザルトを宿舎に戻り次第、選手団本部に提出すること（選手団本部においても大会組織委員会の公式記録の発表を確認する）

#### 3) ドーピング等に関して

- ① サプリメントや薬を服用する場合は必ずドクターに相談してから服用すること
- ② ドーピング検査や聴力検査は、いつでも実施される可能性があることを認識し、居場所情報の提出を怠らないこと（特に外出時）

### 8 危機管理【重要事項】

・自分の安全を守るのは結局は「自分自身」であることを自覚すること

・市内の治安への安全対策及び新型コロナウイルスへの感染予防の観点から、日本選手団が宿泊するホテルや競技会場以外への外出は原則として禁じる。やむを得ず外出する場合は、選手団本部に届け出を行い、また、できる限り不要不急の場には近づかない、立ち入らないこと

これらの遵守期間は競技種目に関わらず全員  
2022年4月1日～5月18日までとする

## 【ドーピング検査の手順】

### 1. 全体的な考え方

ドーピング検査の対象競技者は競技順位やくじで決定されます(従って、予告なしに通告されます)。

#### (1) 行動の監視

ドーピング・コントロール・オフィサー(DCO)からドーピング検査対象となったと通告を受けた時点から検査終了まで、選手の全行動はDCOから監視を受けることになります。

#### (2) 検査の種類

尿検査と血液検査の2種類となります。  
選手が検査の種類を選択することはできません。注意してください。

#### (3) 検査途中での異物混入を防ぐために

検査中は外部から検体(尿・血液)への異物混入を防ぐために、容器の選択、ボトルへの分注、ボトルの密封まで、選手本人とDCO双方が確認した上で各操作が実施されます。  
検体は、密封された状態で検査機関に搬送され、成分が分析されます。

#### (4) コーチ等の同伴

選手にはコーチやチームドクターなどの同伴者を1名帯同することが認められています。特に視覚障害のある選手や上肢機能に障害のある選手については、採尿も同伴者が手伝うこともできます。

未成年(17歳以下)の選手には、検査が正しく行われたかを確認するためにコーチを同伴することが強く勧められていますが、どうしても難しい場合には、DCOによりシャペロンを1名配置するなど、DCOと選手が二人きりで検査を行わないように配慮されています。なお、通訳は上記同伴者の人数に含まず帯同することができます。

### 2. 検査手順

以下は検査手順ですが、検査の際にはドーピング・コントロール・オフィサー(DCO)が丁寧に一つずつ手順を説明してくれますので、その指示に従って検査を受けてください。

また、(公財)日本アンチ・ドーピング機構(JADA)のサイト上(ドーピング検査の流れ)に、手順が紹介されているので、必ず大会前に見ておくようにしてください。

- ◎ 競技会に参加するすべてのアスリート <https://www.playtruejapan.org/athlete/all.html>
- ◎ 尿検査 <https://www.realchampion.jp/what/prove/process/urine.html>
- ◎ 血液検査 <https://www.realchampion.jp/what/prove/process/blood.html>
- ◎ 薬の使用及び治療使用例(TUE) <https://www.realchampion.jp/what/health/tue/>

### 1. ドーピング・コントロール・オフィサーから、検査対象者になったことを通告されたら、検査への同意を確認するための通告書類に署名する(検査を拒否することは規則違反となる。)

\*DCOから検査対象になった旨を伝えられます。通告後は、速やかにドーピング・コントロール・ステーションに出現してください。表彰式や別種目へ出場する、メディアに対応する、ウォームダウンを行う、必要な医療処置を受ける、同伴者または通訳を探し、写真付きの身分証明書

を探すなどの行動は、DCOにその旨を伝え、許可を受けてください。DCOあるいはシャペロン(検査対象者への通知およびドーピング・コントロール・ステーションまでの付き添いと監視を行う検査係員)の同伴があればこれらを行うことは可能です。検査には1名の同伴者(コーチなど)を連れて行くことができます。**検査を拒否することは規則違反とみなされます。**

(ここからは尿検査の場合を説明します。基本的な流れは血液検査も一緒です。)

### 2. 尿意をもよおすまでウェイトングルームで待機する。

\*検査室には安全なミネラルウォーターなどが用意されていますので、飲みながら尿意を催すまで待ちます。採取した尿量が90ml以下の場合は、再度の採尿が必要となります。

\*ドーピング検査の際は対象選手だけではなく同伴者(スタッフ、通訳など)もきちんと手を洗ってから検査キットなどにさわるように注意書きを加えてください。検査前に予期しないルートで禁止物質(体につけている化粧品や日焼け止め等)が混入することを防ぐためです。

### 3. 待機中に、いくつかの採取カップの中から、使用するカップを自ら選ぶ。

\*必ず複数のカップの中から自分で選択します。破損や汚れがないか気をつけて確認しましょう。

### 4. 採尿する。

\*同性のオフィサーと一緒にトイレに入り、選手が正しく採尿しているかどうかを目で見て確認します。

### 5. 採取した尿を保管するためにいくつかの密封されたサンプルキットの中から、使用するものを自ら選ぶ

\*サンプルキットには外箱に確認用のシールが貼ってあります。また中にボトル2本が入っています。あらかじめサンプルキットが密封されているか、また容器に破損がないか確認します。

### 6. 2本のボトルに、指示された量の尿を分注し、しっかりふたをする。

\*指示に従い、自分で行います。

### 7. 残った尿で、比重が測定される

\*DCOが、カップに残った尿に尿スティックを浸して測定するか、または屈折計を用いて比重を測定します。

### 8. 検査7日以内に使用した薬物・サプリメントについて申告する。

\*大会前7日以内に使用した処方箋や処方箋のない薬および栄養補助食品類(サプリメント)を記載して下さい。吸入喘息治療薬(例えば吸入ベータ2作用薬、糖質コルチコイドの経口使用(口腔粘膜・口腔・歯肉・舌下投与を含む)、糖質コルチコイドを含むすべての注射(関節内、関節周囲、腱周囲、硬膜外、皮内等)をした場合は、診断名、使用した薬品名、および処方した医師の氏名や病院名などを記載して下さい。**(常時、薬名、サプリメント名とその成分がわかるものをリスト(日本語と英語)にして所持すること)**

### 9. ドーピング検査公式記録書にすべての関係者が署名した後、控えを受け取る

\*選手と同伴者も記録書の内容が間違いないか確認し、署名をします。

### 10. その後の措置

\*結果は2週間程度で、公式検査機関を通して実施団体及びJADAに報告されます。結果が陰性であった場合にはJPCおよび選手へは連絡は入りません。陽性の反応が検出された場合にのみ、JADAより選手へ直接通知されます。JPCにも連絡が入りますので、選手の所属競技団体にその旨を伝えます。その後、聴聞会を経て選手の処分(罰則)が決定されます。

### 採尿の方法

(株)LSIメディアエスウェブサイトより

DCO: ドーピングコントロールオフィサー

選手にドーピング検査対象であるという通告。 → 通告後1時間以内にドーピングコントロールステーションで受付。 → 待合室で飲み物を飲みながら待機。 → 検査室で採尿カップを選ぶ。 → 専用トイレで、同様のDCOとともに採尿。 ※コード番号や未開封を確認すること。 → サンプルキットを選択。 → コンテナからA・Bボトルを取り出す。 → サンプルの分配採尿カップからBボトルへ25ml、残りをAボトルへ入れる。 → A・Bボトルをコンテナに納める。 → 検査7日前に使用した薬物・サプリメントを申告。 → 公正に採尿作業が行われたことを確認してサイン。 → 終了 ※DCOは検本を保管。選手は控えを受け取る。

#### 【注意】

①現在使用している'薬'は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持して下さい。(検査で必要となります。)

②ドーピング検査を受けたら、必ずその日のうちに「アンチ・ドーピング検査報告」を入力して送信してください。

<https://forms.gle/ur2STTggucv3q7gY9>



### 大会期間中にドーピング検査を受けた場合

- ①必ず、本部メディカルへ報告書の提出をお願いいたします。
- ②書式は本部メディカルで準備をしています。
- ③複数回受けた場合、その都度報告書の提出が必要です。

●アンチ・ドーピング検査を受けたら、必ずその日のうちに「アンチ・ドーピング検査報告」を入力して送信してください。

<https://forms.gle/ur2STTggucv3q7gY9>



●聴覚ドーピング検査を受けたら必ずその日のうちに「聴覚ドーピング検査報告」を入力して送信してください。

<https://forms.gle/2RTYFVcmEP1bG0a9>



[ここに入力]



## 【競技中における抗議について】

- 抗議する場合には、必ず事前に選手団団長に相談をすること
- 下記を熟読し、手順の流れについてつかむこと
- 抗議する際の申し立て金については競技団体負担とする
- 抗議の委託金はUS \$ 100

### デフリンピック規約 (Deaflympics Regulations) より

#### DG24. 異議（第一審）と控訴（第二審）（紛争）

1. ICSD 会長又は会長により指名された者は、開催国連盟（又は組織委員会）又は大会参加国連盟により提出されたデフリンピック関係の紛争を判定する権限を有する。
2. 競技中に試合についてなされた異議は、担当の審判員によって判定が下される。これらの審判員の判断の対象となるのは、試合結果が決定してから2時間以内に英語の書面で異議申立てがなされた場合に限られる。紛争に関して、さらに明確にする必要があれば、該当する国際競技連盟規則を参考にしなければならない。
3. 役員決定に対する控訴は、抗議委員会に対して行うことができる。執行委員会が決められた額の預託金を同時に提出しなければならない。
4. 抗議委員会の決定に対する控訴は、第一審における抗議委員会の決定後4時間以内に、申立てを行う選手団の役員が、デフリンピックの控訴陪審員団に対して行うことができる。
5. 抗議委員会は5名からなり、1名は技術委員とする。他の4名は組織委員会が指名する。
6. 控訴陪審員団は5名で構成され、うち3名はICSD執行委員会が指名し、残りの2名は組織委員会が指名する。
7. 申立てが受け入れられた場合、預託金は申立てを申請した側に返却される。
8. 聴力検査及び選手のドーピングに関する申立ては、(医療委員会、選手委員会などの主要代表者と協議の上)、執行委員会が判定権をもつ。

#### DG24. PROTESTS & APPEALS (DISPUTES)

1. The ICSD President or his nominee will have authority to determine any disputes relating to the Deaflympics submitted for determination by the National Federation (or its OC) or the participating National Federations.
2. Sporting protests made to the ground, in matters of competition, shall be determined by these judges. The matters over which these judges may determine will be limited to protest that have been made in writing, in English, no later than two (2) hours after the results of the competition have been declared. The rules of the applicable International Sports Federation must be referenced for disputes that require further clarification.
3. An appeal against a decision of an official may be made with the Protests Committee. A deposit, the amount of which will be determined by the Executive Committee, must accompany the appeal.
4. An appeal against the decision of the Protests Committee may be made by an official of the protesting delegation with the Jury of Appeal of the Deaflympics within four (4) hours after the decision of the Protests Committee in the first instance has been declared.
5. The Protests Committee will consist of five members, one of whom will be the TD. The OC shall appoint the other four.
6. A Jury of Appeal will consist of five members, three of whom will be appointed by the EC. The OC will appoint the remaining two.
7. Where protest is successfully upheld, the deposit will be returned to the applicant.
8. The EC (after consultation with key representatives e.g. Medical Commission, & Athletes Commission) shall have jurisdiction in matters concerning the hearing or doping of an athlete.

## 【報告書作成について】

大会終了後、日本選手団員は「全員」報告書の作成が義務付けられています。

### 【手順】

日本選手団員は報告書を作成→競技団体で取りまとめ→派遣委員会事務局へ提出。

### 【事務局への提出メチ】

2022年6月5日（日）厳守

※事務局提出メチリを勘案し各競技団体でのメチを決められますよう、お願い致します。

※こちらの報告書は助成金を受けた結果を報告するためのものです。

- 3つのパターンでフォーマットを作成しましたので、添付のワード書式を利用し、下記の内容で報告書の作成をお願いいたします。

#### ● 団長・競技監督（競技チーム全体のトップ）

- ① 選手・役員の選考基準と方法
- ② 総評

#### ● 競技スタッフ

- ① 自己の役割とその評価
- ② 今後の課題

#### ● 選手

- ① 当初の目標（自己目標）
- ② 結果に対する評価
- ③ 今後の課題

本部  
メディカル  
チーム



医師

塩田（しおた）・薬師寺（やくしじ）



トレーナー

野津（のず）



薬剤師

早瀬（はやせ）



染谷（そめや）



新谷（しんが）

健康管理  
病気やケガの  
予防や治療  
を行います

まず選手団の皆様への注意事項

国によって新型コロナウイルス感染症に対する考え方は違う



マスクをしていない選手や関係者もいると思いますが、  
日本に新たな株を持ち帰らないためにも、  
徹底した新型コロナウイルス感染症対策を図ります

皆様にご準備いただきたい物

- ①体温計
- ②不織布マスク（滞在日数+10枚）  
※不織布マスクは使い捨てで1日1枚使いましょう  
※布マスクやウレタンマスクは不可
- ③手指消毒用アルコール  
・機内持ち込み用：50mLくらいの小さなもの  
・預ける荷物用：大きなボトルタイプを2つくらい  
⇒現在、本部と検討中
- ④多めのハンドタオルやハンカチ・ティッシュ
- ⑤うがい薬とうがい用のコップ
- ⑥虫よけスプレー



日本出国14日前より健康観察を行ってください



- 毎朝晩検温をして「らくらく健康観察」アプリに入力  
バレーボール男女・柔道は今まで通り競技団体のアプリに報告
- 自主的に毎日の健康状態の確認（新型コロナウイルス感染症の  
症状に該当しているのかどうかの確認）
- 日本出国前14日間は、他人との物理的な接触を最小限に
- 無理をせず、睡眠時間を十分にとり、健康的な生活を心がける

出国前14日間以内に症状が出た場合

- 競技団体へ連絡し、スポーツ委員会と連携し参加できるかどうかを確認してください。
- スポーツ委員会はすぐにメディカルチームへ連絡してください



感染の危険性が一番高いのは移動中

- 移動中は必ず不織布マスクを着用
- 感染の危険性が一番高いのは、空港や機内  
集団感染の危険性を避けるために空港などでは同じ所へ溜まらないように分散してください。  
特にチーム競技においては集団感染が起こると試合に出場出来なくなる可能性もあります。
- 空港や機内での会話は最小限で
- トイレへ行くたびに、何かを触るたびに、手指消毒

## ホテルでは

毎朝、自分の体調を観察し「らくらく健康観察」アプリを入力

↓  
チームスタッフは選手・スタッフの体調を確認  
異常があればAM8:00までに本部メディカルルームへ連絡

### オミクロン株の主な症状

頭痛・発熱・咳（せき）・のどの痛み・倦怠感・関節痛・鼻水・筋肉痛

↓  
体調不良の際は昼夜問わず直ちに本部メディカルルームへ連絡

- 部屋を出る時には、不織布マスク
- 食事中は黙食
- 人と人との距離をる
- 自分の部屋以外の部屋に立ち入らない
- 他の人と物を共有しない
- 外から帰ったら入口で手指をアルコール消毒
- 手洗いうがいを徹底
- 定期的に部屋の換気
- 基本的にホテルからの外出は禁止  
外出が必要な時は本部の許可をとってください

## 試合会場では

- 可能な限り、人ごみや密閉された場所を避ける
- 他の人とのハグやハイタッチ、握手などの接触や交流をできる限り避ける
- 他の人と2m以上の距離を保つ
- 外に出る時は虫よけスプレーを使用し、長袖長ズボン着用を  
日本にはいない虫がいて刺されると感染症を引き起こします

## 新型コロナウイルス感染症が疑われた場合

- 体調が悪く新型コロナウイルス感染症が疑われた場合、すぐにホテル内の別室に隔離され医師の診察を受ける
- 本部メディカルチームが抗原検査を行うか、明らかに新型コロナウイルス感染症が疑われる症状がある場合、すぐに現地組織委員会のPCR検査を受けてもらう
- 現地の病院で診察を受け、入院の必要がなければホテルの部屋で隔離され療養

原則として、試合には10日間出場できない  
無症状の場合であっても7日間出場できない

## 濃厚接触者となれば

### 濃厚接触者の定義

発症の2日前から隔離開始までの間で陽性が確認された者とマスクを着用せずに1m以内で長時間（15分以上）接触した者  
（特にホテルの客室や車内など閉鎖された空間で接触が起きた場合に適用）

- 濃厚接触者もホテル内の別室に隔離される
- 症状がない場合、4日目のPCR検査・抗原検査で陰性であれば5日目に隔離解除 → 原則として5日目から試合に出場可能

## 参加資格に関する規則

- 良耳の平均聴力レベル（PTA）が55dB以上の聴覚障害を有する（500、1000、2000ヘルツの三つの純音平均聴力レベル、気導、ISO1969基準）ろう者であること。
- 加盟団体である全国ろう者スポーツ協会の会員であり、その国の国民であること。

## 聴力検査 聴覚ドーピング

選手は、禁止エリア内でのウォームアップおよび試合中には、いかなる補聴機器、増幅器および人工内耳体外装置の装着も厳しく禁止されている

スポーツ競技において、音の増幅器の使用が、使用していない者よりも有利に作用することは明白である。  
そのため、ウォームアップならびに試合中は使用が禁止されている。「禁止エリア」は、各々の競技において定義されている。

## 薬剤ドーピング同様、 聴覚ドーピングの検査があります

- 初めて参加するアスリートは聴覚検査を受ける可能性があります
- 今まで参加した経験のあるアスリートでも、検査を受ける可能性もあります
- 驚かずにいつも通りに検査を受けましょう

## 夏季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本代表団派遣			日本代表団成績		
				参加国・地域数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	フランス	パリ	1924年8月10日～8月17日	9	148						
2	オランダ	アムステルダム	1928年8月18日～8月26日	10	212						
3	西ドイツ	ニュルンベルグ	1931年8月19日～8月23日	14	316						
4	イギリス	ロンドン	1935年8月17日～8月24日	12	221						
5	スウェーデン	ストックホルム	1939年8月24日～8月27日	13	250						
6	デンマーク	コペンハーゲン	1949年8月12日～8月16日	14	391						
7	ベルギー	ブリュッセル	1953年8月15日～8月19日	16	473						
8	イタリア	ミラノ	1957年8月25日～8月30日	25	635						
9	フィンランド	ヘルシンキ	1961年8月6日～8月10日	24	613						
10	アメリカ	ワシントン	1965年6月27日～7月3日	27	687	7	4	11	0	1	1
11	ユーゴスラビア	ベオグラード	1969年8月9日～8月16日	33	1189	9	4	13	0	4	0
12	スウェーデン	マルメ	1973年7月21日～7月28日	31	1116	9	4	13	4	2	0
13	ルーマニア	ブカレスト	1977年7月17日～7月27日	32	1150	17	8	25	5	2	0
14	西ドイツ	ケルン	1981年7月23日～8月1日	32	1198	33	11	45	7	4	2
15	アメリカ	ロサンゼルス	1985年7月10日～7月20日	29	995	52	15	77	8	5	2
16	ニュージーランド	クライストチャーチ	1989年1月7日～1月17日	30	955	40	16	56	7	3	4
17	ブルガリア	ソフィア	1993年7月24日～8月2日	52	1679	41	13	54	4	7	5
18	デンマーク	コペンハーゲン	1997年7月13日～7月26日	65	2028	44	14	58	6	1	1
19	イタリア	ローマ	2001年7月22日～8月1日	67	2208	60	26	86	10	5	5
20	オーストラリア	メルボルン	2005年1月5日～16日	63	2038	102	33	135	3	7	1
21	台湾	台北	2009年9月5日～15日	77	2493	154	90	244	5	6	9
22	ブルガリア	ソフィア	2013年7月26日～8月4日	83	2711	149	70	219	2	10	9
23	トルコ	サムスン	2017年7月18日～7月30日	86	2873	108	69	177	6	9	12
24	ブラジル	カシアスドスル	2021年12月5日～12月21日	73	2412	95	54	149	12	8	10
25	日本	東京	2025年11月15日～11月26日								

## 冬季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本選手団派遣			日本選手団成績		
				参加国・地域数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅
1	オーストリア	ゼーフェクト	1949年1月26日～1月30日	5	33						
2	ノルウェー	オスロ	1953年2月20日～2月24日	6	44						
3	西ドイツ	オーベルアンメルガウ	1955年2月10日～2月13日	8	59						
4	スイス	モンタナヴェルマラ	1959年1月27日～1月31日	9	53						
5	スウェーデン	オーレ	1963年3月12日～3月16日	9	60						
6	西ドイツ	ベルヒテスガーデン	1967年2月20日～2月25日	12	77	2	3	5	0	0	0
7	スイス	アーデルボーデン	1971年1月25日～1月29日	13	92	(不参加)					
8	アメリカ	レイクプラシッド	1975年2月2日～2月8日	13	139	10	3	13	0	0	0
9	フランス	メリベル	1979年1月21日～1月27日	14	113	8	5	13	0	0	0
10	イタリア	マドンナ	1983年1月16日～1月23日	15	147	9	6	15	0	0	0
11	ノルウェー	オスロ	1987年2月7日～2月14日	15	129	10	4	14	0	0	0
12	カナダ	バンフ	1991年3月2日～3月9日	16	181	9	6	15	0	0	0
13	フィンランド	ユッラス	1995年3月13日～3月19日	18	258	9	5	14	0	0	0
14	スイス	ダボス	1999年3月8日～3月14日	18	265	10	5	15	0	1	1
15	スウェーデン	スツツバル	2003年2月28日～3月8日	21	247	14	15	29	2	0	0
16	アメリカ	ソルトレークシティ	2007年2月3日～2月10日	23	298	17	22	39	3	0	1
17	スロバキア	ハイタトラス	2011年2月10日～2月20日	中止	中止						
18	ロシア	ハンティ・マンシースク	2015年3月28日～4月5日	27	336	22	26	48	3	1	1
19	イタリア	ヴァルテッリーナ、ヴァルキアヴェンナ	2019年12月12日～12月21日	34	493	15	32	47	0	0	0

## 第 24 回 夏季デフリンピック競技大会 報告書

---

発行日：2022年11月1日

発行：一般財団法人全日本ろうあ連盟

〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F

TEL 03-3268-8847・FAX 03-3267-3445

ホームページ <http://www.jfd.or.jp/>

Eメール [jfd-sc@jfd.or.jp](mailto:jfd-sc@jfd.or.jp)

編集：全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会

編集協力：一般社団法人日本デフ陸上競技協会／一般社団法人日本デフバドミントン協会／一般社団法人日本デフビーチバレー協会／一般社団法人日本ろうが自転車競技協会／一般社団法人日本ろうがサッカー協会／一般社団法人日本ろうが柔道協会／一般社団法人日本ろうが空手道協会／一般社団法人日本デフ水泳協会／一般社団法人日本ろうが卓球協会／一般社団法人日本デフバレーボール協会

印刷：日本印刷株式会社

「国庫補助金 令和4年度民間スポーツ振興費等補助金競技力向上事業 第24回夏季デフリンピック競技大会日本代表選手団派遣等事業」にて作成





公式ユニホームの胸につけられた  
日本選手団のロゴマーク